



方言習得における親の母方言の影響

竹村, 亜紀子

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2010-09-25

(Date of Publication)

2014-08-26

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲5080

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1005080>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



博士學位論文

平成 22 年 7 月 9 日

方言習得における親の母方言の影響

神戸大学大学院人文学研究科
博士課程後期課程社会動態専攻

竹 村 亜 紀 子

要旨

これまで言語/方言調査は多数行われてきたが、その調査に協力する「方言話者」に関する研究は数少ない。本論文ではこの「方言話者」に焦点を当て、どのような人を当該方言話者代表として適しているのかということを明らかにすることを試みた。この問題設定の出発点となったのは、同じ方言地域に生まれ育っていても、親の出身地が違う場合、その話者のアクセントがその土地の方言アクセントとは異なるという事実があったからである。さらに、この「親の母方言の影響」が引いては方言話者の選定にも深く関わることを認識し、「親の母方言の影響」がどのようなものなのかを解明することを目指した。

第2章では記述研究の「方法論」の中にある母方言話者の定義について先行研究で言及されていることを整理した。そして「方言話者」の定義の曖昧性や問題点を挙げ、本論文が目指す方向性を示した。続いて方言話者の定義について「育った地域（生育地）の影響説」と「親の方言（母方言）の影響説」を比較した。日本語のみならず英語圏においても親の出身地の違いによる方言習得の研究は行われてきた。しかし、どの研究でも「親の影響」は周縁的に扱われ、むしろ「どのように方言を習得するのか」という「習得の過程」に焦点が当てられてきたことが明らかとなった。さらに方言習得の調査では「語彙的」要素の習得が中心であり、英語であれば単語の発音と母音の習得、日本語であれば語彙アクセントの習得であった。その「語彙的」な要素の習得とともに重要な「規則的」な要素の習得は少なく、筆者が調べた限りでは「規則的」な要素（音韻規則）の習得の研究は Payne (1976) のみであった。また先行研究の方言習得の調査対象者は言語形成期にある子供が中心で、言語形成期を終えた話者が最終的にどのような方言を習得しているのかについてはあまり調べられてこなかった。

本論文では「同じ方言地域に育っているのであれば、親の出身地に関わらず習得した方言に違いは観察されないはずである」という帰無仮説（ゼロ仮説）を立て、もしそこに「違い」が観察されれば「親の出身地の母方言の影響がある」といえるであろうと考えた。そこで本研究では調査対象者を両親の出身地によって4つのグループに分け、このグループ間に方言習得の違いあるかどうかを調べることにした。

第3章、第4章では「親の出身地の違いによって4グループに分けた話者が、どのような方言習得をし、またどのように異なるのか」という問題を設定し近畿方言および鹿児島方言でアクセント調査を行った。本研究が先行研究と異なる点は「語彙的」要素の習得を「語彙アクセント」の習得と「規則的」な要素の習得を当該方言の「音韻規則」、つまり「複合語のアクセント規則&複合法則の習得」の二つに分けて調査・分析を行っている点である。前者は一つ一つの語彙に備わったアクセントであり、各方言によって語彙アクセントは異なる。規則性がなく、語彙ごとに異なるアクセントの習得をしていくことを考えると効率が悪く非常に負担の大きいものであることは容易に想像ができてしまう。例えば赤ちゃんの言語習得で、一つの規則を覚えるだけで応用範囲が広いもの習得する場合と、一つずつ語彙アクセントを「記憶」して習得する場合を比べると、習得するための労力は後者の方が大きいといえるであろう。本研究では親の出身地によって話者の「語彙アクセント」と「音韻規則」の習得に違いがあるのか、また「語彙アクセント」と「音韻規則」の習得ではどちらが難しいのかということ明らかにすることを研究課題とした。調査方言は近畿方言と鹿児島方言の2つの方言で、両方言とも「音韻規則」を持つ方言である。この2地点での調査結果を比較して「親の出身地の方言（母方言）」

と「方言習得」に関して何らかの共通性を見出すことを目的とした。

その結果、近畿方言と鹿児島方言で一貫して観察された傾向がある。それは「両親の出身地が当該方言地域以外の出身（グループ 4）」の場合、「語彙アクセント」も「音韻規則」も「両親ともに当該方言地域出身（グループ 1）」の話者とは統計的に異なることである。これは先に示した前提「同じ方言地域に育っているのであれば、習得した方言に違いは観察されないはずである」という帰無仮説に反する結果である。この結果に基づき「方言習得には親の出身地の母方言の影響がある」ということを間接的に示した。

また親の出身地の条件によって習得した方言にどのような違いあるのかということ調べるため「音韻規則」が達成できなかったものについて誤答分析を行った。この当該方言の「音韻規則」に則っていない「誤答」の中には東京方言と同じものから、当該方言のように聞こえるものもあったが全ての誤答の種類が同じ割合で出現するわけではない。誤答分析で明らかになったのは「当該方言らしく聞こえるけれども、本当の伝統的な当該方言ではない」という間違いが多いということであった。これは「音韻規則」は違反しても、その方言を特徴づける韻律的特徴（核・式）は保持しているということであった。またこのような誤答は親の出身地が他の方言地域であればあるほど増加するという傾向が明らかとなった。つまり、この方言調査に参加した多くの話者は当該方言の韻律的特徴を保持しているので当該方言らしく聞こえるのだが、「音韻規則」というより抽象度の高いものの習得では違いが観察されることが明らかとなった。

このような調査結果および誤答分析を受けて、第 5 章では論文が考える方言話者の定義を提示した。先行研究の Chambers and Heisler (1999) は「はえぬき度」(RI 値)を導入して当該地域の方言の様子を提示しているのだが、この RI 値では多様な要因が多いためにバラつきが生じる問題、およびその土地固有の方言の変化を捉えることが難しい点を指摘した。さらに方言話者の条件として挙げられる「三世代その土地に居住している話者」の妥当性を検証するため、国立国語研究所 (1965) の『共通語化の過程：北海道における親子三代のことば』のデータを再分析した。この再分析から明らかになったのは第 1 世代と第 3 世代のアクセントの一致率よりも隣接する 2 世代間(第 1 世代と第 2 世代、あるいは第 2 世代と第 3 世代)のアクセントの一致率の方が高いということであった。方言アクセントの伝承という観点からみると、この 2 世代間での関係が強いことを考慮して親子のみで方言話者を決めることが可能であると考えた。

では親子 2 世代の間で、親の出身地によって子供の方言習得がどのように異なるのだろうか。この点について本研究が行った近畿方言と鹿児島方言の調査結果を比較して異同を確認した。同じ土地に育っていれば確かにその土地の方言「らしく」聞こえる方言を習得しているかもしれない。しかしながら、それは表面的な部分でありその実態は大きく異なることを本論文では明らかにした。この結果を踏まえて、方言調査におけるバラつきを抑えるための一つの手段として「親の出身地」の統制をとることを提案した。本論文が考える「方言話者」の条件は調査に協力する話者の「両親 / 母親の出身地が当該方言地域」であり、「母親が当該方言地域の出身でない場合は注意してとりかかべき」であろう。つまり調査協力者の「両親がともに当該当該方言地域以外の出身」の場合はたとえ生まれてからその土地に育っていたとしても、当該方言を代表する「方言話者」とは呼べないということである。この親子 2 世代間の出身地を把握することで、大都市における方言調査においても汎用性が高く、さらにこの条件に該当する話者も見つけやすいという調査者にとって有利な方言話者の条件を設けるに至った。

これまで方言習得では「親の母方言の影響がある」とされながらも「親の母方言の影響」は周縁的に扱われてきた問題である。本研究の意義はこの問題に焦点を当て、その影響の有無およびその程度を近畿方言と鹿児島方言の2つの方言を調査して明らかにしようとしたことにあると思われる。この「親の母方言の影響」の問題をより大きな視点から見ると家庭内における「方言接触」と捉えることができよう。出身地が異なる者同士が「家庭/家族」という小さな社会を形成し、その社会の中で育つ子供達がどのような方言を習得していくのか。さらにその子供が学齢期に入ると家庭という小さな社会を出て、地域の人々が暮らす実社会に入る。そのとき、その子供がどのような方言を選択し習得していくのか。方言習得の背景には様々な要因が関わると思われるが、本研究が扱った「親の出身地の方言」という要因はその一部に過ぎない。今後、方言習得の調査・研究を行う場合には他の要因も考慮し、さらにアクセントだけではなく統語論や形態論からのアプローチも必要であろう。また「方言接触」の研究では地域方言が標準語に取って代わるという「標準語志向」の視点が多いが、体系を異にする方言同士（例えばトーン方言とモーラ方言の接触）が様々なレベルで接触する場合（例えば個人、社会、地理的条件など）、どちらの方言体系にどのような影響が現われるのかという視点も今後は必要になるであろう。日本には数多くの方言がある。今日のように人と人、モノとモノの流動性により方言と方言の接触の形も多種多様であろう。今後はこのような方言接触を多角的に捉えて分析し、方言/言語変化のメカニズムを解明していきたいと考えている。

謝辞

この学位論文を完成するまでに本当に多くの方々にお世話になりました。特に指導教授であった窪菌晴夫先生には、神戸大学の修士課程に入学してから現在に至るまで多くのご指導をいただきました。窪菌先生の演習の授業での議論や質問は毎回、私のモノの見方の甘さを再認識する場でした。今振り返ってみると緊張感のある演習の授業だったからこそ、私にとって得るものが非常に大きい授業だったのだと思います。

2010年4月以降、窪菌先生は神戸大学から国立国語研究所に移られてから岸本秀樹先生が私の指導教授として様々な場面でご指導をいただきました。とくに本論文の草稿を読んで、調査内容やデータの提示方法について有益なコメントをくださったこと心より感謝を申し上げます。そして副査である山森良枝先生からも博士論文の草稿に丁寧なコメントを加えていただきありがとうございました。また国文学の矢田勉先生はイタリアに出張中にも関わらず、私の博士論文の草稿を細かく読んでご指摘いただいたことに大変ありがたく思っております。また神戸松蔭女子大学の松田謙次郎先生には社会言語学的側面からのアプローチを修士課程のときからご指導をいただきました。本当に感謝の言葉を尽くすことができないほどお世話になりました。松田先生と松田先生のゼミ生のみなさんの明るい笑顔にいつも元気をいただきました。ありがとうございました。そして近畿方言の調査協力者を探す際には大阪樟蔭女子大学の有田節子先生に多大なご協力を頂きました。この場を借りて御礼を申し上げます。

この研究が行き詰っていたときに突破口になったのは近畿方言から鹿児島方言にフィールドを移したときだったと思っています。鹿児島との繋がりには2007年の1月に窪菌先生の学部生の授業で訪れた鹿児島方言の調査が始まります。そのとき初めて耳にした鹿児島方言に衝撃を受けたことを今でも覚えています。本論文の鹿児島言調査では、現国立国語研究所の木部暢子先生に調査協力者を集める上で大変お世話になりました。木部先生とのお話の中で先生の実地調査に基づく深い知識に私は感動し、方言研究の面白さを新たにしました。また鹿児島大学の太田一郎先生、鹿児島県立短期大学の建石始先生にも鹿児島方言の調査協力者を集める点でお力をお貸しいただいたことに心より感謝しております。太田先生から伺った若年層の鹿児島方言の特徴が気になり、私の中で次の研究テーマになっています。鹿児島方言の調査は木部先生、太田先生、立石先生のご協力がなければ調査ができなかったと言っても過言ではありません。本当にありがとうございました。

そして、この論文は本当にたくさんの方々のご協力により書くことができました。調査協力者として調査に参加してくださった方々は150名を超えます。この調査協力者の方々がいなければ、この論文を完成することができなかったことは言うまでもありません。長時間の調査にも関わらず快く引き受けてくださった調査協力者の皆様にこの場を借りて心より感謝申し上げます。

この3年半を振り返ってみると調査・研究がうまくいかず挫けそうになったことも多々ありました。そんな私をいつも遠くから本当の家族のように暖かく、時には厳しく接して励ましてくれた Dr. Kabiri さんにこの場を借りて心より感謝を申し上げます。そして最後に、辛抱強く私を応援してくれた父と母にこの論文を捧げます。

2010年7月7日

竹村亜紀子

目 次

要旨	i
謝辞	iv
目次	v
図表一覧	viii

第 1 章 序論

1.1 本研究の目的	1
1.2 論文の構成	2

第 2 章 先行研究

2.1 言語記述における方法論	4
2.1.1 言語記述調査の方法	4
2.1.2 先行研究における方言話者の選定条件	5
2.1.3 Regional Index (RI) (Chambers and Heisler 1999)	8
2.1.4 方言話者選定条件による比較	10
2.2 先行研究—方言習得について	12
2.2.1 生育地の影響	12
2.2.2 親の母方言の影響	14
2.2.3 先行研究のまとめ	17
2.3 問題の所在	18

第 3 章 近畿方言調査

3.1 はじめに	19
3.2 近畿方言の位置づけ	21
3.2.1 近畿方言の韻律的特徴	21
3.2.2 近畿方言の複合語アクセント	22
3.3 近畿方言の変化についての先行研究	24
3.3.1 語彙アクセントの変化	24
3.3.2 複合語アクセント規則の変化	24
3.3.3 形態論的变化	25
3.3.4 まとめ	26
3.4 調査方法	27
3.4.1 調査の焦点—近畿方言で何を明らかにしたいのか—	27
3.4.2 調査概要	27
3.4.3 分析の仕方—何を基準にするのか	31
3.4.4 調査の予想	32

3.5 結果Ⅰ—伝統的な近畿方言—	33
3.5.1 各形式・各話者グループの結果	33
3.5.2 語彙単独形式のアクセント	37
3.5.3 助詞付き形式のアクセント	42
3.5.4 新造複合語形式のアクセント	47
3.5.5 「語彙アクセント」対「アクセント規則」	51
3.5.6 結果Ⅰのまとめ	53
3.6 結果Ⅱ—伝統的な近畿方言からの逸脱とその方向性—	54
3.6.1 新造複合語における逸脱とその種	54
3.6.2 誤答の方向性	56
3.6.3 式選択の間違いの方向性	58
3.6.4 個人差	60
3.6.5 結果Ⅱのまとめ	62
3.7 まとめ	63

第4章 鹿児島方言調査

4.1 鹿児島方言調査の方向性	66
4.2 鹿児島方言の韻律的な特徴	66
4.3 アクセント変化に関する先行研究	68
4.3.1 語彙アクセントの変化	68
4.3.2 複合語におけるアクセント変化	69
4.4 調査方法	71
4.4.1 調査語彙とその分析対象	71
4.4.2 調査の手順	74
4.4.3 調査協力者	74
4.5 結果Ⅰ—伝統的な鹿児島方言—	76
4.5.1 各形式・各話者グループの結果	76
4.5.2 単語単独形式	78
4.5.3 助詞付きの形式	82
4.5.4 新造複合語	85
4.5.5 厳密な基準の「単語＋助詞付き」	89
4.5.6 「語彙アクセント」対「複合法則」	91
4.5.7 結果Ⅰのまとめ	94
4.6 結果Ⅱ—伝統的な鹿児島方言からの逸脱とその方向性—	95
4.6.1 単語単独形式をA型—助詞付き形式の誤答	97
4.6.2 単語単独形式をB型—助詞付き形式の誤答	100
4.6.3 単語単独形式をC型—助詞付き形式の誤答	102
4.6.4 単語A型と単語B型の誤答の共通性	104
4.6.5 個人差	106

4.6.6	結果Ⅱのまとめ	109
4.7	まとめ	110
第5章 方言話者とは誰か		
5.1	これまでの方言話者の基準	113
5.1.1	RI 値の問題点 (1) ー多様な要因	113
5.1.2	RI 値の問題点 (2) ーRI 値の産出方法の欠陥	114
5.1.3	三世代前の情報の必要性	116
5.2	方言話者とは誰なのか	123
5.2.1	近畿方言と鹿児島方言との異同の確認	123
5.2.2	本論文が考える方言話者の条件	129
5.3	まとめ	131
第6章 結論		
6.1	明らかになった点	132
6.2	展望と今後の課題	134
参考文献		
付録		
	先行研究のまとめ	139
	近畿方言調査 調査語彙	141
	調査協力者情報	143
	鹿児島方言調査 調査語彙	151
	近畿方言調査 調査用紙 1	153
	近畿方言調査 調査用紙 2	155
	近畿方言調査 フェイスシート	158
	鹿児島方言調査 調査用紙	159
	鹿児島方言調査 フェイスシート	167

図表一覧

表一覧

表 2.1	方言研究と社会言語学の相違点	5
表 2.2	方言話者の条件	6
表 2.3	Chambers and Heisler(1999: 41) の RI 値を求める素点	9
表 2.4	Chambers and Heisler(1990: 41) による RI 値	9
表 2.5	方言話者選定条件による比較	11
表 2.6	Stanford (2008) の調査対象者 (3-12 歳)	13
表 2.7	柴田 (1958:180) より抜粋	15
表 2.8	杉藤 (1984) の調査対象者(60 名)の内訳	15
表 3.1	式と核の有無によるアクセントの型の分類 (木部 (2008) を筆者が表に変更)	19
表 3.2	2 拍名詞の類別語彙の比較表—東京方言と近畿方言— (金田一 (1974) より抜粋)	20
表 3.3	各方言における複合語アクセントの比較	23
表 3.4	両親の出身地別による調査対象の内訳	28
表 3.5	親の出身地による話者の数の比較	28
表 3.6	本調査で用いた 2 拍名詞の調査語彙	29
表 3.7	調査で用いた語彙の形式	30
表 3.8	語彙単独形式と複合語アクセントの関係	31
表 3.9	母親の影響があると想定された場合の語彙アクセントの習得の境界線	32
表 3.10	各項目・各グループの伝統的な近畿方言アクセント率	34
表 3.11	近畿方言におけるグループ間の等分散性の結果	36
表 3.12	畿方言における調査語彙形式の違いによる等分散性の結果	36
表 3.13	近畿方言のデータを使った二元配置の例	36
表 3.14	単語単独形式の京阪式および東京式のアクセント	37
表 3.15	単語単独形式 個人ごとのアクセントデータ(代表例)	38
表 3.16	単語単独形式における各グループの正答率平均と標準偏差	39
表 3.17	近畿方言 各グループの語彙単独形式におけるアクセントの正答率	41
表 3.18	近畿方言 単語単独形式における Tukey の多重比較	41
表 3.19	助詞付き形式の京阪式および東京式のアクセント	43
表 3.20	助詞付き形式における各グループの正答率平均と標準偏差	43
表 3.21	近畿方言 各グループの助詞付き形式におけるアクセントの正答率	45
表 3.22	近畿方言 助詞付き形式における Tukey の多重比較	45
表 3.23	近畿方言 各グループの 2 拍名詞第 4 類におけるアクセントの内訳	46
表 4.24	近畿方言 伝統的な単語単独アクセントと「式保存の法則」に則った新造複合語のアクセントの例	47
表 3.25	近畿方言 新造複合語形式における各グループの達成率平均と標準偏差	48

表 3.26	近畿方言—各グループの複合語における「式保存の法則」の達成率	49
表 3.27	近畿方言新造複合語形式における Tukey の多重比較	50
表 3.28	近畿方言 グループ 1 における Tukey の多重比較	51
表 3.29	近畿方言 グループ 2 における Tukey の多重比較	51
表 3.30	近畿方言 グループ 3 における Tukey の多重比較	52
表 3.31	近畿方言 グループ 4 における Tukey の多重比較	52
表 3.32	新造複合語アクセントの分類	55
表 3.33	新造複合語アクセントの内訳	56
表 3.34	式選択の誤答例	59
表 3.35	式保存の法則の間違い (単語単独と新造複合語の式が異なる場合)	59
表 3.36	調査語彙形式と年齢の相関係数	61
表 4.1	東京方言と鹿児島方言の語彙単独形式の対応関係 (窪田 2007:112)	68
表 4.2	鹿児島方言調査 調査語彙	71
表 4.3	鹿児島方言 新造複合語の誤答予想の例	72
表 4.4	鹿児島方言 調査語彙の組み合わせと誤答の予想	73
表 4.5	分析の対象とその正答とするものの定義	74
表 4.6	鹿児島方言の調査協力者の内訳	75
表 4.7	鹿児島方言におけるグループ間の等分散性の結果	77
表 4.8	鹿児島方言における調査語彙形式の違いによる等分散性の結果	77
表 4.9	鹿児島方言 Tukey の多重比較による検定—単語単独形式	80
表 4.10	鹿児島方言 単語単独形式におけるアクセント型別の誤答	81
表 4.11	鹿児島方言 Tukey の多重比較による検定—助詞付きの形式	84
表 4.12	鹿児島方言 新造複合語における正答と誤答	86
表 4.13	鹿児島方言 Tukey の多重比較による検定—新造複合語形式	86
表 4.14	鹿児島方言 新造複合語の誤答—A 転率/B 転率—	87
表 4.15	前部要素自体が B 転化/A 転化して鹿児島方言の複合法則に完全に従う場合 (複合法則の達成率 100%の場合)	88
表 4.16	前部要素自体が B 転化/A 転化して東京方言の影響を受けた場合 (複合法則の達成率 50%の場合)	88
表 4.17	鹿児島方言 Tukey の多重比較によるグループ 1 の中での平均の差	92
表 4.18	鹿児島方言 Tukey の多重比較によるグループ 2 の中での平均の差	92
表 4.19	鹿児島方言 Tukey の多重比較によるグループ 3 の中での平均の差	92
表 4.20	鹿児島方言 Tukey の多重比較によるグループ 4 の中での平均の差	93
表 4.21	単語 A—助詞付き形式における誤答の内訳	98
表 4.22	東京方言の単語単独形式と助詞付きの形式の対応関係	99
表 4.23	単語 B—助詞付きでの誤答の内訳	101
表 4.24	C 型で読んだ単語の誤答の内訳	104
表 4.25	助詞付き形式における全体の誤答(単語単独形式が A/B 型のみ)	105
表 5.1	(再掲) Chambers and Heisler(1990: 41) による RI 値	114

表 5.2	RI 値産出方法の比較—Chambers and Heisler (1999) と高木 (2006) —	115
表 5.3	SRI のスコア (高木 2006: 48 より抜粋)	115
表 5.4	PRI の産出方法 (高木 2006:49)より抜粋)	115
表 5.5	SRI と PRI のクロスによる話者のタイプ (高木 2006:49 より抜粋)	116
表 5.6	『共通語化の過程』の第 1 世から第 3 世の調査結果 (昭和 34-35 (1959-1960) 年にかけて調査)	118
表 5.7	美唄の橋本家—3 世代のアクセントの比較	119
表 5.8	池田の小野田家—3 世代のアクセントの比較	119
表 5.9	倶知安の上野家—3 世代のアクセントの比較	120
表 5.10	国立国語研究所 (1951: 253) のデータ	121
表 5.11	金田一 (1967) によるデータの集計 (延べ数)	122
表 5.12	両方言における調査語彙の形式と範疇	123
表 5.13	両方言の多重比較による「語彙的」要素の検定結果	128
表 5.14	両方言の多重比較による「規則的」要素の検定結果	129
表 5.15	親の出身地による方言話者の境界線	130

図一覧

図 3.1	近畿方言 各項目・各グループの正答率	34
図 3.2	統計処理のステップ	35
図 3.3	近畿方言の単語単独形式—各グループの箱ひげ図	39
図 3.4	単語単独形式の近畿方言アクセントの正答率と誤答率	40
図 3.5	単語単独形式における誤答の方向性	40
図 3.6	近畿方言 助詞付き形式の正答率	44
図 3.7	近畿方言 助詞付き形式の誤答の内訳	44
図 3.8	近畿方言 各グループの 2 拍名詞第 4 類のアクセントの内訳	46
図 3.9	近畿方言 新造複合語形式における式保存の達成率と誤答率	39
図 3.10	近畿方言 新造複合語形式の正答率と誤答率	57
図 3.11	近畿方言 新造複合語の誤答の内訳	58
図 3.12	年齢と「式保存の法則」の達成率との関係	60
図 3.13	単語単独の得点と「式保存の法則」の達成率	61
図 4.1	鹿児島方言の二型アクセントと一型アクセントの地域	75
図 4.2	グループ別による各形式と単語+助詞付きの伝統的な鹿児島方言との一致率	77
図 4.3	鹿児島方言 単語単独形式の正答率と誤答率	78
図 4.4	鹿児島方言 単語単独形式の誤答の内訳	79
図 4.5	単語単独形式におけるグループ間の差	80
図 4.6	鹿児島方言 単語単独形式の誤答—A 転率と B 転率—	82
図 4.7	鹿児島方言 単語単独形式の A/B/C 型の割合	83
図 4.8	鹿児島方言 助詞付きの形式の正答率と誤答率	84

図 4.9	鹿児島方言 新造複合語形式の正答率と誤答率	85
図 4.10	鹿児島方言 新造複合語の誤答—A 転率と B 転率の平均	87
図 4.11	鹿児島方言「単語＋助詞付き」における正答率	90
図 4.12	「単語＋助詞付き」形式における単語の種類別正答率	91
図 4.13	単語 A 型—助詞付き形式の正答率と誤答率	97
図 4.14	単語 A—助詞付き形式における誤答の内訳	97
図 4.15	単語 B 型—助詞付き形式の正答率と誤答率	100
図 4.16	単語 B—助詞付き形式における誤答の内訳	101
図 4.17	単語 C-助詞付きでの誤答の内訳	103
図 4.18	助詞付きの形式における複合法則の達成度合いをみた散布図	107
図 4.19	「単語＋助詞付き」の形式における複合法則の達成度合いをみた散布図	107
図 4.20	単語単独形式と新造複合語形式における複合法則の達成度合いの散布図	108
図 4.21	「単語＋助詞付き」と新造複合語形式における複合法則の達成率の散布図	108
図 5.1	国立国語研究所 (1965)『共通語化の過程』で調査された地域	117
図 5.2	美唄の橋本家—3 世代のアクセントの比較	119
図 5.3	池田の小野田家—3 世代のアクセントの比較	120
図 5.4	倶知安の上野家—3 世代のアクセントの比較	120
図 5.5	鹿児島方言 新造複合語の誤答の内訳	126
図 5.6	両方言の「語彙的」要素の比較	128
図 5.7	両方言の「規則的」要素の比較	128

第1章 序論

1.1 本研究の目的

国と国、都市と地方の物理的な距離は昔とかわらないとしても、これまでに発達してきた交通手段(飛行機や新幹線)、情報伝達手段(テレビやインターネット)等によって、情報共有量の差は大きく縮んだことは誰もが認めるところであろう。それは日本国内でも同じであり、日本各地が短時間で移動できることにより、地方の発展を促すことにもつながる。これまで出会うことがなかったような人々が物理的な距離を乗り越えて出会うことを意味する。このような人と人との出会いが活発になってきたのは近年ではない。それは明治時代にまで遡ることができるであろう。だがその時代の人の移動との移動の比を考えると、それは現代の方がはるかに人の移動が大きいであろう。人々の移動が短時間で可能になったことで、今までに見られなかった現象が都市と地方のそれぞれで起こってもおかしくはない。

例えば、地方では都市との差が希薄になったことで「日本全国、みな同じ」というような「均質性」が観察される。どの土地に行ってもある外食レストラン、服飾店、同じような形の家など誰もが感じるところではないだろうか。このような「均質性」は衣食住だけではなく「言葉」にも観察される。これまでその土地で話されてきた「方言」が衰退し、「標準語」¹あるいは「共通語」²に淘汰されている。その顕著な例として琉球方言が挙げられよう。琉球方言はその話者が高齢になり「危機方言」としてその存在が危ぶまれている。言葉の多様性である方言がなくなり、一様に「標準語」あるいは「方言が少し残る標準語」が話されるようになっていく。

故郷の方言が標準語に淘汰されつつあるといっても、まだ日本各地で「方言」は確実に存在する。例えば近畿地方で話されている「近畿方言」を考えてみよう。東京に次ぐ第二番目の都市として機能する近畿地方は言葉の面でもその存在感は大きい。また「気づかない方言」というものもある(橋本 2005, 陣内 1997, 香月 2008)。それは実際には方言でありながら話者本人は標準語と思って使っており、他の地域の出身者にその言葉が伝わらず指摘されて初めて気がつくという意味で「気づかない方言」なのである。この「気づかない方言」は多くの場合、形態的側面を指しているが、アクセントやイントネーションのような超分節音に関わる部分にも「気づかない方言」としてその痕跡をみることができよう。

また方言の存在感の大小に関わらず、故郷の言葉をもった人々が進学・就職・転勤などの様々な事情で都市に移り住むことは珍しいことではない。移り住んだ先ではそのような移住者の人々がその都市で家族を形成することも珍しいことではない。今日の東京や大阪をみると、そのような事例は多い。このような形でできた家族および家庭内ではどのような方言が使われ、そしてそのような環境で育った子供たちはどのような方言を習得するのであろうか。そこに本研究の出発点がある。

本研究は特に「親の出身地(=母方言)の影響」によって習得される方言が同じであるかどうか、また習得される方言に違いがある場合にはどのような違いあるのかを探ろうとするものである。この

¹ 国立国語研究所 (1951: 7) によると、標準語は「なんらかの方法で国として制定された規範的な言語」としており、この定義に従う限り日本では標準語は日本ではまだ存在しないと記されている。

² 共通語の定義について国立国語研究所 (1951: 6) は「全国どこでも通ずることば」と定義されている。本論文では話者が言葉に対して規範的な意識が働く視点を重視し「標準語」を使うことにする。

「親の出身地」の条件による方言習得は、ひいては「方言話者」の定義にも関わることである。かつて厳密な意味での方言話者の条件は「三世代前からその地に居住している者」とされたが、柴田(1984, 1988)ではそのような「方言話者」が今の時代にはいないことを指摘している。

1965年に浦和駅西口周辺の町で「はえぬきの65歳以上」という条件にあう人は皆無であった。

(柴田 1984: 64)

その土地に生まれずうっとその土地に住んでいるような native はいくらでも見つけられたが、これからはその条件を満たす人は少なくなるだろう。(中略) 条件を落としても、将来はその条件に合う人ならだれでもいいということにはならないだろうと思う。

(柴田 1988: 566)

ではこのような「三世代前からその地に居住している者」を見つけることができない今の時代、「方言話者」とは誰のことを指すのだろうか。本論文では「三世代前」とは言わず、当該方言地域にいる親と子の「二世代間」に目を向けて「方言話者」の条件を考える。その前には、親の出身地の違いによって子供の方言習得に違い（バラつき）があるのかなのか、その点を調べる必要がある。そして、その調査結果によって今の時代に合った「方言話者」の条件を考えることが本研究の最終的な目的である。

1.2 論文の構成

本論文は6章で構成されている。まず次の第2章では先行研究を「方言話者」と「方言習得」に分けて整理する。方言研究は多くなされているが、方言調査の方法および当該方言の代表者となるべく「方言話者」についての記述は少ない。ここでは方言調査における「方言話者」について何が問題なのかを指摘する。続く「方言習得」に関する先行研究は、子供は生まれ育った土地の言葉(方言)を覚えるという「生育地の影響説」と親の母方言の影響も少なからずあるとする「親の母方言の影響説」とに分けて整理する。また日本語だけではなく英語圏での方言習得も概観し、「方言習得」では何が明らかになっており、またどのような視点が欠けているのかについて指摘する。これらの先行研究を整理することにより、本研究の目的と方向性を位置づける。

つづく第3章と第4章では実際の方言調査に移る。第3章では近畿方言の方言習得を扱い、第4章では鹿児島方言の方言習得を扱う。両方言の調査で共通するのは、当該方言地域に育った話者を親の出身地の違いによって4グループに分け、そのグループ間に方言習得の差があるかどうかを調べることである。第3章では、まず近畿方言について韻律的特徴を把握し、調査方法では何を分析対象とするのかを明らかにする。続いて実際の調査結果を提示して考察を行う。第4章も同様の手順であり、まず鹿児島方言の韻律的特徴を把握し、鹿児島方言調査における分析対象を示す。そして鹿児島方言で得られた結果を提示し考察を行う。

第5章では第3章、第4章の結果を受けて、実際にどのような人が「方言話者」となるべきかについて議論する。まず、これまで提案されてきた「方言話者」の基準を振り返り、その問題点を指摘する。そして第3章、第4章の体系が異なる二方言(近畿方言と鹿児島方言)の調査結果を比較し、「親の

出身地の影響」という観点からどのような点が一致しているのかを確認する。そしてそれらの結果を踏まえ、本論文が考える「方言話者」の条件を提示する。最終章の第 6 章では全章を振り返りながら、本論文の結論を提示する。

本論文に出てくる言葉「親の出身地」について説明しておく。親が言語形成期（15 歳まで）を過ごした場所を「親の出身地」とし、たとえ他の方言地域に移り住んだとしても言語形成期を過ごした土地の母方言話者と見做した。そのため本論文に繰り返し出てくる「親の母方言」と言った場合には「親の出身地で話されている方言」と同じ意味をもつこととする。

第2章 先行研究

この章では、言語記述における方法論の先行研究、および方言習得に焦点を当てた先行研究を取り上げて整理する。まず日本国内の方法論について、文献資料を整理し問題の所在を明らかにする。そして方言習得の先行研究では日本だけではなく海外における方言習得に関する研究を概観し、方言習得に関して明らかになっている点とそうでない点を整理する。この二つの段階を踏まえて、この研究がどういう立場で何を明らかにしたいのか、その方向性を示す。

2.1 言語記述における方法論

言語学の中でもとりわけ方言学や社会言語学では言語データの収集のために言語調査が行われる。ここでは方言学、社会言語学で挙げられている言語記述調査における調査方法、およびインフォーマントの基準について、先行研究や文献などでどのように言及されているのかを調べて整理する。

2.1.1 言語記述調査の方法

まず調査で何を調べたいのか—意味の違いなのか、アクセントなのか—によって調査方法は異なる。意味論や統語論など、その他の分野での言語調査であれば、紙に書かれた文を読んで文法的に正しいかどうかの判断を被験者に求めるような調査、音声・音韻の調査であれば、被験者に発音してもらうか、あるいは知覚してもらうという調査方法もある。小林・篠崎(2007)によると言語調査の方法は大きく分けて5つの分類が挙げられている。

(1) 言語調査の方法 (小林・篠崎 2007)

- a. 面接調査
- b. アンケート調査
- c. 通信(郵便)調査
- d. 内省調査
- e. 自然観察調査

これらの中でもとりわけ音韻、アクセント、イントネーションなど音に関する分野の調査で向いている調査方法は「面接調査」とされている。これは実際に調査者と被調査者が直接会って面接形式で調査を行い、発音やアクセントの違いを記述することである。方言研究と社会言語学では面接でアクセント調査を行う。方言研究も社会言語学の一部に含まれるが、狭い意味での社会言語学とはその目的が異なる。

ここで日本における方言研究と社会言語学の目的・方法の相違点を整理しておこう。野元(1997)によると、方言研究における調査では当該方言の体系を記述することを目指し、社会言語学の調査では当該方言における変種あるいは変化の動態を社会的要因から捉えることを目的としている。また両者の調査対象および方法も異なる。方言研究においては、いわゆる「はえぬき」と呼ばれる話

者一人あるいは複数人を対象に、その話者の内省をもとに当該方言のアクセント体系を記述する。一方、社会言語学では様々な属性（年齢・性・職業・出身地等）と個々の変種（variation）の現れ方に何らかの関連がないかを調べるため、話者は多数必要となってくる。特に日本における社会言語学的な調査は「変種の使われ方を属性や場面の観点から記述しようとする研究」としてこれまで発展してきたとされる（杉戸 1983）。

表 2.1 方言研究と社会言語学の相違点

	方言研究	社会言語学
目的	当該方言における体系の記述	当該方言の変種の動態を 社会的要因から捉える
対象	「はえぬき」と呼ばれる話者一人／複数人	様々な属性（年齢・性・職業・出身地等）、多人数

このように日本における方言研究と狭義の社会言語学の目的と方法に相違点があることがわかる。しかしながら、両者の目的や方法をそのまま各地方や地域の調査に当てはめることはできるだろうか。例えば、東京という大都市で方言研究を行うことを考えてみよう。大都市の社会構造はこれまでの伝統的な地域社会の構造とは異なることが容易に想像できる。実際に大都市と地方とはその社会構造・産業構造が異なる特徴を有しているとされる（米田 1992）。そのような大都市において方言研究の手法を取り入れてアクセント体系を記述しようとした場合、「はえぬき」と呼ばれる話者が一体どの程度いるのだろうか。柴田（1984:64）によると、1965 年に浦和駅西口周辺の町で「はえぬきの 65 歳以上」という条件にあう人は皆無であったと報告している。このように都市化に伴う「はえぬき」の人を対象とした方言研究の難しさを垣間見ることができる。また、その「はえぬき」と呼ばれる話者は、単にそこに生まれ育った話者なのか、あるいは何世代も前からその土地に移り住んでいる話者を指すのか、その定義は定かではない。

方言変種の動態を把握しようとする社会言語学の場合も同様に、調査対象の話者の属性をどこまで規定するのか—「はえぬき」の人と最近その地域に引っ越してきた人も含めるのか—など、大都市における人の流動性も言語調査では考慮しなくてはならない。このように両者の相違点を踏まえて大都市で言語調査を行おうとする場合、両者に共通するのは「大都市の社会構造を考慮した言語（方言）調査の方法の必要性」である。方言研究の調査と社会言語学の調査、両者の調査が大都市でも行えるように調査対象の属性を決めることが今後の方法論には必要であると考えられる。

2.1.2 先行研究における方言話者の選定条件

調査で挙げられる調査対象の条件を具体的に見てみよう。調査でよく用いられる属性は性別、出身地、年齢である。これらは最低限必要な調査対象の情報であろう。研究目的によっては、より詳しい情報がほしい場合もあるだろう。たとえば出生地、転居歴の有無、婚姻の有無などを調査対象者に尋ねることになるが、近年の個人情報の流出に敏感になっているため調査対象者は快くは答えてくれないであろう。また個々人のライフコース（学歴、結婚の有無など）まで考慮し調査者が挙げる属性項目が多くなると、列挙した属性に該当する調査対象者を探すことは難しくなることは容易に想像できる。表 2.2 は方言研究においてアクセント調査を行う場合、方言話者の選定にあたる上での条件につ

いて言及されたものを研究者ごとに示したものである。

方言調査を組織的に行う国立国語研究所（1981）は「アクセントは言語形成期に本人が過ごした地域の影響を受け、その後、他地域に移住しても変化しない」と方言話者の条件を提示している。この条件から「言語形成期を過ぎた個人のアクセントは変化しない」ということを前提としていると考えられる。

表 2.2 方言話者の条件

	方言話者の条件
国立国語研究所（1981）	アクセントは言語形成期に本人が過ごした地域の影響を受け、その後、他地域に移住しても変化しない
上野（1984）	記述研究のインフォーマントの条件：「はえぬき」 ・物心がついてから思春期までのいわゆる「言語形成期」をずっとその土地で暮らした人 ・言語形成期の許容範囲は地域、調査地点の密度、研究目標などで多少異なる ・両親、祖父母がその出身ならなお理想。親の影響は家庭内でしか使わない単語などに残るぐらいで、特に父親の影響は弱い ・上野(1997) 自身は「一度は必ず外(＝生育地の外)に出たことのある人」を対象としている (外に出たことのある人の方が言語感覚に優れていることが多いから、としている)
吉田（1984）	・はえぬきの土地っ子が望ましい ・言語形成期(満3～12,3歳頃)までその土地で生活し外住歴が少ない人が適当だが、調査の目的や性質で許容範囲は異なるので、個々のケースと調査目的に合わせて調査の適否を判断すべき ・両親や配偶者の影響はさほど神経質にならなくてもよい ・もっとも若年層の調査では、両親の言語の影響が重要な意味をもつので注意 ・言語要素の中では特にアクセントの調査が、両親や配偶者の出身地を吟味してとりかかすべき

さらに上野（1984）、吉田（1984）の方言話者の条件をみると、国立国語研究所（1981）と同様に「言語形成期をその土地で過ごした人」と共通した条件をもっていることがわかる。しかしながら、さらに上野（1984）と吉田（1984）が提示している方言話者の条件を見てみると両者には相違点がある。「親の出身地やアクセントの影響」という観点から上野（1984）をみると「両親、祖父母がその出身ならなお理想。親の影響は家庭内でしか使わない単語などに残るぐらいで、特に父親の影響は弱い」としている。家庭内でしか使わないような語彙というのは、地方によって呼名が変わるようなものを指している。たとえば目蓋に生ずる無痛性の小さな腫瘤のことを医学用語では霰粒腫(さんりゅうしゅ)と呼ぶが、地方によって「めいぼ」「めぼ」「めばちこ」などと呼ばれる。このように形態面における語彙の変種が地方ごとにあり、その変種を親の出身地の影響によって家庭内で使用しているということである。しかしながら「両親、祖父母がその土地出身であればなお理想的」（上野 1984）としているのでこれが絶対的な条件ではないということも伺い知ることができる。間接的ではあるが、

両親の出身地の方言アクセントよりも、むしろその方言話者が生まれ育った土地の方言アクセントの方が方言習得の上では影響力が大きいということを示唆しているといえよう。

一方、吉田（1997）の方言話者の条件をみると、上野（1984）と相違する点がいくつかある。吉田（1997）は方言話者の選定において注意すべき点がいくつか挙げられている。中でも親の影響について言及されている点を見ると「もっとも若年層の調査では、両親の言語の影響が重要な意味をもつので注意すべき」、「言語要素の中では特にアクセントの調査が、両親や配偶者の出身地を吟味してとりかかすべき」とし、アクセントにおいては親や配偶者の影響があるので、方言話者の選定には注意すべきであると述べている。アクセントに関してみると、上野（1984）では「親の出身地の影響にこだわる必要はない」としているのとは反対に、吉田では「親の出身地の影響も考慮すべきだ」としている。このように研究者によって、方言話者の選定に関する条件が細かい点では異なることがわかる。

では日本以外での方言話者の選定条件はどのようなになっているのであろうか。英語圏での方言研究における方言話者選定では Chambers and Trudgill (1980) が NORM (Nonmobile, Olde, Rural, Male の頭文字をとった頭文字語) が理想的であると挙げている。だがこの英語圏での方言研究においてなぜ話者が “Non-mobile, Old, Rural, Male” に限定されているのだろうか。これらの理由として Chambers and Trudgill (1980) では次のように書いている。

(2)

The informants should be nonmobile simply to guarantee that their speech is characteristic of the region in which they live. They should be older in order to reflect the speech of a by gone era. (Chambers and Trudgill 1980: 30)

They should be rural presumably because urban communities involve too much mobility and flux. And they should be male because in the western nations women's speech is considered to be more self-conscious and class-conscious than men's. (Chambers and Trudgill 1980: 30)

本来であれば「〇〇方言」について調べるという目的から当該方言話者を探す手順であろうが、この方言話者の選定条件（NORM）に縛られてしまうと調査する方言が限定されてしまう恐れがある。つまり“Rural”（田舎）の地域の昔の方言しか調べることができないということになってしまうであろう。また都市部の人々が流動的であるからと言ってもその都市部に昔から住んでいる人はいるはずである。そのような人々とよそから来た人々とが接触してどのような方言になっているのか調べることも都市部における当該方言がどのような方向に向かっているのかを知るためには重要であろう。

確かに、研究者ごとに方言話者の選定に関する条件、とくに基本となるような条件が揃わないのであれば、同じ土地で調査をしても得られる言語データに違いが出てくることが予想される。言語データに信頼性と均質性を求めるのであれば、研究者ごとに異なる条件を設定するのではなく、最低限守るべき方言話者の選定条件が必要である。2.1.1 でも示したように、大都市で行われる調査を想定すれば、この方言話者の選定条件の必要性はなおさらである。次節では様々な背景をもった大都市で行う調査を想定した場合、調査対象者の背景の可視化と方言話者としての適切度について Chambers

and Heisler (1999) の RI (Regional Index) を紹介する。

2.1.3 Regional Index (RI) (Chambers and Heisler 1999)

Chambers and Heisler (1999) はカナダのケベック州にあるケベックシティ (Quebec City: QC) において、英語話者が日常的に使う語彙選択 (lexical choice) を調べている。QC があるケベック州はフランス語が主な公用語として使われているが、カナダのもう一つの公用語である英語も日常的に使われている。Chambers and Heisler (1999) は調査を行った時点で QC 居住している人を対象にしている。調査当時の QC に居住している人であるので、当然その土地の出身者でない者も含むことになる。調査対象者が様々な個人的背景をもつことを考慮して (つまり個人的背景の情報が見える形で)、得られたデータを分析しようということから Regional Index (RI 値) を導入した。その RI 値の導入理由を以下のように書いている：

(3)

In the Dialect Topography sample, we aim for a demographic cross-section of the survey area rather than a population of indigènes as in traditional dialect surveys. Our reasoning is straightforward: some proportion of urban speech communities is made up of people who were born outside the community, and the variants they use in their speech are heard in that speech community and have some status in it. We want to know what those variants are and the extent of their use. Our quantitative model allows us to distinguish indigènes and interloper variation by correlating variants with the provenance (via RI) of the respondents who use them.

方言地理学における我々の調査の目的は、調査地域の人口構成を横断的に捉えることであり、伝統的な方言調査における「はえぬき」の捉えることではない。(RI 値を導入する) 理由は単純である。都市部における言語共同体を成す人口構成の中には、その土地に生まれ育っていない人が含まれる。そのような様々な背景をもった人々が話す変異型 (variants) も日常生活では耳にすることがあり、また彼らの変異型に対しても何らかの (良い/悪い) 地位/印象がある。我々が知りたいのはそれらの変異型がどのようなものであるのか、そしてそれらの使用範囲である。我々の数量的モデルは変異型を使用する話者の出自 (RI によって表される出自) と変異型使用とを関連づけることによって indigenous (はえぬきの話者) の変異型と interloper (よそ者話者) の変異型とを区別することができる。

Chambers and Heisler (1999:41) 筆者記

RI 値は「その土地の人口割合 (=はえぬき度)」と言い換えることができよう。では Chambers and Heisler (1999) がどのような方法で RI 値を産出しているのか説明する。まず (4) の 4 点を話者に聞き、話者の情報を確認する。そして (5) の手順に従い (4) で得られた情報をもとにして表 2.3 から基準点、出生地、現居住地、両親の出身地等のスコアを求める。そして (6) の「RI 値の産出方法」に当てはめて RI 値を産出する。この手順によって得られた RI 値とその属性をまとめたものが表 2.4

である。表 2.4 の上部に位置するほど「はえぬき度」が高くなり RI 値 1 の人は“Indigènes (はえぬき)”とされる。一方、表の下に位置するほど「はえぬき度」は低くなり RI 値 7 の人は“Interlopers (部外者/よそ者)”とみなされる。

- (4) 1. どこで生まれたか（出生地）
 2. どこに今住んでいるのか（現居住地）
 3. 8 歳から 18 歳までどこで育ったか（生育地）
 4. 両親はどこで生まれたのか（両親の出生/成育地）

(5) 表 5.1 のスコアを参照して次の手順で産出する。

1. 基準点を求める。基準点は 8-18 歳までの生育地に 1 を足したもの。
 2. 出生地、現居住地、両親の出身地のスコアの合計を求める。
 3. 1.で求めた[基準点]に 2.で求めた[各スコア合計]を足す。

表 2.3 Chambers and Heisler(1999: 41) の RI 値を求める素点

	出生地	現居住地	両親の出生地
調査地域	0	0	0
同一州内	1	1	1
州外	2	2	2

(6) 【RI 値の算出方法】

RI 値 = [基準点] + [出生地、現居住地、両親の出身地のスコアの合計]

表 2.4 Chambers and Heisler(1990: 41) による RI 値

Status	RI	Profile*
Indigènes	1	born, raised, living in same place as parents (Quebec City region: QC)
	2	born, raised, living in QC region, parents born in province ⁱ
	3	born, raised, living in QC region, parents born out of province
	4	raised and living in QC region, but born elsewhere in province, parents born out of province
	5	raised and living in QC region, but born out of province, parents born out of province
	6	living in QC region, raised elsewhere in province, born out of province, parents born out of province
Interlopers	7	living in QC region, born and raised out of province, parents born out of province

*Note: other combinations are possible

このような手順で実際にどのような RI 値が求められるのか、例を高木（2006:43）から挙げてみる。

まず、ある女性がトロントで 8-18 歳まで過ごした女性がいたとする。彼女はトロントを代表する話者として基準点の 1 点を与えられる ((19)の手順 1)。続いて、彼女の出生地がトロントであれば 0 点、現在の居住地もトロントであれば 0 点、そして彼女の両親もトロント出身であれば 0 点となり、これらの合計は 0 点となる ((19)の手順 2)。最後に先ほどの手順 1 で求めた基準点 1 点と手順 2 で求めた合計 0 点を合わせると RI 値 1 (1+0+0+0) となる。この RI 値 1 を表 2.4 でみると、例に挙げた彼女のプロフィールと一致する。だがこの産出方法ではうまく RI 値が求められないことも確かで、このことについては高木 (2006:45) が指摘し正しく産出する代替案を提示している (5.1.2 参照)。

このように Chambers and Heisler (1999)では大都市での言語使用の実態を様々な言語形成の背景をも調査結果に反映させるために RI を導入したことが分かった。だが本研究で求めるのは RI の 1~3 の上位に位置する人の中でも、どの範囲の人がを純粋な方言話者と言えるのかという点である。次節では方言話者の選定条件が厳密なものとは緩和されたものを比較し、それぞれのメリット、デメリットについて考える。そして、それぞれのメリットを生かし、大都市においてでも方言調査が行うことができるような方言話者の選定条件について、本研究が目指す方向性を示す。

2.1.4 方言話者選定条件による比較

表 2.5 は方言話者の選定条件を「緩い条件」と「厳密な条件」とに分けて、どのようなメリット、デメリットがあるのかを比較したものである。ここで考える「緩い条件」は「その土地で生まれ育った人」、あるいは「言語形成期の中で一番長く過ごした土地」というもので、親の出身地は考慮しないというものである。例えば地方出身のある人が就職のために都市に出てきた人は移住 1 世で、そこで生まれた子供は移住 2 世である。その移住 2 世とよばれる世代がこの条件にもあてはまる。この条件の場合、どんな人でも該当する可能性がある。一方「厳密な条件」の「三世代前からその土地に居住している人」というのはどうだろうか。これは方言調査をする土地にもよるだろうが、今日のように人の動きが流動的な場合、同じ土地に居住するという事は少ないと考えられる。とりわけ東京のような大都市で「三世代前から居住している人」を探すことは困難であることが予想される。したがって、この「厳密な条件」は今日の社会状況を反映しているような条件とは考えにくい。

それぞれの条件に付随するメリット、およびデメリットを考えてみると一長一短であることがわかる。「緩い条件」の場合、そのメリットは「該当する話者を見つけやすい」という点、および「当該地域における方言使用の実態の把握が可能」という点にあると考えられる。一方、そのデメリットとしては話者の背景に関する統制が小さくなることで個人差（ゆれ）が現れてくる可能性があり、観察された差異が個人差なのか言語変化なのかを捉えることが困難であると考えられる。「厳密な条件」によるメリットは話者の統制があるので話者が提供する方言データに信頼がおけるという点である。また個人差（ゆれ）が少ないことが予想されるため、先行研究との比較において言語変化か否か確かめることが可能となる。しかしながら、そのデメリットは先述の通り該当者を見つけることが困難な点である。

表 2.5 方言話者選定条件による比較

	緩い条件	厳密な条件
条件	・ その土地に生まれ育った人. ・ 言語形成期の中で一番長く過ごした土地	・ いわゆる「はえぬき」と呼ばれる三世代前からその土地に居住している人.
該当人数	・ 都市部や地方に関係なく該当者はいる	・ 都市部：皆無に近い. ・ 地方：都市部に比べると該当者は比較的多い可能性
メリット	・ 該当する方言話者を見つけやすい. ・ 地域全体における方言の使用実態を映す	・ 該当する話者はその土地の伝統的な方言を保持している可能性あり. ・ 辞書記載の伝統的なアクセントと比較でき世代を経たアクセント変化をみることが可能. ・ 言語データは均質になる可能性有.
デメリット	・ 個人のアクセントの違いが顕著に現れる可能性. ・ 個人差が大きいとその土地の時代を超えたアクセント変化なのか、それともその方言話者個人の環境による個人語 (idiolect) なのか不明. ・ 個人差による言語データのばらつきの可能性有.	・ 該当する方言話者を見つけるのは都市部では非常に困難.

このように方言話者の選定条件を「緩い条件」と「厳密な条件」とに分けて比較してみると、両者それぞれのメリットとデメリットは相補うような形であることがわかる。ここで示した方言話者の条件は極端なものであるが、この両者の良い点を引き継ぐような形で方言話者の選定条件があれば今後の方言研究にも実用可能なのではないかと考えられる。本研究が最終的に目指すのは、方言の質を保証しつつ、今日の社会状況に即した形で方言話者の条件を設定することである。別の言い方をすると、信頼のある方言データが得られ、かつそのような方言データを提供してくれるような話者を都市部でも探すことができるよう、方言話者の条件を決めるということである。具体的には三世代前に遡らなくても、親の出身地が当該方言地域かどうかによって、その子供が方言話者の代表として調査対象となりうるかどうかを決めたいと考えている。そのためには、両親の出身地の方言(母方言)の影響がその子供にどのように影響するのかを調べる必要がある。次節では先行研究の中から「育った地域（生育地）の言葉の影響」と「親の方言(母方言)の影響」という視点から、方言習得で明らかになっている点とそうでない点について整理する。

2.2 先行研究—方言習得について

ここでは方言習得に関する先行研究を概観する。方言習得に関する研究は日本だけではなく英語圏においても盛んに行われている。ここではその英語圏と日本での方言習得の研究を中心に扱い、先行研究が示している結果が「生育地の影響」が大きいとするものと「親の母方言の影響」があるとするものとに分けて整理する。

付録の表 1、表 2 にはこれまで英語圏と日本で行われてきた方言習得に関する先行研究を挙げている。表をみると研究者によって調べたい項目がセグメントの音の習得なのか、語彙なのか、音韻規則なのかが異なる。さらに調査対象の詳細も異なる。調べたい項目をセグメントから音韻規則と総合的に調査しているものは少ないことがわかる。唯一、Payne (1976) が母音の習得と音韻規則の習得について調査を行っている (2.2.3 参照)。

2.2.1 生育地の影響

子供が習得する方言について、子供の育った地域の方が親のことばの影響よりも大きいと主張する先行研究はいくつかある。前節の上野 (1984) も方言習得に関しては「親のことばの影響よりも育った地域のことばの影響の方が大きい」という立場であるといえよう。ここでは、より直接的に子供の方言習得を調べている先行研究に焦点をあて「生育地の影響説」を整理する。

近年、海外における研究で「親の母方言の影響はない」と主張するものは Kerswill & Williams (2000)、Tagliamonte (2007)、Stanford (2008) が挙げられる。

Kerswill & Williams (2000) はイギリスの新興住宅地、Milton Keynes (以下 MK) における新しい方言の形成を記述している。MK は 1967 年から始まった新興住宅地で、元々その土地に住んでいた人々ではなく、他の地域から移り住んで来た人々が多い地域である。この土地に新たに in-migrant (移住) してくる大人と、そのような両親の間に生まれ育った子供達の方言習得はどのようになっているのかを調べたのがこの調査である。調べた項目は 10 の変異型 (4 つの子音、6 つの母音) である。しかしながら、この変異型は語彙ごとに地域によって違いが観察されるものであるので、「地域方言ごとに決まっている語彙に備わった発音」(lexically determined) と言っても過言ではない。つまりこれらの変異型の習得は話者の心内辞書に書かれているセグメントの発音を調べていることを意味する。この調査の結果、その土地で育った子供達が示す変異型は両親の出身地とは関係ないことがわかっていく。そして、子供たちが習得するのは、その土地に固有の変異型ではなく、London などからの影響を受けた変異型を示すことが明らかとなった。つまり、新興住宅地 MK に新たな方言が形成されたということを示している。しかしながら、Kerswill & Williams (2000:84) が書いているように、彼らは rule-governed な項目、つまり音韻規則など文法知識に関わる項目は調べていない。そのため、調査に参加した子供たちの音韻規則の習得がどのようになっているのかは不明である。

Tagliamonte (2007) は自身の子供 3 人を研究対象として、子供の方言習得がどのようになされるのかを Chambers (1992) の「8 つの方言習得規則」にならって検証を行っている。彼女と彼女の夫 (カナダ人) と 3 人の子供たちはそれぞれ 0,5,7 歳のときにカナダからイギリス中部の町、ヨーク (York) に移住した。そして移住直後から一定の期間を置いて 5 年間の追跡調査のような形で行った。移住から 5 年後、再度イギリスのヨークからカナダに戻る直前、ヨークの方言話者に子供の発話を聞いて判断してもらったところ、子供達はネイティブ並み (near-native) にヨーク方言であると判断されたと報告

している。母親である Tagliamonte 自身と彼女の夫はカナダ英語を子供達に話しかけていたにも関わらず、子供達はイギリス中部の方言をネイティブ並みに習得しているということで、「親の母方言は関係ない」であろうと示唆している。Tagliamonte (2007)はその論文の中で直接的に子供の方言習得に関して「親の影響はない」と明示はしていないが、親の影響よりもむしろ移住先の地域に溶け込むことによってネイティブ並みの方言習得ができたとしている。だが「ネイティブ並み(near-native)」と本当のネイティブ(authentically native)とは何が同じなのか、そして何が違うのかということは示していないため、「ネイティブ並み(near-native)」と判断した人の主観的な判断と言わざるをえない。

より明確な主張で「育った地域の影響(=文化)が一番大きい」と主張するのは Stanford (2008) である。Stanford (2008) は中国のある地域に住む一族を研究対象として子供の方言習得を調べている。その結果、Stanford (2008) では親(とりわけ母親)のことばの影響は年齢が上がるにつれてなくなり「子供たちが育った父方の土地とその土地の子供たちの仲間(peer)の影響である」と主張する。しかしながら Stanford (2008) の調査対象者には偏りがある。彼の調査対象者は表 2.6 で示したように母親がよその土地(南部)から父親の生まれ育った土地(北部)に嫁いで来た者だけである。表 2.6 で n/a と示したところが調査されていないところである。

表 2.6 Stanford (2008) の調査対象者(3-12 歳)

母親 \ 父親	北部・中部	南部
北部	(A) n/a	(B) n/a
南部	8 名 (男性 4 名、女性 4 名)	(C) n/a

調査対象者の居住地：北部・中部

表 2.6 示しているように、組み合わせとして考えられるパターンであるが、北部出身の母親が南部の父親のところに嫁ぐ場合(B)や、両親ともに北部でも南部の出身でもなくその土地に居住している子供(C)、さらには両親ともに北部出身である場合(A)が調査で検証されていない。また調査対象者の居住地域は父親の北部および中部に限定されており、南部で同様の調査は行われていない。このような調査での不備を考慮すると彼の主張をそのまま受け入れることは難しい。

結果として Tagliamonte (2007) と Stanford (2008) の主張は「両親の方言の影響よりもその子供が育った土地の方言が重要」という点である。しかしながら両者とも調査対象者は子供であり、まだ方言習得をしている段階である。そのため調査後にその発音が変化する可能性がある。両者の研究は言語発達段階における一つの事例としてみるができるが、最終的に子供達が習得する方言がどのようなものかは分からない。もし「その土地の方言を習得している」と主張するのであれば、言語使用が安定する言語形成期を過ぎた話者を調査対象とすべきである。そのような安定した言語使用をする話者同士を比較することによって、その話者が本当にその土地のネイティブ方言話者と同じかどうかを比較することができると考えられる。

2.2.2 親の母方言の影響

生育地の方言が重要であるという先行研究を前節では取り上げたが、ここでは「親の母方言の影響」を扱った研究を取り上げる。まず養育者(母親)の方言と子供の方言習得過程の両方を直接的に調べているものに Smith et al. (2009) がある。スコットランドの漁師町 Bucki において、そこに生まれ育った母親とその子供の t/d 削除を調べている。t/d 削除は(1)に見られるように、英語では頻繁に観察される安定的な変種とされる。

(7) t/d 削除が起こる条件 Smith et al. (2009:71-72) から抜粋

(a) t/d 削除が起こる音韻的条件

■流音が後続する場合 *FinØ* Lala's head first.

■t/d の前のセグメントが/s/の場合 *I missed it.*

(b) t/d 削除が起こる形態的条件

■単一形態素内にある連続子音の場合 *You'll have to hold mammie's hanØ.*

(c) t/d 削除が起こる社会言語学的な条件

■インフォーマルな会話、労働者階級

この t/d 削除の生起条件は方言によっても異なるため、ある方言話者がきちんと当該方言の t/d 削除の条件に則って変種を使い分けしているのかを確かめることが可能であるとされる。Smith (2009) によると、母親の方言にある t/d 削除の条件をその子供も同じようにその生起条件を習得しているという結果かが得られた。しかしながら、調査対象の子供は 2 歳 6 ヶ月から 4 歳までの子供 24 人で、Tagliamonte (2008) や Stanford (2008) と同様に言語発達の途中段階である。それゆえ、養育者である母親との接触時間も長く、より直接的に母親の母方言の影響が強く現れると考えられる。

子供よりも少し成長した中学生を調査対象にした研究に金田一 (1967) がある。金田一は東京の中学校においてガ行鼻濁音の有無を調べた。その結果、ガ行鼻濁音ができるかどうかは親の母方言の影響はないと結論付けている。しかしながら、その結論にいたるまでの過程に統計的な処理などはないため、金田一の主観的な判断で「親の母方言の影響はない」としている。

また日本においては国立国語研究所が昭和 24 年に福島県白河市で京浜地方から疎開してきて当時まだ残っていた子供約 500 人を対象に方言調査を行った (柴田 1958)。この調査の結果によると、6,7 歳までに白河市にきた子供は白河市に来てから 5, 6 年の間にほぼ完全に白河の方言を習得し、白河市で生まれ育った子供の方言と大差ない。しかし 14 歳以上になって疎開した子供のほとんどは白河の方言の影響を受けず東京式のアクセントであるとしている。またその中間である 7・14 歳までに白河市に疎開で来た子供たちは白河の方言でも東京式でもない不安定なアクセントを示すと報告している。疎開という特殊な状況のため、当時のその子供達の近くには両親がいるという状況は考えにくいであろう。しかしながら、白河市に疎開した子供のうち両親のうちどちらかが白河市出身である場合、母親が白河市出身である方が白河のアクセント習得率がよいという結果がある (表 2.7 参照)。柴田 (1958: 179) もこの結果は「母親の方言の影響の方が大きいということを裏書きするものである」と述べているⁱⁱ。

表 2.7 柴田 (1958:180) より抜粋

両親の出身地 アクセント	父:京浜 母:白河	父:白河 母:京浜
白河式	33 人(91.7%)	28 人(84.9%)
京浜式	1(2.7%)	3(9.1%)
そのほか	2(5.6%)	2(6.1%)
合計	36(100%)	33(100%)

では大人を調査対象にした研究がないのかというそうではない。言語形成期を終えた大人を対象に親の母方言の影響があるかどうかを見たものは、国立国語研究所 (1965)、杉藤 (1984)、Trudgill (1986) がある。

国立国語研究所 (1965) は北海道において親子三世代の方言がどのようになっているのかを調べている。北海道に屯田兵として日本各地から移住者が多いことは知られている。その移住者ら (移住 1 世) とその子供 (移住 2 世) と孫 (移住 3 世) のアクセントの移り変わりを捉えるべく調査が行われた。移住 1 世はもともと北海道以外の地域で生まれ育っており、北海道に移住後もその前の方言 (母方言) を維持していると考えられる。この調査の結果、家庭によって異なることもあるが移住 1 世の母方言のアクセントの影響は移住 2 世までは少なからず残るものとされている。つまり移住 1 世の母方言が移住 2 世にまで伝承されているということを示唆する。移住 3 世のことになると、移住第 1 世がどこの出身地であろうと、ほぼ無アクセントになることを報告している。北海道での調査は道内の 5 つの町で行われており、どの地も札幌、帯広、旭川といった比較的大きな都市では行われてない。

より大きな都市で親の出身地とその子供のアクセントを調べたのが杉藤 (1984) である。杉藤 (1984) は近畿方言における 2 拍名詞第 5 類の拍内下降の有無を当時の女子大学生を対象に調査している。調査対象の女子大学生 (60 名) は表 2.8 に示すように親の出身地によって 4 つのグループに分けられている。

表 2.8 杉藤 (1984) の調査対象者(60 名)の内訳

母 \ 父	近畿アクセント地域	東京アクセント地域
近畿アクセント地域	30 名	12 名
東京アクセント地域	10 名	8 名

近畿方言の 2 拍名詞第 5 類の拍内下降は当時から指摘されているように、拍内下降がなくなり 2 拍名詞第 4 類と統合される形になっているとされる (3.2 参照)。杉藤の結果では拍内下降の有無は親の出身地のアクセントと関係があり、特に母親が近畿地方出身の場合は拍内下降をもっているということがわかっている。この結果は先の疎開児童による白河方言の習得と同じく、母親の母方言が方言習得に影響を与えていることがわかる。

また秋永(1958)では東京生まれ、東京育ちの教養ある 30 代の男性を調査したときに、その男性はほとんど無アクセントであったと報告している。その理由について、秋永は「男性の両親はともに無アクセント地域である熊本の出身で、なおかつ小さいときにあまり遊び友達がいなかったために彼は親の無アクセントを習得したのだろう」としている。

ここまで見てきたのは日本語における方言アクセント、とりわけ語彙アクセントの習得を調べている。語彙アクセントは語彙ごとにアクセントが決まっているためアクセントの予測はできない。一方、複合語アクセントや外来語アクセントなどはそれぞれに「複合語アクセント規則」や「外来語アクセント規則」が決まっているため、「この場合にはこのようなアクセントである」ということが予想できる。そのため子供にとって語彙アクセントの習得は一つ一つ記憶として心内辞書(mental lexicon)に蓄積していくものだと考えられている。

では他の言語ではどうか。英語では方言ごとにセグメントの発音が異なる。また母音の質も方言ごとに異なる。ちょうど日本語の拍内下降の有無と同様に、英語でも方言ごとにきまったセグメントの発音の仕方を子供は習得する必要がある。Trudgill (1976) はイングランドのノリッジ (Norwich) で親の出身地の違いによってノリッジ特有の発音ができるかどうかを調べている。調査対象者は 30 歳から 40 歳の 20 名でノリッジに生まれ育った話者である。20 名のうち 10 名の両親はノリッジで生まれ育った者、残りの 10 名の両親はノリッジ以外の土地で生まれて移住してきた者である。そして 20 名の話者が “Norwich City scored an own goal.” をノリッジの発音で [ʌn] [gu:l] と発音できるかどうかを調査した。その結果、他から移ってきた両親をもつ話者はその発音ができなかったと報告している。英語を対象とした調査でも両親の出身地の違いによって、その土地固有のセグメントの発音を習得できるかどうかに差が現れるということが分かった。このように日本語でも英語でも「語彙」単位で親の出身地の違いによって方言の習得に差が現れてくることが分かっている。

では「語彙」単独ではない場合はどうなるのであろうか。Payne (1976) はペンシルヴァニア州フィラデルフィア郊外の King of Prussia (以下 KP) という地域で子供 (34 名) の方言習得の調査を行った。Payne の目的は州外から KP に移ってきた子供の年齢によって、フィラデルフィアの方言をどの程度習得するのかを調べることである。彼女が調査で用いたのはフィラデルフィアの母音の変異型 (aw, ay, ow, oy, uw) が習得できているか、また “Short-a” と呼ばれる煩雑な音韻規則が習得できているかどうかである。母音の変異型の習得については 5 歳までに KP に移ってきた子供は、どの変異型も 60-70% の割合で習得しており一番習得率がよいということがわかっている。次に習得率が良かったのは 5-9 歳までに KP に移ってきた子供で 40-60% の割合で習得していた。そして一番習得が悪かったのは 10-14 歳で KP に移住してきた子供 (3 名) であった。この変異型の習得の結果は年齢が上がるにつれて第二方言を習得することの難しさを示唆している。

(8) フィラデルフィアにおける母音変異型の習得率

5 歳までに移住	60-70%
5-9 歳	40-60%
10-14 歳	0%

そして後者、“Short-a” と呼ばれる音韻規則は “notorious instance of complexity” (Chambers 1992: 684) と言われているように非常に複雑な音韻規則である。緊張 (tense) の /æh/ と弛緩 (lax) の /æ/ で発音する基本的な 3 つの条件のほかに語彙的な例外を習得する必要がある。しかしながら、基本的な 3 つの条件でさえその習得が難しいとされる。この Short-a の基本的な条件を習得できた子供は両親ともにフィラデルフィアに生まれ育ったという子供であった。両親が KP 出身ではないが KP で生まれ育った子供でさえも、この Short-a の習得ができなかったと報告している。

この Payne (1976) の調査では二つのことが明らかとなった。一つは音声的な変異型（母音の変異型）の習得は親がどこの出身であろうとも、その土地に幼い頃に移住してきた場合にはよく習得できるという点。二つ目は音韻規則の習得は親の出身地が KP でなければ習得できなかったという点である。後者の音韻規則が示す結果は、親の母方言のインプットがその土地の方言でなければ規則が習得できないことを意味している。そして、この調査の結論として Payne (1976: 238) は

Not only do the children tend to acquire the patterns of the phonetic variables of the local children to a very large extent, but also they shift in the direction of learning the new phonological patterns of their peers even though they are usually unsuccessful.

とし、peer が使う新しい音韻規則と同じ方向に向かうが、多くの場合、完全には peer とは一致しないと報告している。親の母方言の影響は言語発達段階における子供に観察されることがわかった。しかしながら、大人を対象として親の出身地の影響をみた調査は Trudgil (1976)、杉藤 (1984) のみであり両者の研究はセグメントの習得である。大人を対象とした音韻規則の習得はどうなっているのかは定かではない。このため先行研究の不備を補完するような調査が必要である。

2.2.3 先行研究のまとめ

方言習得に関して「成育地の影響」「親の母方言の影響」という二つの観点から先行研究を整理した。この二つの影響があることは誰もが納得することであろうが、どちらかの影響が完全にもう一方を覆い隠すというものではない。調査によって得られる方言データや現象をどのような立場で解釈するのかによって、「生育地」「親の母方言」の影響という二つの見方になるものと考えている。しかしながら、先行研究には共通する不備が二点みられる。一つ目は調査対象者が子供であるという点、二つ目は調査項目がセグメントの習得に注目した研究が多いという点である。純粋にその生育地の影響が強いのか、あるいは親の母方言の影響が強いのかを調べるためには、

- ・ 同じ生育地
- ・ 言語形成期を過ぎた話者
- ・ 相違点は親の出身地

という条件を揃えなくてはならないであろう。そして、これらの条件を揃えた上で調査項目として

- ・ 語彙ごとに決まったアクセントの習得 (lexically determined items)
- ・ 音韻規則の習得 (phonological rule)

という点を調べる必要があると考える。これらをきちんと整理し調査をすることによって、先行研究を補完し「生育地の影響」「親の母方言の影響」という説に一定の方向性を示すことができると考える。

2.3 問題の所在

本研究は生まれ育った場所が同じであっても親の出身地の違いによって、その話者が習得した方言に違いがあるのかということが出発点である。そして本論文の最終的な目標は方言調査における実用可能な「方言話者の選定条件」設定することである。ここで書いた「実用可能な」というのは、現実の社会状況に合わせた形で「親の出身地とその子供」の二世代をみることによって決めることができるようするという事を考えている。

もし親の出身地に関係なく、その土地で生まれ育った子供がその土地の方言を同等に習得しているのであれば、親の出身地にこだわる必要はなく「その土地で生まれ育った」という「緩い条件」による方言調査で十分である。しかし、もし「緩い条件」によって違いがあるのであれば、その違いはどこから生み出されるのだろうか。違いを生み出す要因は色々と考えられるであろうが、その一つの要因として「親の出身地の母方言」親の出身地の違いによるものではないかと考えている。

また親の出身地の違いによって習得した方言に違いがあるとしたら、その違いがどこに現れるのか—語彙的な部分なのか、規則的な部分なのか—という点についても明らかにしなくてはならない。これまでの方言習得の研究では、語彙の形態的側面と語彙アクセント、あるいはセグメントの発音という語彙的な部分の習得に焦点が当てられてきた。そのため音韻規則のような規則的な部分の習得は多くは扱われてこなかったのが現状である。このような先行研究での不備を踏まえ、本研究では語彙的な部分（語彙アクセント）とともに規則的な部分（音韻規則）の習得も方言習得に含めて方言習得における両親の母方言の影響を調べる。

ⁱ “province”カナダにおける「州」のことを表す。

ⁱⁱ しかしながら、柴田（1958）のデータで χ^2 検定を行った結果、母親の出身地が白河市かどうかによって違いがあるかどうかを確かめたところ、統計的には有意差は確認されなかった($\chi^2 = 1.28$ 、 $df = 2$ 、 $p = 0.5$)。

第3章 近畿方言調査ⁱ

3.1 はじめに

ここでは調査対象の方言である近畿方言がどのような方言なのか、またどのような状況にあるのかを把握する。まず他方言と式の有無とアクセント核（省略して「核」と呼ぶ）の有無によって近畿方言と他方言を比較し、近畿方言を位置づける。続いて近畿方言の音韻的特徴を取り上げ、近年のアクセント変化を扱った先行研究を整理する。そして近畿方言を調査対象の方言として何を明らかにしたいのかを明示し、調査の概要を説明する。近畿方言の位置づけを行う前に用語の整理をしておく。「アクセント」と一口にいてもアクセントには様々な側面がある。ここでは木部（2008: 59）に挙げられている4つ側面についてその意味を定義しておく。

(9) アクセントの様々な側面

- (a) アクセントの型
- (b) アクセントの単語グループ
- (c) アクセント規則
- (d) アクセント体系

まず一つ目(a)の「アクセントの型」というのは具体的な語彙の音調をもとして、抽象度を上げてパターン化されたものを指す。具体的には、式と核の有無というような基準をもとにパターンをつくり、どの方言がどのようなパターンをもっているのかを示すことである。

表 3.1 式と核の有無によるアクセントの型の分類（木部（2008）を筆者が表に変更）

		核・有	核・無
式・有	高起	京阪式・高起	N型(cf.鹿児島)
	低起	京阪式・低起	
式・無		東京式	無型

二つ目(b)の「アクセントの単語グループ」というのは、同じアクセント型の単語を集めて得られる単語の集合体のことである。このアクセントの単語グループを調べる場合、方言研究のフィールドワーカーは「類別語彙」を使って調査を行う。この類別語彙は昔(平安時代)から使われてきた語彙(つまり和語)で、その頃の京都では同じモーラ数の語彙であってもアクセントによる区別があったと推定されるものである。下の表 3.2 は 2 拍名詞の類別語彙を示しているが、この 2 拍名詞は平安時代には 5 つのアクセントによって区別されていたと考えられるため、5 つの「類」に分類されている。しかしながら、時代と地域によってアクセントが統合される現象がみられる。それが今現在の日本語の方言アクセントの違いに至っていると考えられている。下の表 3.2 は 2 拍名詞のみについて、東京方言と近畿方言のアクセントの単語グループを比較したものである。

表 3.2 2 拍名詞の類別語彙の比較表—東京方言と近畿方言— (金田一 (1974) より抜粋)

類	東京方言アクセント の単語グループ	近畿方言アクセント の単語グループ	語例	近畿方言アクセントの 助詞付きのグループ	語例
一類	○●	●●	ニワ(庭) トリ(鳥)	●●▲	ニワガ(庭が) トリガ(鳥が)
二類	○●	●○	ヤマ(山) カワ(川)	●○△	ヤマガ(山が) カワガ(川が)
三類	○●	●○	アシ(足) イヌ(犬)	●○△	アシガ(足が) イヌガ(犬が)
四類	●○	○●	カズ(数) イト(糸)	○○▲	カズガ(数が) イトガ(糸が)
五類	●○	○◎	コエ(声) アメ(雨)	○●△	コエガ(声が) アメガ(雨が)

●:高 ○:低 ◎:拍内下降 ▲/△:助詞

例えば表 3.2 の東京方言アクセントの単語グループはいくつあるのかというと、助詞付きの場合 (○●▲)、(○●△)、(●○) の 3 グループである。一方、近畿方言アクセントの単語グループはいくつあるのかというと (●●▲)、(●○△)、(○○▲)、(○●△) と 4 つあることから 4 つのグループに分かれることがわかる。このように、どの類とどの類のアクセントが統合し一つの単語グループになるのかによって方言アクセントの違いがあるとされる。

では先に定義した「アクセント型」で東京方言、近畿方言を分類すると、それぞれ東京式アクセント型、京阪式アクセント型となる。だが各アクセント型に分類される諸方言、例えば東京式アクセント型に分類される秋田方言と東京方言とを比較すると、各単語グループに属する所属語彙が異なる。同様に、京阪式アクセント型に分類される富山方言と近畿方言とを比較しても単語グループに所属する所属語彙が異なる。このように各方言によって単語グループに属する所属語彙がことなるが「アクセント型」という点では同じである。

三点目の「アクセント規則」は、複合語や外来語などにアクセントを付与するための規則である。例えば東京方言における外来語のアクセント規則というと「語末から数えて 3 モーラ目を含む音節にアクセントを置く」(McCawley 1978) というもので、汎用性の高い規則である。日本語母語話者であれば初めて目にするような外来語に対しても無意識にこの規則を適用する (竹村 2008)。このような規則は外来語だけではなく、複合語には「複合語アクセント規則」がある。普段、「アクセント」と言った場合に想起されるものは「語彙アクセント」であり、語彙ごとに決まったアクセントのことを指す。そのため、この「アクセント規則」については意識されることは少ない。しかしながら、「アクセントの習得」といったときに「語彙アクセントの習得」と「アクセント規則の習得」とは両者の性質が異なることに注意しなければならない (那須 2004)。前者の「語彙アクセントの習得」の場合、語彙ごとに決まったアクセントがあるため、語彙の数だけ習得すべきアクセントがあるということを意味する。言語習得をしている段階にある幼児にとっては語彙ごとに決まったアクセントを心内辞書に「記憶」として留めていかなくてはならない。これは (4b) の「アクセントの単語グループ」を習得することと同じ意味である。一方、後者の「アクセント規則の習得」の場合、規則を一つ習得すると生産的にアクセントを付与することを意味し、音韻に関する文法の一部とみなされる。そのため「語彙アクセントの習得」を調べることは、すなわち話者の心内辞書に記憶されているアクセントをテストすることを意味するが、「アクセント規則の習得」を調べ

ということとは、話者の音韻に関する文法を問うということになる。(4d)の「アクセント体系」は上記三つのアクセントの側面を含んだ、当該方言のアクセントの全体像のことを指す。

一口に「アクセント調査」といっても「アクセント」には上記 4 つの側面があることを意識して、アクセント調査によってアクセントの何を明らかにしたいのかを明確にしておくてはならない。本研究の調査で中心となるのは「語彙アクセント」と「新造複合語のアクセント」である。新造複合語とは実在する語彙を 2 つ以上合わせて作り出す、あまり意味をなさない実在しない複合語である。通常、複合語を読むときには語彙に備わった単独アクセントをそのまま読むのではなく、「複合語アクセント規則」に従って一つにまとまったアクセントを示すので、新造複合語を読むときには同じ規則に従って読まれると考えられる。つまり「語彙アクセント」と「新造複合語のアクセント」は上記の (4b)、(4c) にあてはまる。話者から提供される「語彙アクセント」がどれだけ近畿方言の伝統的なもの—(4b)の「アクセントの単語グループ」—と一致するのかわかると調べる。一方、「新造複合語アクセント」は近畿方言における「複合語アクセント規則」—(4c)の「アクセント規則」—が習得できているのかを調べることとなる。

今後、論文中に用語として「語彙アクセント」のことを「語彙的要素」あるいは「記憶」と呼び、「アクセント規則」のことを「規則的要素」あるいは「音韻規則」と称する。次節では韻律的側面から近畿方言とその他の方言との相違を整理する。

3.2 近畿方言の位置づけ

3.2.1 韻律的特徴

日本語の諸方言のアクセント型は式の有無と核の有無という韻律的特徴によって分類することができる(3.1 参照)。表 3.1 はこの分類の仕方に従い日本語の代表的な方言を分類したものである。

表 3.1 式と核の有無によるアクセントの型の分類および語例 (木部 (2008) を筆者が表に変更し語例を追加)

			核	
			核・有	核・無
式	式・有	高起式	京阪式・高起 カゼ(風)(●●) フユ(冬)(●○)	N 型(cf.鹿児島) A 型 カゼ(風)(●○) フユ(冬)(●○) B 型 カタ(肩)(○●) アメ(雨)(○●)
		低起式	京阪式・低起 カタ(肩)(○●) アメ(雨)(○◎)	
	式・無		東京式 カゼ(風)(○●) 無核型 フユ(冬)(○●) カタ(肩)(●○) 有核型 アメ(雨)(●○)	無型 カゼ(風)(○●) フユ(冬)(○●) カタ(肩)(○●) アメ(雨)(○●)

●:高 ○:低 ◎:拍内下降

ここでは京阪式アクセント、東京式アクセント、鹿児島や長崎の方言に代表されるような N 型アクセント、福島方言や熊本方言に代表されるような無型アクセントをとりあげて、近畿方言の位置づけを行う。「式」は英語ではトーン (tone) と呼ばれ、アクセント全体にかぶさる全体的な「音調」を指す。日本語のアクセントは「アクセント核」を指し、英語で pitch accent と呼ばれる。これは、ある特定の音節あるいは拍に備わっている下がり目や上がり目のことを指す。表 3.1 で式と核の両方を兼ね備えた方言は京阪式アクセントである。京阪式アクセントにおける式は語頭が高い音で始まるのか、あるいは低い音で始まるのかによって高起式と低起式に分けられる。一方、式の区別を失いアクセント核を有する「核方言」が東京式アクセントである。例えばカゼ(風)は助詞の「が」をそのあとにつけると「カゼガ(○●▲)」という具合に核がなく無核型、フユ(冬)に助詞の「が」をつけると「フユガ(○●△)」と第 2 拍目に下げ核のある型、カタ(肩)やアメ(雨)は第 1 拍目に下げ核のある型となる。

鹿児島方言や長崎方言に代表されるような N 型アクセントと呼ばれる方言は、核を失って式のみを残したという「式方言」である。例えば鹿児島方言であれば 2 つの式(型)があり、語末から 2 音節目が高い A 型と末尾の一音節が高い B 型があり、両者はアクセント単位の長さに関わらず常に一定である。A 型の場合であれば、カゼ(●○)、カゼガ(○●△)、カゼカラ(○○▲△)、カゼカラモ(○○△▲△)という具合に常に末尾から 2 音節目が高く発音される。また B 型であれば、カタ(○●)、カタガ(○○▲)、カタカラ(○○△▲)、カタカラモ(○○△▲△)のように末尾が常に高く発音される。そして、福島方言や熊本方言に代表されるような無型アクセントとは、式も核も持たない方言である。この方言には鹿児島方言でみたような A 型か B 型かというような語彙ごとの型の区別も一定のパターンもない。

他の代表的な方言と式および核の有無によって比較すると、京阪式アクセントが式と核の両者を使うという特徴をもった方言であることがわかる。近畿方言はこの京阪式アクセントを代表する方言であり、この韻律的特徴一式と核一をもつ。もちろんアクセントの単語グループが異なることは言うまでもないが、複合語アクセント規則に代表されるような「アクセント規則」はどうなっているのだろうか。次に複合語アクセント規則について整理する。

3.2.2 近畿方言の複合語アクセント

ある語とある語を一つの単語に形成したものを「複合語」と呼ぶ。例えば、「環境」と「問題」という単語同士を合わせて「環境問題」という複合語を形成する。複合語は一見すると語同士の形態的な結びつきにみえるが、音韻的な側面においてもその結びつきが強く、それを表したものが「複合語アクセント規則」である。

複合語のアクセントを東京式、京阪式で比較したものが表 3.3 である。ここでは東京式の代表として東京方言(標準語のもとになっている方言)、京阪式は近畿方言と鹿児島方言を挙げた。京阪式の例に挙げた近畿方言の式と鹿児島方言の式には対応関係があることが指摘されており、平安京都(平安時代の京都で話されていた言葉)の「高起 / 低起」は現在の鹿児島方言の「A 型 / B 型」に対応するとされている(木部 2008)。

表 3.3 各方言における複合語アクセントの比較

方言	東京式(東京方言)	京阪式(近畿方言)	京阪式(鹿児島方言)
複合語アクセントの音調	○●●○○	高起式: ●●●○○	A型: ○○○●○
		低起式: ○○●○○	B型: ○○○○●
語例	ミ[ズマ]ツリ(水祭り) ア[メマ]ツリ(雨祭り)	高起式: [ミズマ]ツリ(水祭り) 低起式: アメ[マ]ツリ(雨祭り)	A型: ミズマ[ツ]リ(水祭り) B型: アメマツ[リ](雨祭り)
複合語アクセントの特徴	1 拍目と 2 拍目の音の高さが異なる。ある特定の生産的な後部要素(例えば、問題、まつり)であれば、アクセント核が置かれる位置は一定である。	複合語の前部要素が高起式の単語か低起式の単語かによって、複合語全体の式が決まる。	前部要素がA型(語末から 2 音節目が高い)かB型(語末の音節が高い)かによって、複合語全体がA型をとるかB型をとるのが決まる。

●:高 ○:低 ◎:拍内下降

[: ピッチの上昇]: ピッチの下降

東京方言は式の高低はない(3.2.1 表 3.1 参照)。そのため核の有無が複合語アクセントを形成する際に重要となる。東京方言を基礎とする標準語では語彙単独で発音するときには 1 拍目と 2 拍目の音の高さが異なり、複合語においても 1 拍目と 2 拍目の音の高さは異なる(NHK 放送文化研究所 1998)。また、ある特定の生産的な後部要素「～問題」「～まつり」などであれば、前部要素に関係なく複合語アクセントが置かれる位置が一定であることが知られている(NHK 放送文化研究所 1998)。

一方、近畿方言および鹿児島方言はどうか。前者は式と核をもつ方言である。近畿方言は前部要素が高起式の単語か、あるいは低起式の単語かによって複合語の式とアクセントが決まる(和田 1943)。例えば、高起式の単語「水(●●)」は語頭が高い音で始まるので、複合語「水まつり」は(●●●ㄱ○○)のように高い音で始まり、アクセント核(ㄱ)があるところまで高い音を保持する。一方、低起式の単語「雨(○○◎)」は語頭が低く始まるので、複合語「雨まつり」は(○○●ㄱ○○)のように、語頭は低く始まりアクセント核がある直前まで低い音調を保つ。このように近畿方言は前部要素の式(高起式/低起式)とアクセント核の位置によって複合語全体の式とアクセントが決まる。この京阪式アクセントに特徴的な複合語アクセント規則は「式保存の法則」と呼ばれている。

アクセント核をもたず式のみをもつ方言、鹿児島方言はどうか。鹿児島方言は 2 つの型(A型/B型)しかない。(表 3.1 参照) 鹿児島の複合語アクセントは近畿方言と似ており、前部要素が重要な役目を果たす。鹿児島方言は前部要素が A 型の単語か、あるいは B 型の単語かによって複合語全体のアクセントが決まる(平山 1951、上野 1997、早田 1999)。例えば、先述の近畿方言と同じものを例に鹿児島方言の複合語アクセントを見てみよう。「水」は鹿児島方言では A 型で語末から 2 音節目が高く(●○)という音調をもつ。この「語の末尾から 2 音節目が高い」という情報が複合語にも適用され、複合語の末尾から 2 音節目が高く発音される。そのため、先の「水まつり」であれば(○○○●○)となる。そして語末から 1 音節目が高く発音される B 型の単語「雨(○●)」が複合語の前部要

素とするならば、複合語の末尾の1音節目が高く発音される。先と同じ語例「雨まつり」であれば末尾から1音節目が高く発音されるので(○○○○●)となる。鹿児島方言に関する韻律的特徴は次の第4章「鹿児島方言調査」で詳しく説明する。

3.3 近畿方言の変化についての先行研究

先の3.2で概観したように、近畿方言の韻律的特徴は式と核を有し、式では高起式/低起式の区別があることである。さらに複合語アクセント規則では前部要素の「式」が複合語全体の「式」を決めるという「式保存の法則」があることを確認した。しかしながら近年、近畿方言に方言変化があることを多くの研究者が指摘している。ここでは近畿方言の語彙アクセントと複合語アクセント、および形態面についての変化について先行研究を整理し、この近畿方言調査で注意すべき点を確認する。

3.3.1 語彙アクセントの変化

近畿方言の語彙アクセントの変化として真っ先に挙げられるのは、2拍名詞における4、5類の統合である。もともと4、5類はそれぞれ(○●)と(○◎)という別のアクセントをもっているが、近年ではその5類の2音節目の拍内下降(contour tone)が消滅しつつあることが指摘されている(杉藤1984、真田1986)。その5類の拍内下降がなくなったことでそのアクセントは(○●)となり、4類のアクセントとの区別がなくなったことで両者が統合したとされている。そして4、5類の統合により、助詞付きの形式においても本来4類は(○○▲)であったものが、5類と同じ(○●△)に変化したのであろうと指摘されている。

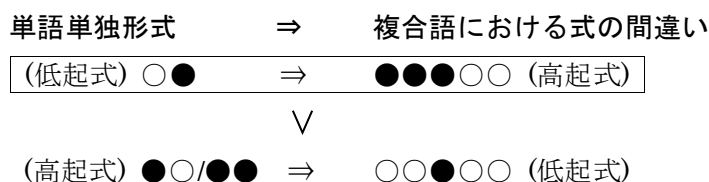
3.3.2 複合語アクセント規則の変化

京阪式の複合語アクセント規則は「式保存の法則」と呼ばれ3.2.2で見たように和田(1943)が最初にその規則の存在を指摘した。しかし、この式保存の法則は「いつも例外がないとは言えない」と和田(1943:10)が言及している。和田がここで言っている例外というものは恐らく、既に語彙化された複合語であったと考えられる。

この式保存の法則の例外について中井(1996)が調査を行っている。中井が調べたのは前部要素が高起式のものと低起式のものを単独で読み上げてもらい、それに続く後部要素をつけて複合語として読み上げてもらう、という方法である。そのときに読み上げてもらう複合語は実在する複合語で、例えば「麦(○●)＋はたけ(○●○)＝むぎばたけ」のような語である。調査対象は京都市に生まれ育った話者16名で、両親ともに近畿地方出身の話者である。

この調査で明らかになった点は二つある。一つ目は複合語が5拍未満の場合、式保存の法則の例外が多くなる点と、もう一つは式保存の法則の間違いで「前部要素を低起式で読み、複合語を高起式で読んだ」という誤答の方が「前部要素を高起式で読み、複合語を低起式で読んだ」という誤答よりも多いという点である。

(10) 近畿方言における複合語の式の間違いの方向性



那須 (2004) も式保存の法則が若年層においてどの程度守られているのかについて調べている。しかしながら、中井 (1996) の手法と異なる点は、調査に用いた語彙が部分的に新造複合語であったという点である。新造複合語とは実在する前部要素と実在する後部要素とを合わせて作る実在しない複合語である。そのような複合語は実在しないため話者にとっては初めて目にする複合語である。例えば「かまきり (○○●○)」 + 「もどき (○●○)」から作られる複合語、「かまきりもどき」のような語のことである。

那須 (2004) は前部要素の語彙単独形式のアクセントと、その前部要素を使ってつくった複合語 (実在する複合語も新造複合語も含め) を若年層 (15-28 歳) の話者 17 名に読み上げ調査を行っている。残念ながら話者 17 名の両親の出身地までは尋ねていないが、京都市内あるいは亀岡市内で生まれ育った話者である。この調査では、語彙単独のアクセントが変化したものが 26.1%であったのに対して、式保存の法則の例外 (式保存の法則の則っていないもの) が 12.9%と低い割合であることがわかった。語彙単独のアクセントの変化とは例えば「マッチ」のアクセントが伝統的な (○○●) から (●○○) に変化するような場合である。言い方を変えると、前者の語彙単独のアクセントは語彙的に決まっているものであるので、心内辞書に記憶として蓄積される言語知識 (記憶) である。それに対し後者は複合語アクセントを付与するという音韻規則 (文法) の一つであり、この規則を一つ習得することによって量産的に複合語アクセントを付与することが可能となる。つまり那須 (2004) の結果からみえてくるのは、「式保存の法則」という音韻規則 (文法) の方が語彙的なものに比べて変化を受けにくいという点である。

2 章の先行研究でも触れたが、これまでの方言調査ではセグメントや語彙アクセントの習得しか観察していないが、それよりも大きい単位として複合語アクセントをみる必要がある。語彙アクセントの習得だけではなく複合語アクセントの習得、とくに近畿方言の「式保存の法則」という音韻規則の習得に注目して、親の出身地の方言と方言習得がどのようにになっているのかを見ることができる。

3.3.3 形態論的变化

高木 (2006) は標準語の「ではないか」に対応する近畿方言のヴァリエーション「～ジャナイカ、～チャウ、～ヤン」の使用実態について若年層 (70 人) を対象に調査を行っている。調査では参加者 2 人ずつのペアに自由に談話してもらい、それを分析している。その結果、標準語の「～ではないか」に対応する近畿方言のそれぞれのヴァリエーションでは標準語の影響で形態的な変化とともに意味の棲み分けができていることを指摘した。

また話者の名詞アクセントが「京阪式アクセントかどうか」についても調べている。その結果、京阪式アクセントの伝統的な型 (77.2%) と若年層の型 (14.9%) が認められ、合計すると京阪式アクセ

ントの割合は 92.1%であったと報告している。一方、東京式アクセントで読まれた割合は 2.5%に留まり、高木（2006）の調査参加者のほとんどが京阪式アクセントで名詞を読んでいることがわかる。

前者「じゃないか」の形態面において標準語の影響がある一方、後者のアクセントについては京阪式アクセントからは逸脱していないと指摘している。その結果、形態面において標準語への大きな変化があったとしても音声的側面からは京阪式アクセントで実現しているので、話者の頭の中では「近畿方言」を話しているという意識になっていると指摘している。つまり近畿方言で形態面における標準語化への変化を支えているのは「京阪式アクセント」であり、形態面が変化しても京阪式アクセントで実現される限り近畿方言として認識されるという。

さらに高木（2006）はアクセントの分類の中で、京阪式（伝統型/若年層型）、東京式、逸脱式と分けている。逸脱型の定義は「京阪式のアクセント型にあてはまるもので、存在しない新しいアクセント型が生まれるものではない」としている。高木（2006）と同様に武田（2001）も「本来その語が持っている「正しい」アクセント型によって実現することよりも、京阪式のいずれかのアクセントによって『近畿方言らしく』実現することが重視されている」と指摘している。その結果「逸脱型」は近畿方言らしく聞こえるのだけれども、本来その語がもっている正真正銘（authentic）の近畿方言とは違うものであることがわかる。

3.3.4 まとめ

まず語彙アクセントで指摘されていたのは、5種類に分類される音節名詞の中で第4類と第5類の統合が、単語単独形式、および助詞付きの形式で起こっているという点であった。この語彙アクセントの変化はかなり進んでいると考えられるため、変化してしまったもの（第5類の単語単独形式、および第4類の助詞付き形式）をこの調査の対象から外すべきだと考えられる。また複合語アクセント規則では、変化の方向性として注目しなくてはならないのは「低起式の単語が複合語では高起式に変わる」という点である。この点について中井（1996）と比較してみる必要がある。また那須（2004）が示したように、「語彙アクセント」と「アクセント規則」の変化の速度についても、この調査では注目してみなくてはならないであろう。そして最後の高木（2006）の形態論的变化は「目に見える形での変化」であり、アクセントを中心に扱っていないが「近畿方言らしさ」を指摘した点に関しては示唆に富んでいるといえよう。本調査では形態的側面は扱わないが、アクセントの「近畿方言らしさ」という視点を取り入れて分析することができよう。

3.4 調査方法

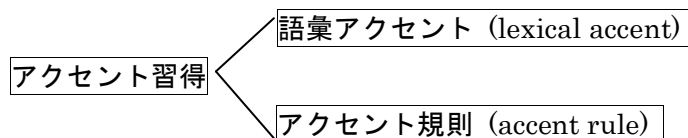
この節では調査で何に焦点を当てるのかを改めて明示する。とくに2章で触れた先行研究を踏まえ、先行研究では何を見過ごしていたのか、またどういう統制が調査には必要なのかについて、ここで述べる。

3.4.1 調査の焦点—近畿方言で何を明らかにしたいのか—

2章では「生育地」と「親の母方言」と二つに分けて先行研究を整理したが、どちらの影響力も存在し、一方の影響力が他方を完全に覆い隠すほどの強い影響力があるとは必ずしも言えないことがわかっていて。だがここでは調査の目的・方向性をはっきりとさせるために両極端に位置する立場に立って考えてみることにする。もし「生育地」の影響が「親の母方言」の影響を完全に覆い隠すほどの強い影響があるのであれば、親の出身地に関係なくその子供たちが習得する方言はみな一樣になることが予想される。もしそのような結果になれば、「生育地」の影響が子供の方言習得においては最も重要な要因であり、ひいては方言調査を行う際の「はえぬき」の条件も「当該方言地域で生まれ育った者」というだけで十分ということになるであろう。

この予想を確かめるために、本調査では「生育地」を統制し「親の母方言」の違いによって、その子供が習得する方言に差が現れるかどうかを確認する。さらに習得する方言アクセントに差があるとなれば、その違いはどこに現れてくるのかを明らかにすることが本調査の目的である。

(11)



ここで一つの問題となるのが方言アクセントの習得に差が現れてくるのは—「語彙的」な部分なのか、あるいは「規則的」な部分—なのかという問題である。(6)に書かれているように、本調査で調べるのは「アクセントの習得」であるが、そこには二つの性質の異なる「語彙アクセント」と「アクセント規則」の習得があることを認識しておかなければならない。「語彙アクセント」は語彙に備わったアクセントであり、方言によって異なる。「アクセント規則」の習得は方言話者であれば備わっているであろう「音韻規則」という文法を習得できているかどうかを確かめることを意味している。親の母方言の影響があるとすれば、この「語彙アクセント」と「アクセント規則」のどちらの習得に差が現れるのか、あるいは両者に差が現れないのかを本調査では調べる。

3.4.2 調査概要

調査対象者と調査地

この調査で重要なのは調査対象者とその両親の出身地である。父親と母親の出身地が近畿地方出身かそれ以外かによって調査対象者を4つのグループに分類した(表3.4)。

表 3.4 両親の出身地別による調査対象の内訳

		父親		合計
		近畿圏内	近畿圏外	
母親	近畿圏内	Group 1 (21 名)	Group 2 (18 名)	39 名
		男性: 0 名	男性: 1 名	男性: 1 名
		女性: 21 名	女性: 17 名	女性: 38 名
	近畿圏外	Group 3 (21 名)	Group 4 (21 名)	42 名
		男性: 1 名	男性: 8 名	男性: 9 名
		女性: 20 名	女性: 13 名	女性: 33 名
合計		42 名	39 名	81 名
		男性: 1 名	男性: 9 名	男性: 10 名
		女性: 41 名	女性: 30 名	女性: 71 名

この分類方法は杉藤（1984）と同じである。また近畿方言の範囲は奥村(1962: 5-14) にならい、大阪府全域、京都府中部・南部、奈良県北部、滋賀県全域、兵庫県南東部までとした。調査対象者は言語形成期を過ぎていると考えられる 18 歳以上で、近畿方言圏内で生育した者を対象とした。また調査対象者の生誕地が近畿方言圏内でなかったとしても 3 歳までに近畿方言圏内に越してきた場合は対象者に含めることにした。調査対象者の詳細は付録の表 5-8 を参照されたい。

グループ 1 に属する話者は両親ともに近畿圏内の出身であり、今後「グループ 1 (両親 native)」と書くことにする。グループ 2 およびグループ 3 は両親のうち母親か父親が近畿圏外の出身であり、それぞれを「グループ 2 (母親 native)」、「グループ 3 (父親 native)」と書くことにする。そしてグループ 4 の話者は両親ともに近畿圏外の出身であり、今後「グループ 4 (両親 non-native)」と書くことにする。大阪を中心に方言調査を行った宮治（1997）や高木（2006）で両親の出身地を尋ねた調査では、両親とも近畿圏外であるという話者は宮治（1997）では 17.9% (19/106 人)、高木（2006）18.2% (8/44 人) であったとしている。（表 3.5 参照）

表 3.5 親の出身地による話者の数の比較

	宮治 (1997)	高木 (2006)	本調査
A (両親とも近畿圏出身)	52 人 (49.1%)	20 人 (45.5%)	21 人 (26.0%)
B/C (片方の親が近畿圏内出身)	35 人 (33.0%)	16 人 (36.4%)	39 人 (48.0%)
D (両親とも近畿圏外出身)	19 人 (17.9%)	8 人 (18.2%)	21 人 (26.0%)
合計	106 人 (100%)	44 人 (100%)	81 人 (100%)

本調査の調査対象者は言語習得が終わったと思われる 18 歳以上で、年齢の上限は 40 歳までとした。

これまでの方言習得の研究では幼年層や青年層を対象に調査が行われてきたが、それらの年齢層では言語習得が終わっているとは言い難い。調査対象となった子供達は年齢的にも親との接触が多いために親の方言の影響は多分にあると考えられる。

Eckert (1998) は社会言語学の調査を行う上では年齢層によって調べたい視点が異なるとしている。例えば、調査対象の年齢を 4 つの幼年層、青年・若年層、中年層、高齢層と分けたとする。幼年層を対象とした研究は子供の社会性の発達と言語習得に注目し、青年・若年層を対象とする研究は大人としての役割・振舞と言語使用に焦点があり、高齢層は喪失と言語使用に焦点があるとしている。そして最後に残った「中年層」が安定的で実際に“doing” language であるとしている。本研究の目的は「調査対象者が習得した今現在の方言」を親の出身地の違いによって何らかの違いが現れるかどうかをみることであるため、言語形成期を過ぎ、自分自身の母方言に直観が働くようになる年頃、18 歳以降からは言語使用が安定的になると想定している。またそのような年齢の話者を対象にするのであれば、ある程度方言調査についての理解もあって反応が早く、その話者の内省や経験も提供してくれるものだろうと考えた。

調査語彙

この調査では近畿方言の先行研究と比較するために、調査語彙は杉藤 (1984) の調査で用いられた 2 拍名詞の語彙 (55 語) をまず用意した。この「2 拍名詞」は 3.1 の「はじめに」のところでも説明したように平安時代の京都では 5 つのアクセントに分かれていたが、現在では 5 つのアクセントには分かれておらず方言によって実現されるアクセントの数 (単語グループ) は異なる。下の表 3.6 には比較のために京阪式アクセント、東京式アクセント、鹿児島方言の 2 拍名詞のアクセントを載せている。

表 3.6 本調査で用いた 2 拍名詞の調査語彙

		京阪式	東京式	鹿児島
一類	柿、腰、笹、壁、牛、枝、霧、口、風、水、 梅、虎、酒、竹、皿、飴、箱、海老、鳥、庭	●●		
二類	北、牙、旅、紙、夏、肘、歌、村、胸、冬、 石、旗、橋、寺、岩、梨、川、雪、町、音	●○	○○	●○
三類	腕、波、岸、泡、裏、蚤、山、塩、月、鍵、 栗、雲、坂、花、靴、髪、櫛、犬、池、馬			
四類	船、板、肩、息、数、帯、海、瓜、絹、糸、 空、肌、位置、中、針、箸、稲、傘、粉、種	○○●		
五類	鍋、鮎、声、窓、猿、鮎(ふな)、前、雨、蜘蛛、午後、 青、秋、白、赤、影、夜、地下、鶴、汗、朝	○○◎⇒ ○●	●○	○●

杉藤 (1984) の調査語彙では類別に偏りがあったため各類の調査語彙数が均等になるように、残りの 45 語を平山 (1960) の『全国アクセント辞典』から選定した。「語彙アクセント」と「アクセント

規則」を調べるために以下の 3 つの形式を用意した。まず調査語彙の選定であるが、表 3.7 の「1. 単語単独形式」と「2. 助詞付き形式」について説明する。こうして 2 拍名詞を 5 つある類から 20 語ずつ、合計 100 語ずつ「1. 単語単独形式（100 語）」と「2. 助詞付き形式（100 語）」を用意した（調査語彙の詳細は付録の表 3-4 参照）。

表 3.7 調査で用いた語彙の形式

	形式	目的	数
1	単語単独形式	語彙アクセントを調べるため	100 語
2	助詞付き形式 (単語 + 助詞「が」)	語彙アクセントを調べるため	100 語
3	新造複合語 (前部要素 + 後部要素)	アクセント規則 (「式保存の法則」の一致) を調べるため	100 語
合計			300 項目

続いて「3. 新造複合語（100 語）」は「式保存の法則」を調査対象者がきちんと適用できるかどうかをみるために用いられる。「式保存の法則」は先述のとおり、複合語アクセント規則で前部要素の式によって複合語全体の式が決まる、というものである。それゆえ調査対象者にとっては前部要素の式を把握し、「規則」を適用して複合語アクセントの式を一致させなければ「式保存の法則」に則っているとはいえないことになる。この「式保存の法則」に則ったかどうかを確かめるために新造複合語を使うことにした。新造複合語は文字通り「新しく作られた複合語」で語彙化されておらず調査対象者にとっては初めて目にするような複合語である。例えば「猿」と「飾り」を合わせて「猿飾り」、「海老」と「祭り」を合わせて「海老祭り」という具合に、単独形式でも独立できる名詞を今までに組み合わせたことがないであろうという形で複合語を用意した。このときに注意すべき点は「複合語が 5 モーラ未満になると例外が起こる」（中井 1996）という点である。そのため新造複合語は前部要素（2 拍名詞）と後部要素（3 拍以上の名詞）の 5 モーラ以上になるように作られている。こうして作られた新造複合語は前部要素（2 拍名詞）の数と同じ数だけ作られるので 100 語を用意した。

調査方法

調査方法は調査者（筆者）と調査協力者の 2 人の面接で、読み上げ形式の調査である。調査語彙と文が記載された調査用紙をインフォーマントは 2 回ずつ読み上げてもらうように指示される。注意点として、2 回読み上げるときに 1 回目と 2 回目の言い方が異なった場合、そのときは調査者が「もう一度〇〇番を読み上げてください」と指示し、1 回目と 2 回目の言い方が一致するようにしている。また高低アクセントがはっきりしない場合には、調査者（筆者）が問題となっている単語のアクセントのパタンをいくつか言って、調査協力者に選んでもらうようにした。調査時の音声は Roland 社の R-09 を使用し WAV ファイル（サンプリング周波数 48kHz、24bit）で録音した。マイクは Roland 社の EDIROL CS-15 を使用した。

3.4.3 分析の仕方—何を基準にするのか

単語単独形式と助詞付き形式には語彙ごとに決まったアクセントがあることは先述したとおりである(3.1)。ではどこの近畿方言の語彙アクセントおよび助詞付きのアクセントを基準とするかであるが、本調査では平山(1960)の『全国アクセント辞典』の「京都」を基準とする。この辞典に記載がある語彙アクセントと一致しているかどうかによって、話者の語彙アクセントの習得率を算出することにした。一方「アクセント規則」の習得ができているかどうかは話者の音韻に関する文法の一部を垣間見ることを意味する。ここでは近畿方言における複合語アクセント規則「式保存の法則」ができるかどうかを通して、話者がもっているアクセント規則を調べる。だが「式保存の法則」の習得ができていないかどうかを調べるにはどうするのが問題となる。これをどのように調べるのかを表3.8に示した。

表 3.8 語彙単独形式と複合語アクセントの関係

	語彙単独形式	新造複合語	語彙単独形式のアクセント	式保存の法則
(a)	うま ●○	うままつり ●●●○○	OK	OK
(b)	うま ●○	うままつり ○○●○○	OK	×
(c)	うま ○○●	うままつり ○○●○○	×	OK
(d)	うま ○○●	うままつり ●●●○○	×	×

この表3.8は窪菌(2006)の鹿児島方言における複合語アクセント規則の正誤表を参考に行っている。近畿方言における「式保存の法則」は複合語の前部要素の式が複合語の式を決めるというものである。まず複合語の前部要素の語彙単独形式における式をみる。そして、その前部要素の式と複合語の式が一致していれば、その話者は「式保存の法則」を習得しているということにした。ここでは単語単独形式が伝統的なアクセントに則っているかどうかは問わないことにしている。

表3.8の(a)は語彙単独形式の語頭が高い(＝高起式)。この語頭が「高起式」であるという情報を新造複合語にも反映させているので(a)は「式保存の法則」に則っている。そして(c)も「式保存の法則」に従った形である。(c)の場合、語彙単独形式のアクセントは語頭が低く(＝低起式)、伝統的なアクセントとは異なる。しかし、この「低起式」であるという情報を新造複合語にもきちんと反映させているので「式保存の法則」に則っており、この法則を習得できているとした。その他の(b)や(d)の場合は、語彙単独形式の式と新造複合語の式が一致していないので、このような場合は「式保存の法則」に則っていないものとした。この表3.8の中で(a)が伝統的な「語彙アクセント」および「式保存の法則」に則っていることから、(c)に比べるとより厳密な近畿方言の基準といえる。

3.4.4 調査結果の予想

研究者によって方言話者の定義が異なることは2章でも示したとおりである。だが研究者によって方言話者の定義が異なれば、そこから得られるデータも異なることが容易に想像できる。ここでは親の影響がないとする「生育地を重視」する立場と親の影響があるとする「親の影響は有」とする立場に分けて、先行研究をもとにして本調査における予測を立ててみる。

まず「成育地を重視」する立場であれば、どんな属性をもった話者であってもその土地の方言をみな一様に習得しているであろうと予想される。つまり親の出身地の方言などは関係なく、子供達はその土地の言葉を習得しているであろうということである。一方、話者の属性、とくに「親の出身地の母方言」による影響が少なからずあるという立場で考えると、話者間に方言習得のばらつきがあることが考えられる。先行研究でも親の母方言の影響があるということは言われている。

親の影響あったと主張するのは杉藤（1984）である。杉藤（1984）では2拍名詞第5類の2拍目の拍内下降ができるかどうかについて女子大学生を対象に調査を行い、その結果、母親のアクセントの影響が大きいことを主張している。柴田（1958）でも子供の方言習得は子供の友達の影響が大きいとしながらも、親の影響も部分的にはあるとしている。特に母親の影響の方が大きいとしている。Stanford（2008）も母親の方言の影響は子供が幼い頃にはあるが、年齢が上がるにつれて母親の影響はなくなるとしており、母親の方言の影響の存在そのものを否定しているわけではない。また Smith et al.（2009）も母親の方言の影響が言語形成期の幼い子供に現れるとしている。しかしながら柴田（1958）、Stanford（2008）、Smith et al.（2009）らは言語形成期の子供を調査対象としており、その母の方言の影響が最終的にどこまで子供に残るのかは定かではない。

上記のように先行研究の対象言語・方言、調査対象者の年齢が異なっても、親の方言の影響を完全には否定していないことがわかる。しかし、その影響の存在を認めているのは確かであるが、どの程度その影響の存在を認めるのかは研究者によって異なる。では親の方言の影響があるとすれば、どのような結果になるだろうか。母親の影響が強いと主張する杉藤（1984）と柴田（1958）の結果に基づいて本調査の結果を予測すると、母親が近畿圏内出身か否かによって、方言習得の境界線が引くことができると考える（表 3.9 参照）。近畿圏内出身の母親を持つグループ 1（両親 native）とグループ 2（母親 native）の2つのグループと近畿圏外出身の母親を持つグループ 3（父親 native）とグループ 4（両親 native）との間に近畿方言の習得に差が現れるのではないかと予想される。

表 3.9 母親の影響があると想定された場合の語彙アクセントの習得の境界線

		父親	
		近畿圏内	近畿圏外
母親	近畿圏内	Group 1	Group 2
	近畿圏外	Group 3	Group 4

しかしながら、杉藤（1984）と柴田（1958）の結果は語彙アクセントについてのものである。複合語アクセントのような音韻規則を親の出身地との関係で調査したものは現在、中村（2007）だけであると考えられる。中村（2007）は本研究と同様に近畿地方において親の出身地とその子供の方言習得を調べているが、調査人数が少ない（両親 native：10 人、母親 native：6 人、父親 native：3 人、両親 non-native：4 人の合計 23 人）。そのため 1 人の話者のパフォーマンスによってグループ全体に

影響を及ぼすことが考えられるが、傾向として親の出身地、特に母親の出身地が近畿か否かによって複合語アクセントの習得度合にも差があることが明らかにしている。

これまでの先行研究で明らかとなっている点を改めて整理すると、

- ・ 母親の出身地が当該方言地域であれば方言習得もよい (柴田 1958, 杉藤 1984)
- ・ 親の影響があるとすれば語彙だけではなく音韻規則にも影響がある (Payne 1976)

という二点である。本研究では先行研究のやり方を踏襲しながら、親の出身地および調査語彙数も統制をとって調査を行う。そして語彙アクセント、アクセント規則(複合語アクセント)の側面から親の母方言の影響をみることにする。

3.5 結果 I —伝統的な近畿方言—

ここでもう一度、調査によって何を明らかにしたいのかを整理しておく。

■親の出身地の違いによって方言習得の差はあるのか。

■方言習得に違いがあるとすれば、その違いはどこに現れてくるのか。

前者は「子供の方言習得に親の母方言の影響はあるのか」という根本的な問題である。子供は生まれ育った土地の言葉を習得する(「育った地域説」と言われているけれども、本当に皆が一様に方言を習得しているのか、ということを確認しなくてはならない。もし親の出身地の違いによって方言習得に差がなかったとすれば、その結果はこれまで言われ続けてきたことを調査によって実証できることになる。

しかしながら、もし親の母方言の違いによって何らかの違いが現れたとすれば、その違いが「どこに」現れるのかという点である。後者の「どこに」とは、語彙レベルの「語彙アクセント(記憶)」なのか、あるいは複合語アクセントに現れるような「アクセント規則(音韻規則/文法)」なのかを強調したものである。親の出身地の違いによって、この二つのうちどちらかに習得に差が出るのか、あるいは両者に習得の差が現れないのかを明らかにする。

また何らかの差あった場合には、その「差」が本当に意味のある差—統計的に有意な差—なのかどうかを確かめる必要がある。さらに有意差が認められた場合でも、話者が間違えた部分はどのような間違いだったのか。当該方言に近いアクセントだったのか、それとも当該方言とはかけ離れたアクセントだったのかを明らかにする必要がある。これらの点に留意して調査結果の確認と考察を行う。

3.5.1 各形式・各話者グループの結果

ここではまず調査結果の全体像を把握し、そして親の出身地の違いによる影響と調査語彙形式の違いによる影響があるのかどうかを統計的に示す。まずは調査結果の全体像を掴むため、ここでは各形式(単語単独形式、助詞付き形式、新造複合語形式)でそれぞれのグループがどの程度、伝統的な近畿方言を保持しているのかを示す(図 3.1 と表 3.10 参照)。

図 3.1 にはグループごとに 4 つの棒グラフがある。各棒グラフは左から「単語単独形式」、「助詞付

き形」、「新造複合語形式」そして「単語＋新造複合語形式」を表している。最後の「単語＋新造複合語形式」は、「単語単独形式が伝統的な近畿方言アクセントで発音し、なおかつ、その伝統的な語彙アクセントから「式保存の法則」に則って新造複合語を言うことができたもの」を表している。この「単語＋新造複合語形式」はこの4つの中では一番厳しい基準であり、ちょうど表3.14の(a)のことを指している。表3.10は図3.1と対応しており、パーセンテージと実数を表している。

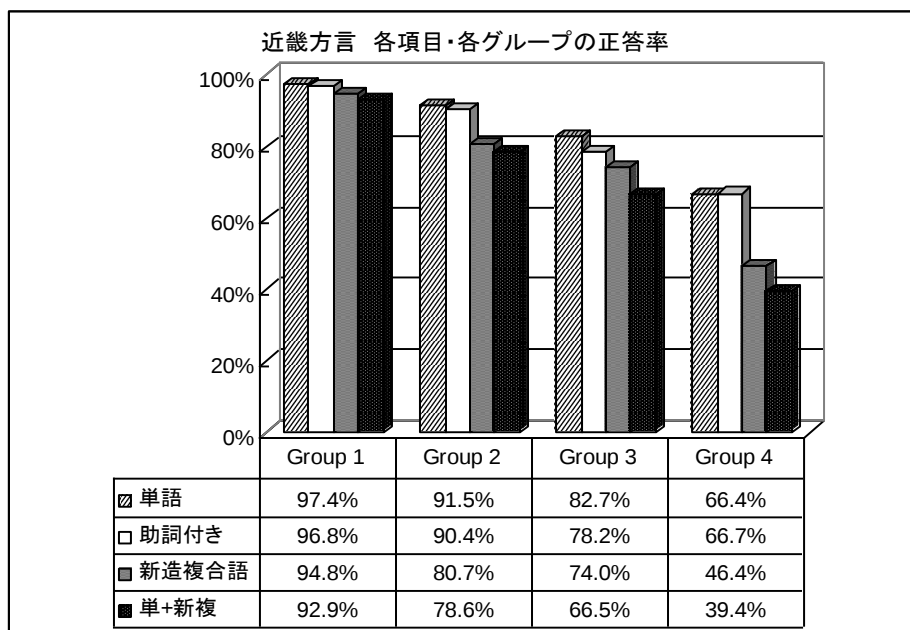


図 3.1 近畿方言 各項目・各グループの正答率

表 3.10 各項目・各グループの伝統的な近畿方言アクセント率

	Group 1 (両親 native) (21 人)	Group 2 (母親 native) (18 人)	Group 3 (父親 native) (21 人)	Group 4 (両親 non-native) (21 人)
単語 (2 拍名詞 1、2、3、4 類=80 語)	97.4% (1637/1680)	91.5% (1317/1440)	82.7% (1390/1680)	66.4% (1115/1680)
助詞付き (2 拍名詞 1、2、3、5 五類=80 語)	96.8% (1627/1680)	90.4% (1302/1440)	78.9% (1314/1680)	66.7% (1121/1680)
新造複合語 (式保存の法則が達成されたもの)	94.8% (1990/2100)	80.7% (1453/1800)	74.0% (1555/2100)	46.4% (975/2100)
単語+新造複合語 (単語アが伝統的な低起/高起に一致 + 式保存の法則が達成されたもの)	92.9% (1950/2100)	78.6% (1414/1800)	66.5% (1397/2100)	39.4% (827/2100)

図 3.1 を見てわかるのは、グループ 1 (両親 native) はどの調査語彙形式 (単語単独形式、助詞付き、複合語) であっても伝統的なアクセントを高い割合で保持している点である。一方、グループ 4 (両親 non-native) をみると、どの調査語彙形式でもグループ 1 と大きな差があることが明らかである。

そしてグループ 2 (母親 native) とグループ 3 (父親 native) の間では差は観察されないが、ちょうどグループ 1 (両親 native) とグループ 4 (両親 non-native) との中間に位置しているような形である。さらに注意深く図 3.1 および表 3.10 を見ると同じグループ内であっても新造複合語形式の近畿方言のアクセント率が単語単独形式よりも低くなっていることがわかる。

では親の出身地の違いによって分けられた 1 から 4 のグループの違いと、グループ内における調査語彙形式 (単語単独形式や新造複合語形式) による違いは、客観的に意味のある違いなのだろうか。別の言い方をすると、同様の調査を同じ属性をもった別の人々に行ったとしても同じような違いが出てくるのか、あるいは別の人々に行った同様の調査でも調査語彙の形式による違いが再度でてくるのかということである。このことを確かめるため、次のようなステップで統計処理を行った。

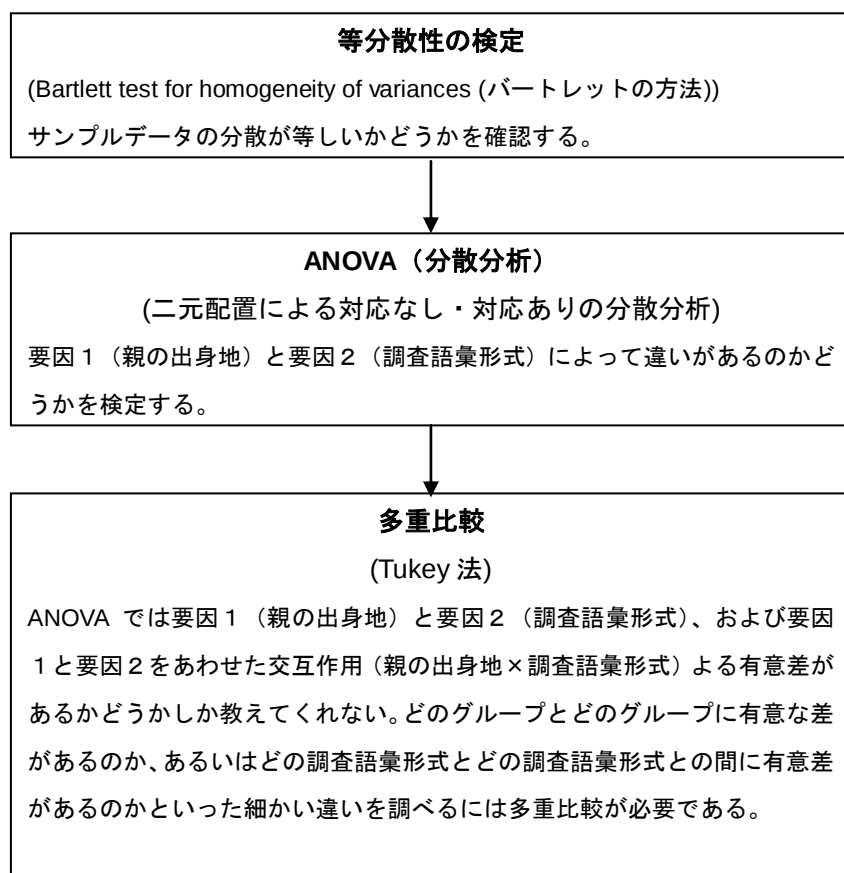


図 3.2 統計処理のステップ

近畿方言の調査結果の分析、および次章の鹿児島方言の調査結果の分析でも図 3.2 と同じの統計処理を行う。グループ間に観察される差が本当に意味のある差であるかどうか、また調査語彙形式による近畿方言の習得率の差が本当に意味のある差であるかどうかということを客観的に示すことである。

まずサンプルで得られた各グループの分散が同じかどうかを確認する必要がある。これを等分散性の検定という。この等分散かどうかを明らかにして次のステップの ANOVA (分散分析) に移ることとなる。分散分析は得られたデータの差を作り出していると思われる要因が本当にそのような違いを作り出している要因かどうかを示すものである。この近畿方言調査ではこの要因は 3 つある。1 つ目

の要因は「親の出身地」、2つ目の要因は「調査語彙形式」、そしてもう1つの要因は前者2つの要因を掛け合わせた交互作用である。この3つの要因が違いを作り出す要因となっているかどうかを客観的に示すものである。しかしながら、ANOVAによってどの要因が有効であるかを客観的に示してくれただとしても、その要因の中（親の出身地）のどの組み合わせの場合に統計的有意差があるのかまでは教えてくれない。そこで「どのような場合に有意差があるのか」を調べるには多重比較が必要となる。

表 3.11 近畿方言におけるグループ間の等分散性の結果

	近畿方言 グループ間の等分散性
単語単独形式	等分散ではない ($k\text{-squared} = 91.26, df = 3, p < .001$)
助詞付き形式	等分散ではない ($k\text{-squared} = 64.97, df = 3, p < .001$)
新造複合語形式	等分散ではない ($k\text{-squared} = 22.97, df = 3, p < .001$)

表 3.12 畿方言における調査語彙形式の違いによる等分散性の結果

	近畿方言 調査語彙形式の違いによる等分散性
Group 1	等分散ではない ($k\text{-squared} = 38.52, df = 2, p < .001$)
Group 2	等分散ではない ($k\text{-squared} = 11.41, df = 2, p < .01$)
Group 3	等分散である ($k\text{-squared} = 0.19, df = 2, p > .05$)
Group 4	等分散である ($k\text{-squared} = 0.34, df = 2, p > .05$)

まず近畿方言におけるグループ間の等分散性と調査語彙形式の違いによる等分散を調べた。表 3.11 と表 3.12 がそれぞれの結果を示している。両者の結果から等分散である場合と等分散でない場合が含まれるため、多重比較をする際には等分散を仮定しない Tukey 法による多重比較を行うことになる。

表 3.13 近畿方言のデータを使った二元配置の例

要因 1 (親の出身地)	Group 1 (両親 native)			Group 2 (母親 native)			Group 3 (父親 native)			Group 4 (両親 non-native)		
要因 2 (調査語彙の形式)	単語	助詞	複合語	単語	助詞	複合語	単語	助詞	複合語	単語	助詞	複合語
1	95	97.5	97	96.25	97.5	97	97.5	97.5	99	86.25	88.75	77
2	97.5	97.5	98	95	88.75	85	98.75	98.75	97	80	88.75	53
3	97.5	96.25	86	93.75	90	82	98.75	98.75	100	91.25	91.25	60
..	: :			: :			: :			: :		
19	93.75	96.25	93				6.25	18.75	64	98.75	96.25	87
20	93.75	97.5	99				92.5	92.5	95	71.25	50	57
21	81.25	96.25	98				27.5	33.75	64	95	71.25	8

等分散性の次は ANOVA（分散分析）である。図 3.2 に示されているように、ここでは親の出身地によって被調査者を分けたグループという要因と調査語彙形式という2つの要因があるので二元配置

の分散分析を行う。この二元配置がどのようなものか具体的に示すと次の表 3.13 のようになる。

二元配置の分散分析をした結果、要因 1 の親の出身地、および要因 2 の調査語彙の形式のどちらにも有意差があることを確認した [$F(3, 78) = 30.99; p < .001$] [$F(2, 79) = 4.82; p < .01$]。要因 1 と要因 2 を掛け合わせた 3 つ目の要因「交互作用」は確認されなかった。つまり同様の調査を近畿方言で別の人々に行ったとしても要因 1 の親の出身地によって近畿方言のアクセントの習得の差は出てくるであろうと考えられ、同様に要因 2 の調査語彙の形式によっても近畿方言におけるアクセントの習得の差が出てくるであろうと考えられるということを意味する。では具体的に親の出身地による違いはどのグループ間に現れるのだろうか。またグループ内での調査語彙形式による違いはどこに現れるのだろうか。このような細かい多重比較については次の 3.5.2 から詳しく調べることにする。

3.5.2 語彙単独形式のアクセント

前節の 5.3.1 ではまず全体的な近畿方言の調査結果の傾向を把握し、親の出身地による違いと調査語彙形式による違いが統計的に有意であるかどうかを ANOVA によって調べた。その結果、親の出身地という要因も調査語彙形式という要因も近畿方言のアクセント習得の違いを生み出す要因であることが確認された。ここからは調査語彙形式を一定にして、その形式の中で正誤の傾向を把握する。そして、どのグループ間に統計的有意差があるのかという多重比較を行う。

この 3.5.2 では語彙単独形式でのグループ間の正誤の傾向を把握して多重比較を行う。まず伝統的な近畿方言アクセントどれだけ一致しているのかをグループ別にみる。語彙単独形式の伝統的な近畿方言アクセントは 3.1 の「はじめに」のところで「アクセントの単語グループ」でみたように、同じ語彙であっても方言によって語彙のアクセントは異なる。下の表 3.14 には 2 拍の調査語彙と伝統的な京阪式のアクセントと東京式のアクセントを掲載している。伝統的に京阪式アクセントの 2 拍名詞は 4 つに分類されるが、ここで提示する結果は 5 類を除いた 2 拍名詞の 1、2、3、4 類のみである（表 3.14 の太枠部分）。ⁱⁱ

表 3.14 単語単独形式の京阪式および東京式のアクセント

		調査語彙数	京阪式	東京式
1 類	柿、腰、笹、壁、牛、枝、霧、口、風、水、 梅、虎、酒、竹、皿、飴、箱、海老、鳥、庭	20 語	●●	○●
2 類	北、牙、旅、紙、夏、肘、歌、村、胸、冬、 石、旗、橋、寺、岩、梨、川、雪、町、音	20 語	●○	
3 類	腕、波、岸、泡、裏、蚤、山、塩、月、鍵、 栗、雲、坂、花、靴、髪、櫛、犬、池、馬	20 語		
4 類	船、板、肩、息、数、帯、海、瓜、絹、糸、 空、肌、位置、中、針、箸、稲、傘、粉、種	20 語	○●	●○
5 類	鍋、鮎、声、窓、猿、鮒(ふな)、前、雨、蜘蛛、午後、 青、秋、白、赤、影、夜、地下、鶴、汗、朝	20 語	○○⇒○●	
合計		100 語		

調査協力者一人一人がどのようなアクセントで上記の 2 拍名詞を発音したか、その場で調査者（筆

者) が調査用紙に書き取った。書き取ったアクセントは表 3.15 のように個人ごとにデータを入力した。具体的にどのように集計をしたのかを表 3.15 で見てみる。表 3.15 は 2 拍名詞第 2 類の語彙 20 語を各グループの代表者一人ずつ、合計 4 人のアクセントを提示している。これら 2 拍名詞第 2 類の単語は京阪式では全て●○ (HL) で言うべきところであるが、表 3.15 の 1 番左の話者 (グループ 1 話者 #6) に目を向ける「北」を一類の●● (HH) で発音していることがわかる。同様にグループ 3 の話者 #5、グループ 4 の話者 #11 は「北」のアクセントが●● (HH) であることを示している。またグループ 4 の話者 #11 は 12 番目の語彙「旗」を○● (LH) と東京式のアクセントで発音していることがわかる。このようにして各話者がどの程度京阪式アクセントで発音しているのかを集計し、さらにその話者が属するグループ全体でどの程度京阪式アクセントで発音されていたのかを調べた。

表 3.15 単語単独形式 個人ごとのアクセントデータ(代表例)

第 2 類			グループ 1	グループ 2	グループ 3	グループ 4
			(両親 native)	(母親 native)	(父親 native)	(両親 non-native)
●○			話者 #6	話者 #2	話者 #5	話者 #11
1	北	きた	HH	HL	HH	HH
2	牙	きば	HL	HL	HL	HL
3	旅	たび	HL	HL	HL	HL
4	紙	かみ	HL	HL	HL	HL
5	夏	なつ	HL	HL	HL	HL
6	肘	ひじ	HL	HL	HL	HL
7	歌	うた	HL	HL	HL	HL
8	村	むら	HL	HL	HL	HL
9	胸	むね	HL	HL	HL	HL
10	冬	ふゆ	HL	HL	HL	HL
11	石	いし	HL	HL	HL	HL
12	旗	はた	HL	HL	HL	LH
13	橋	はし	HL	HL	HL	HL
14	寺	てら	HL	HH	HH	HH
15	岩	いわ	HL	HL	HL	HL
16	梨	なし	HL	HL	HL	HL
17	川	かわ	HL	HL	HL	HL
18	雪	ゆき	HL	HL	HL	HL
19	町	まち	HL	HL	HL	HL
20	音	おと	HL	HL	HL	HL
近畿(HL)			19	19	18	17
東京(LH)			0	0	0	1
その他(HH)			1	1	2	2

個人ごとに単語単独形式、助詞付き形式、新造複合語形式のアクセントを表 3.15 のように得点化

している。このようにして得られた個人の近畿方言アクセントの得点を、その話者が属しているグループでひとまとめにして各グループ間で比較・考察を行う。表 3.16 は単語単独形式における各グループの正答率平均と標準偏差を表している。標準偏差はそのグループ内でのバラつき度合を示すもので、値が大きければ大きいほど個々人のバラつきが大きいことを表している。バラつきが大きいということはそのグループ内ではほぼ満点に近い形で近畿方言アクセントと習得している人もいれば、近畿方言アクセントを全く習得していない人も、またはその中間にいる人もいるということを意味する。一方でバラつきが小さいということは、近畿方言アクセントが良くできる人とあまり近畿方言アクセントができない人との差が小さく、その小さな差の中に中間の人が集中していることを意味している。これを図示したものが図 3.3 である。

表 3.16 単語単独形式における各グループの正答率平均と標準偏差

単語単独形式	Group 1	Group 2	Group 3	Group 4
人数	21	18	21	21
平均	97.44048	91.875	81.13095	66.30952
標準偏差	2.287062	9.346771	25.872	31.27868

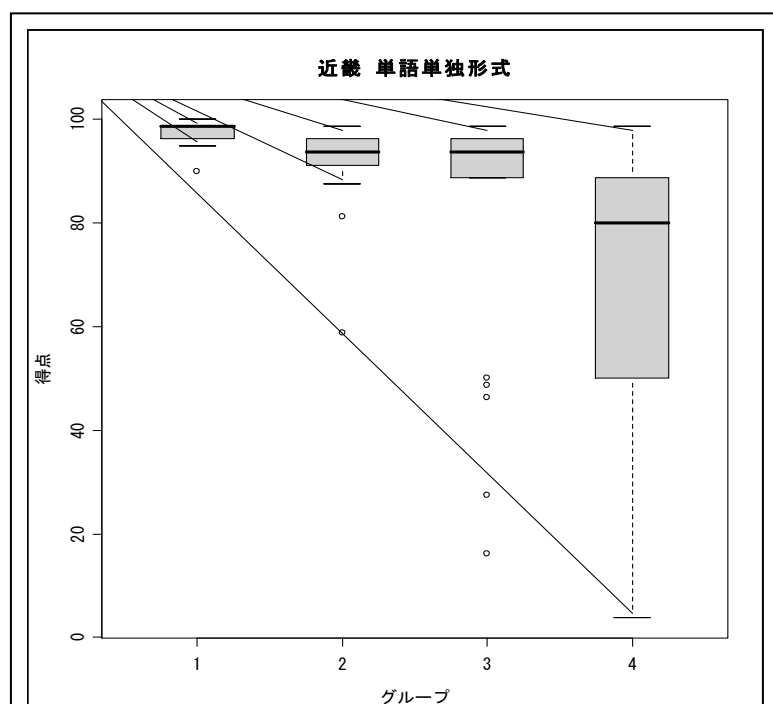


図 3.3 近畿方言の単語単独形式—各グループの箱ひげ図

図 3.3 はグループごとに単語単独形式における近畿方言アクセントがどの程度できてるのかを示している。図 3.3 の中で各グループの一番上に位置している横棒がそのグループ内での最高点を表し、一番下に位置している横棒がそのグループ内での最低点を表している。灰色の箱の中にある太い横棒がそのグループにおける平均点を表している。そして箱の上部はそのグループ内における上位 25% の値を表し、箱の下部は下位 25% の値を表している。図 3.3 の一番左に位置しているグループ 1 をみると、最高点と最低点の差が非常に小さく、表 3.16 のグループ 1 (両親 native) で見た標準偏差の値

が小さいことも納得できる。一方、図 3.3 の一番右に位置しているグループ 4 (両親 non-native) をみると、最高点と最低点の開きが非常に大きく、バラつきが大きいことがわかる。このバラつきの大きさは表 3.16 のグループ 4 (両親 native) の標準偏差でも確認できる。

では各グループの正答率（伝統的な近畿方言アクセントの「習得率」と同意）と誤答率はどうなっているのだろうか。図 3.4 は語彙単独形式の正答率（習得率）と誤答率を表し、図 3.5 は誤答の内訳を図示したものである。

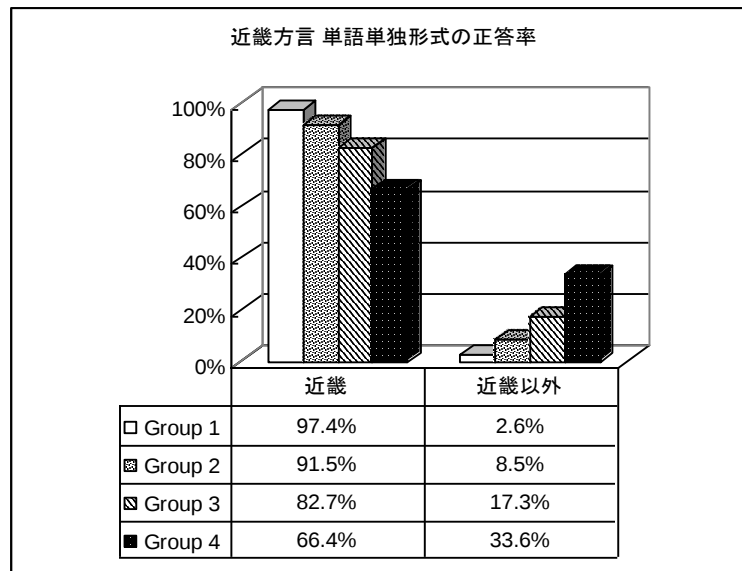


図 3.4 単語単独形式の近畿方言アクセントの正答率と誤答率

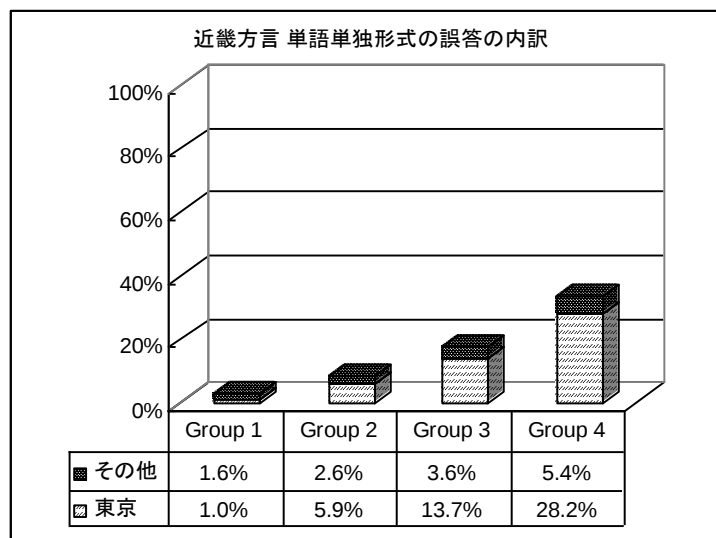


図 3.5 単語単独形式における誤答の方向性

表 3.17 は図 3.4 と図 3.5 と対応しており、グループ別にパーセンテージと実数を表している。図 3.4 をみると正答率（習得率）がグループ 1 (両親 native) からグループ 4 (両親 non-native) にかけて下がっており、反対にその下に示した誤答率（近畿方言アクセント以外で発音した割合）はグルー

プ 4 (両親 non-native) にかけて増えている傾向がわかる。この誤答の内訳を図 3.5 でみると、誤答の大半は東京式のアクセントで言っていることがわかる。誤答の「その他」は近畿方言にある第一類のアクセントである「●●」と言ってしまったものを示している。

表 3.17 近畿方言 各グループの語彙単独形式におけるアクセントの正答率

	例 (一、二、三、四類)	Group 1 (両親 native) (80 語×21 人)	Group2 (母親 native) (80 語×18 人)	Group 3 (父親 native) (80 語×21 人)	Group 4 (両親 non-native) (80 語×21 人)
京阪式	柿(●●)、夏が(●○)、 腕が(●○)、船が(○●)	97.4% (1637/1680)	91.5% (1317/1440)	82.7% (1300/1680)	66.4% (1115/1680)
東京式	柿(○●)、夏が(○●)、 腕が(○●)、船が(●○)	1.0% (17/1680)	5.9% (85/1440)	13.6% (229/1680)	28.2% (474/1680)
その他	東京以外。 (例) 北、寺(●○)を (●●))で読んだ場合	1.5% (26/1680)	2.6% (38/1440)	3.6% (60/1680)	5.4% (91/1680)

表 3.17 の京阪式アクセントをみるとグループ 4 (両親 non-native) の正答率 (習得率) が他のグループに比べるとかなり低いことがわかる。このグループ 4 (両親 non-native) と他のグループ (1, 2, 3) との間に観察される差、およびグループ 1, 2, 3 間にも若干観察される差に統計的有意差があるのだろうか。ここからは Tukey 法による多重比較によってグループ間の有意差を調べることにする。

多重比較は各グループを総当りにして有意差を確認する方法である。この調査ではグループは 4 つあるので各グループの比較は表 3.18 のような表となる。表 3.18 は Tukey 法によって単語単独形式における各グループ間の平均の差は有意であるかを示した結果である。

表 3.18 近畿方言 単語単独形式における Tukey の多重比較

	Group 1 (父 / 母)	Group 2 (-- / 母)	Group 3 (父 / --)	Group 4 (-- / --)
Group 1 (父 / 母)		n.s.	n.s.	***
Group 2 (-- / 母)			n.s.	**
Group 3 (父 / --)				n.s.

*: 5%水準, **: 1%水準, ***: 0.1%水準 n.s.:有意差なし

表 3.18 のグループ 4 (両親 non-native) とグループ 1 (両親 native) とグループ 2 (母親 native) の間には 5%水準で有意差が確認された。表 3.18 の中で「*」で示しているのは有意水準 5%を表し、「**」は有意水準 1%、「***」は有意水準 0.1%を表すⁱⁱⁱ。だがグループ 3 (父親 native) とグループ 4 (両親

non-native) の間には統計的有意差は確認されなかった。つまり隣り合うグループ同士の間には統計的有意差は確認されなかったが、隣り合わないグループ間には統計的有意差が確認された。

グループ 4(両親 native)を除いたグループ (1, 2, 3) の 3 グループ間はどれも 80%以上の正答率である(表 3.17)。グループ 1, 2, 3 の 3 グループ間にも若干の差がある。これら 3 グループ間の差について統計的な意味があるのかどうかを表 3.18 でみると、各グループ間で交差したところには「n.s.」とあり、この 3 グループ間には統計的な有意差がないことがわかる。つまり、この 3 グループは単語単独のアクセントのパフォーマンスは同じと考えてもいいことを示唆する。

さらに母親の出身地の影響をみるためにグループ 2(母親 native) とグループ 3(父親 native) の比較をすると、両者間には有意差がないことがわかる。もし母親の影響がはっきりと現れるのであれば、グループ 2(母親 native)と 3(父親 native)の間に統計的有意差があってもおかしくはなかったであろう。杉藤(1984)では近畿方言の語彙アクセントの習得、とりわけ拍内下降の有無は母親の影響があると報告している。本調査では拍内下降の有無を調査対象としていないため単純に直接的な比較はできないが、語彙に備わった「語彙アクセント」の習得という広い意味で本調査の結果をみると、語彙アクセントのパフォーマンスに母親の出身地による影響は統計的に示されないということが明らかとなった。しかしながら実測値(図 3.4 と表 3.17)ではグループ 2(母親 native)の方がグループ 3(父親 native)よりも習得率が高いという傾向を示しており、この傾向は杉藤(1984)の結果を否定するものではなく追認するものであると言えよう。

ここでは語彙単独形式における両親の出身地で分けた 4 つのグループ間の近畿方言アクセント率を比較した。その結果、両親ともに近畿地方以外の出身(グループ 4)の場合、その子供の語彙アクセントのパフォーマンスは近畿地方出身の両親/母親をもつ場合(グループ 1, 2)と異なることがわかった。ではもう一つの「語彙アクセント」である「助詞付き形式」の結果はどうなっているだろうか。次の 3.5.3 では「助詞付き形式」のアクセントの結果を確認して多重比較を行うことにする。

3.5.3. 助詞付き形式のアクセント

ここからは単語単独形式に助詞の「が」をつけた場合、つまり名詞句の近畿方言アクセントの全体像を把握し、どのグループとどのグループの間に統計的な有意差があるのかを調べる。まず助詞付き形式の調査語彙について説明する。表 3.19 は単語単独形式の調査で用いた単語に助詞を付けた形式(助詞付き形式)の調査語彙を示している。この表 3.19 の太線で囲った部分が本節で主に扱う部分であり、残りの 2 拍名詞第 4 類の語彙に関しては本節の後半で扱って議論する。

まずは助詞付き形式の全体像を把握する。表 3.20 は「助詞付き形式」における各グループの正答率平均と標準偏差を表している。この標準偏差をみると、先の単語単独形式のときと同様に、グループ 3(父親 native)、グループ 4(両親 non-native)の値が他のグループ 1(両親 native)、グループ 2(母親 native)と比べると大きいことから、グループ 3(父親 native)、グループ 4(両親 non-native)は伝統的近畿方言アクセントの習得のバラつきが大きいことを示している。

表 3.19 助詞付き形式の京阪式および東京式のアクセント

			京阪式	東京式
一類	柿が、腰が、笹が、壁が、牛が、枝が、霧が、口が、風が、水が、梅が、虎が、酒が、竹が、皿が、飴が、箱が、海老が、鳥が、庭が	20 語	●●▲	○●▲
二類	北が、牙が、旅が、紙が、夏が、肘が、歌が、村が、胸が、冬が、石が、旗が、橋が、寺が、岩が、梨が、川が、雪が、町が、音が	20 語	●○△	○●△
三類	腕が、波が、岸が、泡が、裏が、蚤が、山が、塩が、月が、鍵が、栗が、雲が、坂が、花が、靴が、髪が、櫛が、犬が、池が、馬が	20 語		
四類	船が、板が、肩が、息が、数が、帯が、海が、瓜が、綱が、糸が、空が、肌が、位置が、中が、針が、箸が、稲が、傘が、粉が、種が	20 語	○○▲ ⇒○●△	●○△
五類	鍋が、鮎が、声が、窓が、猿が、鮒(ふな) が、前が、雨が、蜘蛛が、午後が、青が、秋が、白が、赤が、影が、夜が、地下が、鶴が、汗が、朝が	20 語	○●△	
合計		100 語		

表 3.20 助詞付き形式における各グループの正答率平均と標準偏差

助詞付き形式	Group 1	Group 2	Group 3	Group 4
人数	21	18	21	21
平均	96.84524	90.41667	78.15476	65.53571
標準偏差	3.549187	15.99058	28.399	32.02434

表 3.21 は図 3.6 および図 3.7 と対応しており、各グループの助詞付き形式における正答率(習得率)と誤答率を表している。表 3.21 の太枠で囲った部分が伝統的な京阪式アクセントに則った割合と発音をしたトークン数、つまり正答率とその実数を表している。ここで分析の対象となったのは 2 拍名詞の 1、2、3、5 類で「4 類」を除いている。これは前節の語彙単独形式のときと同様に、2 拍名詞の 4 類は (LLH) から (LHL) へのアクセント変化が若年層では著しいため、伝統的な近畿方言アクセントという観点からみると集計の結果を著しく乱す可能性がある。そのため、この助詞付きの形式では 1、2、3、5 類を統一して表 3.21 で提示し、4 類は他の類とは独立させて表 3.23 に示した。

図 3.6 を見てみると、前節の単語単独形式と同様に、正答率(習得率)がグループ 4 (両親 non-native) にかけて下がっていき、逆に誤答率(近畿以外)がグループ 4 (両親 non-native) にかけて増えていく傾向がわかる。図 3.7 はその誤答の内訳を示しているが、その誤答も先の単語単独形式と同様に大半が「東京式」のアクセントで発音していることが分かる。

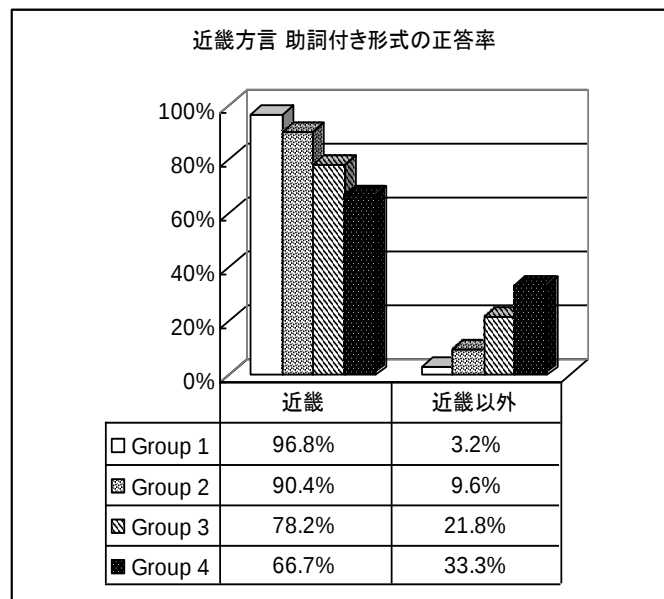


図 3.6 近畿方言 助詞付き形式の正答率

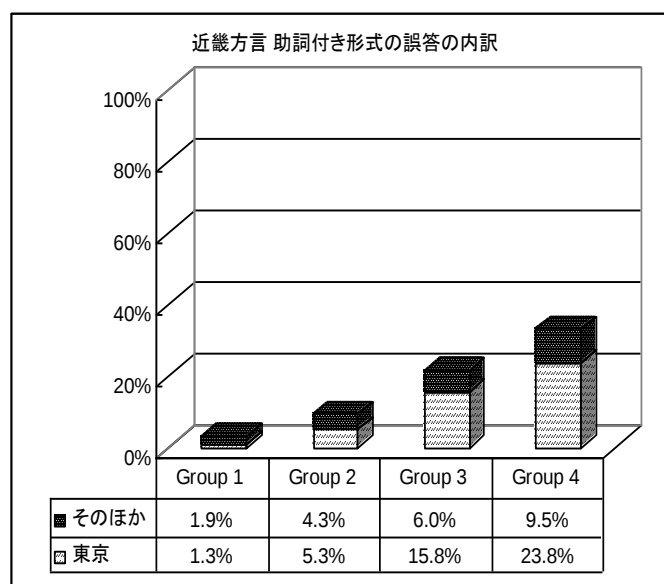


図 3.7 近畿方言 助詞付き形式の誤答の内訳

では伝統的京阪式アクセントで言ったものと、誤答の東京式とその他の傾向と具体例を表 3.21 で見る。まず伝統的京阪式アクセントで言っているものが表 3.21 の太枠で囲った部分である。この表をみると語彙単独形式のときと同様に、グループ 1 (両親 native)、グループ 2 (母親 native) の近畿方言アクセントの割合が 90%前後と高いことがわかる。一方、グループ 4 (両親 non-native) をみると、その割合は 66.7%とグループ 1 (両親 native)、グループ 2 (母親 native) と比べて大きな差があることがわかる。またその中間に位置しているのがグループ 3 (父親 native) であることもわかる。

表 3.21 近畿方言 各グループの助詞付き形式におけるアクセントの正答率

	例(一、二、三、五類)	Group 1 (両親 native) (80 語×21 人)	Group 2 (母親 native) (80 語×18 人)	Group 3 (父親 native) (80 語×21 人)	Group 4 (両親 non-native) (80 語×21 人)
京阪式	柿が(●●▲)、夏が(●○△)、 腕が(●○△)、鍋が(○●△)	96.8% (1627/1680)	90.4% (1302/1440)	78.2% (1314/1680)	66.7% (1121/1680)
東京式	柿が(○●▲)、夏が(○●△)、 腕が(○●△)、鍋が(●○△)	1.3% (21/1680)	5.3% (76/1440)	15.8% (265/1680)	23.8% (399/1680)
その他	東京式以外のもの。 (例) 2 類の「北が」(●○△)を (●●▲)と読むような場合	3.2% (32/1680)	9.6% (62/1440)	21.8% (101/1680)	9.5% (160/1680)

表 3.21 から助詞付き形式の伝統的な近畿方言アクセントの正答率（習得率）について、グループ間の差があること確認できた。しかしながら、そのグループ間の差が統計的に意味のある差であるかどうかはわからない。どのグループ間に統計的有意差があるのかを確認するため Tukey 法による多重比較を行った。表 3.22 はその 4 グループ間の組み合わせで有意差があった関係を表している。この表 3.22 で有意差が確認されたのはグループ 4(両親 non-native) とグループ 1(両親 native)、グループ 2(母親 native) の間のみである。これは単語単独形式と同じ結果である。さらに、ここでもグループ 1(両親 native)、グループ 2(母親 native)、グループ 3(父親 native) の間には統計的な有意差は示されなかった。「単語単独形式」のときと同様に、隣り合うグループ同士には統計的有意差はないけれども、一つグループを飛び越えた間には統計的な有意差が確認された。もし母親の影響が強いのであれば、グループ 2(母親 native) とグループ 3(父親 native) の間に統計的有意差があってもよいが、その点は確認されなかった。だが、習得率の傾向として「グループ 2(母親 native) > グループ 3(父親 native)」という関係は観察されるため、母親の影響はあるものといえよう。語彙的なものである「単語単独形式」および「助詞付き形式」は、ほぼ同じような結果を示すことが明らかとなった。

表 3.22 近畿方言 助詞付き形式における Tukey の多重比較

	Group 1 (父 / 母)	Group 2 (-- / 母)	Group 3 (父 / --)	Group 4 (-- / --)
Group 1 (父 / 母)		n.s.	n.s.	***
Group 2 (-- / 母)			n.s.	*
Group 3 (父 / --)				n.s.

*: 5%水準, **: 1%水準, ***: 0.1%水準

ではアクセント変化が著しいとされる 2 拍名詞第 4 類はどうか。以下ではこの第 4 類に注目して、グループによってどの程度伝統的である第 4 類のアクセント (〇〇▲: LLH) を保持しているのかを調べる。先行研究でも触れたように 2 拍名詞における 4、5 類の統合は語彙単独形式だけではなく助詞付きの形式においても統合が起こっている (杉藤 1979, 真田 1986)。4 類の助詞付きの形式は伝統的には (〇〇▲: LLH) であったが、5 類の助詞付きの形式 (〇●△: LHL) に変化してきているとされる。表 3.23 および図 3.8 はそのような 2 拍名詞第 4 類に注目し、そのアクセントの内訳をグループごとに示したものである。表 3.23 上段の左に位置している「近畿 New」は杉藤 (1979)、真田 (1986) らが報告した新たな 2 拍名詞第 4 類のアクセント (〇●△: LHL) である。その右隣に位置する「近畿 Old」は伝統的な近畿方言の 2 拍名詞第 4 類の助詞付きアクセントを示している。そして「東京(HLL)」は東京式における 2 拍名詞 4 類のアクセントを示している。

表 3.23 近畿方言 各グループの 2 拍名詞第 4 類におけるアクセントの内訳

	近畿 New (〇●△: LHL)	近畿 Old (〇〇▲: LLH)	東京 (●〇△: HLL)	その他 (●●▲: HHH/ ●●△: HHL)
Group 1 (両親 native)	334/420 (79.5%)	78/420 (18.6%)	8/420 (1.9%)	0/420 (0%)
Group 2 (母親 native)	278/360 (77.2%)	59/360 (16.4%)	22/360 (6.1%)	1/360 (0.3%)
Group 3 (父親 native)	288/420 (68.6%)	43/420 (10.2%)	89/420 (21.2%)	0/420 (0%)
Group 4 (両親 native)	269/420 (64.0%)	24/420 (5.7%)	126/420 (30.0%)	1/420 (0.2%)

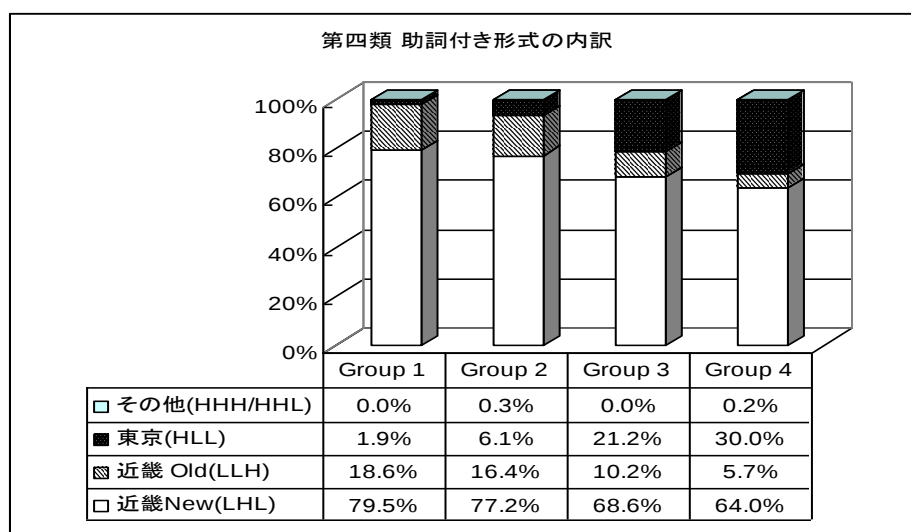


図 3.8 近畿方言 各グループの 2 拍名詞第 4 類のアクセントの内訳

この表 3.23 および図 3.8 から「近畿 New (LHL)」で示した新たなアクセントがどのグループにお

いても多いことがわかる。しかしながら伝統的近畿方言のアクセントである「近畿 Old (LLH)」をみると面白い傾向が見えてくる。それはこの 2 拍名詞第 4 類の伝統的アクセントの保持率はグループ 1 (両親 native) が一番高く、続いてグループ 2 (母親 native)、グループ 3 (父親 native)、グループ 4 (両親 non-native) とその保持率が下がっていく。一方、グループ 4 (両親 non-native) は伝統的な (LLH) のアクセントよりも東京式のアクセント (HLL) が大幅に多い (30%) ことも明らかとなった。^{iv}

ここでは助詞付き形式の近畿方言アクセントについて各グループを比較したが、ここでも単語単独形式と同様に、グループ 4 (両親 non-native) はグループ 1 (両親 native) とは近畿方言の習得が異なることが統計的に示された。この点は単語単独形式と同じである。また 2 拍名詞第 4 類の「LLH」から「LHL」へのアクセント変化について、この第四類のみを独立させて調べてみると、伝統的である「LLH」のアクセント保持率が高いのはグループ 1 (両親 native) であることが確認された。

「語彙アクセント」である助詞付き形式でも、単語単独形式と同様にグループ 4 (両親 non-native) とグループ 1 (両親 native)、グループ 2 (母親 native) の間に統計的有意差が現れることが確認された。では、この論文の中で注目している「音韻規則」の習得はどうなっているのだろうか。次節では「複合語アクセント」の結果では「式保存の法則」の習得を調べグループ間で比較する。

3.5.4 新造複合語形式のアクセント

この節では新造複合語アクセントと通して近畿方言の音韻規則である「式保存の法則」の達成率^vに、両親の出身地の影響があるのかどうかを調べる。「式保存の法則」の達成率は「3.4.3 分析の仕方—何を基準にするのか」にも書いたように、新造複合語を読むときにどれだけ前部要素の語彙の高起式、あるいは低起式に則って発音できているかどうかを調べることでわかる。

表 3.24 近畿方言 伝統的な単語単独アクセントと「式保存の法則」に則った新造複合語のアクセントの例

類	近畿方言	語例		新造複合語	(正しく言えた場合)	
一類 (20 語)	●●	高 起 式	ニワ(庭)	ニワマツリ(庭祭り)	高 起 式	●●●○○
			トリ(鳥)	トリモンダイ(鳥問題)		●●●○○○
二類 (20 語)	●○		ヤマ(山)	ヤマガカリ(山係)		●●●○○
			カワ(川)	カワヤスミ(川休み)		●●●○○
三類 (20 語)	●○		アシ(足)	アシマツリ(足祭り)		●●●○○
			イヌ(犬)	イヌモンダイ(犬問題)		●●●○○
四類 (20 語)	○●	低 起 式	カズ(数)	カズケズリ(数削り)	低 起 式	○○●○○
			イト(糸)	イトビラキ(糸開き)		○○●○○
五類 (20 語)	○○◎		コエ(声)	コエブクロ(声袋)		○○●○○
			アメ(雨)	アメマツリ(雨祭り)		○○●○○

表 3.24 は新造複合語で用いた調査語彙の語例とその調査語彙の式から予測される新造複合語の式を示したものである。ここでのポイントは「式保存の法則」の達成度であり、単語単独形式が正しく近畿方言のアクセントで言うことができたかどうかではない。そのため表 3.24 は話者が伝統的近畿

方言の単語単独形式の式と一致する場合の予測である。また「単語単独形式」では「拍内下降の有無」が問題となる 2 拍名詞第 5 類を除いて分析していたが、ここではその 5 類の単語とその 5 類の単語から作り出された新造複合語も分析の対象に含めている。それは「式保存の法則」で問題となるのは、前部要素の語頭の「低起式」と「高起式」であり 2 拍目の拍内下降の有無は「式保存の法則」には直接関係しないためである。そのため新造複合語の分析では 2 拍名詞第 5 類も含めることとした（表 3.24 参照）。

まず新造複合語形式における全体的傾向を把握するため「式保存の達成率」平均と標準偏差を表 3.25 で確認する。この表 3.25 の標準偏差をみるとグループ 3（父親 native）、グループ 4（両親 non-native）の値がほかの 2 グループよりも大きく、「単語単独形式」と「助詞付き形式」でのバラつきとほぼ同じような傾向を確認することができる。しかしながらグループ 1（両親 native）とグループ 2（母親 native）の標準偏差に注目してみると、それぞれの標準偏差は単語単独形式および助詞付き形式の場合よりもその値が大きくなっているのである。単語単独形式のときの両グループの標準偏差（表 3.17 参照）は 2.28 と 9.34、助詞付き形式の標準偏差（表 3.20 参照）は 3.55 と 16.0 である。つまりグループ 1（両親 native）とグループ 2（母親 native）は新造複合語形式において習得がよくできる人とそうでない人との差が開いたことを意味する。

表 3.25 近畿方言 新造複合語形式における各グループの達成率平均と標準偏差

新造複合語	Group 1	Group 2	Group 3	Group 4
人数	21	18	21	21
平均	94.7619	81.05556	74	46.14286
標準偏差	9.208174	22.47475	27.91953	28.24586

では新造複合語における「式保存の法則」の達成率および誤答率を表 3.26 と図 3.9 で見ることにする。表 3.26 で示されているのは親の出身地別によって分けられたグループの「式保存の法則」が達成できたか、あるいは達成できなかった（誤答）という割合である。表 3.26 上段の太枠で囲った部分が「式保存の法則」を達成した割合を表し、その下の「誤答」と書かれた部分が「式保存の法則」を達成できなかった割合を表している。次の 3.6 節で誤答の内訳と誤答の方向性を詳しく見ていくため、ここでは誤答について深くは追求せず新造複合語形式における「式保存の法則」達成率を確認する。この表 3.26 と対応している図が図 3.9 である。図 3.9 では新造複合語における「式保存の法則」の達成率と誤答率に分けて示している。表 3.26 および図 3.9 をみると「式保存の法則」の達成率がグループ 1（両親 native）、グループ 2（母親 native）、グループ 3（父親 native）、グループ 4（両親 non-native）の順番に下がっていくことが分かる。一方、誤答率をみると同じグループ順で誤答率が上昇していることが確認できる。この傾向は単語単独形式、助詞付きの形式でも同じであった。

表 3.26 近畿方言－各グループの複合語における「式保存の法則」の達成率

	語例 ニワ(庭)(●●) + マツリ(祭) (●●●)	Group 1 (両親 native) (100 語 × 21 人)	Group 2 (母親 native) (100 語 × 18 人)	Group 3 (父親 native) (100 語 × 21 人)	Group 4 (両親 non-native) (100 語 × 21 人)
「式保存の法則」 を達成した割合	ニワマツリ (●●●○○○)	1990/2100 . (94.8%)	1453/1800 . (80.7%)	1555/2100 . (74.0%)	975/2100 . (46.4%)
誤答	ニワマツリ (○○●○○) (○●●○○)	110/2100 . (5.2%)	347/1800 . (19.3%)	545/2100 . (26.0%)	1125/2100 . (53.6%)

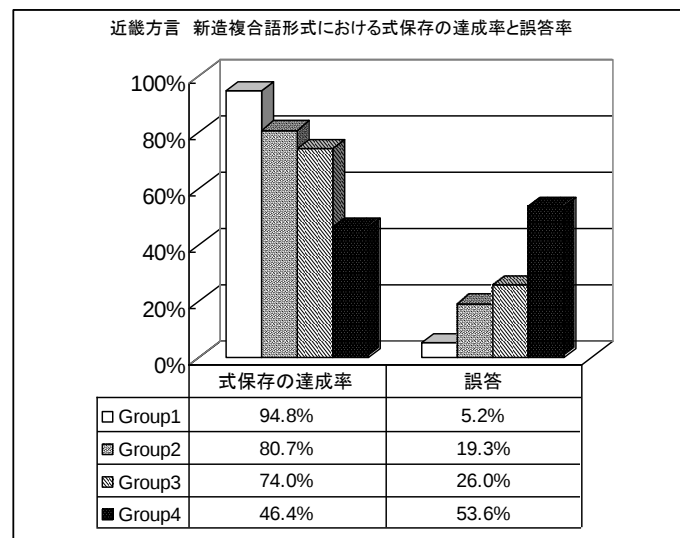


図 3.9 近畿方言 新造複合語形式における式保存の達成率と誤答率

ではどのグループとどのグループとの間に統計的有意差があったのかを調べるため Tukey の多重比較によって統計的有意差を確認した (表 3.27 参照)。表 3.33 の一番右側に位置している縦 1 列はグループ 4 (両親 non-native) と他の 3 つのグループとの比較を示しており、この縦 1 列からグループ 4 (両親 non-native) とその他 3 つのグループ 1 (両親 native)、グループ 2 (母親 native)、グループ 3 (父親 native) との間にそれぞれ統計的な有意差があることが明らかとなった。単語単独形式、助詞付き形式ではグループ 4 (両親 non-native) とグループ 1 (両親 native) とグループ 2 (母親 native) との間にしか有意差が確認されなかったが、ここではグループ 4 (両親 non-native) とグループ 3 (父親 native) との間にも有意差が確認された。これは竹村 (2009)、Takemura (2008, 2009) でも同様の統計的有意差を確認している。

表 3.27 近畿方言新造複合語形式における Tukey の多重比較

	Group 1 (父 / 母)	Group 2 (-- / 母)	Group 3 (父 / --)	Group 4 (-- / --)
Group 1 (父 / 母)		n.s.	*	***
Group 2 (-- / 母)			n.s.	***
Group 3 (父 / --)				**

*: 5%水準, **: 1%水準, ***: 0.1%水準

さらにグループ 1, 2, 3 のグループ間の統計的な有意差をみると、グループ 3 (父親 native) とグループ 1 (両親 native) との間に有意差があることがわかった。この点は単語単独形式の結果と助詞付き形式の結果と異なる点で、どちらの調査語彙形式の場合でも多重比較をした結果でグループ 1 (両親 native) とグループ 3 (父親 native) の間に統計的な有意差は確認されなかった。つまり新造複合語における「式保存の法則」の達成率では新たにグループ 1 (両親 native) とグループ 3 (父親 native)、グループ 4 (両親 non-native) との間に有意差があることが明らかとなった。では有意差が確認されたグループ間では何を調べていることになるのであろうか。グループ 1 (両親 native) とグループ 3 (父親 native) を比較する場合、母親が当該地域の出身であるどうかを比較していることを意味する。そしてグループ 1 (両親 native) とグループ 4 (両親 non-native) を比較する場合には両親が当該地域出身であるかどうかを比較していることを意味する。これらの間には統計的有意差があっても、グループ 1 (両親 native) とグループ 2 (母親 native) の間には差がないことから「母親」の何らかの影響があることがいえそうである。これらの結果は杉藤 (1984) の「母親の母方言の影響が大きい」という報告を肯定するものであるといえよう。しかしながら、この結果は近畿方言の「アクセント規則」である「新造複合語」にのみ観察される結果かもしれない。母親の影響が本当にあるのかどうかを確かめるためには、近畿方言だけではなく、同じ手法を用いた他の方言 (言語) での調査結果と比較して議論しなくてはならないであろう。

ここでは新造複合語を用いて「式保存の法則」の達成ができるかどうかを確認し、グループ間の多重比較によってどのグループ間に統計的有意差があるのかを調べた。その結果、グループ 4 (両親 non-native) のみが他の 3 グループと式保存の法則の達成率が異なることが統計的に示された。さらにグループ 1 (両親 native) とグループ 3 (父親 native) との間にも式保存の法則の達成率に統計的有意差があることを確認した。グループ 4 (両親 non-native) は一貫してどの調査語彙形式においても伝統的近畿方言の語彙アクセントおよび式保存の法則の達成率が統計的にグループ 1 (両親 native) と異なる点が明らかになった。グループ 4 (両親 non-native) に属する話者だけでなく他のグループの話者も言語形成に関して多様な背景をもつことも考えられる。だが近畿方言の調査で調べた「親の出身地」という属性 (両親の出身地が近畿地方以外) も方言アクセントおよび音韻規則の習得に何らかの影響があることが考えられる。この点については鹿児島方言調査の結果と比較する 5 章で議論することにする。

3.5.5 「語彙アクセント」対「アクセント規則」

3.5.1 の「各形式・各話者グループの結果」では各調査語彙形式で各グループの近畿方言アクセントの習得率を概観した。その中で明らかになったのは、同じグループでも調査語彙形式の違いで近畿方言の語彙アクセントおよび式保存の法則の習得率と達成率が異なる点である。その近畿方言アクセントの習得率/達成率は単語単独形式、助詞付き形式、新造複合語形式の順に下がっていく傾向が明らかとなった。調査語彙形式による違いについて二元配置の分散分析で処理した結果、調査語彙形式によって習得が異なることが統計的に示された (3.5.1)。では調査語彙形式の中でもどの形式が習得することが難しいのであろうか。習得率の傾向だけを見ると「新造複合語形式」、つまり「アクセント規則」の習得が他の「語彙アクセント」である 2 つの形式 (単語単独形式、助詞付き形式) よりも難しいのではないかと考えることができる。だがこれらの形式間の差は本当に「習得の違い」を生み出すような差なのだろうか。

このことを確かめるため、ここではグループ内で「語彙アクセント」と「アクセント規則」との間に差があるかどうかを調べた。近畿方言における「語彙アクセント」は単語単独形式および助詞付き形式であり、「アクセント規則」は新造複合語である。この「語彙アクセント」と「アクセント規則」のどちらを習得することが難しいのか、その点について各グループ内で「単語単独形式」、「助詞付き形式」、「新造複合語形式」それぞれの関係に有意差があるかどうかを Tukey の多重比較によって確かめてみた。その結果が以下の表 3.28 から表 3.31 である。

表 3.28 近畿方言 グループ 1 における Tukey の多重比較

Group1 近畿	単語 (語彙アクセント)	助詞付き (語彙アクセント)	新造複合語 (アクセント規則)
単語		n.s. ($t = 0.35, p > .05$)	n.s. ($t = 0.66, p > .05$)
助詞付き			n.s. ($t = 0.91, p > .05$)

*: 5%水準, **: 1%水準, ***: 0.1%水準, n.s.: 有意差なし

表 3.29 近畿方言 グループ 2 における Tukey の多重比較

Group2 近畿	単語 (語彙アクセント)	助詞付き (語彙アクセント)	新造複合語 (アクセント規則)
単語		n.s. ($t = 0.03, p > .05$)	n.s. ($t = 1.37, p > .05$)
助詞付き			n.s. ($t = 1.53, p > .05$)

*: 5%水準, **: 1%水準, ***: 0.1%水準, n.s.: 有意差なし

表 3.30 近畿方言 グループ 3 における Tukey の多重比較

Group3 近畿	単語 (語彙アクセント)	助詞付き (語彙アクセント)	新造複合語 (アクセント規則)
単語		n.s. ($t = 0.28, p > .05$)	n.s. ($t = 0.46, p > .05$)
助詞付き			n.s. ($t = 0.31, p > .05$)

*: 5%水準, **: 1%水準, ***: 0.1%水準, n.s.: 有意差なし

表 3.31 近畿方言 グループ 4 における Tukey の多重比較

Group4 近畿	単語 (語彙アクセント)	助詞付き (語彙アクセント)	新造複合語 (アクセント規則)
単語		n.s. ($t = 0.07, p > .05$)	* ($t = 2.52, p < .05$)
助詞付き			n.s. ($t = 2.28, p > .05$)

*: 5%水準, **: 1%水準, ***: 0.1%水準, n.s.: 有意差なし

これらの表をみると唯一、「語彙アクセント」および「アクセント規則」に統計的有意差が確認されるのは表 3.31 のグループ 4 (両親 non-native) の単語単独形式と新造複合語形式を比較した場合である。このグループ 4 (両親 non-native) に関していうと「新造複合語形式」の達成率が単語単独形式の習得率よりも低いことから「アクセント規則」の習得の方が「語彙アクセント」よりも難しいということがいえるであろう。しかし、この他のグループには「語彙アクセント」および「アクセント規則」に関しては統計的有意差がないことがわかる。他の形式（単語単独形式、助詞付き形式）に比べて低いことが、即「アクセント規則」を習得することの方が難しいとはいえないということがこの統計結果から明らかとなった。さらに那須 (2004) が示したような「語彙アクセント」は変化しやすいために習得率が下がり、「アクセント規則」は変化しにくいために達成率がよいという変化の速度の違いは、両親が近畿方言地域出身のグループ 1 の中でも観察されなかった。

「語彙アクセント」の習得と「アクセント規則」の習得に関して、近畿方言調査で明らかになった点は実測値 (図 3.1 および表 3.11) では心的辞書に蓄積されていると考えられる「語彙アクセント」の方が、音韻規則である「アクセント規則」の習得よりも高いということである。グループ 4 (両親 non-native) では「語彙アクセント」と「アクセント規則」に統計的有意差があったとしても、他のグループでは統計的に意味のある違いではない (有意差なし) ということが明らかになった。

3.5.6 結果 I のまとめ

この 3.5 ではまず近畿方言における調査結果の全体像を把握するために、どの程度近畿方言アクセントが習得できているのかを各調査語彙形式および各グループで概観した。そして親の出身地による習得の違い、つまりグループ間の違いと、調査語彙形式による習得の違いがあるのかどうかについて二元配置の分散分析を行った。その結果、親の出身地による違いと調査語彙形式による違いのどちらも統計的に違いを作り出していることが明らかとなった。この「親の出身地」および「調査語彙形式」の両方の要因が有効であることを確認し、次に各調査語彙形式で正答率と誤答率を概観してきた。

ここで 3.5 を振り返りながら、最初に提示した二つの問題を検証する。

■親の出身地の違いによって方言習得の差はあるのか。

■方言習得に違いがあるとすれば、その違いはどこに現れてくるのか。

3.5.2 から 3.5.4 まで「語彙単独形式」、「助詞付きの形式」、「新造複合語形式」の三つの形式に分けて近畿方言アクセントの習得率および「式保存の法則」の達成率をグループ間ごとの比較を行った。その結果、上記の二つの問題について次のようなことが明らかとなった。

■親の出身地の違いによって方言習得の差はあるのか？

この問題に対しては「ある」といえる。特に両親ともに近畿方言地域以外の出身（グループ 4）の場合、他のグループ 1（両親 native）、グループ 2（母親 native）との間に近畿方言の語彙アクセントの習得率、および「式保存の法則」の達成率に統計的な有意差あることがわかった。親の出身地による影響は、とりわけ両親ともに近畿地方以外の出身という影響が大きいことがわかった。

グループ間の差をより詳しく見ると、グループ 2（母親 native）、グループ 3（父親 native）は「語彙アクセント」（記憶）の習得はグループ 1（両親 native）と統計的には差がなかった。しかし、「アクセント規則」（文法）については、グループ 1（両親 native）とグループ 3（父親 native）、グループ 4（両親 native）との間に有意差があったことから、「アクセント規則」（文法）に関しては母親の影響がないとは言いきれないことが明らかとなった。

■方言習得に違いがあるとすれば、その違いはどこに現れてくるのか？

両親の出身地の違いによって、その子供の方言習得に違いあることがわかった。では、その親の出身地の違いによる影響が「どこ」に現れてくるのか、語彙アクセント（語彙的/記憶）なのか、それともアクセント規則（音韻規則/文法）なのかという問題である。

3.5.5 では各グループ内での調査語彙形式による近畿方言アクセントの違いを多重比較によって確認したが、ほとんどの場合、同一グループ内において「語彙アクセント」の習得と「アクセント規則」の習得との間に統計的な有意差を確認できなかった。ただし「語彙アクセント」と「アクセント規則」の習得の実測値の傾向として「語彙アクセント」の方が「アクセント規則」よりも習得がよいことが明らかとなった。唯一、この「語彙アクセント」と「アクセント規則」の間に有意差が確認されたのはグループ 4（両親 non-native）だけであった。このグループ 4（両親 non-native）にのみに確認されたということは、このグループの特徴を表すものであるかもしれない。この点については他の方言で行う同様の調査結果と比較してみなければならない。

次節では、これまで「誤答」としてひとまとめに扱ってきた新造複合語における誤答アクセントを「伝統的な近畿方言と何が違うのか」という視点から詳しく見ていく。この新造複合語における誤答

の内訳がどうようになっているのかを見ることにより、各グループの方言習得の方向性を明らかにする。

3.6 結果 II—伝統的な近畿方言からの逸脱とその方向性—

前節まではどれだけ伝統的近畿方言アクセントと一致するのかという視点から、その正答率（習得率）および達成率を見てきた。ここでは新造複合語における「式保存の法則」から逸脱したもの、つまり間違えたアクセントに焦点を当て、間違いにはどのような傾向があるのか、さらにグループ間でもどのような間違いの傾向が観察されるのかを調べる。ここからは「式保存の法則」に則っていないものは伝統的近畿方言から外れているので「逸脱」と呼ぶことにする。

3.6.1 新造複合語における逸脱とその種類

3.5.1 の図 3.1 では語彙アクセントの習得率に比べると新造複合語における「式保存の法則」の達成率はどのグループにおいても下がることを確認した。しかしながら、グループごとにその達成率に大きな違いがあることも確かである。ここでは新造複合語において「式保存の法則」が達成できなかったもの（逸脱）に注目し、その逸脱がどのようなものであったのかを詳しく見ていく。

まず逸脱の種類を定義する。近畿方言の「式保存の法則」は複合語の前部要素の式（高起式 / 低起式）によって複合語全体の式が決まる（3.2.2）。近畿方言の新造複合語の調査結果から「式保存の法則」が達成できなかった割合がグループごとに異なることを確認したが（3.5.4）、「式保存の法則」から逸脱したものがみな同じような間違いをしたのかということそうではない。その逸脱の種類について Takemura (2010) は方言の分類に用いた「式の有無」「核の有無」という二つの基準と、「式の一致（式保存の法則）」という 3 つの基準を用いて分類している。

表 3.1 は式と核の有無によって方言を分類したものである（3.2.1 で掲載した表 3.1 の再掲）。京阪式アクセントは式も核もある方言であるが、それら二つを兼ね備えているからといっても正真正銘の伝統的な京阪式アクセントを習得しているとは呼べない。「式保存の法則」をきちんと使うことができているのかどうかという点も近畿方言の習得には重要であるため「式の一致（式保存の法則）」という条件も必要となる。

表 3.1 (再掲) 式と核の有無による方言アクセントの分類

		核・有	核・無
式・有	高起	京阪式・高起	N 型(cf.鹿児島)
	低起	京阪式・低起	
式・無		東京式	無型

表 3.32 新造複合語アクセントの分類

		式		核	例
		式の有無 (○/×)	式(高/低 起)の一致 (○/×)	核の有無 (○/×)	
京阪式	伝統的な 近畿方言	○	○	○	なつ(HL)⇒なつやすみ(HHHLL)
					あき(LH)⇒あきやすみ(LLHLL)
	新しい 近畿方言	○	×	○	なつ(HL)⇒なつやすみ(LLHLL)
					あき(LH)⇒あきやすみ(HHHLL)
東京式	東京	×	×	○	なつ(LH/HL)⇒なつやすみ(LHHLL)
N 型	N 型	○	○	×	はこ(HH)⇒はこびらき(HHHHH)
					やま(HL)⇒やまがかり(HHHHH)
					ふね(LH)⇒ふねまつり(LLLLH)
		○	×	×	はこ(HH)⇒はこびらき(LLLLH)
無型	無型	×	×	×	やま(HL)⇒やまがかり(LLLLH)
					ふね(LH)⇒ふねまつり(HHHHH)

そこで「式があるかどうか」、「核があるかどうか」、「式の一致があるかどうか」という 3 つの条件を設けて、表 3.32 では「式保存の法則」から逸脱したものを四つに分類した。逸脱したものを 4 つに分類は表 3.1 の方言分類に合わせて「京阪式、東京式、N 型、無型」に分けた。さらにそれぞれの方言タイプの中で細分化されている。ここでは逸脱の種類を方言分類のように四つに分けているが、これは「式の有無」、「核の有無」によって表 3.1 と同じようにするために便宜的に名前を付けているものである。そのため話者の実際のデータがその名前が示している方言と一致するわけではない。

この 4 種類に分けた逸脱の中身はどのようになっているのかを実際に見てみる。例えば「京阪式」に分類された間違いの中でも「伝統的な近畿方言」と「新しい近畿方言」と二つに分けている。両者の違いは何かというと、前者が「式の有無」「(新造複合語)式の一致」「核の有無」の各条件をすべてクリアしている。例えば「夏」を単語単独形式で「●○」と高起式で読み、その「夏」と「休み」から作られる複合語「夏休み」を「●●●○○」と高起式で読んだ場合、この式も核もあるが「式の一致」もクリアしているので「伝統的な近畿方言」に分類されることになる。これに対して後者の「新しい近畿方言」は「(新造複合語)式の一致」のみが前者と異なる点である。例えば先ほどの「夏」を単語単独形式で「●○」と高起式で読み、複合語の「夏休み」を「○○●○○」と低起式で読んだ場合、式も核も有しているが「式の一致」のみができていないことになる。このような逸脱を「新しい近畿方言」とした。後者の「新しい近畿方言」は式も核もあるため近畿方言らしく聞こえるが、新造複合語では高起式と低起式を間違えて使っているパターンであり、伝統的近畿方言とは呼べないものである。このような誤答は 3.3.3 で紹介した高木 (2006) の逸脱式 (京阪式のアクセント型にあてはまるもので、存在しない新しいアクセント型が生まれるものではない) とほぼ同じものである。だが高木 (2006) と異なる点は単語単独形式の語彙的アクセントではなく、「式保存の法則」という規則

的な部分でどのように逸脱するのかを調べている点である。

新造複合語を「東京式」として読んだ間違いは、前部要素の式とは関係なく 1 拍目と 2 拍目が (LH) と発音され、アクセント核があったものを「東京式」と分類した。しかしながら、東京式の 1、2 拍目の (LH) は低起式ではないのかという疑問が生じる。ここで京阪式の式保存に則った低起式と東京式の 1、2 拍目の (LH) の違いについて明確にしておかなくてはならない。京阪式の低起式で重要な点はアクセント核がある直前まで低起を保つという点である。これに当てはまるものを京阪式の低起式とみなし、これ以外の場合を東京式とした。N 型の間違いは鹿児島方言のような A/B 型に当てはまるというものではない。例えば「箱」を「●●」と高起式で読んで、「箱」と「ひらき」から作られる「箱開き」という複合語に対して「●●●●●」とアクセント核がなく全て高起式で読んだものや、「船」を「○●」と単語単独形式では低起式で読み、「船まつり」という複合語では「○○○○●」と末尾のみを高く発音する（末尾まで低く保つ）ものを「N 型」タイプの間違いとした。そして無型と分類される間違いは N 型とは反対で、単語単独形式で「山」を「●○」を高起式で読んでおきながら、「山係」という新造複合語では「○○○○●」と末尾のみを高く発音するものを指す。このようにして新造複合語を「伝統的近畿方言」から「無型」のタイプの 5 つに分類した。

3.6.2 誤答の方向性

前節では新造複合語における「式保存の法則」からの逸脱を「式の有無」「核の有無」「式の一致」という条件を設けて分類した。ここでは実際に「逸脱」がどのような方向に向かっているのかを実数と割合で見てみる。

表 3.33 新造複合語アクセントの内訳

逸脱の種類		式		核	例	Group1 (100 語 × 21 人)	Group2 (100 語 × 18 人)	Group3 (100 語 × 21 人)	Group4 (100 語 × 21 人)
		有 無	一 致	有 無					
京阪 式	伝統 的	○	○	○	なつ(HL)⇒なつやすみ(HHHLL)	1990/2100	1453/1800	1555/2100	975/2100
					あき(LH)⇒あきやすみ(LLHLL)	.(94.8%)	.(80.7%)	.(74.0%)	.(46.4%)
	新し い	○	×	○	なつ(HL)⇒なつやすみ(LLHLL)	94/2100	217/1800	314/2100	638/2100
					あき(LH)⇒あきやすみ(HHHLL)	.(4.5%)	.(12.1%)	.(15.0%)	.(30.4%)
東京式		×	×	○	なつ(LH/HL)⇒なつやすみ(LHHLL)	15/2100 .(0.7%)	125/1800 .(6.9%)	215/2100 .(10.2%)	475/2100 .(22.6%)
N 型 (式有・核無)		○	○	×	はこ(HH)⇒はこびらき(HHHHH)	1/2100 .(0.05%)	5/1800 .(0.3%)	16/2100 .(0.8%)	4/2100 .(0.2%)
					やま(HL)⇒やまがかり(HHHHH)				
					ふね(LH)⇒ふねまつり(LLLLH)				
			○	×	×	はこ(HH)⇒はこびらき(LLLLH)			
無型 (式無・核無)		×	×	×	やま(HL)⇒やまがかり(LLLLH)	0/2100	0/1800	0/2100	8/2100
					ふね(LH)⇒ふねまつり(HHHHH)	.(0%)	.(0%)	.(0%)	.(0.4%)

表 3.33 は表 3.32 をもとに分類した新造複合語アクセントの内訳とそれらの実数を示している。表 3.33 の上段「伝統的な近畿方言」が「式」も「核」もあり、なおかつ「式保存の法則」に則った形のもので、図 3.10 の「伝統的な近畿方言」と一致する。この「伝統的な近畿方言」はグループ 1、2、3、4 の順に正答率が下がっていくことが表 3.33 でも図 3.10 でも示されている。その「伝統的な近畿方言」を除くと、その他はみな式保存の法則からの逸脱（誤答）というになり、図 3.10 の「誤答」と一致する。ここからは、その誤答と分類されるものの傾向を表 3.33 と図 3.11 と対応させて見てみる。誤答の中でも「新しい近畿方言」は式選択の間違いである。このタイプ間違いがグループの 1、2、3、4 の順番に増加していることが、表 3.33 でも図 3.11 の「新近畿」で示された部分でも確認できる。この式選択を間違えた「新しい近畿方言」は式と核をもっていることから分類の上では「京阪式アクセント」に分類され「近畿方言」らしく聞こえる特徴をもつ。そのため「京阪式アクセント」という大きな枠をこの「新しい近畿方言」という誤答に当てはめると、グループ 1、2、3 の「京阪式アクセント」である割合は約 90%あるいは 90%以上にもなる（表 3.33 の太枠で囲った部分）。この太枠で囲った部分の中でグループ 4（両親 non-native）を見ても、「式と核を持つ」という近畿方言らしさの点では約 77%にもなる。

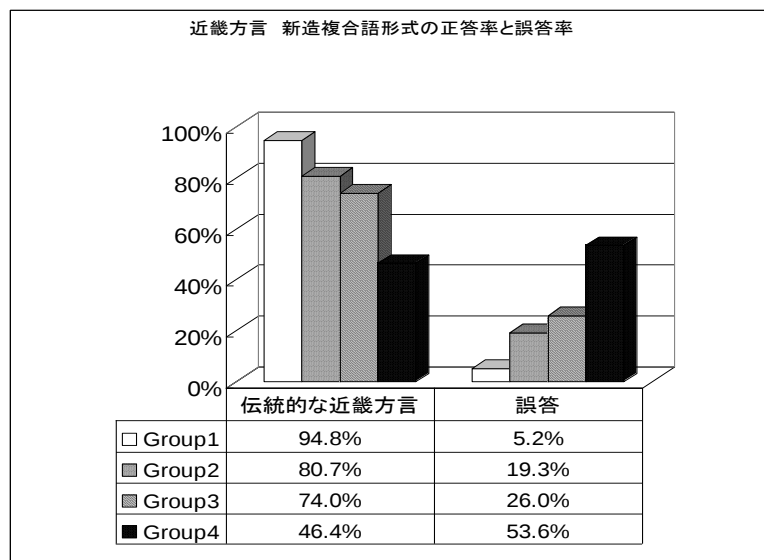


図 3.10 近畿方言 新造複合語形式の正答率と誤答率

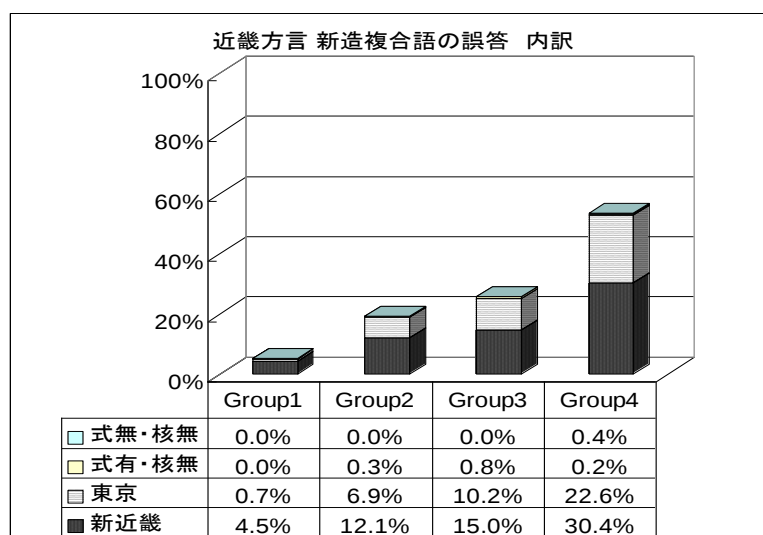


図 3.11 近畿方言 新造複合語の誤答の内訳

では「新しい近畿方言」以外の誤答はどうなっているのだろうか。その他の誤答で多いのは「東京式」の誤答であり、その他の誤答「N型（式有・核無）」、「無型（式無・核無）」にはほとんど向かわないことが表 3.33 および図 3.11 からわかる。これら誤答の内訳から見てくるのは、誤答は誤答であってもできるだけ近畿方言の韻律的特徴内をもった誤答「新しい近畿方言」に集中し、それ以外の「東京式」や「N型」などの誤答へは向かない傾向があるという点である。さらに近畿方言の韻律的特徴以外の誤答に向かうのであれば「東京式」が圧倒的であることも明らかとなった。

ここでは誤答の多くが近畿方言らしく聞こえる「新しい近畿方言」に向かうことが明らかとなり、音韻規則である「式保存の法則」の適用に関してグループによる差があることが確認できた。これまで先行研究では「子供は生まれ育ってきたその土地の言葉（方言）を習得する」といわれてきたが、それは方言の型（ここでは京阪式アクセント）という韻律的特徴の枠に収まっているということを意味していたのではないだろうか。もしそうであれば、「語彙アクセント」の習得率を調べるだけでも、十分に当該方言の「韻律的特徴の枠内」（ここでは「式有/核有」）を満たすことはできる。だが方言の習得は「韻律的特徴の枠内」に収まること、つまり「当該方言らしく聞こえる」ことだけではない。方言習得の問題は「アクセント規則」に代表されるような、当該方言の文法（音韻規則）を運用することができ、当該方言に対して直観が働くという点であろう。そのような意味で表 3.33 をみると、やはり親の出身地の違いによって方言習得、とくに「アクセント規則」の習得と運用面において影響があることを確認することができよう。次節では誤答「新しい近畿方言」で式の選択を間違ってしまったものが、どちらの式に向かう傾向があるのか、その式の方向性について詳しく見てみることにする。

3.6.3 式選択の間違いの方向性

前節では誤答の内訳をみることによって、式選択の間違いがあることが表 3.33 から明らかとなった。では、その式選択の間違いの実態はどのようなになっているのだろうか。具体的には表 3.34 (a)のように、前部要素を高起式で読んでおきながら新造複合語では低起式で読んでしまった間違いが多い

のか、あるいはその逆で(b)のような低起式で読んでおきながら高起式で新造複合語を読んでしまう間違いが多いのかということをごここでは詳しく見てみる。

表 3.34 式選択の誤答例

単語の式⇒新造複合語の式	単語	新造複合語
(a) 高⇒低	なつ(HL)	なつやすみ(LLHLL)
(b) 低⇒高	あき(LH)	あきやすみ(HHHLL)

中井 (1996) によると実在する複合語において、前部要素の式と後部要素の式が異なる場合が多いことを上げ、その表面的な特徴を次のように述べている。「前部要素が低起式で複合語が高起式」は a) 数が多い、b) 和語に多い、c) 複合語全体が短い、d) 高齢の話者に多い、e) 先部要素末尾に母音交替が見られるものに多い、f) 伝統性が感じられるものが多い、という特徴を挙げている。これらの特徴は印象論であるため、その実態を確かめるべく中井 (1996) は実在する複合語を用いて調査を行っている。その結果、前部要素の音調に世代差がある場合、複合語の音調が前部要素の変化にも関わらず古い形を残すことがあると指摘し、とくに語彙化された複合語にはそのような「ねじれ」が起こるとしている。

本調査では前部要素の単独形式と新造複合語を調べているので、「ねじれ」が起きている部分、つまり式が一致していない部分をみることで中井 (1996) が挙げた特徴と一致するかどうかを確かめることができる。特にここでは「ねじれ」の数が多いとされる「前部要素が低起式で複合語が高起式」という特徴がこの調査結果に当てはまるのかどうかを確かめる。

表 3.35 は式の選択を間違えたもの(表 3.33 の「新しい近畿方言」の段に対応)の内訳をグループ別に表示している。上段と下段の二段があり、上段は単語単独形式を高起式で読み、新造複合語を低起式で読んだ場合、下段は単語単独形式を低起式で読み、新造複合語を高起式で読んだ場合を示している。それぞれ分母となる数は前部要素が高起式/低起式であったかの数による。その分母の中で式の間違いを起こしたものを分子で示している。

表 3.35 式保存の法則の間違い (単語単独と新造複合語の式が異なる場合)

		Group 1	Group 2	Group 3	Group 4
単語単独⇒新造複合語		(両親 native)	(母親 native)	(父親 native)	(両親 non-native)
		(21 人)	(18 人)	(21 人)	(21 人)
式保存の間違い	高⇒低	36/1259	139/1102	187/1289	289/1198
		(2.9%)	(12.6%)	(14.5%)	(24.1%)
	低⇒高	58/841	72/698	141/811	355/902
		(6.9%)	(10.3%)	(17.4%)	(39.4%)
		94/2100	211/1800	328/2100	644/2100
		(4.5%)	(11.7%)	(15.6%)	(30.7%)

表 3.35 の枠で囲ったものが、そのグループの中でどちらの間違いが多かったかを示している。これを見ると、グループ 2 (母親 native) を除いた、グループ 1 (両親 native)、グループ 3 (父親 native) 、

グループ 4 (両親 non-native) で単語単独形式を低起式で読んで新造複合語を高起式で読んだという間違いが多いことがわかる。この傾向は中井 (1996) が挙げていた特徴「前部要素が低起式で複合語が高起式」と一致する。ではなぜこのような傾向になるのだろうか。考えられる理由としては、「高起式」で読むものへの馴染み度が考えられる。つまり普段耳にする、周囲の言葉自体に高起式のものが多く、高起式への馴染み度が高くなることによって、複合語は式保存 (音韻規則) に頼らず高起式として読むのではないかと考えられる。とくに式保存の達成率が低かったグループ 4 (両親 non-native) を見てみると、そのような高起式への間違いが低起式への間違いよりも圧倒的に多いことがわかる。高起式で読まれる複合語が実際に多いのかどうか、またそのように高起式で読まれる語彙 (単純語、複合語) への馴染み度との関係については今後の課題である。

3.6.4 個人差

調査協力者は同じ近畿地方に育ってきたとはいえ、個人が育ってきた環境は異なる。そのため個人によって習得された方言も異なることは確かである。前節までは各グループに分けて調査結果を見てきたが、ここからは個人差について詳しく見てみる。

本研究の調査協力者らは 18-41 歳までで男性 10 名、女性 71 名で合計 81 名である。まず個人差の要因として考えられるのは、年齢と方言アクセントとの関係である。例えば、年齢が上がるにつれて伝統的な近畿方言アクセントの習得の割合が高くなる、あるいはその逆で年齢が上がるにつれて伝統的な近畿方言アクセントの割合が下がっていく傾向があるのかということを見ていく。図 3.12 は「年齢」と「式保存の法則」の達成率との関係を表した散布図である。年齢と「式保存の法則」の達成率との間に相関関係があるかどうか Pearson を使って調べたところ、強い相関関係は示さなかった ($r = 0.15, p < .05$)。では年齢ではなく個人差を表すものは何であろうか。

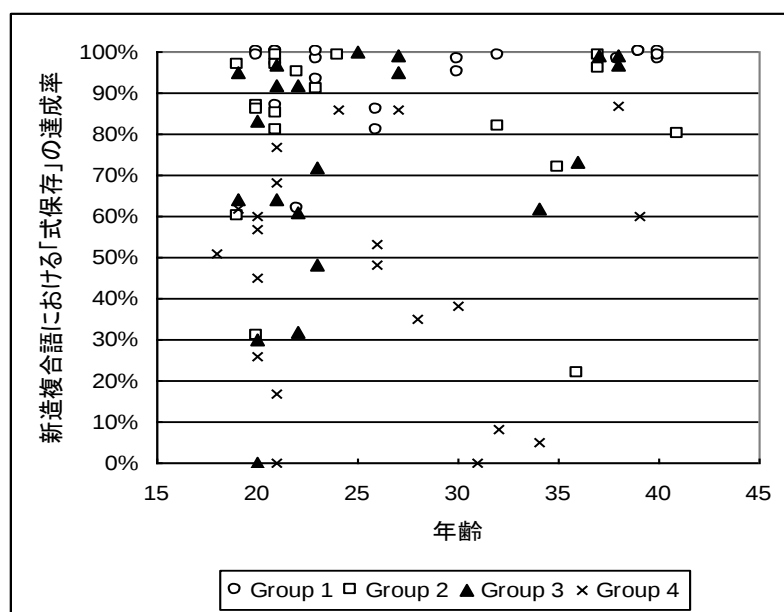


図 3.12 年齢と「式保存の法則」の達成率との関係

次の表 3.36 は「年齢」と各形式 (単語単独形式、助詞付き形式、新造複合語形式、単語 + 新造複

合語形式)らをそれぞれ組み合わせたときの相関係数を示している。この表 3.36 をみると「年齢」以外の組み合わせでは、かなり相関係数を示すことが明らかとなっている。この組み合わせの中で「単語単独形式」と「新造複合語形式」の組み合わせに注目し、図示したものが図 3.13 である。これは横軸に単語単独形式の近畿方言アクセントの習得率(正答率)を、縦軸に新造複合語形式の「式保存の法則」の達成率をとり両者の関係を示した散布図である。

表 3.36 調査語彙形式と年齢の相関係数

	単語	助詞付き	新造複合語	単+新複	年齢
単語		0.95 ($p < .05$)	0.8 ($p < .05$)	0.83 ($p < .05$)	0.24 ($p < .05$)
助詞付き			0.79 ($p < .05$)	0.83 ($p < .05$)	0.24 ($p < .05$)
新造複合語				0.97 ($p < .05$)	0.15 ($p < .05$)
単+新複					<u>0.21</u> ($p > .05$)

この図 3.13 をみるとグループ 1(両親 native)、グループ 2(母親 native)、グループ 3(父親 native)の各個人は右端上部に位置していることがわかる。これは単語単独のアクセントが伝統的な近畿方言のアクセントとほぼ満点に近い値を示すのと同時に、「式保存の法則」の達成率もかなり高いことを示している。一方、グループ 4(両親 non-native)に属する個人は(×)でグラフの中に描かれているが、これをみると個人で単語単独の得点と式保存の達成率との間にバラつきが大きいことがわかる。さらにグループ 4(両親 non-native)の中でも単語単独の得点が高い人ほど式保存の達成率も高いことがわかる。どうやら「語彙アクセント」である「単語単独形式」の習得率が高い人は、「式保存の法則」の達成率が高い傾向があることが明らかとなった。

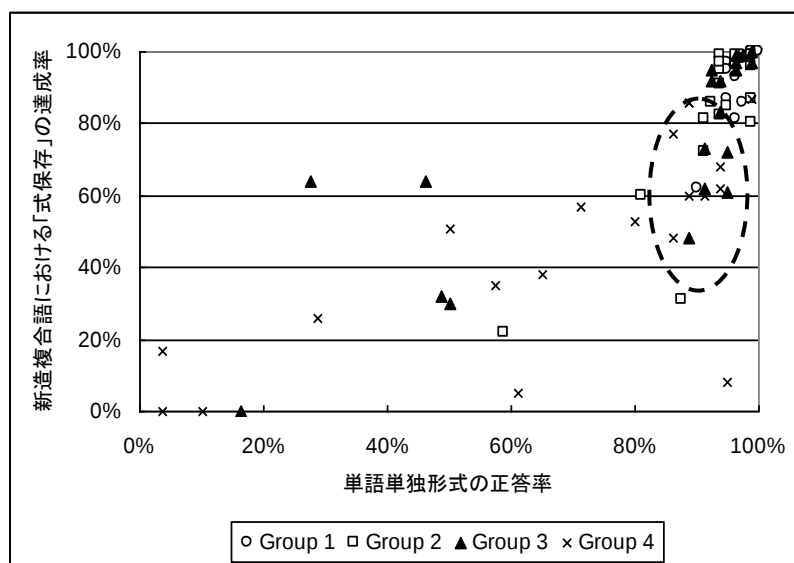


図 3.13 単語単独の得点と「式保存の法則」の達成率

前節まではグループごとにまとめて提示しており、個人の習得がどのようになっているのかという細かい点までは見ることはできなかった。ここでは伝統的な近畿方言の音韻規則「式保存の法則」を達成できるかどうかを個人レベルで示してきた。その結果、年齢と「式保存の法則」との達成率との間には相関関係はほぼないことが明らかとなった。「式保存の法則」の達成率と相関関係があるのは「語彙アクセント」である「単語単独形式」と「助詞付き形式」の正答率である。またグループ 4 (両親 non-native) については「式保存の法則」の達成率にバラつきが大きいことがわかり、グループ 4 (両親 non-native) の中でも「近畿方言の習得がよくできている人」と「そうでない人」がいることが明らかとなった。

では個人ごとに方言習得の違いがあることに関連して、話を「方言話者の定義」を移して個人差のことを考えてみたい。ある程度の人数を扱う方言調査であれば、調査結果にバラつきが生じないようにしたいと思うのが調査者の願いであろう。緩い方言話者の条件とされる「その土地で育った人」という条件であれば、本調査のグループ 4 (両親 non-native) の人はこの「その土地で育った人」という条件に該当することになる。だがこの節の「個人差」から分かるように、グループ 4 (両親 non-native) の個人差が大きいことは明確である。同じ土地で調査を行ったとしても、グループ 4 (両親 non-native) の話者、つまり当該方言地域以外の両親をもつ話者が調査に加わる場合、得られる方言データを歪める可能性があることが容易に想像できる。「方言話者とは誰なのか」という議論については、4 章の「鹿児島方言調査」の結果を経て、5 章で議論することにする。

3.6.5 結果 II のまとめ

3.6 全体を通して調べたものは「新造複合語形式」に現れる伝統的な近畿方言からの逸脱とその方向性である。まず 3.6.2 でみたのは逸脱の方向性である。この方向性から見てみると、誤答は「新しい近畿方言」に集中することが明らかとなった。この誤答は「式も核もあるが、式保存の法則のみ違反する」というもので、近畿方言らしく聞こえる韻律的特徴を備えたものである。このような誤答がグループ 1 (両親 native) 、グループ 2 (母親 native) 、グループ 3 (父親 native) 、グループ 4 (両親 non-native) の順に高くなることが明らかとなった。この他の誤答として次に多いのは「東京式」の誤答である。これは 1 拍目と 2 拍目の間に上がり目あるタイプのもので、この誤答が一番多く観察されたのはグループ 4 の両親ともに近畿方言地域以外の出身の話者であることが明らかとなった。

また「新しい近畿方言」の誤答に分類されるものの中で、さらにどのような誤答が多いのかという方向性を 3.6.3 で単語単独形式時の「高起式/低起式」と新造複合語の「高起式/低起式」に分けて調べた。その結果、四つのグループがある中で 3 グループ (グループ 1 (両親 native) 、グループ 3 (父親 native) 、グループ 4 (両親 non-native)) で「単語は低起式で新造複合語は高起式」という間違いが多いことが明らかとなった。これは中井 (1996) の報告と同じ傾向を示す結果である。

さらにグループ間の比較ではなく、より細かい違いをみるために個人差を 3.6.4 では調べた。この個人差は、言い換えると「バラつき」だと言える。グループ 1 (両親 native) 、グループ 2 (母親 native) 、グループ 3 (父親 native) に比べ、グループ 4 (両親 non-native) このバラつきが一番大きいことが分かった。つまり両親ともに近畿方言地域出身でない場合、「方言習得がよく出来ている人」と「そうでない人」とが一緒のグループにいることが「個人差」から明らかになった点である。このバラつきが

グループ 4 (両親 non-native) 全体としての平均を下げていたのではないかと考えられる。このようなことから、均質性を求めるような方言調査では、両親とも当該方言地域以外の話者は方言データを乱す可能性があることが言えるであろう。

3.7 まとめ

この 3 章では近畿方言を対象に、以下の 2 点に注目しながら調査結果を分析および考察を行った。分析した結果は「結果 I—伝統的な近畿方言—」と「結果 II—伝統的な近畿方言からの逸脱とその方向性—」に分けて提示した。以下の 2 点はこの論文全体を通してのリサーチクエスションである。

■ 親の出身地の違いによって方言習得の差はあるのか？

■ 方言習得に違いがあるとすれば、その違いはどこに現れてくるのか？

まず第 1 点目のリサーチクエスションの答えとして「親の出身地の違いによる方言習得の差はある」ということがこの近畿方言の調査で明らかとなった。それは「語彙アクセント (記憶) にもアクセント規則 (文法) にも親の影響がある」という結果に基づいている。特にグループ 4 (両親 non-native) とグループ 1 (両親 native)、グループ 2 (母親 native) との差が語彙単独形式、助詞付きの形式、新造複合語形式のどの項目にも統計的な有意差が示されたことから、両親の出身地の違いによって「記憶」にも「文法」にも習得に違いがあることが明らかとなった。またグループ 3 (父親 native) はグループ 4 (両親 non-native) と新造複合語形式にのみ統計的有意差が観察された。

さらに第 2 点目のリサーチクエスションは各グループ内で「語彙アクセント」と「アクセント規則」の習得に有意差があるかどうか確認した (3.5.5)。ほとんどのグループで両者の間には有意差は認められなかった (唯一、統計的有意差が確認されたのはグループ 4 (両親 non-native) のみであった)。単語単独形式、助詞付き形式、新造複合語形式の結果から一貫して観察されたのは、両親ともに近畿以外の出身の場合 (グループ 4) と両親/母親が近畿出身の場合 (グループ 1、グループ 2) との間の統計的有意差であった。

さらに新造複合語における「式保存の法則」からの逸脱をみることによって、4 つのグループ間の違いがさらに明らかとなった。「式」と「核」の両方を有しているが「式保存の法則」に一致しないタイプの誤答を「新しい近畿方言」として 4 グループを調べたところグループ 1 (両親 native)、グループ 2 (母親 native)、グループ 3 (父親 native)、グループ 4 (両親 non-native) の順にこの誤答が増加することがわかった。つまり「京阪式アクセント」を韻律的特徴である「式」と「核」はどのグループも高い割合で習得しているため「近畿方言らしく」聞こえるが、実際は音韻規則 (文法) の習得に違いがあることが明らかとなった。また次に多い誤答は東京式アクセントで、この誤答もグループ 1 (両親 native)、グループ 2 (母親 native)、グループ 3 (父親 native)、グループ 4 (両親 non-native) の順に増加することが明らかとなった。では先行研究での主張とこの近畿方言調査の結果との相違点はないのだろうか。先行研究で明らかになっている次の 2 点との異同を検証してみることにする。

■母親の出身地が当該方言地域であれば方言習得もよい (柴田 1958, 杉藤 1984)

この近畿方言の調査では、どの形式においても一貫して両親ともに近畿以外の出身の場合（グループ 4）と両親/母親が近畿出身の場合（グループ 1、グループ 2）との間の統計的有意差が確認された。この 3 つのグループの違いは母親の出身地の違いである。もちろん、この 3 つのグループの中で方言アクセントの習得率が高いのはグループ 1（両親 native）、グループ 2（母親 native）であり、方言アクセントの習得率が一番低いのはグループ 4（両親 non-native）である。母親の出身地の違いがあるグループ 2（母親 native）とグループ 3（父親 native）の間には有意差が確認されなかったため「母親の影響が強い」とは強調することはできないが、実測値の傾向として「グループ 2（母親 native）> グループ 3（父親 native）」という方向性があるため母親の出身地の影響が少なからずあることがいえよう。

■親の影響があるとすれば語彙だけではなく音韻規則にも影響がある (Payne 1976)

音韻規則「式保存の法則」の習得を調べた新造複合語ではグループ 4（両親 non-native）と他の 3 つのグループ（グループ 1（両親 native）、グループ 2（母親 native）、グループ 3（父親 native））との間に統計的な有意差が確認されることから本研究でも Payne (1976) の結果と同様に音韻規則の習得にも両親の影響があることが明らかとなった。

本研究では近畿方言を対象に、近畿方言地域で生まれ育った話者の方言習得を親の出身地による違いから調べた。方言アクセントの習得という「語彙アクセント」の習得が注目されがちであるが、本研究では Payne (1976) 以外は扱われてこなかった音韻規則である「アクセント規則」の習得についても調査を行った。その結果、両親の出身地が近畿方言地域でない場合は近畿方言の語彙アクセントおよびアクセント規則の習得が異なることが明らかとなった。そして誤答を分析した結果、誤答の多くが近畿方言らしく聞こえるが「式保存の法則」に違反する「新しい近畿方言」と呼ぶ誤答に集中している傾向が明らかとなった。さらに本研究では先行研究では示されてこなかった個人差を示し、グループ 4（両親 non-native）は他のグループに比べると個人差が顕著に現れることが明らかとなった。このように近畿方言の調査では親の出身地の違いによる方言習得の違いが明らかとなった。しかしながら、この傾向は近畿方言だけに観察される可能性も否定できない。そこで 4 章では、鹿児島方言で同じ手法を用いた調査・分析を行い、近畿方言で得られた結果と同じ結果になるのかどうかを検証する。

i 本稿は第 29 回関西言語学会（2008 年 6 月 8 日 於 大阪樟蔭女子大学）での研究発表「子供のアクセント獲得における親の母方言の影響—近畿方言における式保存の法則に注目して—」、および The Thirteenth International Conference on Methods in Dialectology (2008 年 8 月 6 日 於 University of Leeds, England, UK)での研究発表“Accentual difference caused by parental accentual influence in a Japanese dialect”、New Ways of Analyzing Variation 38 (2009 年 10 月 23 日 於 University of Ottawa, Canada)でのポスター発表“Parents Do matter in dialect acquisition: Evidence from the Kansai dialect of Japanese”、および研究論文 Takemura (2010) “Dialect Acquisition in the View of Parental Origins: The Case of Kansai Dialect of Japanese” に加筆・修正したものである。

ii 5 類を集計から除外しているのは、先行研究で指摘されているように拍内下降がなくなる変化があるためである。本調査で対象とした若年層のほとんどがこの変化をしている。そのため伝統的な近畿方言アクセントという観点からみると、現在の若年層のデータは伝統的な近畿方言から著しく逸脱すると考えられるため、この集計から排除している。

iii 多重比較によって得られる p 値が低ければ低いほど「違いがない（＝有意差なし）」という事象が起こる確率が下がることを意味する。

iv なぜこの2拍名詞第4類の助詞付き形式のアクセントが伝統的な(LLH)から(LHL)に変化したのか、ということについて2つの説明がある。一つは「近畿方言の体系内におけるアクセント変化」であり、二つ目は筆者が考える「東京方言の影響による変化」である。前者は杉藤(1984)、真田(1986)で指摘されている「2拍名詞第4類と第5類の統合」によって、単語単独形式の区別がつかなくなったために、助詞付きの形においても第4類と第5類の統合が起こったというものである。確かに近畿方言の第4類助詞付き形式(LLH)は単語単独形式の(LH)から考えるとアクセントの位置が異なる。一方で第5類の助詞付き形式(LHL)は単語単独形式が(LC(C:Contour))から(LH)に変化したことにより、アクセントの位置は助詞付き形式と単語単独形式とで変わらないために整合性が取れていることとなる。そうすると第4類の助詞付き形式の(LLH)は整合性がないものになるということで(LLH)から(LHL)に変化したのであろうというのである。

この説に従えば非常にきれいに説明ができるので納得したくなるが、この説は本当に正しいのだろうか。変化の要因として他の可能性はないのだろうか。筆者は他の要因として「東京方言による影響」を考えている。東京方言の助詞付き形式のアクセントは単語単独形式のアクセントを保持して、そのうしろに助詞をつけるという形をとる。そのため、アクセントの位置が単語と助詞付きのときとで変化するということはない。つまり東京方言の単語と助詞付き形式において「アクセント位置が変化しない」という点を模倣して、近畿方言の2拍名詞第4類の助詞付き形式のアクセントが(LLH)から(LHL)に変化したのではないかと考えている。だが先ほどの「近畿方言の体系内による自律的なアクセント変化説」も、また筆者が考える「東京方言の助詞付き形式の影響による変化説」も変化が完了しているような今の状態では確かめることが難しいであろう。

v 「語彙アクセント」の場合は正答率(習得率)を用いるが、「音韻規則」の場合は「規則」を適用できるかどうかを調べるため達成率とする。

第4章 鹿児島方言調査ⁱ

4.1 鹿児島方言調査の方向性

方言習得において親の出身地のアクセントの影響があるかどうかを、3章では近畿方言を対象に分析してきた。影響があるかどうかをみたのは「単語単独形式」、「助詞付き形式」そして「新造複合語形式」のアクセントである。言語習得の観点からみると、前者の2点は語彙に備わった一つ一つのアクセント(=語彙アクセント)をきちんと「記憶」できているのかを調べるものであり、後者の「新造複合語」は音の「文法/規則」(=アクセント規則)の習得を調べるものである。その結果、近畿方言では両親が近畿地方の出身である場合とそうでない場合とで「語彙アクセント」と「アクセント規則」の習得との間に統計的な有意差があることが明らかとなった(Takemura 2010)。また母親の出身地の影響が大きいとしている杉藤(1984)の報告を客観的(統計的)に示すことはできなかったが、実測値の傾向として母親の出身地の影響があるのではないかという結果を得た。

また両親が近畿地方の出身でない話者の特徴は、近畿方言らしく聞こえるが伝統的な近畿方言とは異なる点である。具体的には近畿方言の韻律的特徴の「式(高起/低起)」「核」はあるが「式保存の法則」という「アクセント規則」まではきちんと習得できていないという点であった。だが、このような傾向は近畿方言のみに観察されるものであろうか。近畿方言で明らかとなった「親の出身地の影響」が他の方言で観察されるかどうかを他の方言でも確かめなくてはならない。そうしなければ近畿方言で明らかになった点は「ある方言習得の報告(事例報告)」で終わってしまうことになる。

ここでは近畿方言と同じく「アクセント規則」が明確に規定されている鹿児島方言を対象にして親の出身地の影響を調べることにする。次節では鹿児島方言の韻律的な特徴を概する(4.2)。その後、鹿児島方言のアクセント変化に関する先行研究を取り上げ、調査で注意すべき点を明確にする(4.3)。そして4.4では鹿児島方言調査の概要および分析対象を説明する。次の4.5では全体的な調査結果を概観し各形式・各グループ間の方言習得の傾向を把握する。つづく4.6では誤答に注目して話者の属性と誤答の方向性の分析を行い、個人差も提示する。最後の4.7では鹿児島方言の調査から明らかになった点を振り返り、鹿児島方言に関する先行研究との異同、近畿方言を対象としたときの結果との異同を示しながら方言習得における「親の出身地」の影響について考察する。

4.2 鹿児島方言の韻律的特徴

まず「式」と「核」の有無によって鹿児島方言を捉えると「式がある」かつ「核がない」というアクセント型をもつ方言である(3.2.1の表3.1参照)。そしてその「式」は2つの型しかないとされる「二型アクセント体系」の方言である。ただし鹿児島方言の二型アクセント体系は語彙の長さに関わらず、末尾から2音節目が高く発音される型(A型)か、あるいは末尾の1音節が高く発音される型(B型)の2つしかない(平山 1951、木部 2008)。また語種によらず常にこの2種類のアクセント型しか現れない。(12)は鹿児島方言におけるA型の例「女」とB型の例「男」を示す。(この章ではアクセント(=卓立)のある部分を、文字の上に示された点線で示す)

(12) 鹿児島方言における A 型と B 型

A 型：おんな (女)

B 型：おとこ (男)

二型のアクセント体系であるということ以外に鹿児島方言を特徴づけるもう一つの側面は、「シラビーム方言（音節方言）」であるという点である。語末からの位置、またどの部分を高く発音するかは常に音節で数える。(12) の A 型は末尾から数えて「2 音節目」が高く発音されなければならないため「おんな (女)」の「おん」の撥音まで高く発音するように卓立の位置を点線で示している。このように鹿児島方言では特殊拍と呼ばれる引き音（一）、撥音（ん）、促音（っ）、二重母音（ai, oi, ui）はそれらの前に位置するモーラと一緒に一つの音節をつくり、その音節で卓立が置かれる位置を測る。一方、標準語のもととなっている東京方言はアクセント位置を決める単位も、またアクセントを付与する単位も「モーラ」を基準にして考える「モーラ方言」である。そのため、鹿児島方言と東京方言はそれぞれ「音節」と「モーラ」という単位を用いるという点で全く異なる韻律的特徴をもつということがわかる。

先述のように、鹿児島方言では複合語の規則が明確に規定されている。ここでは近畿方言の調査のときと同様に鹿児島方言における複合語の規則を整理しておく。鹿児島方言も近畿方言の「式保存の法則」によく似た複合語のアクセント規則が存在する。この複合法則は「平山の法則」（窪菌 2006, 2007）と呼ばれる複合語音韻規則である（平山 1951、上野 1997、早田 1999、Kubozono 2004）（以後、この法則をここでは「複合法則」と呼ぶ）。この規則は「複合語を構成する最初の要素のアクセント型が複合語全体のアクセント型を決める」というものである。つまり複合語の最初の要素が A 型ならば複合語全体が A 型に、B 型ならば複合語全体が B 型になる。(13) にこの複合法則の例を示す。

(13) 複合法則の例

A 型：ゆき(雪)、ゆきが、ゆきから、ゆきもんだい、ゆきもんだいが

B 型：あめ(雨)、あめが、あめから、あめもんだい、あめもんだいが

(13)の「ゆき(雪)」は A 型の単語であるため、名詞句ⁱⁱ（ゆきが、ゆきから）、複合語（ゆきもんだい）は常にその末尾から数えて 2 音節目が高く発音される。B 型の語例「あめ (雨)」は名詞句（あめが、あめから）、複合語（あめもんだい）は末尾から数えて 1 音節目が高く発音される。このように句や複合語を構成する最初の要素が句全体、複合語全体の式を決める。最初の要素が何であるかによって複合語全体の式が決まるというのは近畿方言の「式保存の法則」と似ている。鹿児島方言におけるこの「複合法則」は最初の要素のアクセント型（A/B 型）の把握、および「複合法則」自体の習得が重要である。近畿方言で行った調査と同様に、親の出身地の影響があるのかどうかを「複合法則」の習得、および語彙一つ一つに備わった A 型/B 型の習得について調べる。これは近畿方言の調査と同じ手法を用いて異なる方言を調べることにより、方言習得における親の母方言の影響の異同を明らかにし、より一般的な知見を得ることが可能であると考えたからである。

4.3 アクセント変化に関する先行研究

前節では鹿児島方言がどのような特徴をもった方言なのかを韻律的特徴から外観したが、ここでは鹿児島方言のアクセント変化の研究を整理する。そして現在進行中のアクセント変化がどのように今回の親の母方言の影響を調べる調査に影響があるかも予測し、その注意点も記述する。

4.3.1 語彙アクセントの変化

窪菌（2006, 2007）は鹿児島方言の A/B 型をそれぞれ下降調と非下降調、および東京方言をアクセント核がある起伏式とアクセント核がない平板式とに分け、それぞれがどのような対応関係にあるのかを以下の表 4.1 のように示した。

表 4.1 東京方言と鹿児島方言の語彙単独形式の対応関係（窪菌 2007:112）

東京方言 鹿児島方言	起伏式(+)アクセント	平板式(-)アクセント
A 型アクセント (下降調)	たべもの（東京） たべもの（鹿児島）	ともだち（東京） ともだち（鹿児島）
B 型アクセント (非下降調)	のみもの（東京） のみもの（鹿児島）	ねずみ（東京） ねずみ（鹿児島）

表 4.1 の「たべもの」は鹿児島方言では A 型、東京方言では起伏式のアクセントである。鹿児島方言で「たべもの」は末尾から二音節目の「も」が高く、末尾の「の」は低く発音される。このため末尾から二音節目と一音節目との間に急激なピッチの下降があり、窪菌（2006, 2007）はこの鹿児島方言の A 型を「下降調」と呼んでいる。この鹿児島方言の下降調（A 型）と東京方言の起伏式アクセントは、その位置は異なっていたとしても「ピッチが急激に下がる」という点で鹿児島方言も東京方言も一致する。

一方、鹿児島方言では下降調（A 型）でありながら、東京方言では平板式アクセントとされる「ともだち」をみると、鹿児島方言では A 型のため「ともだち」の「だち」の間でピッチの「下降」があるが、東京方言では平板式アクセントであるためピッチの下降はない。ピッチ下降の有無という観点から「ともだち」をみると両方言が一致していないことがわかる。同様に「非下降調」か否かという観点から「ねずみ」をみると両方言は「非下降調」で一致しているが、「のみもの」では「下降調 / 非下降調」で一致していない。このように、「下降の有無」「非下降の有無」という視点から両方言をみると、一致していない部分が「鹿児島方言の A 型・東京方言の平板式アクセント（-）（以下 A-）」、「鹿児島方言の B 型・東京方言の起伏式アクセント（+）（以下 B+）」であることが分かる。

窪菌（2006, 2007）はこの「下降調 / 非下降調」で一致していない部分に間違いが多くなるのではないかと予想した。その調査結果では若年層になるほど（A-）を B 型（＝非下降調）で、（B+）を A 型（＝下降調）で発音する誤答率が上がることが明らかとなり予測と一致したことを報告している。

(14) 鹿児島方言のアクセント変化

A- 危険	(きけん)	→	B 型	きけん	(東京方言: きけん)
ブラジル	(ブラジル)	→	B 型	ブラジル	(東京方言: ブラジル)
B+ 招待	(しょうたい)	→	A 型	しょうたい	(東京方言: しょうたい)
ドーナツ	(ドーナツ)	→	A 型	ドーナツ	(東京方言: ドーナツ)

なぜこのようなミスマッチが起こる部分に誤答率が上がる傾向が観察されるのであろうか。この疑問に対し窪菌 (2006) は東京方言の「起伏式 (+)」と「平板式 (-)」に影響を受けているのではないかと指摘している。例えば (14) の「危険 (きけん)」を例に挙げると、東京方言では「危険 (きけん)」を平板型 (-) で読む。東京方言の平板型 (-) を「下降がないもの (非下降調)」とみなすと、それと対応する鹿児島方言の非下降調は「B 型」であるため B 型で実現する。同様に (14) の「招待 (しょうたい)」は東京方言では起伏式 (+) で読む。東京方言の起伏式 (+) を「下降があるもの」とすると、鹿児島方言の下降調に対応するものは「A 型」であるため A 型で実現するというものである。このようにして、鹿児島方言では A (-) 型のものは B 型へ、B (+) 型のものは A 型への変化が起こっていると報告している。さらに窪菌 (2006) の中で指摘されている点は、語彙単独のアクセント変化があったとしても、鹿児島方言の二型アクセント体系に保たれており、突然東京方言のアクセント体系 (有核・式無) に変わるというものではない点である。このようなアクセント変化は語彙単独形式だけではなく、複合語アクセントにもこのような影響があるとしている。

4.3.2 複合語におけるアクセント変化

窪菌 (2007) では新造複合語でどのようなアクセント変化が起こるのかを調べるべく、人名で調査を行っている。東京方言の人名アクセントであれば、後部要素にくる人名の形態素「一子」や「一男」によって決まる ((15) 参照)。

(15) 人名の形態素の例

- 「一子」: はるこ、なつこ、あきこ、ふゆこ (東京方言では起伏式アクセントを作る)
「一男」: はるお、なつお、あきお、ふゆお (東京方言では平板式アクセントを作る)

これは人名形態素だけに限ったことではない。後部要素にくる名詞自体が複合語全体のアクセント決める。例えば「一病」という語であれば前部要素に何をつけても複合語全体として「平板式アクセント」で発音される。同様に「一問題」であれば複合語全体が「起伏式アクセント」で発音される ((16) 参照)。

(16) 複合語の後部形態素の例

- 「一病」: 心臓病、メニエール病、アルツハイマー病
「一問題」: 経済問題、献金問題、オリンピック問題

このように (15) および (16) で示したように、東京方言の複合語アクセントは「後部要素」が平板式アクセントをもつ形態素か、あるいは起伏式アクセントをもつ形態素かによって決まる。一方、鹿児島方言の複合語アクセントは「前部要素」の A/B 型によって決まる。窪菌 (2007) では (15) で示したような人名の形態素「一子」「一也」「一男」に A/B 型の前部要素を付けて新造複合語として読ませた。その結果、(17) のような誤答が現れることを確認している。

(17) 新造複合語(人名)の誤答例

a. 銅(B)子、今日(B)也

「…子」「…也」: B 型(非下降調) → A 型(下降調)

(東京方言: 「子」「也」は起伏式アクセントをつくる人名形態素)

b. 金(A)男

「…男」: A 型(下降調) → B 型(非下降調)

(東京方言: 「男」は平板式アクセントをつくる人名形態素)

(17a) は本来単語単独形式が B 型なので人名の新造複合語である「銅子」「今日也」も B 型で読まれるべきところが A 型に変化し、(17b) は A 型であるはずの単語「金」が人名の新造複合語が B 型に変化すると報告している。このような誤答について「東京方言の後部要素がによって複合語全体のアクセントが決まる」という点を真似して、「後部要素が起伏式アクセントであれば鹿児島の A 型で、平板式アクセントであれば鹿児島の B 型で発音する」という誤答に変化しているのであろうと推測している。このように窪菌 (2006, 2007) の調査報告から単語単独形式においても、新造複合語においても東京方言の影響を受けてアクセントが変化する傾向があることがわかる。ではこのような変化があることを把握した上で、本調査で親の出身地の違いとともに注意して観察する点は何かを整理しておく。

まず鹿児島方言の韻律的特徴からの逸脱がどの範囲にまで及んでいるのかという点である。先述のとおり鹿児島方言には 3 つの韻律的特徴 ①二型のアクセント体系、②音節単位 (一音節卓立)、③複合法則があり、これら 3 つの特徴がどの程度保持されているのかを把握する必要がある。さらに、これら 3 つの特徴に加えて ④語彙に備わった伝統的なアクセント型 (A/B 型) とどの程度一致しているのかという視点を取り入れる必要がある。先の 3 つの韻律的特徴を保持しているけれども、それが鹿児島方言の伝統的な A/B 型と一致するとは限らない。どの程度伝統的な鹿児島方言の A/B 型を保持しているのかを調べるのは、近畿方言の調査でも行ったものと同様に伝統的なものとの一致度合を調べることを意味する。

これら 4 つの特徴のどれが逸脱されやすいのか、またどの特徴がよく保持されているのかという点にも注目する必要があるであろう。もし鹿児島方言が習得できているのであれば、上記 4 つの特徴からの逸脱は観察されないはずである。だが窪菌 (2006, 2007) の調査からもわかるように、若年層においては語彙単独形式の伝統的な語彙アクセントとの不一致は著しい。この著しいアクセント変化の存在も視野にいれて、現在の鹿児島方言の中で親の出身地の違いによって方言習得にどのような違いが現れるのかを調べることにする。

4.4 調査方法

4.4.1 調査語彙とその分析対象

調査語彙は鹿児島方言の A/B 型と東京方言の起伏式 (+) / 平板式 (-) アクセントとの組み合わせの数を一致させているもので、窪菌 (2006, 2007) が使用した調査語彙と同じものを用意した。下の表 4.2 は調査で用いる語彙 48 語の単語単独形式である。表 4.2 の中で太い線で囲った部分、つまり (A-) と (B+) に分類される部分は、窪菌 (2006, 2007) が指摘しているアクセント変化が著しいところである。先行研究でも触れたように、この部分は東京方言の平板式 (-) および起伏式 (+) に影響を受けて A 型が B 型に、B 型が A 型に変化をしている部分である。

表 4.2 鹿児島方言調査 調査語彙 (太枠は誤答があると予想される部分を示す)

東京方言 鹿児島方言	起伏式(+)アクセント	平板式(-)アクセント
A 型アクセント	食べ物	友達
	赤貝	鎧(よろい)
	岡山	鹿児島
	赤	危険
	玄関	問題
	飛行機	遠足
	社会	汚職
	定期	乗車
	ロンドン	共産
	ガンジス	オルガン
	オレンジ	ブラジル
	コーラ	ラクダ
B 型アクセント	飲み物	真鯉
	貝	広島
	長崎	沖縄
	空	ねずみ
	青	学校
	自由	牛肉
	火事	手旗
	先生	誘拐
	生麦	公明
	招待	お食事
	コーヒー	アメリカ
	ドーナツ	蒸しパン

この単語単独形式に助詞の「が」がついた形式（以下、「助詞付き形式」と呼ぶ）、および上記の調査語彙に様々な後部要素をつけた「新造複合語形式」の 2 つを加え、合計で 3 つの形式（語彙単独形式、助詞付き形式、新造複合語形式）を調査語彙として用意した。

ここからは新造複合語がどのような目的と予測に基づいて作られたのかについて説明する。新造複合語は前部要素に表 4.2 の単語単独形式をもち、後部要素に東京方言での起伏式（+）と平板式（-）の 2 種類用意した。つまり一つの単語単独形式につき 2 種類の新造複合語を作っていることになる。東京方言における複合語アクセントは後部要素が起伏式の要素か、あるいは平板式の要素かによって決まる（4.3.2 参照）。一方、鹿児島方言の複合法則は前部要素の A/B 型によって決まる（(8)参照）。そのため鹿児島方言の複合法則をきちんと適用できるのであれば、後部要素にどのようなものが付くとしても複合語全体のアクセント型が前部要素の A/B 型に従うことが予想される。

しかしながら、窪菌（2006, 2007）で指摘されているように、単語単独形式では A/B 型が東京方言の起伏式（+）と平板式（-）の影響によって本来の鹿児島方言の A/B 型とは反対の型（B/A 型）で発音される傾向が強いことがわかっている。この結果に基づいて新造複合語がどのように発音されるのか考えると、おそらく後部要素が起伏式（+）か平板式（-）かによって新造複合語全体の A/B 型が決まるのではないかということが予想される。表 4.3 は前部要素と後部要素を組み合わせで作った場合の新造複合語の例を示している。前部要素の単語単独形式は表 4.1 でみたように、鹿児島方言の A/B 型と、東京方言での後部要素の下降調（+）/ 非下降調（-）の組み合わせで 4 つの単語のタイプがある。この 4 つのタイプの単語それぞれに、東京方言の起伏式（+）と平板式（-）の後部要素の二つが結合するので、合計で 8 つの新造複合語ができる。もし単語単独形式が伝統的な鹿児島方言の A/B 型で発音し複合法則に則っているのであれば、この 8 つの新造複合語は前部要素の A/B 型に従うことになる。しかしながら、東京方言の起伏式（+）/ 平板式（-）の後部要素の従うのであれば、新造複合語の A/B 型が逆になることを予想する。表 4.3 の太枠は新造複合語の誤答が出てくると予想されるところを囲っており、その枠内には誤答の予測を右矢印（→）の右側に書いている。

表 4.3 鹿児島方言 新造複合語の誤答予想の例

		後部要素	
	前部要素	東京方言の起伏式(+)	東京方言の平板式(-)
A	食べ物 A(+)	食べ物コーナー A(+)	食べ物党 A(-) → (B)
	鎧 A(-)	鎧兜 A(+)	鎧党 A(-) → (B)
B	飲み物 B(+)	飲み物コーナー B(+) → (A)	飲み物党 B(-)
	蒸しパン B(-)	蒸しパンコーナー B(+) → (A)	蒸しパン党 B(-)

表 4.4 は表 4.2 示した 48 の単語の中から一部の単語を取り出し、その単語単独形式、および助詞付き形式、そして新造複合語形式を示している。表 4.4 の中で色がついた部分は東京方言の影響あるとすると変化が見られるであろうと予想したところを示す。調査語彙（48 単語とその助詞付き形式、および新造複合語形式 96 語（48 語 × 起伏式（+）/ 平板式（-）の 2 種類）は付録の表 13、表 14 に示す。

もし調査協力者が複合法則を習得しているのであれば、後部要素には影響を受けずに前部要素の

A/B 型によって新造複合語全体を発音すると予想され、複合法則の達成率も 100%に近いことが期待される。しかしながら、後部要素の起伏式 (+) / 平板式 (-) に影響を受けて新造複合語の A/B 型が決まるとすれば複合法則の保持率は 50%に近いことが予想され、全体として「複合法則」の達成率は 50%になることが予測される。

表 4.4 鹿児島方言 調査語彙の組み合わせと誤答の予想 (色のついた部分は変化があると予想される部分)

	東京方言:		新造複合語:	東京方言:		新造複合語:
	起伏式(+)アクセント		後部要素が付いたとき	平板式(-)アクセント		後部要素が付いたとき
鹿児島方言: A 型アクセント	食べ物 (A+)	食べ物が (A+)	食べ物コーナー(A+)	鎧(よろい)	鎧(よろい)が	鎧(よろい)兜(A+)
			食べ物党(A-)	(A-)	(A-)	鎧(よろい)党(A-)
	ガンジス (A+)	ガンジスが (A+)	ガンジス川(A+)	ブラジル	ブラジルが	ブラジル旅行(A+)
			カンジス病(A-)	(A-)	(A-)	ブラジル病(A-)
	岡山 (A+)	岡山が (A+)	岡山問題(A+)	鹿児島	鹿児島が	鹿児島問題(A+)
			岡山産(A-)	(A-)	(A-)	鹿児島産(A-)
	赤 (A+)	赤が (A+)	赤信号(A+)	危険	危険が	危険信号(A+)
			赤色(A-)	(A-)	(A-)	危険色(A-)
	定期 (A+)	定期が (A+)	定期券(A+)	乗車	乗車が	乗車券(A+)
			定期病(A-)	(A-)	(A-)	乗車病(A-)
	オレンジ (A+)	オレンジが (A+)	オレンジ問題(A+)	ラクダ	ラクダが	ラクダ問題(A+)
			オレンジ色(A-)	(A-)	(A-)	ラクダ色(A-)
鹿児島方言: B 型アクセント	飲み物 (B+)	飲み物が (B+)	飲み物コーナー(B+)	蒸しパン	蒸しパンが	蒸しパンコーナー(B+)
			飲み物党(B-)	(B-)	(B-)	蒸しパン党(B-)
	先生 (B+)	先生が (B+)	先生気取り(B+)	学校	学校が	学校制度(B+)
			先生節(B+)	(B-)	(B-)	学校節(B-)
	ドーナツ (B+)	ドーナツが (B+)	ドーナツパン(B+)	真鯉	真鯉が	真鯉料理(B+)
			ドーナツ病(B-)	(B-)	(B-)	真鯉病(B-)
	コーヒー (B+)	コーヒーが (B+)	コーヒーゼリー(B+)	アメリカ	アメリカが	アメリカ旅行(B+)
			コーヒー病(B-)	(B-)	(B-)	アメリカ病(B-)
	長崎 (B+)	長崎が (B+)	長崎問題(B+)	沖縄	沖縄が	沖縄問題(B+)
			長崎産(B-)	(B-)	(B-)	沖縄産(B-)
	青 (B+)	青が (B+)	青信号(B+)	手旗	手旗が	手旗信号(B+)
			青色(B-)	(B-)	(B-)	手旗色(B-)

ただし単語単独形式自体が東京方言の影響を受けて変化している部分 (A-) と (B+) があるので、単語単独形式で東京方言の影響を受け、さらにまた新造複合語形式で東京方言の後部要素の影響がある場合、「複合法則」の保持率が予測通りの 50%になるかどうかは分からない。

最後に分析対象の形式と正答とするものの定義を明確にしておく。4.3 の先行研究を踏まえて、表

4.5 ではどのような視点（語彙アクセントか複合法則か）をどの形式で調べるのか、その分析の対象範囲と正答とするものを表している。

表 4.5 分析の対象とその正答とするものの定義

	分析対象 の形式	正答とするものの定義				
		二型	音節	複合法則	伝統的な アクセント	定義
語彙 アクセント	①単語	○	○	—	○	A/B 型の二型のアクセント体系を保って <u>伝統的な鹿児島方言のアクセントと一致しているかどうか</u>
複合法則	②助詞付き	○	○	○	—	A/B 型の二型のアクセント体系を保って鹿児島方言の複合法則に則って達成できているかどうか (単語単独形式が伝統的な A/B 型でなくてもよい)
	③新造複合語	○	○	○	—	
語彙+ 複合法則	④単語 +助詞付	○	○	○	○	A/B 型の二型のアクセント体系を保って、 <u>単語単独形式が伝統的な A/B 型で、なおかつ複合法則に則って助詞付きの形式が発音できているかどうか</u>

まず表 4.5 では A/B 型の二型のアクセント型を保持、および音節単位であることは大前提であると考え、①から④の分析対象はこの「二型」「音節」が守られていなければならない。まずこの 2 つの基準「二型」「音節」を守っていないものは誤答とみなすことにしている。その上で分析のポイントとなるのは、①単語単独形式であれば「伝統的な A/B 型アクセント」と一致するかどうか、②助詞付きの形式と③新造複合語形式であれば「鹿児島方言の複合法則」と一致するかどうかである。そして④の「単語+助詞付」形式は「伝統的な A/B 型アクセント」の一致、および「鹿児島方言の複合法則」の一致を求めるもので、これらの分析対象の中では一番厳しい基準である。

4.4.2 調査の手順

調査は調査者（筆者）と調査協力者の 2 人で行う対面式の読み上げ調査で、被調査者は用意された調査語彙を読み上げるというものである。インフォーマントは 2 回ずつ調査語彙を読み上げてもらうように指示される。注意点として 2 回読み上げるときに 1 回目と 2 回目の言い方が異なった場合、そのときは調査者が「もう一度〇〇番を読み上げてください」と指示し、1 回目と 2 回目の言い方が一致するようにしている。また高低アクセントがはっきりしない場合には、調査者（筆者）が問題となっている単語のアクセントのパターンをいくつか言って、その中から直観に合う発音を選択してもらってアクセントを書き取った。調査時の音声は Roland 社の R-09 を使用し WAV ファイル(サンプリング周波数 48kHz、24bit)で録音した。マイクは Roland 社の EDIROL CS-15 を使用した。

4.4.3 調査協力者

まず二型アクセント体系をもつ鹿児島方言の地理的範囲を把握し、それから調査協力者について説明する。九州地方は北部から南部にかけて、準東京式アクセントに分類される北九州方言、無アクセ

ントの宮崎方言、一型アクセントの都城方言、二型アクセントの鹿児島方言など方言のバラエティが豊かな地域である。多くの島をもつ鹿児島県の中でもその二型アクセントに分類される地域と一型式あるいは無アクセントに分類される地域がある。「鹿児島方言の二型」がどの範囲まで及ぶのか、ということに関しては木部（1997: 13）を参考にしたが、木部（PC）により鹿児島方言の二型の範囲は（18）に示した以下を除く地域とした（図 4.1 参照）。

(18) 鹿児島方言(二型)以外の範囲

志布志市、曾於市、枕崎市、種子島、トカラ列島(悪石島-与論島まで)、奄美大島
(ただし市町村合併をする以前の行政区画に基づく)

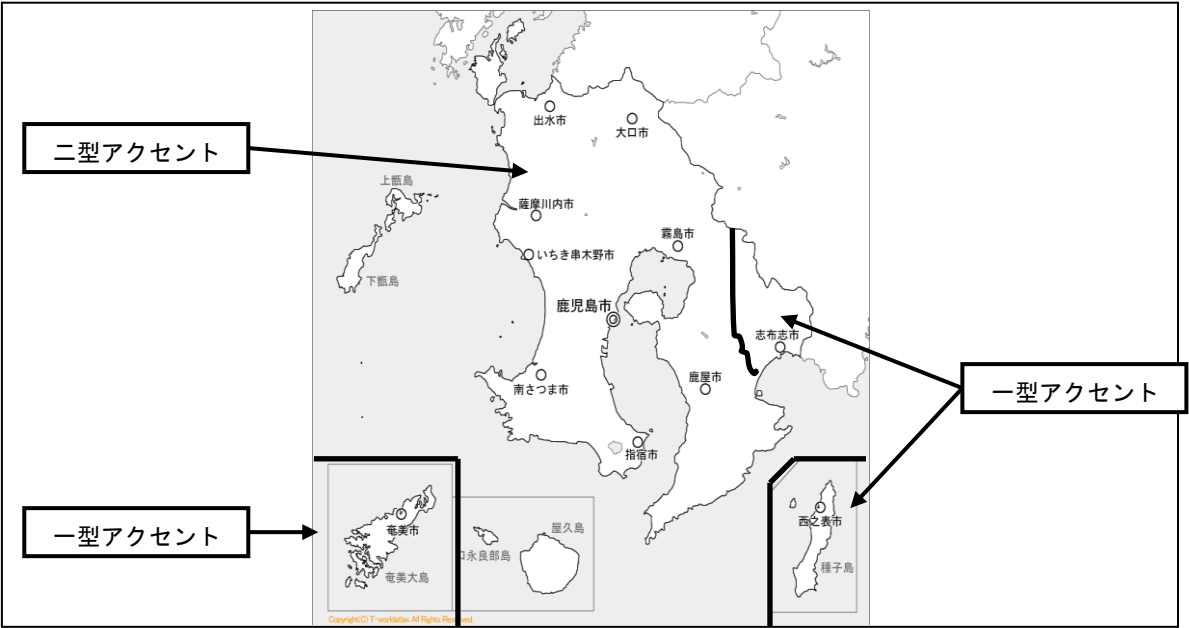


図 4.1 鹿児島方言の二型アクセントと一型アクセントの地域

表 4.6 鹿児島方言の調査協力者の内訳

		父親		合計
		鹿児島島の二型出身	鹿児島島の二型以外	
母親	鹿児島島の二型出身	Group 1 (18 名) 男性: 4 名 女性: 14 名	Group 2 (13 名) 男性: 2 名 女性: 11 名	31 名 男性: 6 名 女性: 25 名
	鹿児島島の二型以外	Group 3 (16 名) 男性: 4 名 女性: 12 名	Group 4 (8 名) 男性: 3 名 女性: 5 名	24 名 男性: 7 名 女性: 17 名
合計		34 名 男性: 8 女性: 26	21 名 男性: 5 名 女性: 16 名	55 名 男性: 13 名 女性: 42 名

この鹿児島方言の調査では親の出身地を「鹿児島方言の二型」であるか、そうでないか（鹿児島方言

の二型以外) という形で二分し調査協力者を 4 つのグループに分類した。表 4.6 はこの親の分類に基づいて調査協力者を 4 つに分類したグループ 1 (両親 native)、グループ 2 (母親 native)、グループ 3 (父親 native)、グループ 4 (両親 non-native) に分類し、各グループの内訳を表している¹。調査協力者は合計 55 名で年齢は 15~28 歳である。男女の構成は男性 13 名、女性 42 名である。どのような出身地の属性をもった両親が表 4.6 ではどのグループに分類されるのか、その具体例を(19)に示す。

(19) 調査協力者の属性例

グループ 1	父：川内市 (二型)	母：指宿市 (二型)
グループ 2	父：志布志市 (一型)	母：鹿児島市 (二型)
グループ 3	父：日置市 (二型)	母：都城市 (一型)
グループ 4	父：奄美大島 (無型)	母：種子島 (無型)
グループ 4	父：福岡 (東京方言)	母：福岡 (東京方言)

この分類では「鹿児島方言の二型であるか、そうでないか」という二者択一で分類しているため「一型」「無型」「東京方言」が「鹿児島方言の二型ではない」という形でまとめられている。そのため一型アクセントの影響があるかどうかなどはここでは考慮していない。

4.5 調査結果

4.5.1 各形式・各話者グループの結果

3 章の近畿方言調査と同様に、まずここでは調査結果の全般的な傾向を各グループ、各形式別に把握する。その後、グループ間差があるのかどうか、また差があるとすればどこにあるのかということについて次節から調べていくことにする。

図 4.2 はグループ別に各形式の伝統的な鹿児島方言アクセントの習得率 (伝統的な鹿児島方言との一致率) を示したものである。横軸には親の出身地によって分けて 4 つのグループを配置した。各グループには 4 本の棒グラフがあり、それぞれ調査語彙形式での鹿児島方言の習得率を表している。この図 4.2 をみると、全体的にグループ 1 (両親 native) は他の 3 つのグループよりも鹿児島方言の習得度合が高いことがわかる。その他、3 つのグループに目を向けるとグループ 2 (母親 native)、グループ 3 (父親 native)、グループ 4 (両親 non-native) の順に全体的に鹿児島方言アクセントの習得度合が下がっていく傾向を読み取ることができる。

特に鹿児島方言アクセントの習得率が良かったグループ 1 (両親 native) に注目してみると、グループ 1 (両親 native) の中でも調査語彙形式によって習得率が異なり、その中でも助詞付き形式の習得率が突出して高いことがわかる。さらに興味深いこと、この傾向はグループ 1 (両親 native) のみ観察され、他の 3 つのグループの助詞付き形式は単語単独形式よりも低くなっていることがわかる。助詞付き形式は複合法則によって卓立の位置が決まるものである。グループ 1 (両親 native) は「語彙アクセント」である単語単独形式の正答率 (習得率) よりも、音韻規則である「複合法則」の達成率の方が高いということが言える。ではなぜ同じ複合法則を適用する新造複合語形式の場合、このグループ 1 (両親 native) であっても「複合法則」の達成率が約 60%にまで下がっているのである

¹ 調査協力者の詳細は付録の表 9-12 を参照のこと

うか。この点については新造複合語だけを扱う 4.5.4 で他の三つのグループと比較しながら考察する。そして、どのグループでも達成率が低かった形式が「単語+助詞付き」についても 4.5.5 で考察する。

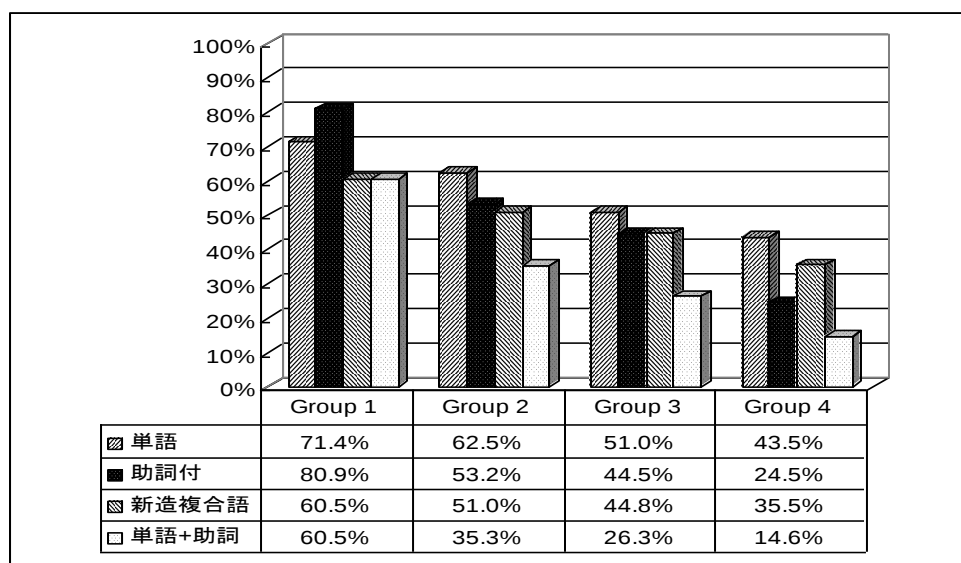


図 4.2 グループ別による各形式と単語+助詞付きの伝統的な鹿児島方言との一致率

では 3.5.1 の近畿方言における「各形式・各話者グループの結果」の場合と同様に、親の出身地によるグループ間の違いとグループ内における調査語彙形式（単語単独形式や新造複合語形式）による違いは、客観的に意味のある違いであるかどうかを確かめる必要がある。ここでは 3.5.1 の図 3.5 の「統計処理のステップ」と同様に「等分散性の検定」、「ANOVA（二元配置による分散分析）」、「多重比較」の手順で、鹿児島方言における親の出身地の影響と調査語彙形式による違いを明らかにしていく。まずは「等分散性の検定」である。ここでは人数が異なるグループが複数ある場合に用いる等分散性（バートレット法）を用いて検定を行った。グループ間の等分散性の検定結果が表 4.7 で、調査語彙間の等分散性の検定結果が表 4.8 である。

表 4.7 鹿児島方言におけるグループ間の等分散性の結果

	鹿児島方言 グループ間の等分散性
単語単独形式	等分散ではない ($k\text{-squared} = 9.94, df = 3, p < .05$)
助詞付き形式	等分散である ($k\text{-squared} = 5.46, df = 3, p > .05$)
新造複合語形式	等分散ではない ($k\text{-squared} = 20.68, df = 3, p < .001$)

表 4.8 鹿児島方言における調査語彙形式の違いによる等分散性の結果

	鹿児島方言 調査語彙形式の違いによる等分散性
Group 1	等分散ではない ($k\text{-squared} = 17.7, df = 2, p < .001$)
Group 2	等分散ではない ($k\text{-squared} = 10.83, df = 2, p < .001$)
Group 3	等分散ではない ($k\text{-squared} = 15.12, df = 2, p > .001$)
Group 4	等分散である ($k\text{-squared} = 5.67, df = 2, p > .05$)

どちらの表にも等分散である場合と等分散ではない場合が混在することがわかる。次に行うのはANOVA(分散分析)である。ここではグループ分けをした親の出身地という要因と調査語彙形式による違いという2つの要因があるので二元配置の分散分析を行う(二元配置については表3.13を参照のこと)。そして、それぞれの要因が違いを生み出しているのかどうかを確認する。

二元配置の分散分析の結果、グループ分けをした親の出身地という要因も有意であり [$F(3, 52) = 23.66; p < .001$]、調査語彙形式による違いも有意であった [$F(2, 53) = 3.23; p < .05$]。だが両者の要因を組み合わせた場合の交互作用には有意差が確認されなかった。では、どのグループとどのグループの間に統計的有意差があるのか、また「語彙アクセント」と「複合法則」の習得に統計的な違いがあるのかということについて、次節から多重比較によって調べていく。

4.5.2 単語単独形式

4.5.1で全体の調査結果を見てきたが、傾向としてグループ1(両親 native)がどの調査語彙形式においても最もよい習得率を示していた。ここでは単語単独形式におけるグループ間の差を確認するとともに、その差が親の出身地によるものなのかどうか統計を用いて確認する。

まず単語単独形式全体の正答と誤答を確認しておく。図4.3は単語単独形式における正答と誤答を2種類に分けて提示している。この図4.3をみるとグラフをみると、グループ1(両親 native)がどのグループの習得率よりも良く約70%であった。グループ1(両親 native)が一番高い習得率を示すのは近畿方言と同じであるが、近畿方言ではグループ1(両親 native)の単語単独形式の習得率が90%以上を示していたものに比べると、鹿児島方言におけるグループ1(両親 native)の習得率は低いといえよう。しかしながら、このグループ1(両親 native)の約70%を最高点にして、他の3つのグループ(グループ2(母親 native)、グループ3(父親 native)、グループ4(両親 non-native))はその習得率が下がり、逆に誤答率が上昇していることが図4.3の右側に位置する棒グラフからわかる。

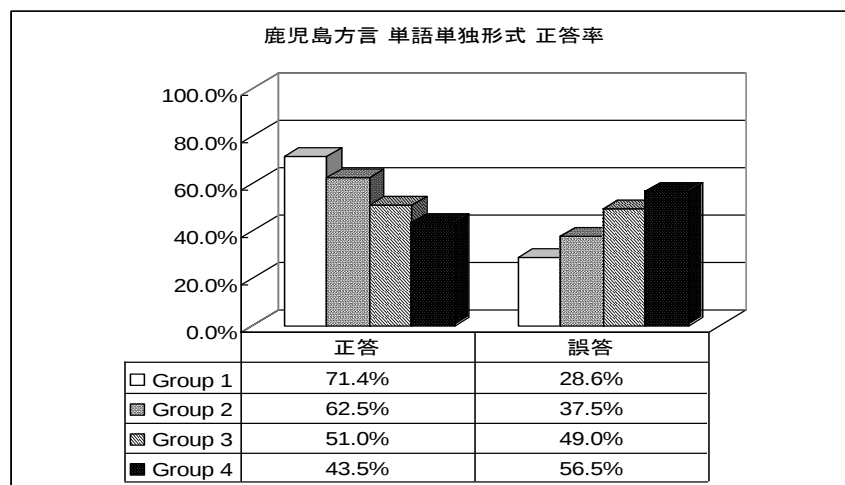


図4.3 鹿児島方言 単語単独形式の正答率と誤答率

では誤答の内訳はどのようなになっているのだろうか。図4.4は図4.3の誤答の内訳を図示したもの

である。ここでは誤答を 2 種類に分けた。図 4.4 の中の表で下に位置している「A/B 転率」と書かれたのは、鹿児島県の韻律的特徴の二型と音節を保っているが、「A/B 型」が逆になってしまったものを指している。この誤答は A 型で言うべきところを B 型で言った誤答、あるいは B 型で言うべきところを A 型で言った誤答である。その上の上段に位置する「C 転率」と書かれた誤答は二型と音節を保っていないタイプの誤答である。これは「鹿児島方言の A/B 型ではない」ということを明示するために「C 型化する=C 転率」とした。この C 型化した誤答には「まごい」と音節でいうべきところを「まごい」とモーラ単位と思われる発音をした場合や、あるいは「たべもの」というべきところを「たべもの」と東京方言と同じアクセント言った場合のものが含まれる。図 4.4 の中で「A/B 転率」と「C 転率」の比率を比べると、鹿児島方言の韻律的特徴を守っているが「型」のみを間違えてしまった「A/B 転率」の方が鹿児島県の韻律的特徴を保持していない「C 転率」よりも割合が高いことがわかる。

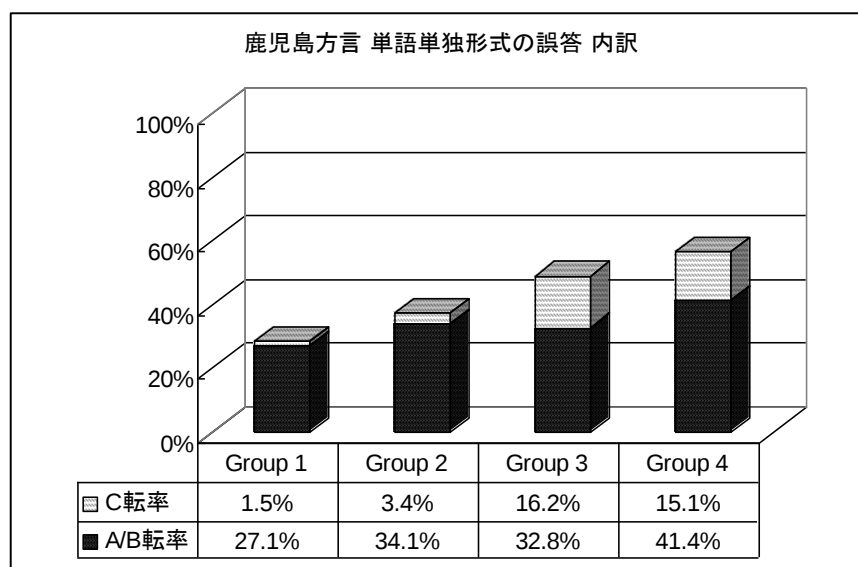


図 4.4 鹿児島方言 単語単独形式の誤答の内訳

ではここから正答と誤答についてより詳しく見てみる。下の図 4.5 は単語単独形式における伝統的な鹿児島方言の A 型、B 型に則って発音できたものを左側と真ん中に示し、両者を正答とを合わせた全体的な正答を右側に表示したものである。図 4.5 の左側に位置している A 型と書かれた棒グラフは A 型単語をきちんと A 型で言えた正答率を表し、真ん中に位置している B 型と書かれた棒グラフは B 型単語をきちんと B 型で言えた正答率を表したものである。この両者の棒グラフ群を比べると、全体的に B 型単語の方がきちんと B 型で発音されている傾向がみえてくる。図 4.5 の右側に位置している「全体の正答率」と書かれた部分は図 4.3 の左側の「正答」と書かれた棒グラフと同じである。

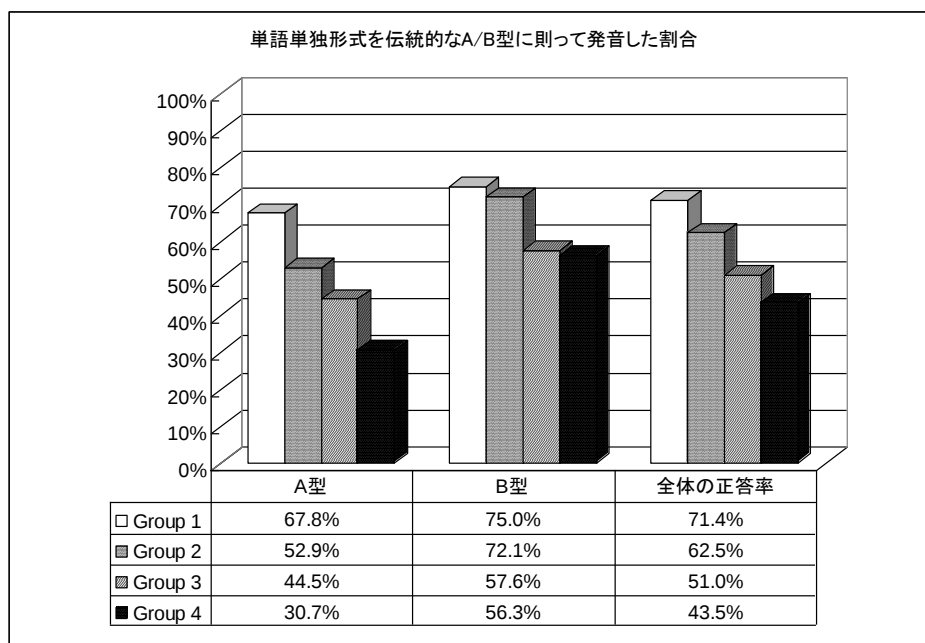


図 4.5 単語単独形式におけるグループ間の差

では、この鹿児島方言の単語アクセントの習得率に親の出身地による統計的な違いがあるのだろうか。この点を調べるため Tukey の多重比較を用いてどのグループ間に統計的有意差あるのかを調べた。その結果が下の表 4.9 である。表の中で「*」あるいは「***」が付いたところがグループ間の統計的な有意差が確認されたところを示す。グループ 1 (両親 native) とグループ 2 (母親 native) の間には統計的な有意差は確認できなかったが、グループ 1 (両親 native) とグループ 3 (父親 native) またはグループ 4 (母親 native) の間には統計的な有意差があることがわかる。

表 4.9 鹿児島方言 Tukey の多重比較による検定－単語単独形式

	Group 1	Group 2	Group 3	Group 4
Group 1		n.s.	***	***
Group 2			n.s.	*
Group 3				n.s.
Group 4				

*: 5%水準, **: 1%水準, ***: 0.1%水準, n.s.: 有意差なし

またグループ 2 (母親 native) とグループ 4 (両親 non-native) の間にも統計的な有意差があることが示されている。もし柴田 (1958) と杉藤 (1984) の「母親の影響が大きい」とする主張に合う統計結果があれば、父母の出身地のみが異なるグループ 2 (母親 native) とグループ 3 (父親 native) の間に有意差が現れてもいはずである。だが、ここではそのような統計的有意差は確認されなかった。そのため先行研究の「母親の影響が大きい」という主張をこの鹿児島方言の統計結果から導きだすことはできない。しかしながらグループ 1 (両親 native) 、グループ 2 (母親 native) とグループ 4 (両親 non-native) との間には統計的有意差があることから、なんらかの母親の影響があるのではないかと

考えられる。また今回の結果も近畿方言の場合と同様に、単語単独形式の結果では両親とも鹿児島方言の二型出身の場合（グループ 1）と両親ともに鹿児島方言の二型以外の出身（グループ 4）は明らかに違うということが統計的に示された。このことより鹿児島方言における単語のアクセント習得に差は親の出身地の違いがあることが明らかとなった。

これまでは単語単独形式における伝統的な鹿児島方言の正答率を見てきたが、ここからは誤答の中でも「鹿児島方言の韻律的特徴をもった誤答」、つまり図 4.4 のなかの「A/B 転率」に注目してグループ間の差を見てみることにする。この「A/B 転率」は鹿児島方言では本来 A 型で発音されるべき単語が B 型で発音され、B 型で発音されるべき単語が A 型で発音されるというものである。なぜ逆の型で発音されるのかについては、東京方言の平板型（非下降調）と起伏型（下降調）に影響があるのだろうと考えられている（窪菌 2006）。図 4.4 で誤答の多くがこの「A/B 転率」であることは先ほど確認した通りである。では今回のデータからも東京方言の影響によって「A/B 転率」が異なるのだろうか。この点に注目して誤答を分析する。

下の表 4.10 は単語単独形式における誤答を細分化したものである。調査語彙は鹿児島方言の A/B 型および東京方言の起伏式（+）/ 平板式（-）アクセントを組み合わせで 4 種類あるため、表 4.10 も 4 つの調査語彙に分類される。それぞれマスの中にはグループ 1（両親 native）からグループ 4（両親 non-native）までの誤答の実数とその割合を示している。表 4.10 の上段に位置する A（+）と A（-）の 2 マスは本来、鹿児島方言の A 型で言うべきところ B 型で言ってしまった「B 転率」を示している。そして下段の B（+）と B（-）の 2 マスは本来、鹿児島方言の B 型で言うべきところを A 型で言ってしまった「A 転率」を示している。この表 4.10 と対応したグラフが図 4.6 である。

表 4.10 鹿児島方言 単語単独形式におけるアクセント型別の誤答

東京 鹿児島	起伏式(+)アクセント	平板式(-)アクセント	
A 型 (下降調)	Group 1: 25/216 (11.6%)	Group 1: 109/216 (50.4%)	B 転率
	Group 2: 44/156 (23.2%)	Group 2: 95/156 (60.9%)	
	Group 3: 54/192 (28.1%)	Group 3: 102/192 (53.1%)	
	Group 4: 45/96 (46.9%)	Group 4: 64/96 (66.7%)	
B 型 (非下降調)	Group 1: 66/216 (30.6%)	Group 1: 34/216 (15.7%)	A 転率
	Group 2: 43/156 (27.6%)	Group 2: 31/156 (19.9%)	
	Group 3: 63/192 (32.8%)	Group 3: 33/192 (17.2%)	
	Group 4: 33/96 (34.4%)	Group 4: 17/96 (17.7%)	

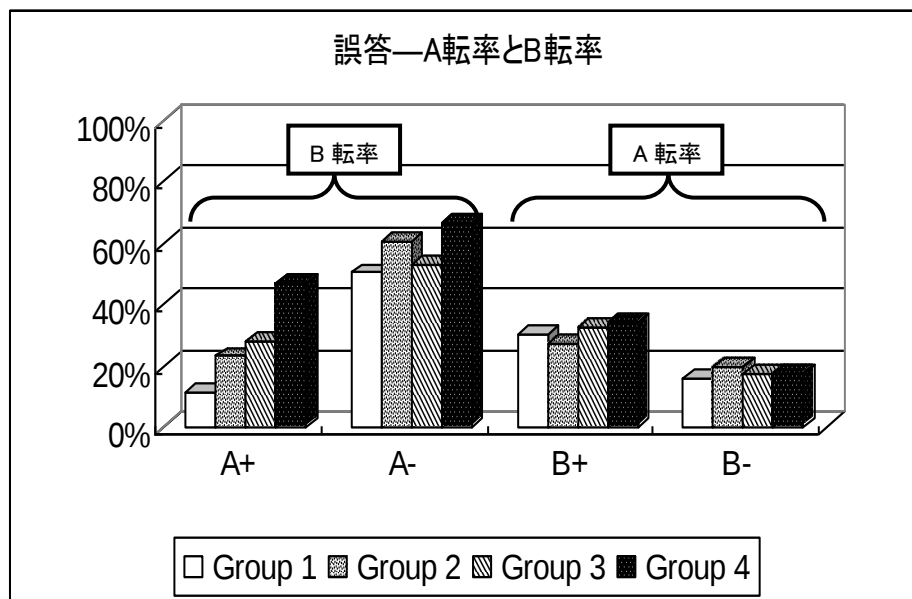


図 4.6 鹿児島方言 単語単独形式の誤答—A 転率と B 転率

表 4.10 太枠で囲まれた A (－) のマスは窪菌 (2006) に基づき誤答が多いであろうと予測された部分である。表 4.10 の 4 つのマスの中で誤答率の分布を見ると、その分布に偏りがあることがわかる。グループによらず誤答が一番多く現れるのは A (－) の部分で、その次に誤答が多いのはグループ 4 を除き B (+) の部分であることがわかる。どうやら東京方言の平板型 (非下降調)、起伏型 (下降調) に影響を受けて、鹿児島方言で B 型 (非下降調)、A 型 (下降調) で実現しているものと考えられる。この調査でも単語単独形式の誤答は A (－)、B (+) に集中する傾向が明らかとなり、窪菌 (2006) の結果を追認する形となった。

ここで鹿児島方言における単語単独形式の習得率についてまとめておく。鹿児島方言の単語単独形式の習得率は近畿方言の調査と比較すると全体的に習得率が低いという傾向が挙げられる。また単語単独形式の誤答の内訳を見ると、鹿児島方言の韻律的特徴を保持した A/B 転率という誤答が C 転率という誤答よりも多いことが明らかとなった。また A/B 転率も単語の属性 (A (－)、A (+)、B (－)、B (+)) によって異なり、A (－)、B (+) に誤答が集中することが明らかとなった。

4.5.3 助詞付きの形式

ここでは 4.5.2 単語単独形式と同様に、助詞付きの形式においてもグループ間の差が統計的な有意差であるかどうかを確かめる。その後、助詞付き形式における誤答がどのようなになっているのか、その誤答の内訳を詳しく見る。まず確認のためにもう一度、鹿児島方言の助詞付き形式では何を調べているのかについて書いておく。助詞付きの形式は複合法則によって A/B 型が決まる。そのため単語単独形式を A 型、B 型で発音したものは助詞付きの形式でも A 型、B 型で発音することが予測される。単語単独形式を B 型で発音しておきながら、助詞付きの形式において A 型で発音した場合、この話者は複合法則を適切に適用できていないことを意味する。

(20) A 型単語の助詞付きの正答と誤答例

A 型 たべもの → たべものが (複合法則を適用・正答) A 型
たべものが (誤答) A/B 型のどちらにも当てはまらない (C 型)
たべものが (誤答) B 型

(21) B 型単語の助詞付きの正答と誤答例

B 型 のみもの → のみものが (複合法則を適用・正答) B 型
のみものが (誤答) A 型に分類されてしまう
のみものが (誤答) A/B 型のどちらにも当てはまらない (C 型)

ここでは「複合法則」の適用ができるか否かが問題となる。そのため単語単独形式が伝統的な A/B 型に則っているのかは問わない。しかしながら、話者が言った単語単独形式が複合法則を適用する際には重要となるため、話者自身はどちらの型で単語単独形式を言ったのかを把握しておく必要がある。話者自身が言った単語の A/B 型を把握して、その A/B 型を複合法則の助詞付き形式に適用できるかどうか、この助詞付き形式では重要になる。まず単語単独形式をどちらの型で言ったのかを把握するため、伝統的なアクセントかどうかは問題にせず A/B 型で発音した数を調べてみた。その結果が図 4.7 である。

単語単独形式において「二型」「音節」の基準を満たして A/B 型で言ったものを「A 型で言ったもの」と「B 型で言ったもの」に分類した。本来「まごい」と音節を保って B 型で発音すべきところを「まごい」あるいは「まごい」とモーラ単位と認められる発音をした場合には C 型と呼ばれる「その他」に分類した。

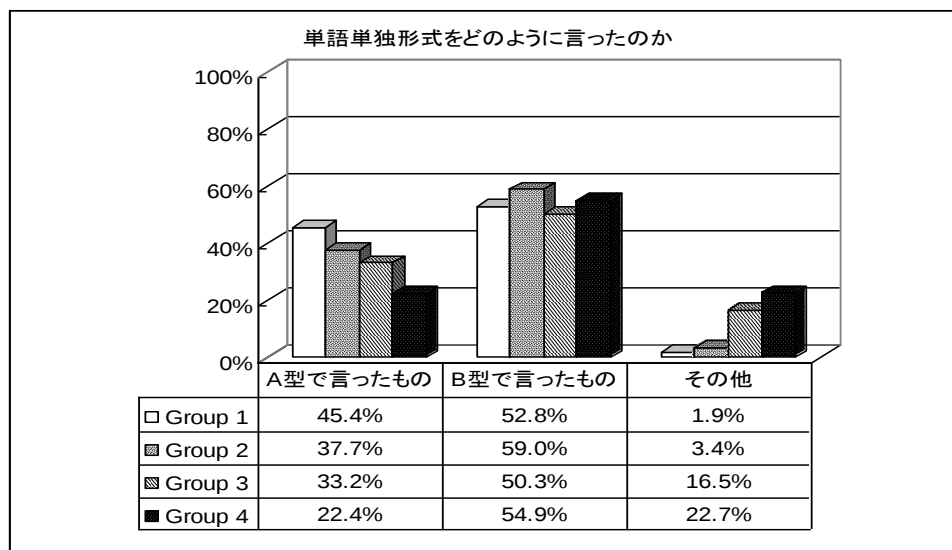


図 4.7 鹿児島方言 単語単独形式の A/B/C 型の割合

この図 4.7 をみるとどのグループにおいても圧倒的に単語自体を B 型でいう傾向を読み取ることができる。また鹿児島方言の「二型」「音節」の範囲を超える C 型（鹿児島方言の A/B 型以外のその他）で読まれる割合はグループ 1 (両親 native)、グループ 2 (母親 native) ではほとんど観察されない。

一方、グループ 3 (父親 native) とグループ 4 (両親 non-native) では「その他」と書かれた C 型の割合が他の 2 つのグループ (グループ 1 (両親 native) とグループ 2 (母親 native)) と比較すると高いことがわかる。では A/B 型で単語単独形式を言ったもののの中でどの程度、複合法則に則って「助詞付き形式」が発音できたのかを図 4.8 で確認する。図 4.7 で右側に位置している「その他」(C 型) は単語単独形式であるこの時点ですでに誤答であるので、ここでは扱わず 4.6.3 で取り上げる。

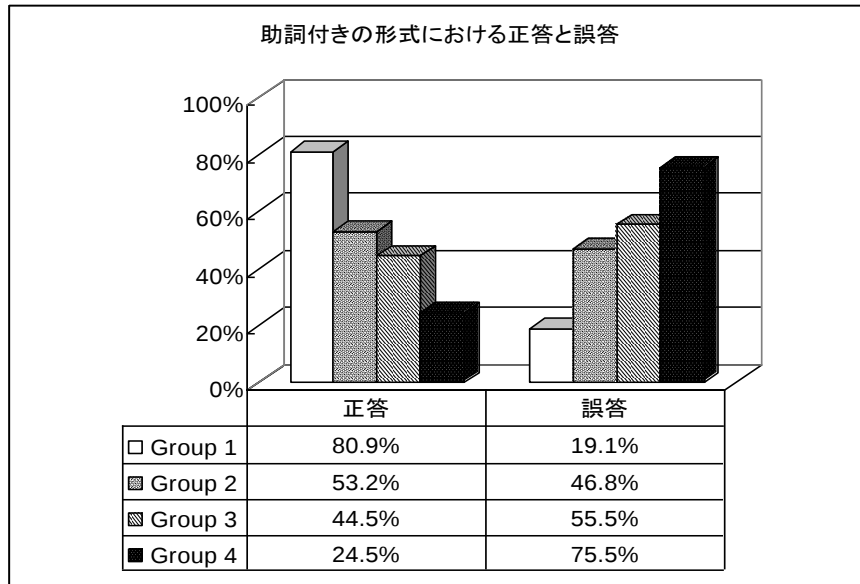


図 4.8 鹿児島方言 助詞付きの形式の正答率と誤答率

まず助詞付きの形式が複合法則に則って言うことができた正答率と誤答率を比較してみる (図 4.8)。この図をみると正答率が高いのはここでもグループ 1 (両親 native) である。そのグループ 1 (両親 native) を先頭にグループ 2 (母親 native)、グループ 3 (父親 native)、グループ 4 (両親 non-native) という順番で正答率は下がっていく。ではどのグループとどのグループの間に統計的有意差があるのかを確認するため Tukey の多重比較を使って調べた。その結果が表 4.11 である。

表 4.11 鹿児島方言 Tukey の多重比較による検定－助詞付きの形式

	Group 1	Group 2	Group 3	Group 4
Group 1		*	***	***
Group 2			n.s.	n.s.
Group 3				n.s.
Group 4				

*: 5%水準, **: 1%水準, ***: 0.1%水準, n.s.: 有意差なし

この表 4.11 をみると、グループ 1 (両親 native) とグループ 2 (母親 native)、グループ 3 (父親 native)、グループ 4 (両親 non-native) の各々の間に統計的有意差があることが示されている。その 3 つのグループ (グループ 2 (母親 native)、グループ 3 (父親 native)、グループ 4 (両親 non-native))

間には統計的な有意差は確認されていない。つまり、グループ 1 (両親 native) と他のグループ (片親 / 両親が non-native) との間に助詞付きの形式における複合法則の習得度合に統計的有意差があることが分かった。このことから間接的ではあるが親の出身地、とりわけ両親の出身地が鹿児島方言の二型地域である場合とそうでない場合との間で、音韻規則である「複合法則」の習得に差があることを示唆するものであると言える。

ここでは助詞付き形式における「複合法則」の習得率を確認し、多重比較でグループ間の統計的有意差を確認した。その結果、グループ 1 (両親 native) とその他の 3 つのグループの間に統計的有意差を確認したことから、「両親とも鹿児島方言の二型地域出身」という場合とその他の場合で「複合法則」の習得が異なる点が明らかとなった。図 4.8 の誤答の内訳と誤答の方向性については 4.6 から詳しく調べることにする。

4.5.4 新造複合語

先行研究では単語単独形式、および人名の新造複合語において東京方言の下降調 (+) / 非下降調 (-) の影響があることが指摘されているが (窪 2006, 2007)、新造複合語で下降調 (+) / 非下降調 (-) の影響がどのように現れるのかは調査されていない。ここでは新造複合語での全体的な結果を把握し、グループ間の多重比較を行う。

新造複合語は鹿児島方言の「複合法則」によって読まれるため、新造複合語形式での正答は先の助詞付き形式と同じく「単語単独形式の A/B 型の正答は問わず、複合法則に則って新造複合語が発音できたかどうか」である。新造複合語は 4.4.1 の調査語彙で示したように、一つの単語につき後部要素が下降調 (+) / 非下降調 (-) の 2 種類を用意した。先行研究で指摘されているように東京方言の影響があるとすれば、前部要素の A/B 型によらず後部要素の下降調 (+) / 非下降調 (-) によって A/B 型が決まることを予測する。これも先の助詞付き形式のときと同様に、前部要素がどちらの型で読まれたのかによって正答が決まる。実際、どのような結果になったのかを図 4.9 に図示し、実数を表 4.12 に示す。

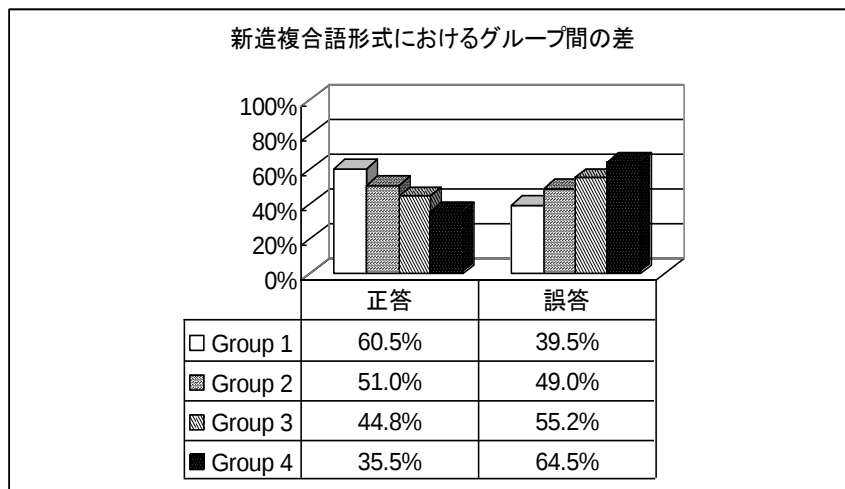


図 4.9 鹿児島方言 新造複合語形式の正答率と誤答率

表 4.12 鹿児島方言 新造複合語における正答と誤答

	正答	誤答
Group 1	1045/1728 (60.5%)	683/1728 (39.5%)
Group 2	636/1248 (51.0%)	612/1248 (49.0%)
Group 3	688/1536 (44.8%)	848/1536 (55.2%)
Group 4	273/768 (35.5%)	495/768 (64.5%)

図 4.9 の左側にある 4 つの棒グラフは複合法則を達成できた割合（正答率）を表し、右側の 4 つの棒グラフは複合法則を適用できなかった割合（誤答率）を表している。前節の助詞付き形式の正答率と比較すると、どのグループでも全体的に正答率が下がっていることが明らかである。その傾向はグループ 1（両親 native）であっても新造複合語の複合法則の達成率は 60%しかない。他のグループに目を向けてみると、グループ 2（母親 native）とグループ 3（父親 native）の正答率も値が 50%前後とかなり低くなっていることがわかる。全体的にグループ間の差がないようにみえるが、どのグループとどのグループとの間に統計的有意差があるかを多重比較によって調べた。その結果が表 4.13 である。

表 4.13 鹿児島方言 Tukey の多重比較による検定—新造複合語形式

	Group 1	Group 2	Group 3	Group 4
Group 1		n.s.	n.s.	*
Group 2			n.s.	n.s.
Group 3				n.s.
Group 4				

*: 5%水準, **: 1%水準, ***: 0.1%水準, n.s.: 有意差なし

表 4.13 をみると唯一、統計的有意差を確認できるのはグループ 1（両親 native）とグループ 4（両親 non-native）の間であることがわかる。では他のグループ（グループ 1（両親 native）、グループ 2（母親 native）、グループ 3（父親 native））の間には有意差がないということは何を意味しているのだろうか。

実は 4.4.1 の調査語彙で誤答が出現する語彙群を予測したことがここでは起こっている。4.4.1 では鹿児島方言の視点と東京方言の視点からの 2 つの視点から新造複合語の結果を予測した。一つ目の鹿児島方言の予測は「前部要素の A/B 型によって複合語全体の型が決まる鹿児島方言の複合法則に従うのであれば、新造複合語（助詞付き形式も）の複合法則の達成率は 100%に近いものになるであろう」というものである。二つ目の東京方言の予測は「（鹿児島方言の複合法則ではなく）東京方言のように後部要素の下降調（+）/ 非下降調（-）に合わせて新造複合語も読まれるのであれが、その実現の仕方は鹿児島方言の A 型 / B 型で読まれることになり複合法則の達成率は約 50%くらになるであろう」と予測した。なぜ東京方言の影響を受けると複合法則の達成率が約 50%になるのかというと、ここで使用した新造複合語の後部要素は一つの前部要素につき下降調（+）/ 非下降調（-）と 2 種類を用意して統制をとっているためである。そのため後部要素に従うのであれば新造複合語の結果は下降調（+）/ 非下降調（-）のどちらに分かれることになる。そうすると複合法則の達成率はこの約 50%

になるであろうと予測したのである。

この予測を再確認したところで再度、新造複合語の結果をみるとグループ 1 (両親 native)、グループ 2 (母親 native)、グループ 3 (父親 native) の達成率は 50% 前後の値を示し、統計的にもこの 3 つのグループ間には統計的有意差がないことは確認した (表 4.13 参照)。つまりこの 3 つのグループ (グループ 1 (両親 native)、グループ 2 (母親 native)、グループ 3 (父親 native)) は東京方言の複合語アクセント規則 (後部要素が重要) に従い、後部要素の下降調 (+) / 非下降調 (-) に合わせて複合語アクセントを読んでいるという可能性が高いと考えられる。窪菌 (2006, 2007) では既存の単語や人名の新造複合語を使って東京方言の影響を主張してきたが、今回の新造複合語の結果でも東京方言の影響を確認し窪菌 (2006, 2007) の主張を支持するものであると考えている。

続いて新造複合語の誤答の内訳に注目する。ここでの誤答は助詞付き形式と同様に、複合法則が適切に適用できたかどうかである。単語単独形式が伝統的な A/B 型に則って発音していたかどうかは問わない。

表 4.14 鹿児島方言 新造複合語の誤答—A 転率/B 転率—

東京 鹿児島	新造複合語の誤答—A 転率/B 転率—	
	起伏式(+)アクセント	平板式(-)アクセント
A 型 (下降調)	Group 1: 151/432 (35.0%)	Group 1: 167/432 (38.7%)
	Group 2: 161/312 (51.6%)	Group 2: 147/312 (47.1%)
	Group 3: 136/384 (35.4%)	Group 3: 134/384 (34.9%)
	Group 4: 69/192 (35.9%)	Group 4: 61/192 (31.8%)
B 型 (非下降調)	Group 1: 167/432 (38.7%)	Group 1: 177/432 (41.0%)
	Group 2: 152/312 (48.7%)	Group 2: 135/312 (43.3%)
	Group 3: 143/384 (37.2%)	Group 3: 137/384 (35.7%)
	Group 4: 63/192 (32.8%)	Group 4: 63/192 (32.8%)

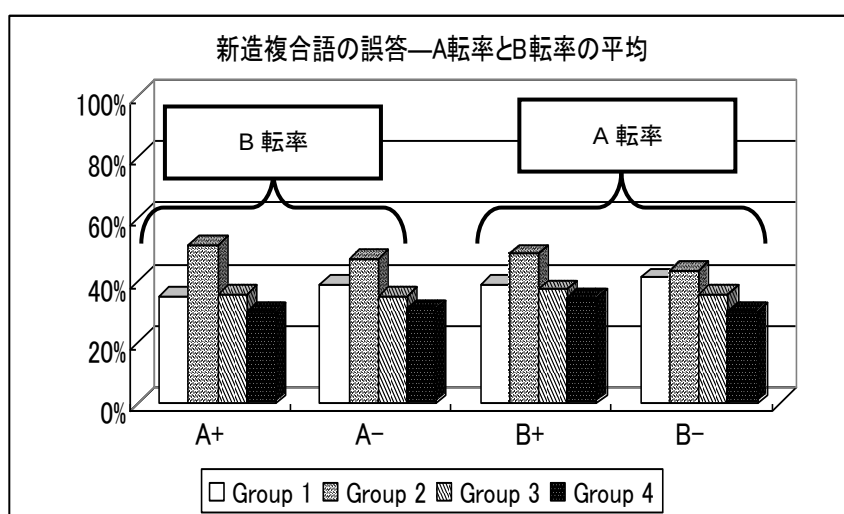


図 4.10 鹿児島方言 新造複合語の誤答—A 転率と B 転率の平均

表 4.14 と図 4.10 は新造複合語における誤答を前部要素の単語 (A(+)、A(-)、B(+)、B(-)) を基にして表したものである。表 4.14 は単語単独形式の場合と同様に誤答率を表している。表 4.14

の上段に位置する A(+) と A(-) の 2 マスは本来、鹿児島方言の複合法則に従えば A 型で言うべきところであるが、そこを B 型で言ってしまったという「B 転率」を示している。そして下段の B(+) と B(-) の 2 マスは本来、鹿児島方言の複合法則に従えば B 型で言うべきところであるが、そこを A 型で言ってしまったという「A 転率」を示している。

4.4.1 の調査語彙の予測では A(+) と B(-) に誤答が集中するであろうと考えていた（表 4.14 の太枠で示した部分）。しかしながら、表 4.14 および図 4.10 の誤答率を見てみると、誤答率はどの種類の単語であっても同程度であることがわかる。ではなぜ、この新造複合語では A(+) と B(-) の場合の B 転率、A 転率が高くないのだろうか。これはおそらく単語単独形式の A/B 型自体が B 転化、A 転化した影響によるものであると考えられる。表 4.15 は前部要素である単語単独形式が B 転化、A 転化した場合に、そのあとに続く新造複合語が鹿児島方言の複合法則（前部要素）に従った場合（複合法則の達成率 100% の場合）を示している。続く表 4.16 では前部要素の単語単独形式が B 転化、A 転化しているのは同じであるが、その後続く新造複合語が東京方言の影響（後部要素）に従った場合（誤答）を示している。

表 4.15 前部要素自体が B 転化/A 転化して鹿児島方言の複合法則に完全に従う場合
(複合法則の達成率 100% の場合)

		後部要素	
	前部要素	東京方言の起伏式(+)	東京方言の平板式(-)
A	食べ物 A(+)	食べ物コーナー A(+)(+) → A	食べ物党 A(+)(-) → A
	鎧 A(-) → [B]	鎧兜 [B](+) → B	鎧党 [B](-) → B
B	飲み物 B(+) → [A]	飲み物コーナー [A](+) → A	飲み物党 [A](-) → A
	蒸しパン B(-)	蒸しパンコーナー B(-)(+) → B	蒸しパン党 B(-)(-) → B

表 4.16 前部要素自体が B 転化/A 転化して東京方言の影響を受けた場合
(複合法則の達成率 50% の場合)

		後部要素	
	前部要素	東京方言の起伏式(+)	東京方言の平板式(-)
A	食べ物 A(+)	食べ物コーナー A(+)(+) → A	食べ物党 A(+)(-) → B
	鎧 A(-) → [B]	鎧兜 [B](+) → A	鎧党 [B](-) → B
B	飲み物 B(+) → [A]	飲み物コーナー [A](+) → A	飲み物党 [A](-) → B
	蒸しパン B(-)	蒸しパンコーナー B(-)(+) → A	蒸しパン党 B(-)(-) → B

調査語彙の語彙単独形式で誤答が多いとされる A(-) と B(+) がそれぞれ B 型、A 型に全てが変わったとする（表 4.15、表 4.16）。もし単語単独形式自体がすべて逆のアクセントに変化しても、全体としての A/B 型のバランスはどちらも 50% で依然として変わっていない。しかし単語単独形式自体のアクセント型が変わったとしても、前部要素が重要である複合法則に則って発音しているのであれば表 4.15 のように複合法則が 100% に近づくものと考えられる。だが後部要素の起伏式あるいは平板式に影響を受けるのであれば、前部要素がどのような A/B 型の単語であったとしても正答率は 50%

になると考えられる（表 4.16）。このような点を考慮すると、上記の図 4.10 の結果は前部要素のもとと単語の型が A(+)、A(-)、B(+)、B(-)のどの型であっても正答率は 50%であることから、後部要素の起伏式および平板式の影響を受けて新造複合語の型が決まっていることを示しているといえる。

では話者の頭の中では新造複合語はどのように認識されているのであろうか。調査中、調査者（筆者）が複合法則に従った新造複合語の型で読み「このアクセントはどうですか」と調査協力者に尋ねたところ、「それはおかしい。後ろ(後部要素)に何がくるかによって(新造複合語のアクセント型が)決まる」とコメントした話者がいた。このコメントからわかるように、若年層の鹿児島方言話者はすでに東京方言と同様に後部要素によって複合語全体のアクセント型が決まるという形に変わっていることがわかる。しかしながら、その中身は完全に東京方言にシフトするわけではない。後部要素が東京方言の下降調(+)であれば鹿児島方言の A 型で、後部要素が東京方言の非下降調(-)であれば鹿児島方言の B 型で、といった具合に鹿児島方言の韻律的特徴を保ったまま、複合語のときの複合法則自体が変化しつつあるということがわかる。

さらにこの新造複合語における複合法則の変化の傾向は両親の出身地の違いに関係なく起こっているという点も見逃すことはできない。両親がともに鹿児島方言の二型アクセント地域の出身であっても、その正答率は約 60%である。今回の調査では若年層を中心に扱ってきたため、高齢者層と直接比較をすることはできない。だが窪菌(2007)の人名の新造複合語の調査結果では中高年層における複合法則の達成率かなり高い割合（約 90%）であることが分かっている。この点を考慮すると、若年層が積極的にこの変化を牽引しているものと考えられる。

4.5.5 厳密な基準の「単語＋助詞付き」

前節までは近畿方言と同様、順当に「単語」「助詞付き」「新造複合語」の正答率を調べてきたが、ここではより一段と厳しい基準である「単語＋助詞付き」を使ってその正答率を調べることにする。この「単語＋助詞付き」の正答とする定義は表 4.5 にも書いているように「A/B 型の二型のアクセント体系を保って、単語単独形式が伝統的な A/B 型で、なおかつ複合法則に則って助詞付きの形式が発音できているかどうか」である。つまり「二型」と「音節」を保つことは言うまでもなく、「単語単独形式」の「語彙アクセント」と「助詞付き形式」の「複合法則」の 2 つの基準を同時に満たさなければならないため、この分析対象とするなかではハードルが高い基準と言える。

4.5.2 の単語単独形式で各グループの正答率は「1→2→3→4」の順に下がっていくことが明らかとなった。これは両親が鹿児島の二型（グループ 1）と両親が鹿児島の二型以外（グループ 4）の間には単語単独のアクセントの習得に統計的有意差があることが確認されている。ではその単語単独形式の習得にさらに「助詞付き形式」で複合法則の一致率を合わせるとどうなるのか、それを示したものが図 4.11 である。

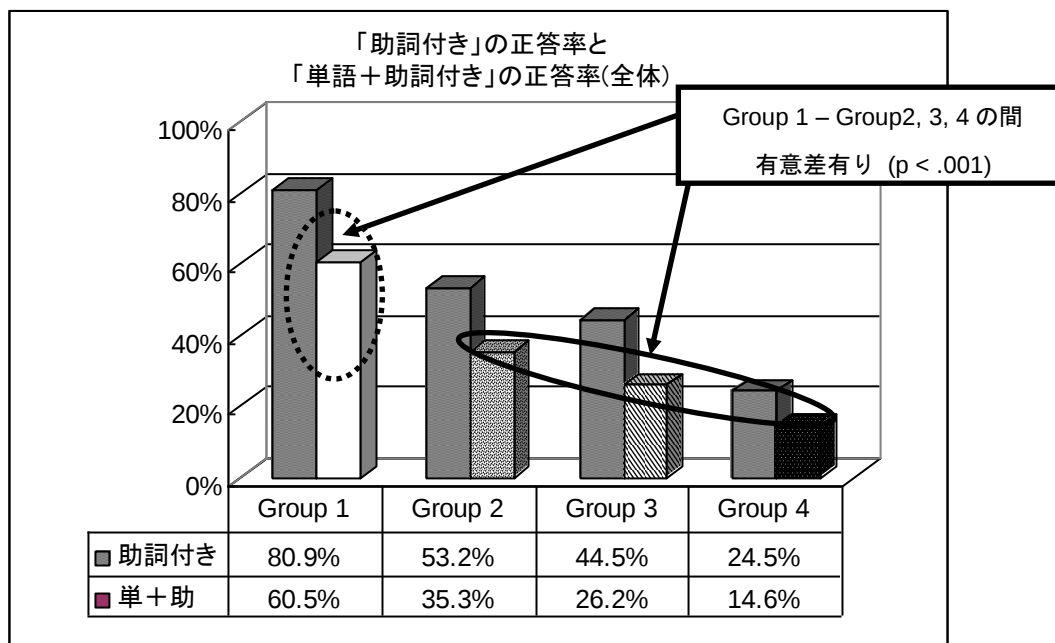


図 4.11 鹿児島方言「単語＋助詞付き」における正答率

図 4.11 は「助詞付き形式」の正答率と「単語＋助詞付き」における正答率を比較のためにグループごとに隣に並べて表示している。各グループの左側に位置している棒グラフが助詞付き形式における正答率であり、その右側に位置している棒グラフが「単語＋助詞付き」の形式である。興味深い点はグループ 1 (両親 native) の「単語＋助詞付き」の正答率が約 60%まで下がっている点である。これは「助詞付き形式」における複合法則の一致率でグループ 1 が約 80%を示したものと比べると明らかに正答率が下がっている。また他のグループを見ても「助詞付き」>「単語＋助詞付き」の傾向があることがわかる。この「単語＋助詞付き」でもグループ間に統計的に差があるのかどうかを調べてみると、グループ 1 (両親 native) と他の 3 つのグループ (グループ 2 (母親 native)、グループ 3 (父親 native)、グループ 4 (両親 non-native)) の間にのみ統計的有意差が確認された。つまり両親が鹿児島の二型(グループ 1)とそれ以外の 3 つのグループとは鹿児島方言の習得が同じではないことを示している。

4.5.2 の単語単独形式では A (－) と B (＋) の語彙に誤答が多くなるであろうと予測し、語彙を A (＋)、A (－)、B (＋)、B (－) に分けてグループごとにその誤答率を調べた。その結果、やはり A (－)、B (＋) で誤答率が他の A (＋)、B (－) に比べて高くなることが明らかとなった。言い換えると A (－)、B (＋) の正答率が下がることを意味する。ここで注目している「単語＋助詞付き」でも同じ傾向が観察されるのではないかと考え、単語を A (＋)、A (－)、B (＋)、B (－) に分けて正答率を調べてみることにした。「単語単独形式」の結果をもとに「単語＋助詞付き」の正答率 (習得率) を予測すると、誤答が多いとされる A (－)、B (＋) の正答率が下がることが予測される。果たしてその結果はどのようなになるのか、それを示したものが図 4.12 である。

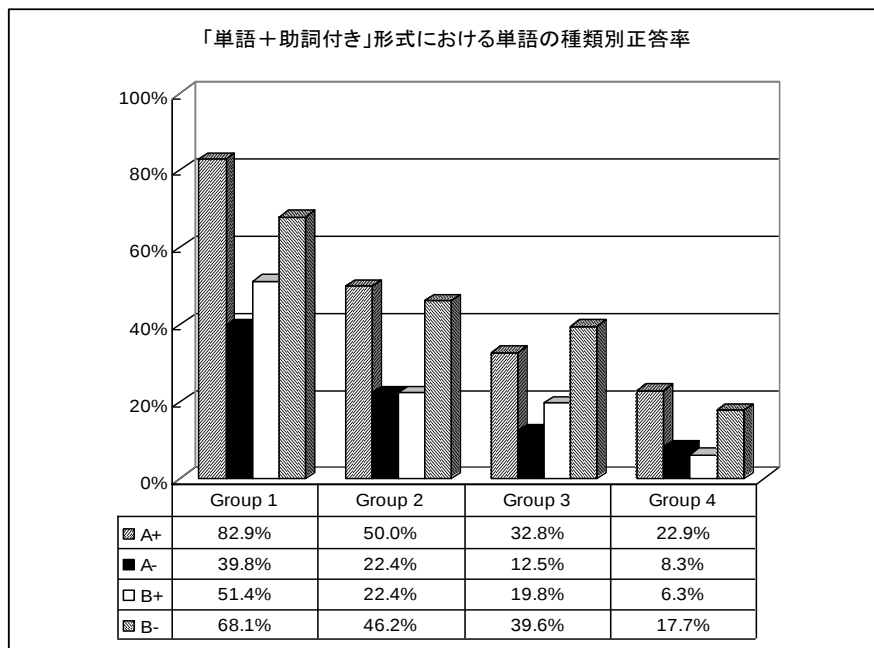


図 4.12 「単語＋助詞付き」形式における単語の種類別正答率

図 4.12 は各グループの中で単語を A(+)、A(-)、B(+)、B(-) に分けて、それぞれの正答率を示している。これをみると各グループの棒グラフの真ん中が凹んでいることがわかる。真ん中の黒と白の棒グラフはそれぞれ A(-)、B(+) の単語を示しており、正答率が他の A(+)、B(-) に比べると下がっていることは一目瞭然である。「単語＋助詞付き」は言い換えれば「語彙アクセント＋音韻規則」である。まず語彙アクセントである単語単独形式の時点で A(-)、B(+) は東京方言の影響を受けて正答率が低くなり、さらに複合法則が運用できるかどうかを調べる助詞付き形式であることから、この両者を同時に満たすことはどのグループにおいても非常に難しいことを示している。

また別の見方をすると、この結果が今の若年層の鹿児島方言の実態ということもできる。ここで設けた厳しい基準を満たすのはグループ 1 (両親 native) の若年層、つまり両親とも鹿児島方言の二型地域の出身であっても非常に困難であることから明らかである。さらにこのグループ 1 (両親 native) の A(-)、B(+) の正答率が低くなっていることから、東京方言の影響を強く受けている実態をみることができる。この意味において、この「単語＋助詞付き」におけるグループ 1 (両親 native) の結果は現在 (調査時) の若年層の鹿児島方言を反映した結果といえるであろう。

東京方言の影響があることはこの節だけではなく前節でも多く触れてきた。だが「東京方言の影響」があるからといって、そっくりそのまま東京方言のアクセントで発音するわけではない²。東京方言の韻律的特徴を鹿児島方言の「二型」、「音節」という韻律的特徴で実現しているという姿がみえてくる。

4.5.6 「語彙アクセント」対「複合法則」

では各グループの中で「語彙アクセント」と「複合法則」の習得を比較したときに、両者の習得には何らかの差があるのだろうか。ここでは 3 章のときと同様に、各グループ内での「語彙アクセント」

² データの一部には東京方言のアクセントで発音しているものもある。

と「アクセント規則（＝ここでは「複合法則）」との多重比較を行い、それぞれの関係に統計的な有意差があるかどうかを確認する。下の表 4.17 から表 4.20 には各グループ内での形式ごとの多重比較の結果を示している。

各グループの多重比較の結果をみるとグループ 1 (両親 native)、グループ 2 (母親 native)、グループ 3 (父親 native) は同じ傾向を示し、グループ 4 (両親 non-native) のみが異なる傾向を示している。前者の三つのグループは「新造複合語形式」(複合法則)と「単語単独形式」(語彙アクセント)との間、および「新造複合語形式」(複合法則)と「助詞付き」(複合法則)との間に統計的有意差があることを示している(表 4.17 から表 4.19 の 3 つの表の中で「*」が付いた部分である)。しかしグループ 4 (両親 native) 内における多重比較の結果ではどこにも有意差が確認できなかった(表 4.20)。この違いは何を示すのであろうか。

表 4.17 鹿児島方言 Tukey の多重比較によるグループ 1 の中での平均の差

Group1 鹿児島	単語 (語彙アクセント)	助詞付き (複合法則)	複合語 (複合法則)
単語		n.s.	*
助詞付き			*
複合語			

*: 5%水準, **: 1%水準, ***: 0.1%水準, n.s.: 有意差なし

表 4.18 鹿児島方言 Tukey の多重比較によるグループ 2 の中での平均の差

Group2 鹿児島	単語 (語彙アクセント)	助詞付き (複合法則)	複合語 (複合法則)
単語		n.s.	*
助詞付き			*
複合語			

*: 5%水準, **: 1%水準, ***: 0.1%水準, n.s.: 有意差なし

表 4.19 鹿児島方言 Tukey の多重比較によるグループ 3 の中での平均の差

Group3 鹿児島	単語 (語彙アクセント)	助詞付き (複合法則)	複合語 (複合法則)
単語		n.s.	*
助詞付き			*
複合語			

*: 5%水準, **: 1%水準, ***: 0.1%水準, n.s.: 有意差なし

表 4.20 鹿児島方言 Tukey の多重比較によるグループ 4 の中での平均の差

Group4 鹿児島	単語 (語彙アクセント)	助詞付き (複合法則)	複合語 (複合法則)
単語		n.s.	n.s.
助詞付き			n.s.
複合語			

*: 5%水準, **: 1%水準, ***: 0.1%水準, n.s.: 有意差なし

まず、前者の 3 つのグループ (グループ 1 (両親 native)、グループ 2 (母親 native)、グループ 3 (父親 native)) について考えてみたい。この 3 つのグループに共通して観察された有意差は、同じ複合法則を用いる「助詞付き形式」と「新造複合語形式」との間である。同じ複合規則を用いるのになぜ違いが出てきたのか。これは先の 4.5.4 の「新造複合語」でもみたように、東京方言の影響によって、この新造複合語形式における複合法則の達成率が他の 2 つの調査語彙形式 (単語単独形式、助詞付き形式) に比べてその達成率が格段に低くなくなったことに起因すると思われる。そのために同じ「複合法則」を用いると予想されているが、「助詞付き形式」と「新造複合語形式」との間に統計的有意差が出たものと考えられる。

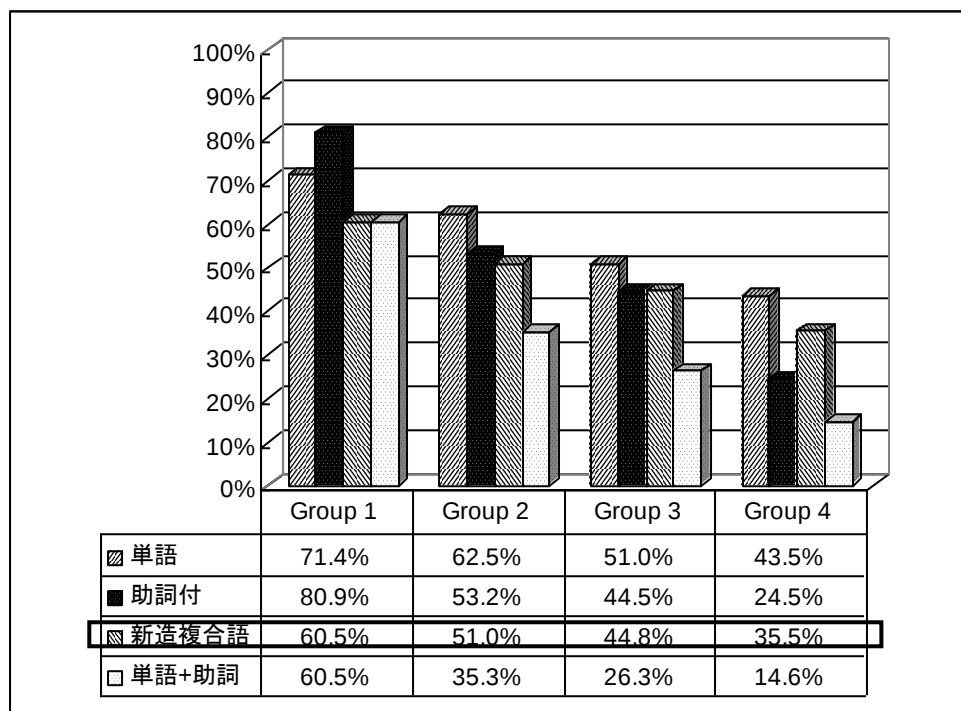


図 4.2(再掲) 鹿児島方言 グループ別による単語単独形式、助詞付き、新造複合語、単語+助詞付きの伝統的な鹿児島方言との一致率

このように東京方言の影響を多分に受けている鹿児島方言の「新造複合語形式」であるため、純粋に「語彙アクセント」と「複合法則」の習得に差があるのかどうかを見るには「単語単独形式」と「助詞付き形式」を比較したところ見るべきであろう。これら二者間の多重比較の結果をみると、どのグ

グループにおいても統計的有意差は確認されなかった。だが統計的有意差が確認されなかったとしても、グループによって両者の間に違いがある。

図 4.2 (再掲) を見てみると、グループ 1 (両親 native) の話者は「複合法則」 > 「語彙アクセント」という関係を示している。だがグループ 2 (母親 native)、グループ 3 (父親 native) はその逆で「語彙アクセント」 > 「複合法則」という関係である。つまり両親ともに鹿児島出身の話者は、単語単独形式で東京方言の影響を受けたとしても、音韻規則 (文法) はしっかり伝承・保持している傾向がわかる。この点は近畿方言では観察されなかった部分であり、近畿方言ではどのグループも一貫して「語彙アクセント」 > 「アクセント規則」という関係を示していた。

ではグループ 4 (両親 non-native) はどうか。図 4.2 (再掲) のグループ 4 (両親 non-native) をみると視覚的に大きな差があるようにみえるが、多重比較の結果 (表 4.17) を見てもどの調査語彙形式にも有意差は確認されなかった。このようにグループ 4 (両親 non-native) は上記の 3 つのグループ (グループ 1 (両親 native)、グループ 2 (母親 native)、グループ 3 (父親 native)) とは違う傾向を示す特異性が明らかとなった。

那須 (2004) では「語彙アクセント」は変化しやすく「アクセント規則 (ここでは複合法則)」は変化しにくいと変化の速度の違いについて、この鹿児島方言の各グループの結果で考えてみたい。この点について鹿児島方言の「単語単独形式」と東京方言の影響が少ない「助詞付き形式」で比較してみると、実測値 (図 4.2) ではグループ 1 (両親 native) のみ「複合法則」の方が「語彙アクセント」よりも習得率が高いという傾向を示している。つまりグループ 1 (両親 native) では「複合法則」自体は変化せずに伝承され「語彙アクセント」は変化していると見ることができる。グループ 1 (両親 native) に関していうと、統計的には有意差は確認されないが実測値では那須 (2004) の主張を追認する形であることが言えるであろう。

4.5.7 結果 I のまとめ

この 4.5 では鹿児島方言の習得率を各グループ、各調査語彙形式の全体的な傾向を把握し、その後、各調査語彙形式に分けて正答率と誤答率を比較し、調査結果に関して考察した。ここからは最初に提示した 2 つの問題について、4.5 で明らかになった点を振り返りながら検証を行う。

まず最初に提示した 2 つの問題は以下の通りである。

- 親の出身地の違いによって方言習得の差はあるのか。
- 方言習得に違いがあるとすれば、その違いはどこに現れてくるのか。

- 親の出身地の違いによって方言習得の差はあるのか。

この答えに対しては「ある」といえよう。4.5.2 の「単語単独形式」、4.5.3 の「助詞付き形式」、4.5.4 「新造複合語」のどの調査語彙形式についてもグループ間に統計的有意差は確認された。調査語彙形式を問わず一貫して観察された傾向は、グループ 1 (両親 native) とグループ 4 (両親 non-native) との間には常に統計的有意差を確認した。これらの結果から、同じ方言地域で育っていても親の出身地が鹿児島の二型地域かどうかによってその子供が習得する方言には違いがあることを確認した。

■ 方言習得に違いがあるとすれば、その違いはどこに現れてくるのか。

「語彙アクセント」と「複合法則」の習得に違いがあるのかというと、「新造複合語形式」を除くと、「語彙アクセント」と「複合法則」の両者には統計的な違いは観察されなかった。統計的な差がないという点では近畿方言と同じである。だが統計的な有意差がないとしても「語彙アクセント」と「複合法則」との関係性にはグループ間で差があった。

両親が鹿児島出身のグループ 1 では「複合法則」>「語彙アクセント」という傾向が観察されたのに対し、その他のグループはその逆の傾向「複合法則」<「語彙アクセント」を示すことが明らかとなった。グループ 1 (両親 native) が示した「複合法則」>「語彙アクセント」という傾向は近畿方言のグループ 1 (両親 native) では観察されなかった点であり、この傾向は那須 (2004) の主張を支持するものである。

次節では「助詞付き形式」の中で誤答として一つにまとめられてきた様々な誤答について、一つずつ詳しく調べる「誤答分析」を行う。近畿方言の誤答分析と同様に、間違いの中身がどうなっているのかをみることにより、各グループの方言習得がどのようになっているのかを知ることができ、さらに誤答を調べることにより誤答がどのような方向に向かっているのか、その方向性を示すことが可能となる。

4.6 結果 II—伝統的な鹿児島方言からの逸脱とその方向性—

4.5 では「単語単独形式」「助詞付き形式」「新造複合語形式」「単語＋助詞付き」の形式ごとに、どの程度鹿児島方言の基準（二型、音節、複合法則）すべてを満たしているのかを調べてきた。その結果、複合法則を用いる「助詞付き形式」および「単語＋助詞付き」で親の出身地によって分けたグループ間の差が顕著であることが明らかとなった。だが「新造複合語形式」では複合法則の達成率はグループ 1 (両親 native)、グループ 2 (母親 native)、グループ 3 (父親 native) で約 50%に留まり、親の出身地の違いによる影響は観察されなかった。これは東京方言の影響によるものと考えられる（4.5.4 参照）。ここでは特に親の出身地による違いが顕著に現れた「助詞付き形式」に焦点を当て、誤答の内訳と方向性を詳しく調べることにする。

「助詞付き形式」での正答の定義は「A/B 型の二型のアクセント体系を保って鹿児島方言の複合法則に則って達成できているかどうか」である。単語単独形式が伝統的な鹿児島方言の A/B 型であったかどうかは問わず、話者自身が発した単語の A/B 型に則って助詞付き形式が発音できるのかをみる。そのため、まずは単語単独形式がどのように言われていたのかを把握し、そしてその単語の A/B 型に基づいて助詞付きがどのように発音され、どのような誤答があるのかを調べていく。

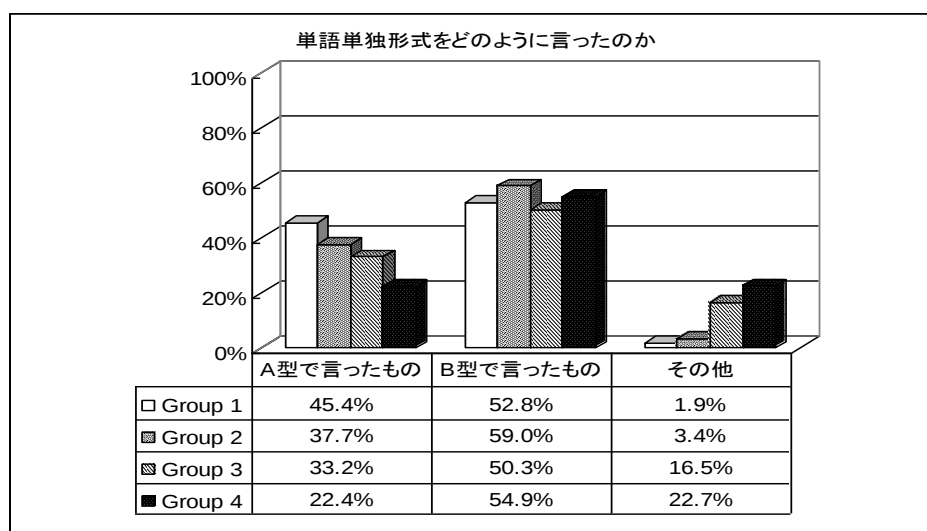


図 4.6 (再掲) 単語単独形式の A/B/C 型の割合

まずは単語単独形式自体が A/B 型のどちらの型で読まれたのを再確認するため図 4.6 をここで再掲する。A/B 型で読まれた語彙は単語単独形式において「二型」「音節」の基準をクリアしていることである。また「まごい」とモーラ単位と認められる発音や東京方言と同じアクセントの場合には C 型と呼ばれる「その他」に分類した。すでに 4.5.3 で助詞付き形式での複合法則に則った発音の正答率は明らかとなっているので、ここでは正答については言及しない。ここからは助詞付き形式の誤答を中心に調べていく。そして「その他」に分類された C 型自体が「二型」「音節」をもっていないので鹿児島方言の韻律的特徴から逸脱しているが、その誤答 C 型の中でもどのような「助詞付き形式」の間違いを起こしているのを詳しく調べることにする。

4.6.1 単語単独形式を A 型－助詞付き形式の誤答

先の図 4.6（再掲）でみた単語単独形式で A/B/C 型の A 型で単語単独形式を言ったものの中で、どの程度複合法則に則って助詞付き形式を言うことできたのか、その正答率と誤答率を図 4.13 は示している。

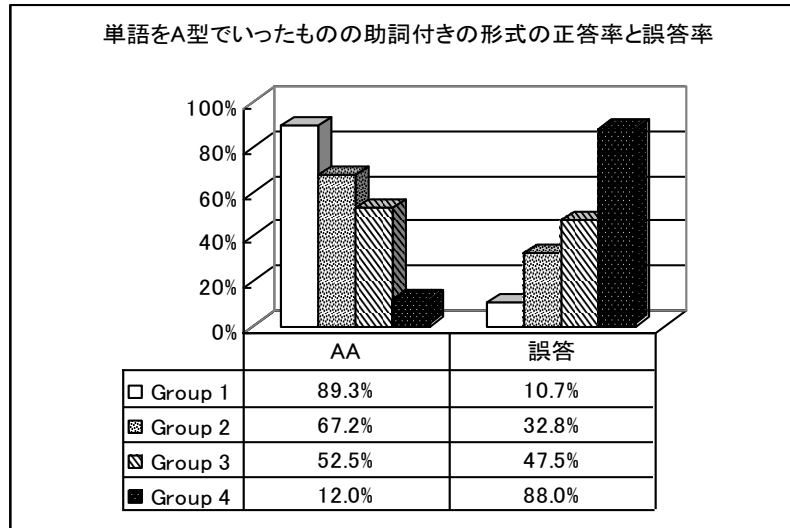


図 4.13 単語 A 型－助詞付き形式の正答率と誤答率

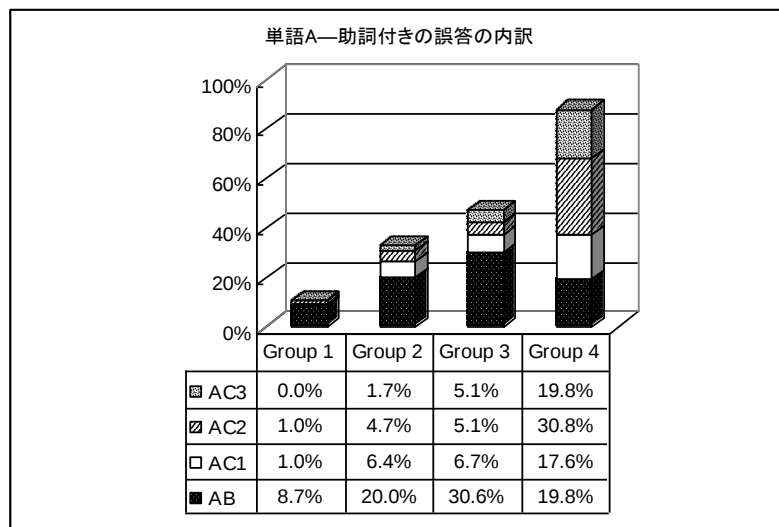


図 4.14 単語 A－助詞付き形式における誤答の内訳

図 4.13 の左側の棒グラフ群は「AA」と記され正答率を表している。これは「単語を A 型でいい、助詞付きも A 型」で言ったことを表している。例えば「ロンドン」という単語で正答を考えてみよう。この単語を「ロンドン」と A 型で発音し、その助詞付き形式も「ロンヅンが」と卓立の位置を末尾から 2 音節目の位置に移動させて A 型で発音した場合には、きちんと複合法則に則って発音しているので正答となる。一方、その右に位置している「誤答」は A 型で発音すべき助詞付き形式を A 型で言わなかったもの全てを合わせた誤答である。図 4.13 をみると正答率を表した「AA」が「1→2→3→4」順に下がっていき、逆に誤答率は「1→2→3→4」順に上がっていくことがわかる。それでは、この誤

答の中にはどのような誤答が含まれているのだろうか。図 4.13 の右側にある誤答を拡大し、その誤答の内訳を示したのが図 4.14 と表 4.21 である。

表 4.21 単語 A-助詞付き形式における誤答の内訳

	結果の分類	単語	助詞付き		Group 1	Group 2	Group 3	Group 4
鹿児島方言 の枠内	AA	ロンドン	ロンドンが	正答	350/392 (89.3%)	158/235 (67.2%)	134/255 (52.5%)	46/384 (12.0%)
	AB (B 転率)	ロンドン	ロンドンが	誤答	34/42 (81.0%)	47/77 (61.0%)	78/121 (64.5%)	9/40 (22.5%)
鹿児島方言 の枠外	AC1(w/ σ) (卓立移動なし)	ロンドン	ロンドンが		4/42 (9.5%)	15/77 (19.5%)	17/121 (14.0%)	8/40 (20.0%)
	AC2(w/o σ) (卓立移動なし)	たべもの	たべものが		4/42 (9.5%)	11/77 (14.3%)	13/121 (10.7%)	14/40 (35.0%)
	AC3	たべもの	たべものが		0/42 (0.0%)	4/77 (5.2%)	13/121 (10.7%)	9/40 (22.5%)
	合計				42/42 (100%)	77/77 (100%)	121/121 (100%)	40/40 (100%)

*太枠全体が誤答を表す

表 4.21 の中で一番上に位置している「AA」と記された部分が「A 型で発音した単語を助詞付き形式でも A 型で発音した」正答率を表している。そして「AA」よりも下に位置しているものすべてが誤答であり、表 4.21 の太枠で囲った部分が誤答を表している。この表 4.21 の太枠で囲った部分を各グループで縦に見て、この縦の 1 列をそのグループの誤答全体 (100%) とする。その誤答全体 (100%) の中で、どのような誤答がどれだけの割合で現れるのかを割合の中で表している。例えば表 4.21 のグループ 1 (両親 native) の「AB」と記された誤答は 81%とある。これはグループ 1 (両親 native) が間違えた発音の中でも「AB」に分類される間違い (誤答) が 81%であることを示している。

では具体的にどのような誤答があるのかを見てみる。誤答「AB」は「単語を A 型でいい、助詞付きは B 型」で言った誤答である。例えば「ロンドン」という単語を単語単独形式では「ロンドン」と A 型で発音しているにも関わらず、その助詞付き形式の場合に「ロンドンが」と B 型で発音した場合はこの誤答「AB」に分類される。誤答「AC」は「単語を A 型でいい、助詞付きは C 型」で言ったことを示している。C 型というのは鹿児島方言の「二型」「音節」という韻律的特徴をもっていない誤答を表している。

「AB」と「AC」はどちらも誤答であるが、鹿児島方言の韻律的特徴の枠中にあるのか、枠外にあるのかという視点からみると「AB」と「AC」の誤答は大きく異なる。「AB」は助詞付きのときに「B 型」に変化し「複合法則」には違反しているが、鹿児島方言の「二型」「音節」の範囲を超えているわけではない。その意味で「AB」はまだ「鹿児島方言の韻律的特徴の枠内」にあると言える。しかしながら「AC」は助詞付き形式のときに「C 型」変化したことを意味しており、「複合法則」の違反

および「二型」からの逸脱を意味する。そのため「AC」は「鹿児島方言の韻律的特徴の枠外」にあると言える。表 4.21 の左端にはその鹿児島方言の韻律的特徴の範囲内であるかどうかによって「鹿児島方言の枠内」と「鹿児島方言の枠外」に分けて示している。さらに「鹿児島方言の枠外」にある「AC」の誤答を三つに分類した。「AC1」と「AC2」はどちらも助詞付き形式のときに卓立の位置が移動していないことを意味している。「AC1」と「AC2」の違いは調査語彙が音節を含む語であるかどうかを表している。「AC1」は音節を含む語であり「AC2」は音節を含まない語であることを示している。例えば「AC1」の誤答は「ロンドン」と音節を含む単語を A 型で読んで、助詞付き形式では「ロンンが」と卓立の位置を「ロン」から移動させずに読んだ場合である。もう一つの誤答「AC2」の誤答は「たべもの」と音節を含まない単語を A 型で読んで、助詞付きの形式でも「たべものが」と卓立の位置を「も」から移動させずに読んだ場合である。もし鹿児島方言の複合法則に従うのであれば、助詞付き形式では卓立の位置が移動すべきであるのに対し、誤答「AC1」と「AC2」は卓立の位置を移動させずに助詞の「が」を付けて読んだことになる。「AC3」は上記以外の誤答であり、東京方言と同じように発音した場合は「AC3」に分類される。

表 4.21 の太枠で囲った部分が誤答である。この太枠の中の各グループを縦に見て、そのグループ全体の誤答を 100%とみたときに、その誤答の中でどのような分布をしているのかに注目してみる。まずグループ 1 (両親 native)、グループ 2 (母親 native)、グループ 3 (父親 native) については誤答が「AB」に集中していることが分かる。これら 3 つのグループは「複合法則」は間違っていたとしても鹿児島方言の韻律的特徴（「二型」と「音節」）の範囲内で間違いを犯している様子がわかる。そしてその 3 つのグループ（グループ 1 (両親 native)、グループ 2 (母親 native)、グループ 3 (父親 native)）の中で次に多い誤答は何かというと「AC」である。その「AC」の誤答の中でも誤答の分布は「AC1」と「AC2」の「卓立の位置を動かさない」タイプに集中していることがわかる。グループ 4 (両親 non-native) ではこの「AC1」と「AC2」の誤答（卓立の位置を動かさない誤答＝鹿児島方言の韻律的特徴から逸脱）が「AB」の鹿児島方言の韻律的特徴を守っている誤答を上回っている。

全グループの傾向をまとめると、グループ 1 (両親 native)、グループ 2 (母親 native)、グループ 3 (父親 native) の誤答はできるだけ鹿児島方言の枠内である「AB」で治めようとしている傾向が見られるものの、その次に多いのは鹿児島方言の枠外であるが卓立の位置を移動させない「AC1」あるいは「AC2」タイプの誤答である。ではなぜこのような卓立の位置を移動させない「AC1」あるいは「AC2」タイプの誤答が多いのであろうか。一つの見方として「助詞が付いた形式で卓立の位置を動かさない」という東京方言の助詞付きの形を真似しているのではないかと考えることができる(表 4.22 参照)。

表 4.22 東京方言の単語単独形式と助詞付きの形式の対応関係

鹿児島方言(A/B 型)と 東京方言(+/-)の対応	例	単語単独形式	助詞付きの形式
A(+)	岡山	お <u>か</u> や <u>ま</u>	お <u>か</u> や <u>ま</u> が
A(-)	鹿児島	か <u>ご</u> し <u>ま</u>	か <u>ご</u> し <u>ま</u> が
B(+)	長崎	な <u>が</u> さ <u>き</u>	な <u>が</u> さ <u>き</u> が
B(-)	沖縄	お <u>き</u> な <u>わ</u>	お <u>き</u> な <u>わ</u> が

表 4.22 に示したように、東京方言では単語単独形式の卓立の位置は助詞付き形式でも変わらない。この「卓立の位置が変わらない」ということを別の言い方にすると「卓立の位置を移動させていない」と捉えることができる。例えば表 4.22 の東京方言での「おかやま」という単語であれば、助詞付き形式では「おかやまが」と卓立があった「か」の位置から移動していない。誤答「AB」に次いで二番目に多い誤答がこの「卓立の位置を移動させていない」タイプの「AC1」、「AC2」である。もしもこの東京方言のような「卓立の位置を移動しない」という点を真似しているのであれば、単語単独形式、新造複合語形式だけではなく、助詞付きの形式でも東京方言の影響が観察されることを意味する。この点について次節の「単語単独形式を B 型で言ったものの助詞付きの形」の中で誤答がどのような方向に向かっているのかを確かめてから東京方言の影響について再び考察をする。

4.6.2 単語単独形式を B 型－助詞付き形式の誤答

前節の「単語単独形式を A 型で言ったものの助詞付きの形」の誤答の内訳では、できるだけ鹿児島方言の枠内の誤答「AB」に集中する傾向を確認した。しかしながら、鹿児島方言の枠を超える「AC1」、「AC2」という誤答もその次に多いことが明らかとなった。「AC1」、「AC2」という誤答では「卓立の位置を移動させない」という点で東京方言と一致しているように見えるが、A 型で読まれた単語の結果からだけではそのことを裏付けすることはできない。

ここでは図 4.6 (再掲) でみた単語単独形式を B 型で言ったものの中で、前節と同様に、どの程度複合法則に則って助詞付き形式を言うことできたのかについて、その正答率と誤答率に注目する。図 4.15 は「単語を B 型、助詞付き形式でも B 型」で行った正答を「BB」として左側に配置し、正答以外の「誤答」を右側に配置して、それぞれの正答率と誤答率を示している。

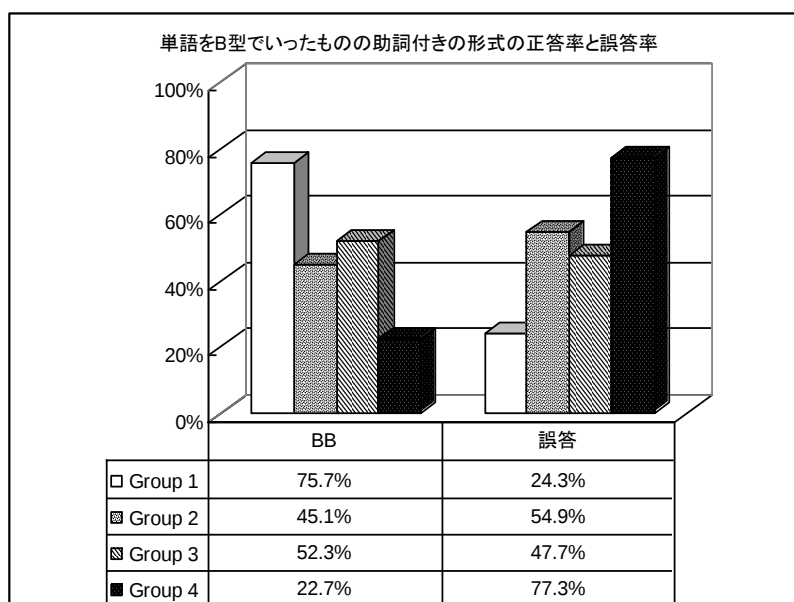


図 4.15 単語 B 型－助詞付き形式の正答率と誤答率

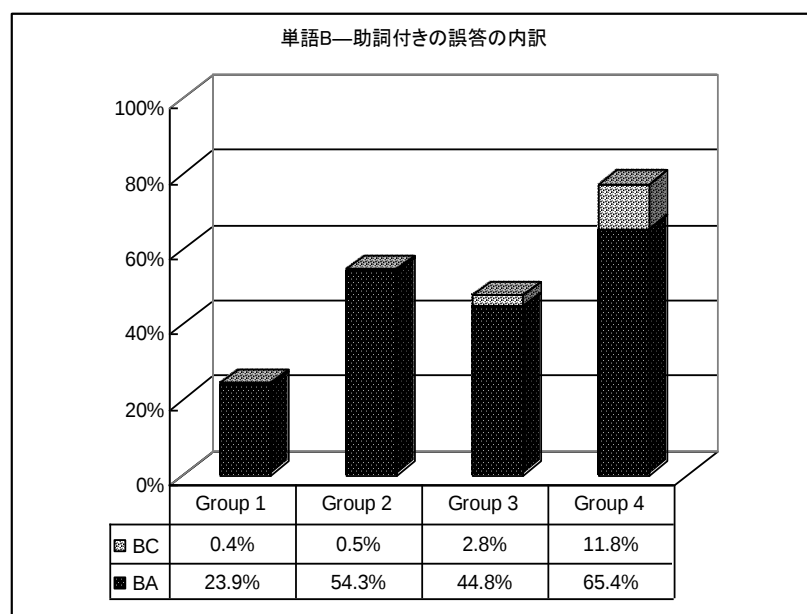


図 4.16 単語 B—助詞付き形式における誤答の内訳

図 4.15 をみると B 型の単語を複合法則に則って発音できた正答の「BB」の割合はグループ 1 (両親 native) の 75.5%が一番高く、その次「3→2→4」という順に下がっていく傾向が読み取れる。一方、誤答率をみるとグループ 4 (両親 non-native) の 77.3%が一番高いことが分かる。グループ 1 (両親 native) と対照的な傾向を示すのがグループ 4 (両親 non-native) ということができる。では、その誤答の内訳はどうなっているのでしょうか。図 4.16 と表 4.23 は誤答の内訳を示しており、両者は対応している。

表 4.23 単語 B-助詞付きでの誤答の内訳

	結果の分類	単語	助詞付き		Group 1	Group 2	Group 3	Group 4
鹿児島方言 の枠内	BB	コーヒー	コーヒーが ^が	正答	345/456 (75.7%)	166/368 (45.1%)	202/386 (52.3%)	48/211 (22.7%)
	BA (A 転率 =卓立移動なし)	コーヒー	コーヒーが ^が	誤答	109/111 (98.2%)	200/202 (99.0%)	173/184 (94.0%)	138/163 (84.7%)
鹿児島方言 の枠外	BC	コーヒー	コーヒーが ^が		2/111 (1.8%)	2/202 (1.0%)	11/184 (6.0%)	25/163 (15.3%)
			コーヒーが ^が	合計				111/111 (100.0%)

表 4.23 の太枠で囲った部分が誤答を表している。この表 4.23 の太枠で囲った部分を各グループで縦に見て、この縦の 1 列をそのグループの誤答全体 (100%) としている。その誤答全体のなかで、どのような誤答がどれだけの割合で現れるのかを各グループの誤答全体 (100%) の中で表している。では具体的にどのような誤答があるのかを見てみる。

B 型単語を助詞付き形式でどのように言ったのかという誤答は「BA」と「BC」の二つに分類される。前者は「単語単独形式を B 型、助詞付きの形式を A 型」であることを表し、後者は「単語単独形式は B 型、助詞付きの形式を C 型」であることを表している。誤答「BA」は例えば「コーヒ^{~~~~}ー」と B 型で単語を言い、助詞付き形式を「コーヒ^{~~~~}ーが」と A 型で言った場合である。誤答「BC」は例えば「コーヒ^{~~~~}ー」と B 型で言い、助詞付き形式を「コーヒ^{~~~~}ーが」と東京方言のように言った場合と、「^{~~~~}コーヒ^{~~~~}ーが」と鹿児島方言の韻律的特徴から逸脱している場合である。この二つの誤答を合わせて「BC」としている。

表 4.23 をみると、誤答は圧倒的に「BA」に集中していることがわかる。この傾向は前節の「単語 A」のときの結果と違い、どのグループにも観察される。ではなぜ誤答が「BA」に偏っているのだろうか。誤答「BA」の特徴は二つある。一つ目の特徴は「BA」が誤答であっても鹿児島方言の範囲内である点であり、二つ目の特徴は卓立の位置を動かしていないという点である。例えば「コーヒ^{~~~~}ー」と B 型で単語を言い、助詞付き形式を「コーヒ^{~~~~}ーが」と A 型で言った場合、複合法則に則っていないので違反となるが、それでも「二型」「音節」は保持しており鹿児島方言の韻律的特徴の範囲内とみることができる。さらに単語の「コーヒ^{~~~~}ー」の卓立をもった「^{~~~~}ヒー」の部分を助詞付き形式で動かしていないという視点からみると、前節で示した東京方言の助詞付き形式を模倣しているともみることが可能である。そのため誤答「BA」は「鹿児島方言の複合法則に違反」しながら「鹿児島の韻律的特徴」の範囲内にあり、なおかつ「東京方言の助詞付き形式の模倣」という二つの方言の特徴を有している。この両者の特徴が重なって誤答「BA」が圧倒的に多くなっていると考えられる。前節の結果とこの節での結果の比較については次々節の 4.6.4 において、両者の誤答の傾向を並べて比較し「助詞付き形式における東京方言の影響」について考察する。

4.6.3 単語単独形式を C 型－助詞付き形式の誤答

ここでは単語単独形式を C 型、つまり鹿児島方言の韻律的特徴の範囲から逸脱した単語の中で、助詞付きの形式ではどのように読まれたのかを分析する。単語単独形式自体が鹿児島方言から逸脱しているので「誤答」に分類されるが、誤答であってもその助詞付きの形のみることにより、鹿児島方言のどのような特徴（二型、音節、複合法則）を失うことがないのかを見ることができると考えている。

まず単語単独形式が C 型の特徴について再度確認しておく。単語が C 型は音節ではなくモーラで発音したもの、あるいは東京方言と同じ発音であったことを示している。先の図 4.6 (再掲)「単語単独形式の A/B/C 型の割合」では「その他」で示した部分が C 型に当たる。単語単独形式そのものを C 型で読んだ割合はどのグループにおいても少ないが、とりわけグループ 1 (両親 native)、グループ 2 (母親 native) は鹿児島方言の「音節」「二型」の枠から外れること自体が非常に稀であることがわかる。単語単独形式で誤答 C 型の多くはグループ 3 (父親 native)、グループ 4 (両親 non-native) に多く観察されることがわかる。

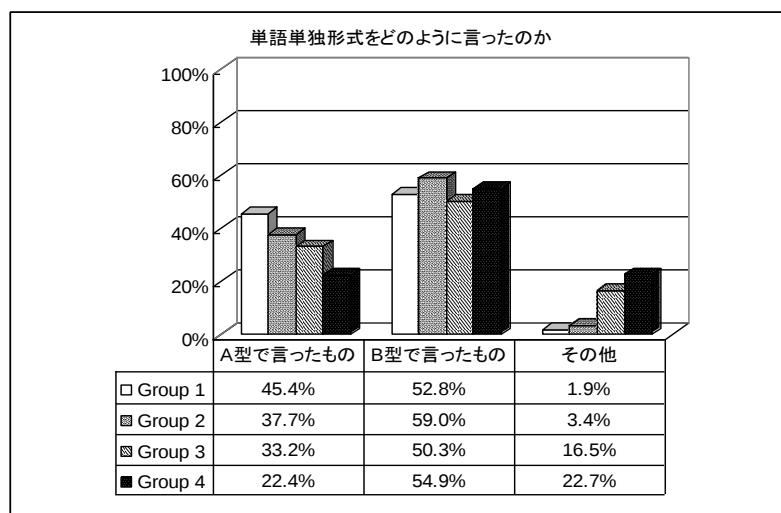


図 4.6 (再掲) 単語単独形式の A/B/C 型の割合

ではこの単語単独形式が C 型の場合の助詞付き形式はどのようなになっているのでしょうか。その結果を示したものが、図 4.17 と表 4.24 である。助詞付き形式における誤答はまず「複合法則に則っているか否か」という基準によって「C1」と「その他」を分けた。そして複合法則に則っていない「その他」を「卓立の移動の有無」という基準によってさらに「C2」、「C3」と二つに分けた。この単語 C 型（その他）での助詞付き形式での誤答は合計で三つの分類があることになる。

誤答「C1」は単語を 1 モーラ卓立で発音しているが鹿児島方言の二型の範囲内（末尾から二番目/末尾）であり、助詞付きの形式において複合法則を適用しているものである。例えば単語単独形式を「よろい」¹とモーラで発音しているので単語単独形式では誤答（C 型）に分類される。だが助詞付き形式を「よろいが」²と卓立の位置を末尾に移動させていた場合、複合法則に則っているとみなし「C1」の誤答に分類した。誤答「C2」は単語単独形式は誤答「C1」と同じであるが、助詞付きの形式において複合法則を適用しておらず、卓立の移動がないもの誤答「C2」とした。例えば単語を「まごい」³と言った場合には 1 モーラ卓立なので誤答（C 型）となる。そして助詞付き形式で「まごいが」⁴と卓立があった「い」⁵の位置を動かさなかった場合を「C2」の誤答に分類した。そして誤答「C3」は単語単独形式自体が鹿児島方言の二型の枠を超え、さらに助詞付きの形式において東京方言と同じように発音したものである。

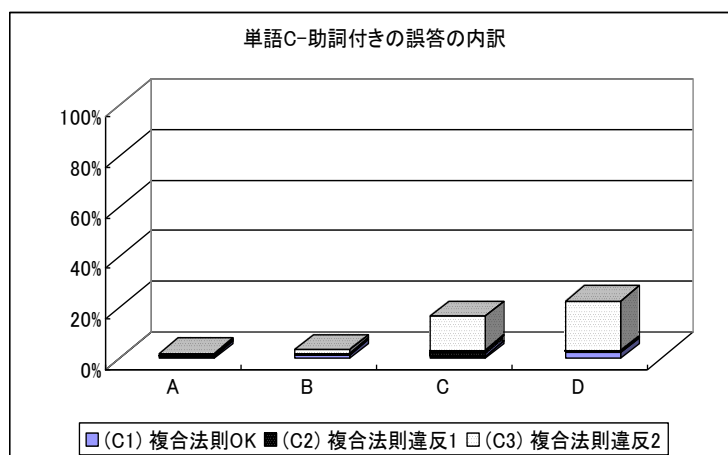


図 4.17 単語 C-助詞付きでの誤答の内訳

表 4.24 C 型で読んだ単語の誤答の内訳

	結果の分類	単語	助詞付き	Group 1	Group 2	Group 3	Group 4
鹿児島 方言 の枠外	C1 (複合法則 OK)	よろい まごい	よろいが まごいが	6/16 (37.5%)	8/21 (38.1%)	5/127 (3.9%)	9/87 (10.3%)
	C2 (複合法則違反 1) (卓立の移動なし)	まごい	まごいが	5/16 (31.3%)	4/21 (19.0%)	18/127 (14.2%)	2/87 (2.3%)
	C3 (複合法則違反 2) (上記以外)	よろい ながさき	よろいが ながさが	5/16 (31.3%)	9/21 (42.9%)	104/127 (81.9%)	76/87 (87.4%)
	合計			16/16 (100%)	21/21 (100%)	127/127 (100%)	87/87 (100%)

まずグループ 3 (父親 native)、グループ 4 (両親 native) に焦点を当てて誤答をみると、東京方言の誤答である誤答「C3」が多いことがわかる。次にグループ 1 (両親 native)、グループ 2 (母親 native) の誤答全体数をみると、単語単独形式の「誤答 C (その他)」に分類される数自体が少ないため、どの誤答が多いかという方向性は見出せない。だが誤答「C1」に分類される割合をグループごとに比較すると、グループ 1 (両親 native)、グループ 2 (母親 native) はグループ 3 (父親 native)、グループ 4 (両親 non-native) よりもその割合が高いことが分かる。つまりグループ 1 (両親 native)、グループ 2 (母親 native) は単語自体を 1 モーラ卓立で発音していたとしても、助詞付きの形式のときには複合法則を守って発音しているのである。さらに誤答「C1」と「C2」を合わせてみると、グループ 1 (両親 native)、グループ 2 (母親 native) は「音節」と「複合法則」は保持していないかもしれないが、「二型」の範囲を超えることとはないことがわかる。つまり「二型」であることが誤答の中でも最後まで残っていることから、「二型」であることが鹿児島方言らしさを特徴づけているとすることができるであろう。

ここまでの話をまとめると、両親あるいは母親が鹿児島方言の二型地域の出身である場合、単語単独形式における「誤答 C」(鹿児島方言の韻律的特徴を違反) 自体が少ないが、助詞付き形式における誤答をみると「音節」と「複合法則」を破っても「二型」を保とうとしていることが明らかとなった。一方で、母親、あるいは両親が鹿児島方言の二型以外の出身の場合、単語単独形式を「誤答 C」で言い、その助詞付き形式での内訳では東京方言で発音される場合が多い傾向が明らかとなった。

4.6.4 単語 A 型と単語 B 型の誤答の共通性

ここでは 4.6.2 と 4.6.3 でみた単語単独形式を A 型と B 型で読まれたものが助詞付き形式の誤答ではどのようなになっていたのかを並べて比較する。下の表 4.25 は 4.6.2 と 4.6.3 で提示した助詞付き形式の誤答を統合した結果である。真ん中を中心に「単語 A 型」と「単語 B 型」に分けて、それぞれの正答と誤答をグループごとに示している。表 4.25 上部に位置している「AA」と「BB」は単語も

助詞付きも複合法則に則って言うことができた正答率を示している。太枠で囲った部分は「誤答率」を示しており、それぞれ誤答の種類は太枠の中に書かれている。そして右端の枠の外に「枠内/枠外」と示してあるのは、鹿児島方言の韻律的特徴の枠内であるのか、それとも枠外であるのかを示している。

表 4.25 助詞付き形式における全体の誤答(単語単独形式が A/B 型のみ)

単語 A 型					単語 B 型					
	Group 1	Group 2	Group 3	Group 4		Group 1	Group 2	Group 3	Group 4	
AA (正答)	89.3%	67.2%	52.5%	12.0%	BB (正答)	75.7%	45.1%	52.3%	22.7%	枠内
AB (B 転)	81.0%	61.0%	64.5%	22.5%	BA (A 転/移無)	98.2%	99.0%	94.0%	84.7%	
AC1&2 (移無)	19.0%	33.8%	24.7%	55.0%						枠外
AC3 (東京)	0.0%	5.2%	10.7%	22.5%	BC (東京)	1.8%	1.0%	6.0%	15.3%	
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

太枠は誤答を示す

4.6.2 と 4.6.3 で問題となっていたのは「卓立の位置を動かしていない」と思われる誤答「AC1」「AC2」と誤答「BA」である。ここで「なぜ卓立の位置を動かしていない」ということができるのか、両者の誤答を整理して考察する。

まず表 4.25 の右側にある「単語 B 型」の誤答を整理してみる。誤答「BA」は 4.6.3 でも述べたように二つの特徴をもっている。一つは鹿児島方言の韻律的特徴の範囲内にあるという特徴であり、もう一つは卓立の位置を動かしていないという特徴である。このどちらかの一つの特徴を反映して誤答「BA」が圧倒的に多くなっているのではなく、両者の特徴が重なることによって誤答「BA」はこのように高い誤答率を示しているものと考えている。それゆえ誤答「BA」だけ注目していたのでは「卓立の位置を動かしていない」ということはできない。

では表 4.25 の左側にある「単語 A 型」の誤答に目を向けて整理してみよう。「単語 A 型」の誤答は誤答「AB」と「AC1」「AC2」に集中していることがわかる。ではなぜこの二つに誤答が集中しているのだろうか、その理由を「東京方言へのアクセント変化」と「鹿児島方言の枠内での変化」という視点から考えみよう。

もし東京方言をそのまま模倣するような影響があるのであれば、同じように鹿児島方言の枠外である誤答 AC2(東京方言)の誤答率が半数近くあってもいいはずである。しかしながら実際には誤答「AC1」「AC2」の「卓立の位置を移動しない」という誤答に集中している。また鹿児島方言の韻律的特徴の枠内で変化するのであれば、誤答「BA」のように誤答「AB」にもっと集中してもよいはずである。しかしながら実際には誤答率はそのような分布は示していない。このように「東京方言へのアクセント変化」と「鹿児島方言の枠内での変化」という二つの視点からこの結果をみると、誤答

「AC1」「AC2」はやはり東京方言の助詞付き形式「卓立の位置を移動しない」という特徴を模倣しているものと考えられる。そしてもう一度「単語 B 型」での誤答「BA」に目を向けてみると、ちょうど「単語 A 型」の誤答「AB」（鹿児島方言の韻律的特徴の範囲内での変化しようとするもの）と誤答「AC1」「AC2」（「卓立の位置を移動しない」という東京方言の助詞付き形式の特徴）の誤答を合わせたような数値になる。

4.6.1 から 4.6.4 では「助詞付き形式」における誤答の方向性を調べてきた。その結果、助詞付き形式では誤答はできるだけ鹿児島方言の韻律的特徴の範囲内に収めようとする力が働くのと同時に、東京方言の助詞付きの形式とよく似た「卓立の位置を動かさない」という誤答も多いことが明らかとなった。前者の誤答「できるだけ鹿児島方言の韻律的特徴の範囲内で収めよう」とする傾向はグループ 1（両親 native）、グループ 2（母親 native）、グループ 3（父親 native）で観察され、グループ 4（両親 non-native）は後者の「卓立の位置を動かさない」という東京方言の助詞付きの形式が増える傾向が観察された。窪菌（2006, 2007）では単語単独形式、新造複合語形式においては東京方言の影響があるとされ、助詞付き形式では複合法則は比較的高い割合で保持されていると言われてきた。しかしながら、この調査結果から助詞付き形式においても東京方言の影響が観察され、東京方言の「卓立の位置を動かさない」という特徴を模倣している傾向を確認できた。

今回の調査は 2009 年 8 月から 2010 年の 1 月にかけて行われたが、窪菌（2006, 2007）の調査時からはずか 3、4 年しか経っていない。この点を考慮すると若年層の鹿児島方言がかなり早いスピードで変化していると考えられる。今回は鹿児島市内の若年層を中心に調査を行ったが、変化のスピードが鹿児島市外と一様なのかどうか、また方言の変化を加速させている要因は何なのかという疑問が出てくるが、これらの点については今後の課題としたい。

4.6.5 個人差

近畿方言のときと同様に、話者ごとに伝統的な鹿児島方言を保持している割合は異なる。ここでは個人差をみるために「単語単独形式」をベースに「助詞付きの形式」と「単語＋助詞付き」における複合法則の達成度合い、および「新造複合語」をベースにした「単語＋助詞付き」形式における両者の複合法則の達成度合いをそれぞれ散布図にしてみることにする。「単語＋助詞付き」形式は「単語単独形式が伝統的な鹿児島方言の A/B 型で言うことができ、なおかつその単語に複合法則を適用して正しく言うことができたもの」を表している。これは「語彙アクセント」と「複合法則」を同時に満たさなければならないため、かなり厳しい基準といえる。下の図 4.18 は「単語単独形式」と X 軸にとり、グループ間の差が観察された「助詞付きの形式」を Y 軸にして、各個人をグループ別に表した散布図である。

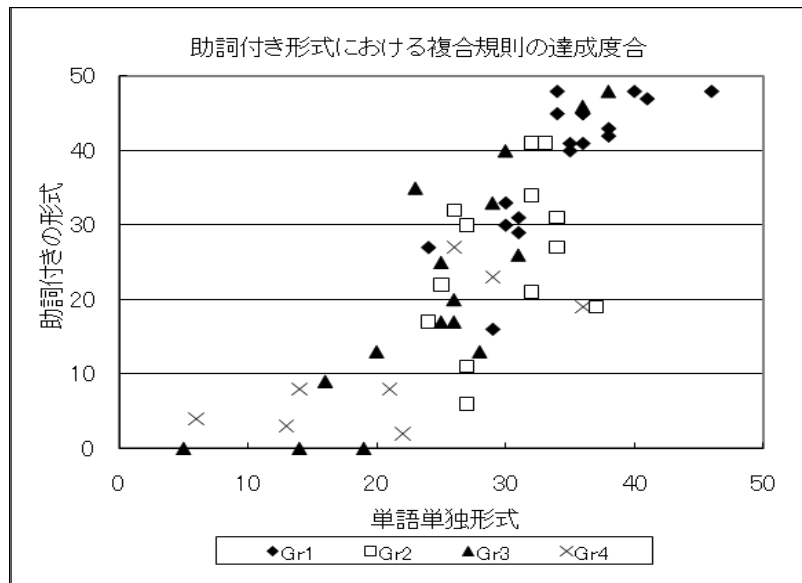


図 4.18 助詞付きの形式における複合法則の達成度合いをみた散布図

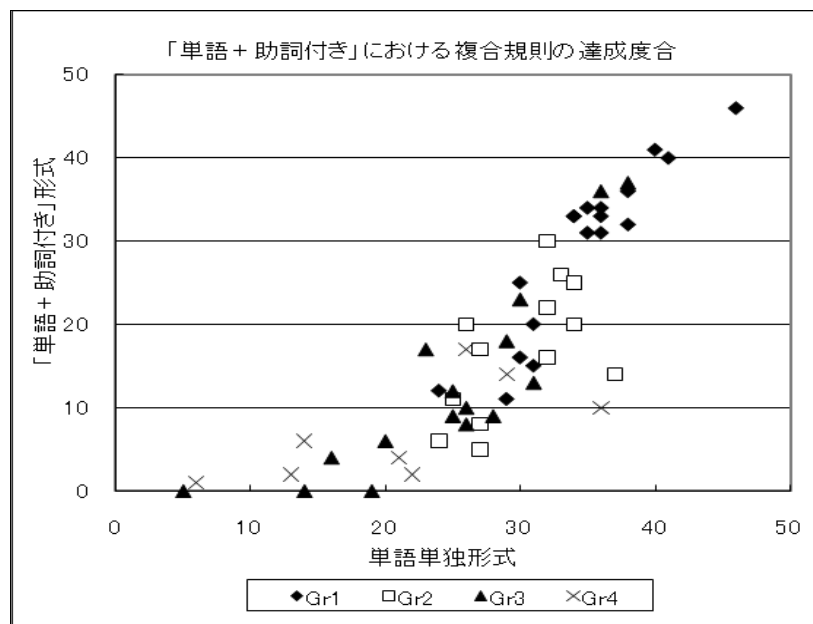


図 4.19 「単語＋助詞付き」の形式における複合法則の達成度合いをみた散布図

図 4.18 をみただけでも単語単独形式における鹿児島方言の保持率と助詞付き形式における複合法則の達成度合いとの間に相関関係があることが分かる ($r = 0.82, p < .001$)。だが、さらに厳しい基準である「単語＋助詞付き」形式における複合法則の達成度合いをみると、さらに強い相関関係の傾向を読み取ることができる(図 4.19)。この図 4.19 の相関係数は前者のものよりもわずかに高かった ($r = 0.84, p < .001$)。単なる「助詞付き」形式の達成度合いの図 4.18 と比べると、図 4.19 はより鮮明に複合法則の達成度合いを表しているといえる。

では複合法則の達成度合いが最も低かった「新造複合語」形式はどうなっているのでしょうか。ここでの複合法則の達成度合いは、単語単独形式をもとに複合法則を適用して新造複合語を発音できるかどうかである。予測では単語単独形式が高かったとしても、新造複合語の後部要素の影響を受けて

複合法則の達成率は半数になるであろうと考えた。実際にグループごとの比較をするとグループ間に統計的有意差はほとんど観察されなかったが、個々人ではどのような傾向をみせるのだろうか。図 4.20 は個々人の単語単独形式の正答度合いと新造複合語形式における複合法則の達成度合いを示したものである ($r = 0.77, p < .001$)。

図 4.20 をみるとグループに関係なく、新造複合語における複合法則の達成度合いは図の中の点線の枠で示したように、ほぼ真ん中に位置していることがわかる。だが図 4.20 の右上に位置している個人がいることも確認できる。では、より厳しい基準である「単語+助詞付き」の形式で高い複合法則の達成度合いを示している人は新造複合語においても高い達成度合いを示すのではないかと考えられる。これを図示したものが次の図 4.21 である。

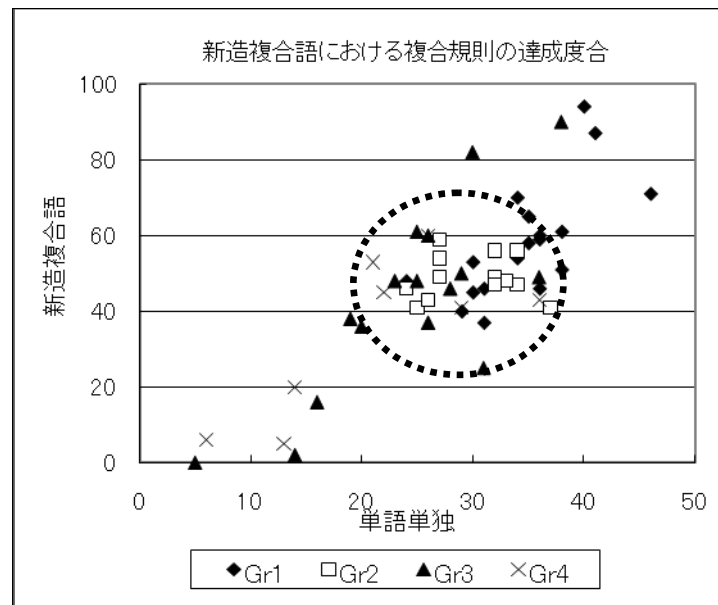


図 4.20 単語単独形式と新造複合語形式における複合法則の達成度合いの散布図

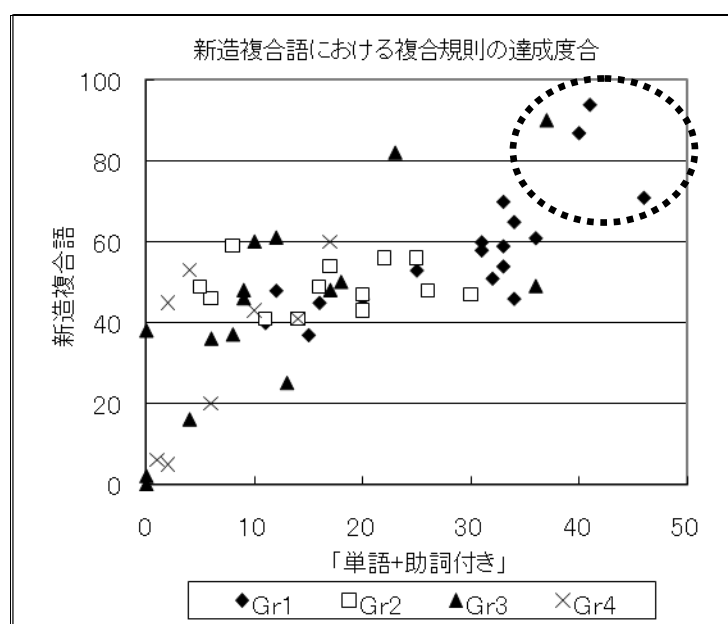


図 4.21 「単語+助詞付き」と新造複合語形式における複合法則の達成率の散布図

図 4.21 は一番厳しい基準である「単語＋助詞付き」形式を X 軸にとり、Y 軸には「新造複合語」形式における複合法則の達成度合いを散布図にしたものである ($r = 0.72$, $p < .001$)。この図 4.21 の点線で囲った部分が図 4.20 で右上に位置していたものを示す。この点線で囲った四つの個人を図 4.20 で見ても動きは見受けられない。だが図 4.20 で真ん中周辺に固まっていた個人は「単語＋助詞付き」という厳密な基準をベースにして散布図にした図 4.21 をみると、複合法則の達成度合いは半分程度に留まっていることがわかる。

一つのグループとして捉えると個人の傾向を掴むことはできないが、この節では 1 人ずつ「単語単独形式」、「助詞付きの形式」、「新造複合語形式」、「単語＋助詞付き」でどの程度伝統な鹿児島方言を保持できているのかを相関関係とう観点から調べてきた。相関関係が強かったのは「単語単独形式（語彙アクセント）」と「助詞付き（アクセント規則）」、および「単語単独形式（語彙アクセント）」と「単語＋助詞付き（語彙アクセントとアクセント規則の複合型）」の間であることが分かった。近畿方言の「単語単独形式（語彙アクセント）」と「新造複合語形式（アクセント規則）」でも相関関係が強い傾向が観察された。また「単語＋助詞付き」という厳しい基準をベースにして「新造複合語形式」の複合法則が達成されているかどうかをみると、「単語＋助詞付き」形式の達成度合いが高い人は東京方言の影響が大きいとされる「新造複合語形式」においても同じように達成度合いが高いということが明らかとなった。鹿児島方言の個人差を分析することで明らかになった点は、語彙単独形式において方言形を保持しているのであれば、その話者は音韻規則の達成率も高いということである。

ここで近畿方言の個人差をみたときと同様に「方言話者の定義」に話題を移して個人差のことを考えてみよう。近畿方言のグループ 4 (両親 non-native) は「習得の良くできている人とそうでない人」とバラつきが大きかった。では鹿児島方言のグループ 4 (両親 non-native) はどうか。鹿児島方言のグループ 4 (両親 non-native) の人数が少ないことも影響しているが、バラつきがあるといえるだろうが、近畿方言ほどのバラつきはない。鹿児島方言のグループ 4 (両親 non-native) は習得がよい人でも鹿児島方言の習得率や複合法則の達成率は半分程度である (図 4.19、図 4.21 参照)。この傾向はグループ 3 (父親 native) にも当てはまる。このことを踏まえて方言調査における方言話者のことを考えると、もし同じ土地で調査を行ったとしてもグループ 4 (両親 non-native) の話者が調査に加わる限り、データにバラつきをもたらす可能性があると考えられる。

4.6.6 結果Ⅱのまとめ

この 4.6 では「助詞付き形式」に焦点を当て、この形式における誤答分析を行った。この「助詞付き形式」は鹿児島のアクセント規則である「複合法則」がきちんと習得できているかどうか確かめるもので、単語単独形式自体が伝統的な鹿児島方言のアクセントであるかどうかは問わない。そこでここでは単語単独形式を A 型、B 型、C 型で読んだものに分類して、それぞれの型で読んだ単語自体が助詞付きの場合には「複合法則」に則って発音できたかどうかを調べた。

その結果、A 型で単語単独発音をしたものの誤答の中で一番多い誤答は B 型で助詞付き形式を発音する「AB」というもので、その次が卓立の位置を動かしていないように見える「AC1」、「AC2」という誤答であった。前者は B 型で読まれるという A 型単語からの「B 転化」であり、鹿児島方言の韻律的特徴 (二型、音節) 範囲内である。一方、後者の C 型で読まれるものは鹿児島方言の韻律的特徴の

二型を飛び越え、卓立を置く位置を変えないと捉えることができるものである。これは東京方言の助詞付き形式でアクセントの位置を変えないものを模倣しているようにもみえる。また「卓立の位置を動かさない」という誤答「AC1」、「AC2」はグループ4の両親ともに鹿児島方言以外の出身が高い割合を示すことがわかった。

では単語をB型で読んだ場合はどうか。B型で発音した単語の場合、助詞付きの誤答が二種類の「BA」、「BC」である。誤答分析の結果、グループに関係なく圧倒的に「BA」に誤答集中することが明らかとなった。この誤答「BA」はちょうどA型の「AB」と「AC1」、「AC2」という誤答を合わせた数値になることから、「鹿児島方言の韻律的特徴内での変化」と「卓立の位置を動かさない」という東京方言の助詞付き形式の影響が重なっているものだと考えられる。

個人差をみた4.6.5では、単語単独形式をベースに「助詞付き」、「単語＋助詞付き」をみると、非常にきれいな強い相関関係があることが明らかとなった。さらに一番厳しい基準である「単語＋助詞付き」をベースに複合法則の達成率の悪かった「新造複合語形式」をみると、「単語＋助詞付き」で高いパフォーマンスを示す個人は僅かではあるが、新造複合語でも東京方言の影響を受けることなく、しっかりと「複合法則」を保持して高い達成率を示していることが明らかとなった。これまで「助詞付き形式」には東京方言の影響は少ないとされていたが、この誤答分析の結果、「助詞付き形式」でも東京方言の「助詞付き形式」の影響とみることができる傾向があることが確認された。

4.7 まとめ

この章の前半では鹿児島方言の特徴や先行研究を紹介し、そして鹿児島方言における調査概要（調査語彙、調査場所、被調査者）を説明した。調査結果は次の二つに分けて提示した。調査結果Ⅰでは全体像を把握するため、どの程度鹿児島方言の韻律的特徴（二型、音節、複合法則）に則って発音できていたかを示し、その習得率あるいは達成率に親の出身地による影響があるのかどうかを統計的に調べた。そして調査結果Ⅱでは「助詞付き形式」における誤答分析を行い、誤答がどのような傾向を示すのかを明らかにした。ここからは鹿児島方言での調査結果を振り返りながら以下二点について明らかにした点を確認する。

■親の出身地の違いによって方言習得の差はあるのか？

■方言習得に違いがあるとすれば、その違いはどこに（語彙的/規則的）現れてくるのか？

■親の出身地の違いによって方言習得の差はあるのか？

この答えとして「親の出身地の違いによる方言習得の差はある」ということがこの鹿児島方言の調査でも明らかとなった。その根拠となるのは、どの形式においても統計的有意差がグループ間で確認されたからである。顕著にその違いが現れたのは「助詞付き」および「単語＋助詞付き」の形式で、鹿児島方言の複合法則の習得度合であった。

一方、親の出身地による差がほとんど確認されなかったのは新造複合語の形式であるが、唯一グループ1（両親 native）とグループ4（両親 non-native）の間にのみ統計的有意差を確認した。新造複合

語形式では、東京方言の影響があるかどうかみるために後部要素に起伏式 (=下降調(+)) / 平板式 (非下降調(-)) の要素を付けた。その結果、ほぼ予測通りに東京方言の影響を受けるような形で、起伏式のものは A 型 (下降調(+)) で、平板式のものは B 型 (非下降調(-)) で発音するという傾向が現れた。この結果から鹿児島方言における新造複合語の複合法則は窪菌 (2007) の指摘通り崩壊していると言えるであろう。

■ 方言習得に違いがあるとすれば、その違いはどこに(語彙的/規則的)現れてくるのか？

「語彙的」と「規則的」の間には統計的な差はないと言える。両者に統計的な差はなかったが、グループによって「語彙アクセント」と「アクセント規則」の習得度合いが逆転することが明らかとなった。両親が鹿児島出身のグループ 1 (両親 native) のみが「アクセント規則」>「語彙アクセント」という傾向を示し、那須 (2004) の結果と同じであった。

近畿方言の結果では近畿方言の韻律的特徴を保持していながら「式保存の法則」が習得できていないという実態が明らかとなり、「近畿方言らしく聞こえるけれども本当の近畿方言とは異なる」ということが親の出身地と関係していることがわかった。では鹿児島方言にはこのような実態はないのだろうか。

鹿児島方言でも近畿方言のような傾向が観察されるかどうかを確かめるため「助詞付き形式」での誤答分析を行った。その結果、できるだけ鹿児島方言の韻律的特徴を保持しながら型を間違えるという誤答が多く、これは近畿方言と同様の傾向を示した。しかし、この鹿児島方言の韻律的特徴内での誤答とは別に、東京方言の助詞付き形式で「卓立の位置を動かさない」という影響によるものと考えられる誤答があることも明らかとなった。窪菌 (2006, 2007) では単語単独形式および新造複合語形式に東京方言の影響があるとされていたが、ここでは「助詞付き形式」でも東京方言の影響があるのではないかという傾向を示した。

音韻規則である鹿児島方言の複合法則の習得と適用という点に焦点を当てると、「助詞付き」および「単語＋助詞付き」の形式で親の出身地による違いが顕著に表れることがわかった。これらの点を考慮すると鹿児島方言においても「当該方言らしく聞こえる」けれども、その方言の文法の一部である複合法則の習得には親の出身地による違いがあることが示された。

第 3 章と同様に先行研究で主張されている以下の二点について、この鹿児島方言の結果と比較してみる。

■ 母親の出身地が当該方言地域であれば方言習得もよい (柴田 1958, 杉藤 1984)

単語単独形式においては、隣り合うグループ同士の間には統計的有意差は確認されなかった。また複合法則を用いる助詞付き形式においてはグループ 1 (両親 native) とその他 3 つのグループ間に統計的な有意差があることが示されているが、グループ 2 (母親 native), グループ 3 (父親 native), グループ 4 (両親 non-native) 間には有意差はなかった(表 4.11 参照)。このことより複合法則については柴田 (1958) と杉藤 (1984) が主張する「母親の影響がある」という説は鹿児島方言の調査結果からは確認されなかったといえるであろう。だが単語単独形式については隣り合うグループ同士の間には有意差がないことから何らかの「母親の影響」があると言えそうである (表 4.9 参照)。この単語単独形式における「母親の影響」については、第 5 章で近畿方言の結果と重ね合わせて検討する。

■親の影響があるとすれば語彙だけではなく音韻規則にも影響がある (Payne 1976)

鹿児島方言の調査では助詞付きの形式、および「単語＋助詞付き」の形式（両者とも音韻規則を含む）に統計的な有意差が観察された。このことから Payne (1976)の主張を支持する結果が得られたと言える。

これまで方言話者の条件は「その土地で生まれ育った者」という緩やかな条件である場合もあった。しかしながら、この近畿方言と鹿児島方言の結果からみえてくるのは、同じ土地で育っていて言語形成期をすでに過ぎた者でも、習得した方言に違いがあることが明らかとなった。その習得した方言に違いをもたらす要因が親の出身地であろうということが、統計的にも示される結果となった。次章では近畿方言と鹿児島方言の結果を受けて「方言話者の条件とは誰なのか」ということをについて議論を進めていく。

ⁱ 本稿の一部は New Ways of Analyzing Variation 38 (2009 年 10 月 23 日於 University of Ottawa, Canada) でのポスター発表 “Parents *Do* matter in dialect acquisition: Evidence from the Kansai dialect of Japanese” で公表した。

ⁱⁱ 名詞句は複合語ではないが、鹿児島方言では単語単独形式以外はすべてこの音韻規則に従うため、ここでは名詞句も形態的に複合語的であるとみなし句構造でも「複合語」と呼ぶことにする。

第5章 方言話者とは誰か

本研究の最終的な目標は 2.1.3 の「方言話者選定条件による比較」でも示したとおり、方言の質を保証しつつ現実に即した形で方言話者の条件を設定することである。前者の「方言の質を保証する」というのは言語形成の背景に個人的な差（たとえば父親あるいは母親が当該方言地域の出身でない場合など）があったとしても、その差が統計的に顕著な違いをもたらすようなものではないものを指す。また後者の「現実に即した形の方言話者の条件設定」は、三世代ではなく親子二世代間に注目して方言話者の条件を設定しようというものである。その 2.1.3 でも挙げた「緩い条件」と「厳密な条件」の良い点を取り、大都市で方言調査を行う際、調査者にとって win-win（方言の質を保証しつつ当該方言話者を比較的探しやすい）の方言話者選定条件とは何であろうか。

5.1 これまでの方言話者の基準

方言話者のタイプを考慮した研究は第2章の 2.1.3 で挙げた Chambers and Heisler (1990: 40-46) がある。Chambers and Heisler (1990) では比較的緩い条件（当該方言圏外から移住してきた話者も方言調査に含める）による「方言話者」を調査対象者とし、その対象者から得られる言語データを出生地、言語形成期に基づいて方言調査の結果を提示する形をとっている。比較的緩い条件で「方言話者」を選んだ理由として Chambers and Heisler (1990) は「現代社会においては単一の民族で形成されるわけではないから『調査時にその土地に居住する者』が当該地域の方言話者であり、現代の社会状況と合う」としている。Chambers and Heisler (1990) は話者がどれだけその土地の者であるのかということを示すために「はえぬき」度合 “Regional Index (RI 値)” という指数を導入して調査結果を提示している。ここではまず Chambers and Heisler (1990) の「はえぬき度」(RI 値)の説明し、その問題点を挙げる。

5.1.1 RI 値の問題点 (1) —多様な要因

ここでは筆者が求める「二世代間によって質を保証する方言話者を設定する」という立場から、RI 値の問題点を指摘する。まず1点目の問題としては雑多な要因（異なる出生地、生育地、現在の居住地等）が含まれている点である。確かに言語運用を調べる調査であれば、調査時点で当該地域に居住している人々を無作為抽出で選んで調べることは有益かもしれない。だがそのような方法で選んだ話者について「方言の質を保証できているのか」というと、話者の統制がとられていないために均質性を求めることはできない。このような観点から再度、Chambers and Heisler (1999)の RI 値を見ると、筆者が求める「方言の質を保証できるような方言話者」とは程遠い。

表 5.1 (再掲) Chambers and Heisler(1990: 41) による RI 値

Status	RI	Profile*
Indigènes	1	born, raised, living in same place as parents (Quebec City region: QC)
	2	born, raised, living in QC region, parents born in province
Interlopers	3	born, raised, living in QC region, parents born out of province
	4	raised and living in QC region, but born elsewhere in province, parents born out of province
	5	raised and living in QC region, but born out of province, parents born out of province
	6	living in QC region, raised elsewhere in province, born out of province, parents born out of province
Interlopers	7	living in QC region, born and raised out of province, parents born out of province

その土地本来の方言の姿あるいは過去のその方言資料と比較するのであれば、方言の質が保たれていなければならない。そのように方言の質に厳密さを求めるのであれば、変化をもたらすような要因を排除して方言話者を選択しなくてはならない。このような観点から Chambers and Heisler (1999) が提案した幅広い RI 値ではなく、よりの絞った RI 値、具体的には RI 値 1-2 に相当する話者を対象とした方言話者を求めることが理想的であることがいえる。

5.1.2 RI 値の問題点 (2) – RI 値の産出方法の欠陥

2.1.3 でも触れたが Chambers and Heisler (1999) が作った RI 値を求める産出方法は欠陥があることが高木 (2006) で指摘されている。その欠陥が生じる場合というのは基準点を与える点が「8-18 歳までの生育地」である点である。2.1.3 でもみたように、話者に尋ねるのは出生地、現居住地、8-18 歳までの生育地、両親の出生/成育地であるが、「調査地」という重要な要素がどこなのか、ということをも明記していない点である。この問題点を高木 (2006) では指摘し新たな RI 値の産出方法を提示している。

(22) RI 値産出方法(改訂版)

高木 (2006) ではこれを Speaker's Regional Index (SRI) と呼ぶ。

1. 現在の居住地(=調査地)=1 (基準点)
2. 出生地、8-18 歳までの生育地、両親の出身地のスコアの合計を求める。
3. 1.で求めた[基準点]に 2.で求めた[各スコア合計]を足す。

Chambers and Heisler (1999) の産出方法と高木 (2006) の産出方法に代入した場合、きちんと RI 値 6 が算出されるのかを次の表 5.2 で見てみよう。このように RI 値をきちんと求められるのは高木

(2006) が改訂した方法であるとその方法の妥当性を主張している。そしてこの高木 (2006) の RI 産出方法を使って話者の RI 値 Speaker's Regional Index (SRI) (話者のはえぬき度) と呼び、次のような産出方法を作っている (表 5.3 参照)。

表 5.2 RI 値産出方法の比較—Chambers and Heisler (1999) と高木 (2006) —

	Chambers and Heisler (1999) Original RI		高木 (2006) による SRI	
基準点	8-18 歳までの生育地	無条件で 1 を与える	現在の居住地 (=調査地)	無条件で 1 を与える
各スコア	出生地	他の州なので 2	出生地	他の州なので 2
	現在の居住地	調査地域なので 0	8-18 歳までの生育地	同じ州内なので 1
	両親の出身地	他の州なので 2	両親の出身地	他の州なので 2
	合計	5	合計	6

表 5.3 SRI のスコア (高木 2006: 48 より抜粋)

	出生地	生育地
当該県下	0	0
同一地方内	1	1
他地方	2	2

- スコアは[現在の居住地]との異同によって求める。
- SRI = [それぞれのスコア] + [基準点 1]

さらに高木(2006)では Chambers and Heisler (1999)らが父親、母親の出身地を一まとめにして RI 値を出している点も問題であると指摘している。両親の出身地が当該方言地域の出身地かどうか、その点も顧慮すべきであるということで高木 (2006) では Parents' Regional Index (PRI) 値 (両親のはえぬき度) の導入を提案している。この PRI 値は親についても「はえぬき度」を取り入れようというものである。PRI の求め方は次のような方法である(表 5.4 参照)。

表 5.4 PRI の産出方法 (高木 2006:49)より抜粋)

	PRI	親 1	親 2	備考
はえぬき	1	0	0	両親が当該方言圏出身
↕	2	0	1	一方の親が当該方言圏出身
移住 2 世	3	1	1	両親とも当該方言圏外出身

さらにこの SRI 値 (話者の はえぬき度) と PRI 値 (両親の はえぬき度) をクロスさせてより細分化して話者を分類して調べたものが表 5.5 である。この表 5.5 をみるとかなり細分化された話者である

ことがわかる。

表 5.5 SRI と PRI のクロスによる話者のタイプ (高木 2006:49 より抜粋)

PRI \ SRI	1	2	3	4	5
1	①		②		
2		③			⑤
3		④			⑥

①「はえぬき」と呼ばれる話者。

②先の①の話者について当該方言の接触が多いと考えられる。

③両親のうち一方が当該方言圏外の出身。ゆえに家庭内で他の方言を聞く可能性あり。

④移住二世であるため両親ともに当該方言圏外の出身。

⑤⑥:当該方言圏外で出生・成育した話者。

点線枠: 本調査で行った調査対象者の範囲

実践枠: 調査の結果から本研究が求める「方言話者」の条件

筆者が行った近畿方言と鹿児島方言の調査結果から、方言習得には「親の出身地の影響がある」ということが示されていることから PRI 値 3 (両親とも当該方言圏外出身) は対象から外すことが妥当であろう。また方言圏外で成育した場合がある SRI 値が「3」以降の話者も対象から外すことが妥当と思われる。そうして排除した部分、つまり表 5.5 の中での実践の枠で示した部分を本研究が求める方言話者となる。さらに父親の出身地と母親の出身地の影響も考慮して方言話者の対象を絞ることについては 5.2.2 で提示する。

この節では方言話者のタイプを考慮した二つの先行研究 Chambers and Heisler (1999)と高木 (2006)を紹介した。両者とも「その時点、その場所における全ての話者」を対象にして彼らの言語使用の実態を調べている。実際の言語運用を捉えるためにはそのような視点も確かに重要である。だが本来のその土地固有の方言がどのようなもので、さらにどのような変化が起こっているのかということを知るためには話者の方言にバラつきがあってはならないだろう。そのためにはバラつきを生じさせないようなその土地を代表する話者である必要がある。

5.1.3 三世代前の情報の必要性

厳密な方言話者の条件では「三世代続けてその土地に居住している者」とある。だが、なぜ三世代、つまり祖父母の出身地まで規定しなければならないのだろうか。三世代続けてその土地に居住する者と二世代続けてその土地に居住する者とでは方言が異なるのだろうか。

この問題について調べるため、次に挙げる三つの先行研究のデータから分析を行う。国立国語研究所 (1965) の『共通語化の過程—北海道における親子三代のことば—』、同じく国立国語研究所 (1951)

の『言語生活の実態—白河市および附近の農村における—』、そして金田一（1967）の『日本語音韻の研究』に収められている「ガ行鼻音論」である。これら三つの先行研究のデータを通して「なぜ三世代まで考慮する必要がないのか」ということについて考察してみる。

国立国語研究所（1965）の『共通語化の過程—北海道における親子三代のことば—』

まず 1965 年に国立国語研究所から発行された『共通語化の過程—北海道における親子三代のことば—』の付録のデータを使い親子三代のことばがどのように変化しているのかをみることにする。

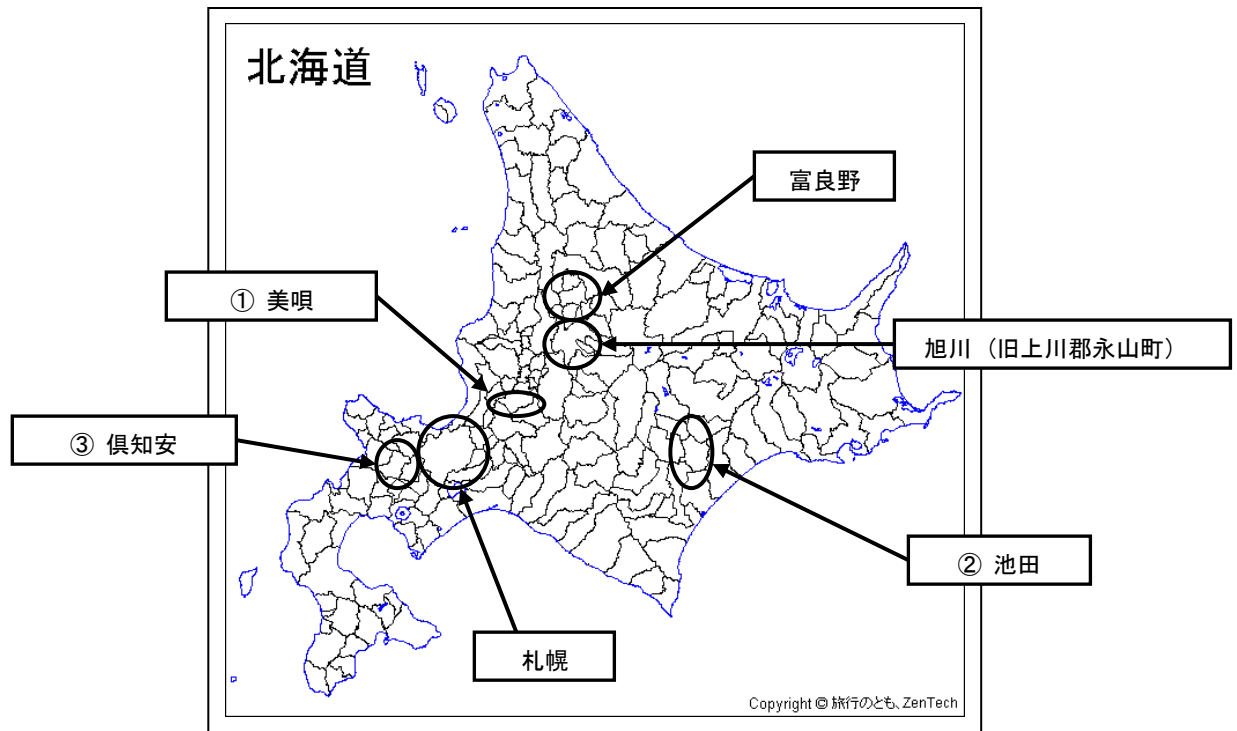


図 5.1 国立国語研究所（1965）『共通語化の過程』で調査された地域

北海道には元々アイヌの人々が先住民として居住していたが、明治以降、日本各地から多くの人が開拓従事者として様々な形（屯田兵、自由移民、集団移民）で移住した経緯がある。そのため北海道ではその土地の「アイヌ語」は存在していても、その土地固有の「日本語」は存在していなかったといえるであろう。この観点から北海道への移住を捉えると、新たな土地に本土の各地から多くの人々が各々の方言をもって移住していったと捉えることができる。そのような新たな地でどのように方言が伝承されるのか、またどのような共通語が話されているのかを親子三代を通して調べている。この北海道の調査では北海道各地（美唄、倶知安、池田等）に移住してきた人々の家庭を調査している。調査対象となるのは同じ世帯に居住する親子三世代で、各世代からアクセントと使用語彙の調査を行っている。図 5.1 の中で①美唄、②池田、③倶知安の各家庭の調査データが国立国語研究所（1965）の付録についている。各地域の各家庭での親子三世代のアクセント変化について言及されている部分をまとめると表 5.6 のようになる（国立国語研究所 1965: 22）。

表 5.6 『共通語化の過程』の第1世から第3世の調査結果 (昭和 34-35 (1959-1960) 年にかけて調査)

	① 美唄の橋本家	② 池田の小野田家	③ 倶知安の上野家
第1世代	(86 歳) 高知県出身 (屯田兵) 高知のアクセント体系(2 拍名 詞: I/ II・III/ IV/ V)を保持	(77 歳) 福井県出身 (集団移民) 無アクセント地域 (アクセントがない)	(75 歳) 徳島県出身 (自由移民) アクセントの区別ある
第2世代	(58 歳) 第一世代と同じ 高知方言の体系を保持	(46 歳) 無アクセント (アクセント意識なし)	(46 歳) アクセントの区別ある
第3世代	(33 歳) 4 モーラ以上の語は型が安定 2 モーラ以下の語は不安定	(21 歳) 無アクセント (アクセント意識なし)	(15 歳) 無アクセントに近い

国立国語研究所 (1965: 23) では「アクセントは第3世代になると無アクセントに近くなる」としている。その理由として「誰もいないところへ互にアクセントの違う方言の話し手が移住したため、それらの方言が衝突して、無アクセントが生まれたのであろう」と理由を挙げているが、本当に違う方言をもつ者同士が衝突すると無アクセントが生まれるのかどうかはわからない。例えば集団移民の人たち自身が無アクセント地域の出身であれば、移住先の北海道でも無アクセントのコミュニティが形成されるであろう。そのコミュニティの中で育った子供であれば当然、無アクセントを習得することができる。国立国語研究所 (1965: 23) では上記の三地点での調査結果を総括するようなアクセント変化を報告している。そのため「どの程度、第1世代のアクセントが第2世代、あるいは第3世代に伝承されていたのか」ということについて数量的は明示されていない。そこで、ここでは第1世代から第2世代、第3世代にかけてどの程度アクセントが保持され、またはアクセントが変化しているのかを調べるため、国立国語研究所 (1965) の付録の実際のデータを使って数量的に調べた。

まず美唄の橋本家の三世代の結果が表 5.8 である。表 5.8 の左側に書かれている「1・2 世」「2・3 世」は「第1世代と第2世代の間」「第2世代と第3世代の間」ということを表している。そして各世代間の横に書かれた数値が「(その世代間での) アクセントの一致数」と「(その世代間での) アクセントの不一致数」を表している (図 5.2)。この結果をみると「1・2 世代」間でのアクセント一致率が 87.9% と非常に高いことが分かる。表 5.7 で言及されていた通り、第2世代は第1世代と同じということが言えるであろう。一方この橋本家の「2・3 世代」間ではアクセント不一致の方が 80.1% とアクセント一致の 19.9% よりもはるかに上回る。「1・3 世代」間ではアクセントの不一致率が 86.1% とほとんど一致していない傾向がわかる。どうやら、この橋本家では方言の伝承に関して第2世代と第3世代の間で大きな違いがあることが言えよう。

表 5.7 美唄の橋本家—3 世代のアクセントの比較

美唄	アクセント 一致	アクセント 不一致	合計
1-2 世代	443 (87.9%)	61 (12.1%)	504 (100.0%)
2-3 世代	96 (19.9%)	386 (80.1%)	482 (100.0%)
1-3 世代	67 (13.9%)	415 (86.1%)	482 (100.0%)
1-2-3 世代	63 (13.1%)	413 (85.7%)	476 (100.0%)

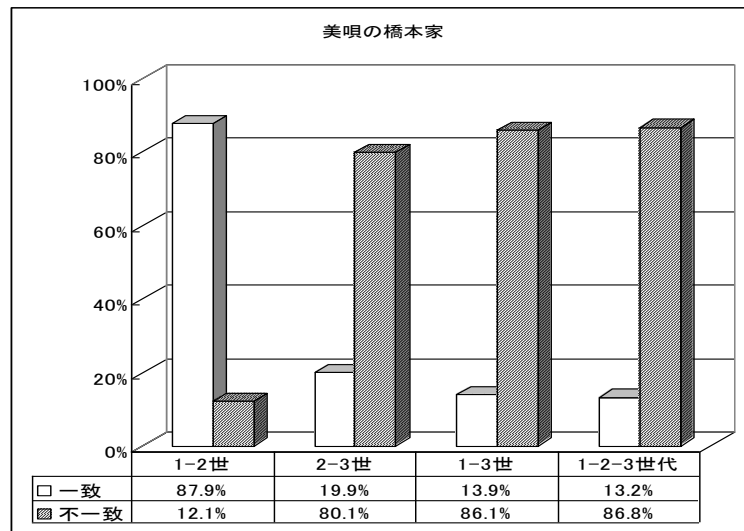


図 5.2 美唄の橋本家—3 世代のアクセントの比較

では他の地域はどうだろうか。次に表 5.9 と図 5.3 で池田の小野田家における各世代間のアクセントの一致率と不一致率を調べる。小野田家を見ると「1-2 世代」間のアクセントの一致率（38.6%）よりも「2-3 世代」間のアクセントの一致率（57.4%）の方が高いことが分かる。「1-3 世代」間ではアクセントの一致率は約半分である。これは美唄の橋本家の「1-3 世代」間の一致率（13.9%）に比べると高いといえよう。表 5.7 では第 1 世代が「無アクセント」地域の出身とあるため第 2 世代、第 3 世代も同じ傾向を示すものかと思われたが、実際は「2-3 世代」のアクセントの方が数量的に近いことが明らかになった。

表 5.8 池田の小野田家—3 世代のアクセントの比較

池田	アクセント 一致	アクセント 不一致	合計
1-2 世代	56 (38.6%)	89 (61.4%)	145 (100%)
2-3 世代	113 (57.4%)	84 (42.6%)	197 (100%)
1-3 世代	89 (49.2%)	92 (50.8%)	181 (100%)
1-2-3 世代	34 (26.8%)	93 (73.2%)	127 (100%)

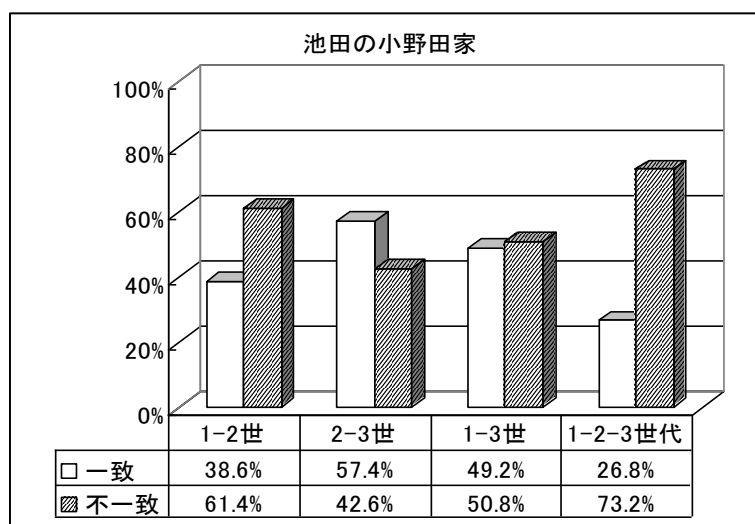


図 5.3 池田の小野田家—3 世代のアクセントの比較

では最後の俱知安の上野家について調べてみる。俱知安の上野家では「1-2 世代」間の一致率 (76.9%) が「2-3 世代」間の一致率 (47.0%) や「1-3 世代」間の一致率 (32.1%) よりも高いことがわかる。この点は美唄の橋本家と同じであるといえよう。

表 5.9 俱知安の上野家—3 世代のアクセントの比較

俱知安	アクセント 一致	アクセント 非一致	合計
1-2 世代	390 (76.9%)	117 (23.1%)	507 (100%)
2-3 世代	242 (47.0%)	273 (53.0%)	515 (100%)
1-3 世代	161 (32.1%)	340 (67.9%)	501 (100%)
1-2-3 世代	150 (29.6%)	357 (70.4%)	507 (100%)

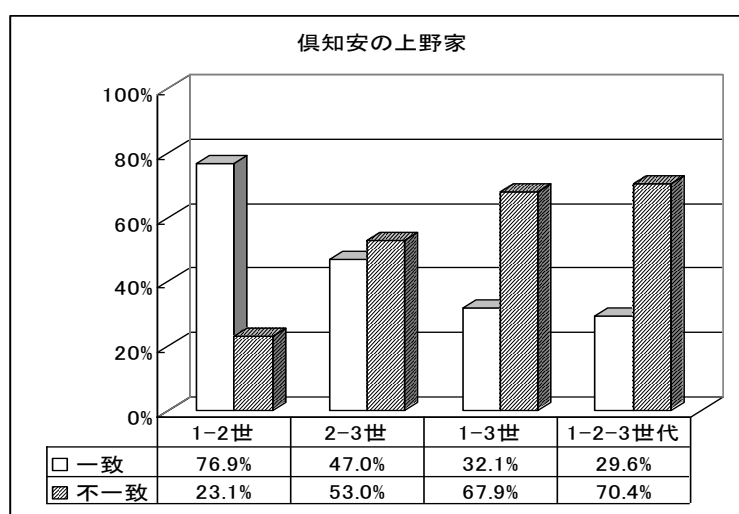


図 5.4 俱知安の上野家—3 世代のアクセントの比較

ここでは国立国語研究所 (1965) の付録にあるアクセントデータを用いて数量的に各家庭の 3 世代

間のアクセント一致率と不一致率を調べてきた。その結果、各家庭でどの世代間（「1-2 世代間」、「2-3 世代間」）でアクセントの一致率が高いかが異なることが分かった。しかしながら三つの家庭で共通して観察された傾向は、第 1 世代と第 3 世代を比較した「1-3 世代」間の一致率は他の伝承率の高い 2 世代間（「1-2 世代間」、「2-3 世代間」）の一致率よりも低いということである。ここでは三つの家庭の調査データしかないため強く主張することはできないが、この三家庭の傾向を総括すると、同じ家庭であっても、第 1 世代と第 3 世代のアクセントは他の隣接する世代間同士に比べると関係が薄いということができよう。また隣接する世代間同士の方がアクセントの一致率が高いということがいえるであろう。

国立国語研究所 (1951)『言語生活の実態—白河市および附近の農村における—』

国立国語研究所 (1951) では福島県白河市で、共通語がどの程度用いられているのか、共通語を話す度合を決定する要因は何かということを調べるために、15-69 歳までの男女 500 人を対象に調査を行っている。この白河市の白河方言はアクセントの型の区別をしない地域である。だが調査対象者の中にはアクセントの型を区別できる者もあり、なぜアクセントの型を区別できるかということについて調べている。この「アクセントの型が区別できるかどうか」は次の三つの要因、①父母の出身地、②本人の生育地、③本人の全居住経歴に関わると考え統計的に検証している。その結果「どの要因もおなじ程度に強い影響力をもつ」（国立国語研究所 1951: 345）と結論付けている。

ここでは国立国語研究所 (1951) のデータを用いて再度、統計的に検証してみる。表 5.11 は国立国語研究所 (1951: 253) のデータで「親の出身地のアクセント」と「話者本人のアクセント」との関係を示したものである。この表の左側には「両親あるいは片親の出身地がアクセントのない地域」か「両親ともアクセントのある地域」かで両親を分けており、上部に話者本人の発話データがアクセントが無いのか、あるいはアクセントがあるのかを示している。

表 5.10 国立国語研究所 (1951: 253) のデータ

人 両親のアクセント	本 アクセント無	アクセント有	合計
片親ないし両親がア ⁱ の ない地域出身	400 人(/407) (98.3%)	7 人(/407) (1.7%)	407 人
両親ともアのある地域出身	9 人(/31) (29.0%)	22 人(/31) (71.0%)	31 人
合計	409 人	29 人	438 人

表 5.11 のデータで筆者が χ^2 検定を行ったところ統計的に有意差があることが確認された ($\chi^2 = 212.35$, $df = 1$, $p < .001$)。国立国語研究所 (1951: 235)でも $\chi^2 = 223.42$, $df=1$, $p < .001$ とほぼ一致している。この国立国語研究所 (1951) のデータから「親の出身地のアクセントの有無」と「話者本人のアクセント有無」との間には密接な関係があることが明らかとなった。

金田一 (1967) 「ガ行鼻音論」

ここでは金田一 (1967) の「ガ行鼻音論」のデータを用いて「親のガ行鼻音」と「本人のガ行鼻音」との関係について統計的に検証を行う。金田一 (1967) は昭和 16 年 (1941) に数え年で 15 歳 (実際には 14 歳) の生徒 70 名を対象にガ行鼻濁音ができるかどうかの調査を行っている。調査語彙は「雨傘、鏡、葉書、上着」などの鼻濁音化する 12 語である。これら 12 語全て鼻濁音で言うかどうかを調べた。生徒本人の発音は 1 人ずつ調べていても、その生徒の両親の発音調査は行っていない。だが生徒の両親の出身地は調べている。その「両親の出身地が鼻濁音をもつ地域であるかどうか」と「生徒本人の鼻濁音の度合」で金田一 (1967: 192) の表 6 を簡略化すると表 5.12 のようになる。

表 5.11 金田一 (1967) によるデータの集計 (延べ数)

	全ての語を[n]	[ŋ]/[g]半々	全ての語を[g]	合計
[ŋ]音の地域出身の父母をもつ	35	45	14	94
[ŋ]/[g]の両音を半ばもつ地域の父母をもつ	0	5	7	12
[g]音の地域出身の父母をもつ	3	6	21	30
合計	38	56	42	136 ⁱⁱ

この表 5.12 をみると「両親の出身地が鼻濁音をもつ地域であるかどうか」と「生徒本人の鼻濁音の度合」との間に何らかの関係があるように見える。だが金田一 (1967: 193) は生徒の鼻濁音について「親や先生の影響とは見られない」と結論づけている。だが本当にそういえるだろうか。「親の鼻濁音」と「生徒の鼻濁音」との関係について χ^2 検定を行ったところ $\chi^2 = 39.6$, $df = 4$, $p < .001$ で有意差があることが確認された。つまり「生徒が鼻濁音をもっているかどうか」ということと「親が鼻濁音をもつ地域の出身であるかどうか」ということの間には関係があることが明らかとなった。

この節では国立国語研究所 (1965) の『共通語化の過程—北海道における親子三代のことば—』、国立国語研究所 (1951) の『言語生活の実態—白河市および附近の農村における—』、そして金田一 (1967) の『日本語音韻の研究』に収められている「ガ行鼻音論」のデータを用いて、親子三世代間のアクセントの伝承と、親子二世代間におけるアクセントと音の伝承について再検証をした。

その結果、国立国語研究所 (1965) の『共通語化の過程—北海道における親子三代のことば—』では 1 世代を隔てる第 1 世代と第 3 世代とはアクセントの一致率が低く、隣接する 2 世代間の方が高い一致率を示すことが明らかとなった。つづく国立国語研究所 (1951) の『言語生活の実態—白河市および附近の農村における—』では、「親の出身地が無アクセント地域かどうか」と「その子供の発音が無アクセントであるかどうか」との間には統計的に関係があることが明らかとなった。さらに金田一 (1967) のデータから「親が鼻濁音を持つ地域の出身かどうか」と「その子供が鼻濁音を使うかどうか」との間には関係があることが明らかとなった。

国立国語研究所 (1965) の北海道の調査では北海道という土地に固有の方言があったわけではないので厳密な方言話者の条件である「三世代続けてその土地に居住する者」には当てはまらない。だが第 1 世代と第 3 世代のアクセントが異なるということが明らかになったことは「三世代続けてその土地に居住する者」という厳密な条件が妥当なのかという疑問も出てくる。ここで明らかになったのは、親子二世代間に観察される関係性の強さである。アクセントや音の伝承には親子二世代間で関係

がある点を考慮すると、方言話者の条件を「三世代続けてその土地に居住する者」とするよりも「親が当該方言地域の出身かどうか」という親子二世代間に注意を向けた方がより現実的ではないだろうか。次節では近畿方言と鹿児島方言の調査結果を比較し、本論文が考える方言話者の条件について述べることにする。

5.2 方言話者とは誰なのか

5.2.1 近畿方言と鹿児島方言との異同の確認

ここでは「親の母方言の影響」について、3 章、4 章でみてきた近畿方言と鹿児島方言の結果を比較し両方言の異同を確認する。本論文では一貫して「語彙的」なものと「規則的」なものの習得に注目して「親の母方言の影響」を調べてきたが、方言によって「語彙的」なものと「規則的」なものが異なる。ここでは方言ごとに「語彙的」および「規則的」なものがどのような語の形式であったのかを表 5.13 で整理する。

表 5.12 両方言における調査語彙の形式と範疇

形式	近畿方言	鹿児島方言
単語単独	語彙的	語彙的
助詞付き		規則的
新造複合語	規則的	

両方言で「語彙的」なものと「規則的」なものとで異なる点は「助詞付き」の形式である。「助詞付き」形式が近畿方言では「語彙的」なものであるのに対して、鹿児島方言では「規則的」なものとされる。ではこの「語彙的」なものと「規則的」なものとにどのような違いがあったのかを具体的に両方言を比較してみる。まず近畿方言の単語単独形式と助詞付き形式、そして鹿児島方言の単語単独形式の正答と誤答の内訳をみてみる。

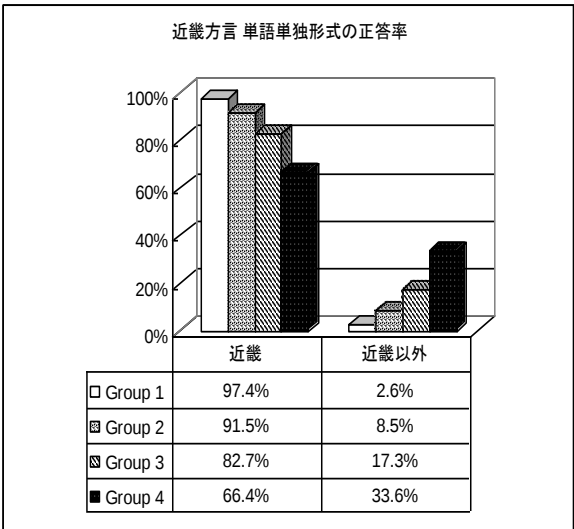


図 3.4 (再掲) 近畿方言 単語単独形式の正答率

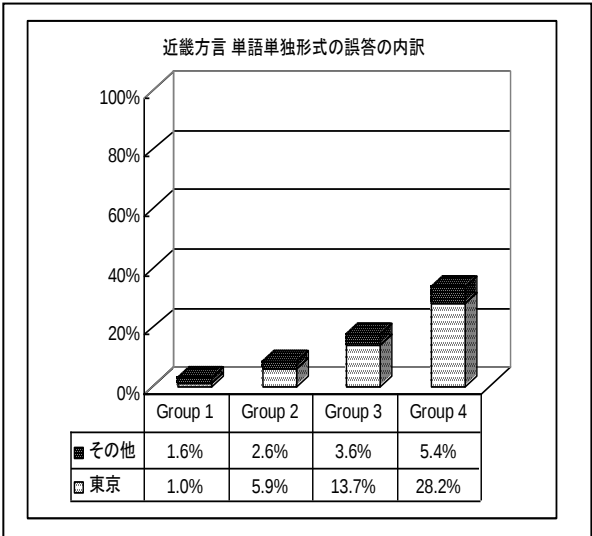


図 3.5 (再掲) 近畿方言 単語単独形式の誤答の内訳

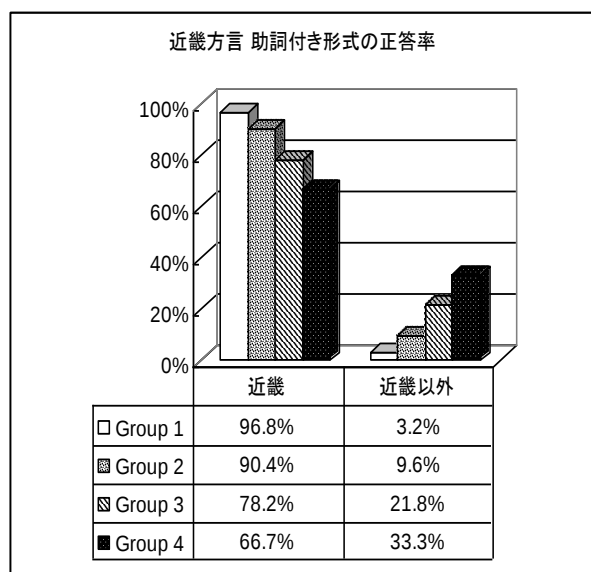


図 3.6 (再掲) 近畿方言 助詞付き形式の正答率

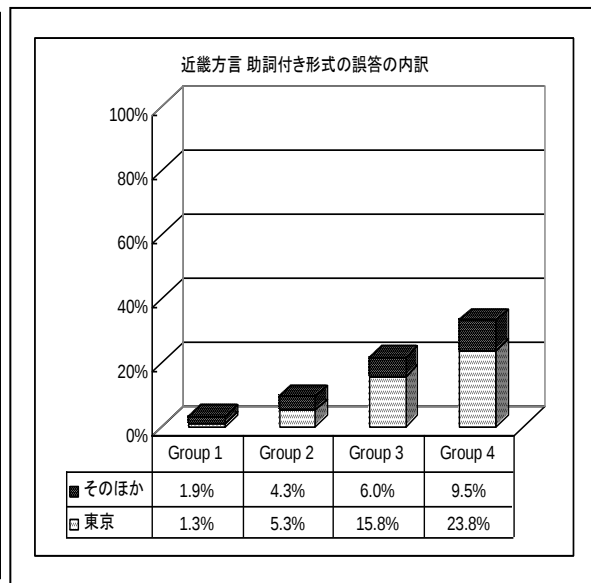


図 3.7 (再掲) 近畿方言 助詞付き形式の誤答の内訳

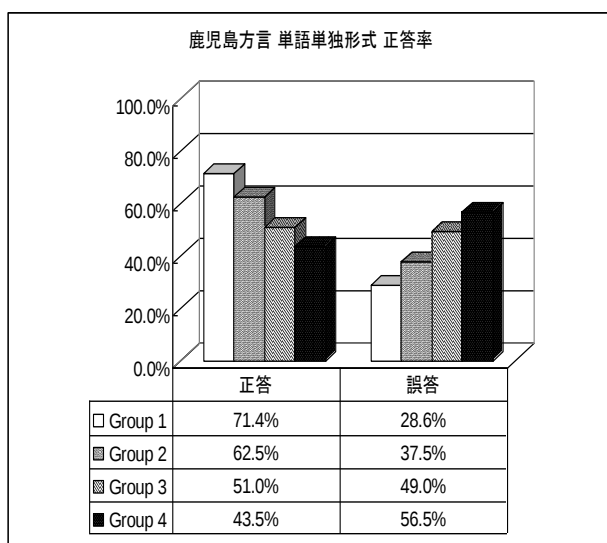


図 4.3 (再掲) 鹿児島方言 単語単独形式の正答と誤答

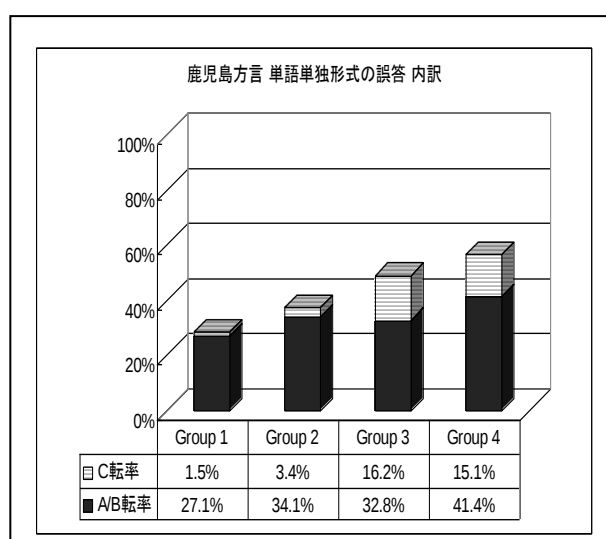


図 4.4 (再掲) 鹿児島方言 単語単独形式の誤答の内訳

図 3.6 から図 4.4 をみて両方言で共通するのは、誤答率がグループ 1 (両親 native) からグループ 4 (両親 non-native) にかけて上昇する傾向があるという点である。また近畿方言の方が鹿児島方言よりも誤答率が全体的に低いことが分かる。そして各方言の誤答の内訳をみると、近畿方言での誤答は「東京方言」と「そのほか」に分かれており、その誤答が東京方言に集中していることがわかる。近畿方言の「そのほか」という誤答は、単語単独形式であれば近畿方言の二音節名詞第一類の「●● (高高)」で発音した誤答、助詞付きの場合は東京方言とも近畿方言とも異なるアクセントのことを指す。近畿方言での誤答は「東京方言」に向かう傾向があることがわかる。一方、鹿児島方言の単語単独形式の結果 (図 4.3 と図 4.4) をみると、単語の誤答のほとんどが A 転/B 転という鹿児島の韻

律的特徴内での誤答で、C型という東京方言への誤答は少ないことが分かる。両方言に共通するのは誤答がグループ4（両親 non-native）にかけて増える傾向である。しかしながら、誤答の傾向は近畿方言が東京方言に向かうのに対して、鹿児島方言では鹿児島方言の韻律的特徴内での誤答が多いという点異なる点である。

では「規則的」なものの場合はどうか。表 5.7 で「規則的」とされた近畿方言の新造複合語形式、鹿児島方言の助詞付き形式、新造複合語形式の正答と誤答の内訳を比較してみよう。図 4.13 から図 4.16 が鹿児島方言の助詞付き形式の正答と誤答を A 型、B 型に分けて提示している。

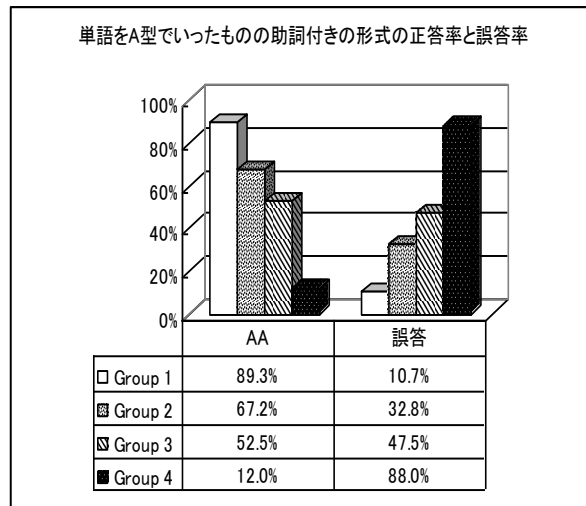


図 4.13 (再掲) 単語 A 型－助詞付き形式の正答率と誤答率

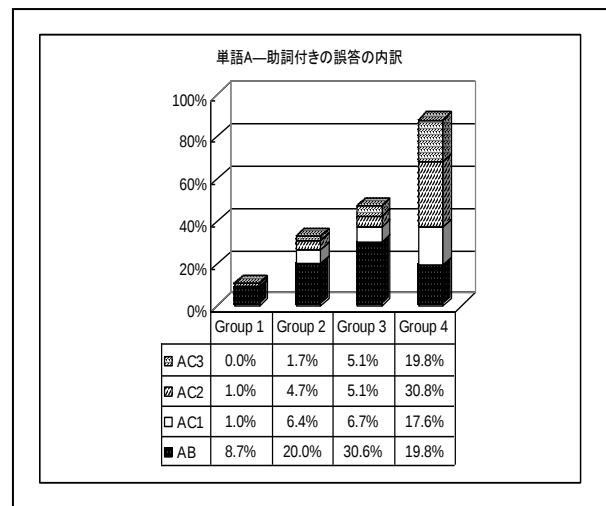


図 4.14 (再掲) 単語 A－助詞付き形式における誤答の内訳

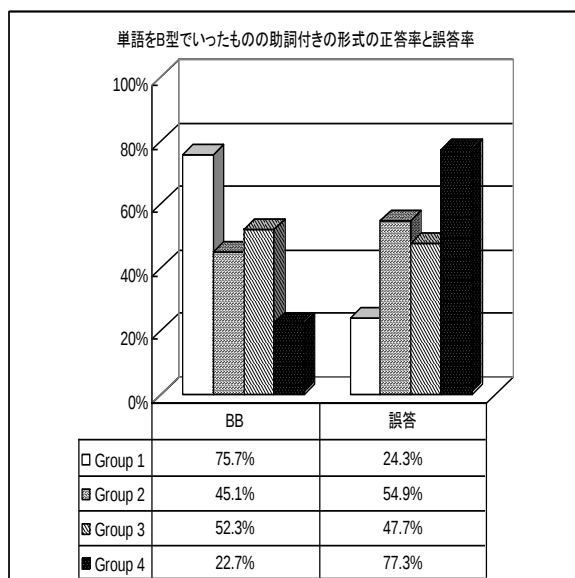


図 4.15 (再掲) 単語 B 型－助詞付き形式の正答率と誤答率

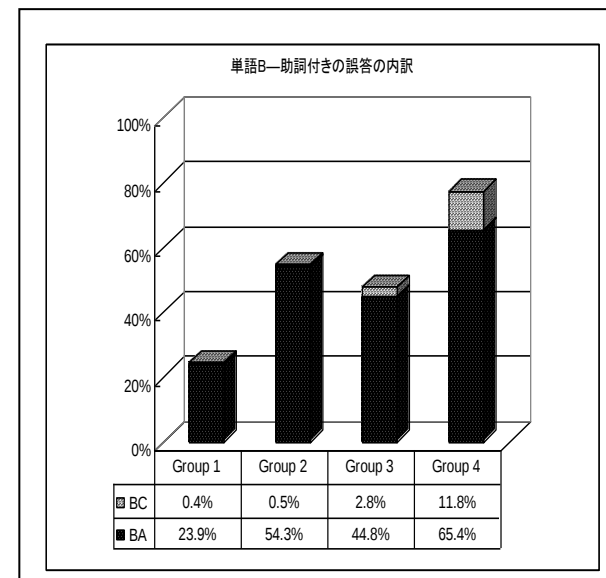


図 4.16 (再掲) 単語 B－助詞付き形式における誤答の内訳

図 4.13 から図 4.16 の鹿児島方言の助詞付き形式から分かるのは、誤答はグループ4（両親 native）が多いの是一目瞭然であるが、それよりも誤答の傾向が「できるだけ鹿児島方言の韻律的特徴の範囲内で間違える」というものに集中するという点である。この点は単語のみを A 型で言っても B 型で言っても助詞付きの形式では「できるだけ鹿児島方言の韻律的特徴の範囲内で間違える」という傾向

が観察された。また A 単語の誤答（図 4.14）に限ってみると、誤答が C 型（鹿児島県の韻律的特徴の範囲を超える誤答）がグループ 4（両親 native）にかけて増加する傾向があることが明らかとなった。では両方言で調べた新造複合語の結果はどうであったのか。図 3.10 から図 5.5 は近畿方言、鹿児島方言の新造複合語における誤答を示している。

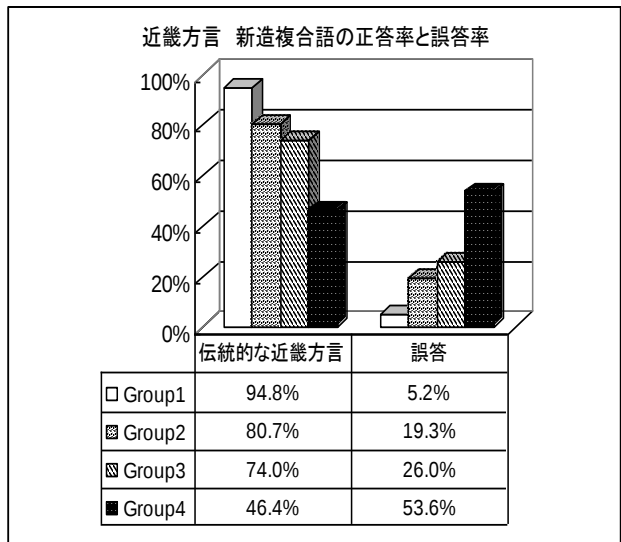


図 3.10 (再掲) 近畿方言 新造複合語の正答率と誤答率

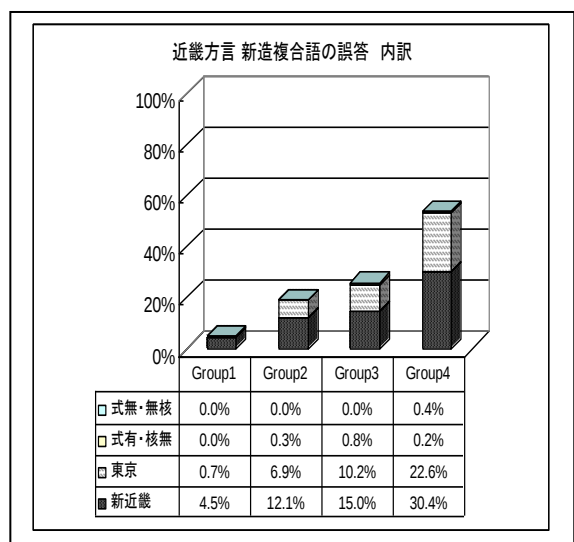


図 3.11 (再掲) 近畿方言 新造複合語の誤答の内訳

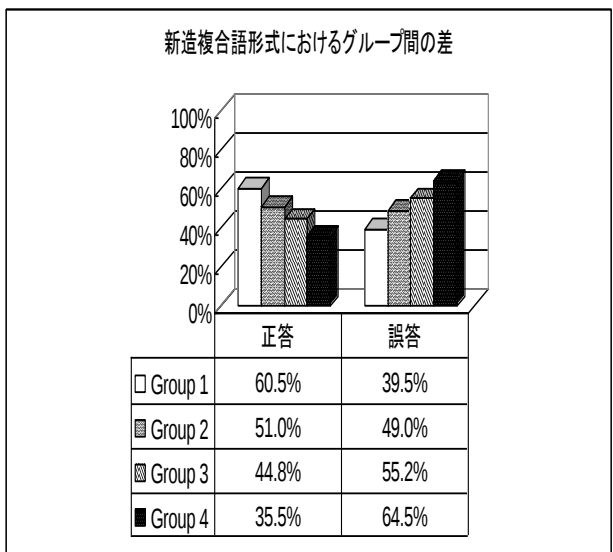


図 4.9 (再掲) 鹿児島方言 新造複合語の正答率と誤答率

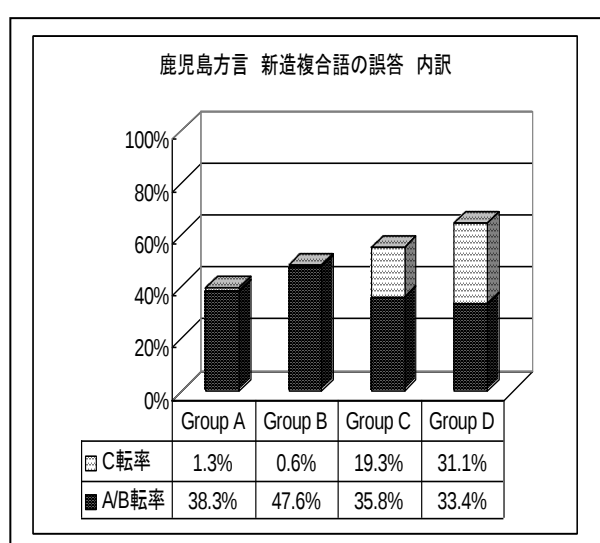


図 5.5 鹿児島方言 新造複合語の誤答の内訳

近畿方言の新造複合語の誤答（図 3.11）、および鹿児島方言の新造複合語の誤答（図 5.5）をみると「当該方言の音韻規則に違反した誤答」が多いという点で共通性を確認できる。例えば近畿方言における新造複合語の誤答（図 3.11）で多いのは「新近畿」と書かれた「近畿方言の韻律的特徴をもつが規則に違反する」誤答である。一方、鹿児島方言における新造複合語の誤答は「A/B 転率」と書かれた「鹿児島方言の韻律的特徴をもつが規則に違反する」誤答である。どちらも当該方言の韻律的特徴の範囲内だが、当該方言の音韻規則（式保存の法則、複合規則）に違反している点で一致する。この

点は先にみた鹿児島方言の助詞付き傾向と同じである。両方言を「規則的」なものという側面から比較した結果、「当該方言の韻律的特徴の範囲内だが規則に違反する」誤答が圧倒的に多い傾向が確認できた。これは当該方言の範囲内にあること、つまり「当該方言らしく聞こえる」ということが重要であり、当該方言話者であれば母方言話者として習得しているであろう「音韻規則」が習得されていない実態が両方言の調査結果から明らかとなった。

本論文では主に「誤答」の分析を行い議論してきたが、「正答」の側面からみた方言習得も忘れてはならない。正答率がグループ 1 (両親 native) を先頭にグループ 2 (母親 native), グループ 3 (父親 native), グループ 4 (両親 non-native) と順番に下がっていく傾向はどちらの方言のどの形式にも確認できたが、正答率で一致している部分もある。例えば下の図 3.10 の点線で囲った部分をみると、グループ 4 (両親 non-native) であっても平均すると約 50% 近くは「式保存の法則」に則った形で新造複合語を発話しており、近畿方言を全く習得できていないわけではない。

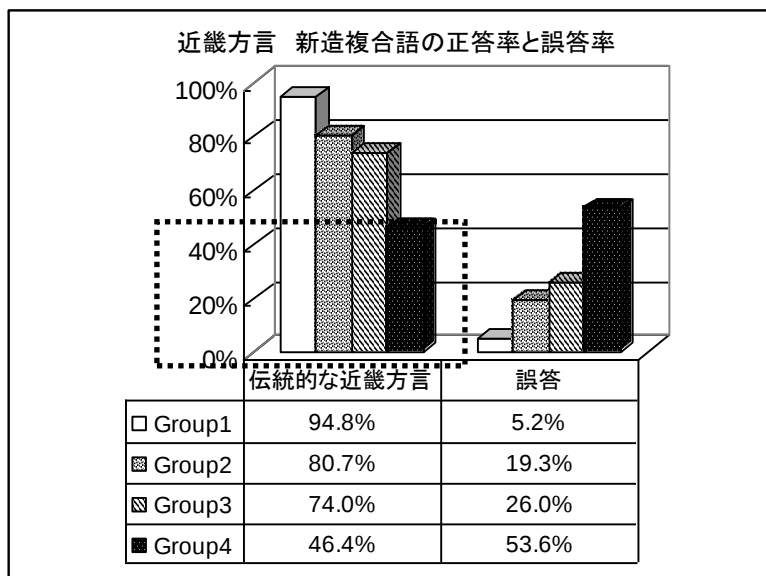


図 3.10 (再掲) 近畿方言 新造複合語の正答率と誤答率

Labov (1991, 2010) は「方言習得は親の影響よりも『Peer(友達)の影響』が大きい」としているが、本研究で得られた結果と矛盾しているのだろうか。筆者は本研究の調査結果によって Labov (1991, 2010) の主張を否定するつもりはなく、むしろどのようにデータや結果を解釈するのかという問題ではないかと考えている。上記の図 3.10 (再掲) は近畿方言の調査結果の一例であるが、正答率の中で「一致した部分」に Peer の影響があると言えるのではないかと考えている。また同じ現象を扱っているが正答に目を向けるか、あるいは誤答に目を向けるのかによって、どのようにその結果を解釈するのかという見方が異なるのではないだろうか。例えばコインの表と裏のような関係である。「方言習得」を研究する研究者らがどのような視点からその現象を扱うのか、という点に「Peer の影響」対「親の影響」という議論の違いがあるものだと考えている。

では全体として「語彙的」要素と「規則的」要素を比較してみる。図 5.6 と図 5.7 は両方言の「語彙的」要素の比較と「規則的」要素の結果を示している。まず「語彙的」要素の比較をみてみよう。「語彙的」要素は 3 つあり「近畿方言の単語単独」、「近畿方言の助詞付き」そして「鹿児島方言の単

語単独」である（表 5.7 参照）。これら 3 つの「語彙的」要素の正答率をグループごとに示したものが図 5.6 で、それぞれの多重比較をした結果を統合した形で表 5.7 に表した。この表の各マスの中には「/ (スラッシュ)」で 3 つのセクションに分かれているが、これら 3 つのセクションは左からそれぞれ「近畿方言の単語単独（近単）」、「近畿方言の助詞付き（近助）」、「鹿児島方言の単語単独（鹿単）」を表している。この表をみると、一貫して有意差が観察されたのは「グループ 1 (両親 native)、グループ 2 (母親 native)」と「グループ 4 (両親 non-native)」との間である（表 5.14 の太枠で囲った部分）。この結果から「語彙的」要素に関して、両親 / 母親が当該方言地域出身の話者（グループ 1 とグループ 2）と両親が当該方言地域以外出身の話者（グループ 4）は同一視できないということが両方言の結果から言える。

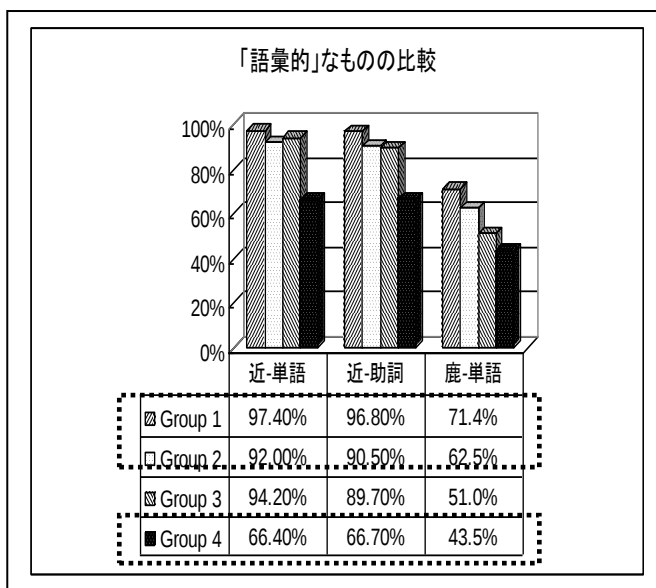


図 5.6 両方言の「語彙的」要素の比較

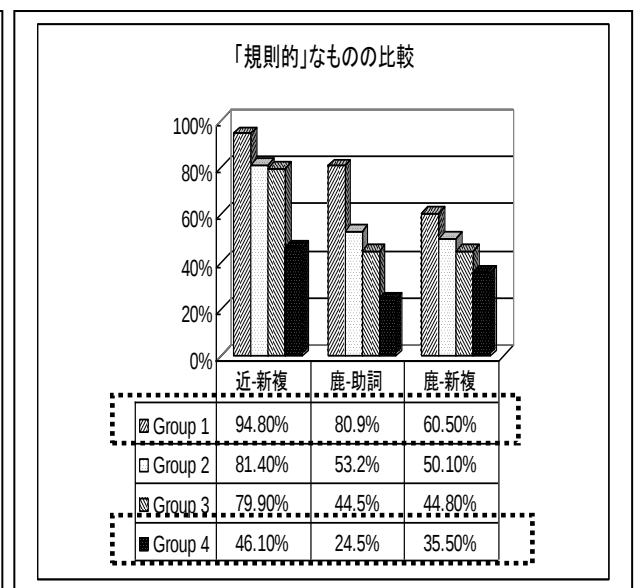


図 5.7 両方言の「規則的」要素の比較

表 5.13 両方言の多重比較による「語彙的」要素の検定結果

(近単/近助/鹿単)	Group 1 (父：母)	Group 2 (-：母)	Group 3 (父：-)	Group 4 (-：-)
Group 1 (父：母)		n.s. / n.s. / n.s.	n.s. / *** / n.s.	* / *** / ***
Group 2 (-：母)			n.s. / n.s. / n.s.	** / * / *
Group 3 (父：-)				* / n.s. / n.s.

*: 5%水準, **: 1%水準, ***: 0.1%水準, n.s.: 有意差なし

表 5.14 両方言の多重比較による「規則的」要素の検定結果

(近複/鹿助/鹿複)	Group 1 (父 / 母)	Group 2 (- / 母)	Group 3 (父 / -)	Group 4 (- / -)
Group 1 (父 / 母)		n.s. / * / *	n.s. / *** / ***	* / *** / ***
Group 2 (- / 母)			n.s. / n.s. / n.s.	* / n.s. / n.s.
Group 3 (父 / -)				* / n.s. / n.s.

*: 5%水準, **: 1%水準, ***: 0.1%水準, n.s.: 有意差なし

では「規則的」要素に関してはどうか。表 5.7 で確認した規則的なものは 3 つあり「近畿方言の新造複合語（近複）」、「鹿児島方言の助詞付き形式（鹿助）」そして「鹿児島方言の新造複合語（鹿複）」である。これら 3 つの形式についても「語彙的」要素と同様に比較したものが図 5.6 と表 5.14 である。図 5.7 は 3 つの「規則的」要素をグループごとにその達成率を示したもので、表 5.15 はそれぞれの多重比較の結果を統合した形で示している。各マスには先ほどと同様に「/ (スラッシュ)」によって 3 つのセクションに分かれており、それぞれ先に挙げた「近畿方言の新造複合語（近複）」、「鹿児島方言の助詞付き形式（鹿助）」そして「鹿児島方言の新造複合語（鹿複）」に対応する。この表 5.15 をみると表 5.14 と同様に一貫して観察される有意差はグループ 1 (両親 native) とグループ 4 (両親 non-native) である。さらに表 5.15 の太枠で囲ったもう一つのマス、グループ 1 (両親 native) とグループ 3 (父親 native) のマスの中では鹿児島方言のみ統計的有意差を示すが、「近畿方言の新造複合語」には統計的有意差は確認されなかった。だが「近畿方言の新造複合語」の実測値を比較すると、やはり「グループ 1 > グループ 2 > グループ 3」という関係があり、統計的有意差がないとしてもグループ 3 (父親 native) の達成率が低いこと把握することができよう。これら両方言の「規則的」要素を比較した結果、両親が当該方言地域出身の話者（グループ 1）とその対極に位置する両親が当該方言地域以外の出身の話者（グループ 4）は「アクセント規則」の習得は同じではないことが示された。また鹿児島方言のみに観察された、両親が当該方言地域出身の話者（グループ 1）と父親が当該方言地域以外の出身の話者（グループ 3）との間には統計的有意差はないが、数量的に差があることは確かである。その点を考慮すると「規則的」要素の場合、両親 / 母親が当該方言地域以外の出身の話者（グループ 4 とグループ 3）は方言話者としては注意すべきであると言えよう。次節ではこれまでの調査結果の比較と議論を踏まえ、本論文が考える方言話者について議論する。

5.2.2 本論文が考える方言話者の条件

社会言語学では当該地域の言語運用をみるため、調査時点でその土地に居住している人を含んだ調査が多い。その土地に居住しているからその土地の人、つまり「はえぬき」の人とは呼べないこと考え、Chambers and Heisler (1999) は社会言語学における調査方法の一つとして「親の出身地」も取

り入れた RI 値 (Regional Index) を取り入れた。だが Chambers and Heisler (1999) が行う調査の対象は「調査時点でその土地に居住している人」であり、調査の後で RI 値によって振り分けて結果を分析しようというものである。では、その土地固有の方言がどのように変化しているのかということ調べる場合にはどうしたらよいのだろうか。Chambers and Heisler (1999) の方法をとると、あらゆる条件の人 (例えば、最近移り住んできた人) も含まれるため効率が良いは言えないであろう。では多様な背景をもった人々を何らかの形で統制し、方言のバラつきを最小限に留める必要がある。本論文ではその手段の一つとして「親の出身地」による方言話者の統制方法を挙げる。

ここでは「親の母方言の違いによる子供の方言習得の差はあるのか」という問いを立て、二方言を調査してこの問題に取り組んできた。この「親の母方言」の問題について Labov (1991, 2010) は「peer による影響が一番強い」として親の影響は周縁的に扱われてきた。この Labov (1991, 2010) の主張は通言語的に観察されることであろうか。本論文では 3 章の近畿方言の調査、および 4 章の鹿児島方言の調査から「親の母方言による影響がある」という一致する結果を得た。では「親の母方言による方言習得の違い」はどこに現れるのであろうか。この答えとして、一つずつ単語に備わったアクセントを覚えていく語彙アクセント (語彙的なもの) にも、複合語にアクセントを生産的に付与していく音韻規則 (規則的なもの) においてもその違いが観察されることが明らかとなった。

では、こういった両親のタイプに違いがあるのか。これは両親がともに当該方言圏外という話者の場合において両親とも当該方言圏内出身という話者と比べて、「語彙アクセント」にも「音韻規則 (アクセント規則/複合法則)」にも統計的に大きな違いがあるということが示された。つまり同じ方言圏内で育っていても、親の出身地の違いによって習得される方言が異なるのである。さらに両親ともに当該方言圏外出身 (グループ 4) の話者の中には方言習得がうまくできている事例や、習得が全くできていない事例など様々である。このように個人差が大きいこともこのグループ 4 (両親 non-native) の傾向である。このような個人差があることにより、同じ調査を行ったとしてもばらつきが生じるものと考えられる。また母親が当該方言地域以外の出身 (グループ 3) という話者もわずかながらにその違いを確認した。

以上の点を考慮すると、方言話者の条件も絞られてくるであろう。この研究で行った調査結果から、本研究が考える「方言話者」とは「両親ともに当該地域出身者の話者 (グループ 1)、あるいは母親が当該地域出身者の話者 (グループ 2) 」 (表 5.16 の太枠部分) である。両親の出身地が当該方言圏外の話者 (グループ 4) は方言調査には不適格であり、当該方言を代表する方言話者として入れない方がよりよいということができよう。また母親が当該地域以外の出身の話者 (グループ 3) は方言話者としては個々のケースによるが注意すべきであろう (表 5.16 参照)。

表 5.15 親の出身地による方言話者の境界線

		父親	
		当該方言圏内	当該方言圏外
母親	当該方言圏内	1	2
	当該方言圏外	3	4



注意すべき話者



当該方言話者としては扱わない

このような親の出身地による条件で方言話者の設定ができれば、大都市においても汎用性が高く、なおかつこの条件に該当する話者も見つけやすい。調査者にとって win-win の方言話者選定の条件といえるであろう。

5.3 まとめ

5.1 では Chambers and Heisler (1999) および 高木 (2006) の RI 値の導入とその算出方法を整理してきた。この RI 値を導入することにより、多様な背景を持った個人をも調査で調べることができるという利点があった。確かに現実社会の構成員を考えると個々の背景は決して単一ではない。そのため「調査時にその土地に居住する人」を調査対象とするというのは、同時に集めるデータにばらつきをもたらす要因であることを指摘した。さらに 5.1.4 では方言話者の厳密な条件として「三世代まで遡ることが必要なのか」ということについて先行研究のデータを用いて再分析を行った。国立国語研究所 (1965) の北海道での調査結果を再分析した結果では、第 1 世代のアクセントと第 3 世代のアクセントは一致しない傾向が高いことが明らかとなった。むしろ隣り合う 2 世代間 (第 1 世代と第 2 世代、第 2 世代と第 3 世代) にアクセントの一致率が高いことが明らかとなった。またその他の先行研究、国立国語研究所 (1951) の白河市での調査結果および 金田一 (1967) の鼻濁音の調査結果を統計的に再分析した結果、親の出身地の方言と子供の方言習得には関係があることが示された。

5.2 では本研究が行った近畿方言調査と鹿児島方言調査で得られた結果を比較し、異同を確認した。その結果、両方言の調査結果で共通するのは「両親が当該方言地域以外の出身」という話者が他のグループとは違いを見せるという特異性であった。またわずかながら、鹿児島方言からは母親が当該地域以外の出身の場合は方言習得の違いを見せた。これらの結果を考慮し、話者の背景を統制する方法の一つとして「親の出身地」による方言話者の選定条件を提示した。条件自体は単純で「当該方言圏外の両親をもつ話者」以外はその土地を代表する方言話者という、というものである (ただし母親が当該地域以外の出身の場合は注意すべき)。この単純な条件によって都市部においても方言調査を行うことが可能になると考えている。次章では本論文の結論と残された課題を提示する。

i 「ア」はアクセントを意味する。

ii 1 人の生徒に父母の出身地があるので $70 \text{ 名} \times 2 \text{ (父と母)} = 140 \text{ 名}$ となる。しかし 2 名の生徒の父母の出身地が不明のため $140 - 4 = 136$ となる。

第 6 章 結論

6.1 明らかになった点

これまで言語/方言調査は多数行われてきたが、その調査に協力する「方言話者」に関する研究は数少ない。本論文ではこの「方言話者」に焦点を当て、どのような人を当該方言話者代表として適しているのかということを明らかにすることを試みた。この問題設定の出発点となったのは、同じ方言地域に生まれ育っていても、親の出身地が違う場合、その話者のアクセントがその土地の方言アクセントとは異なるという事実があったからである。さらに、この「親の母方言の影響」が方言話者の選定にも深く関わることを認識し、「親の母方言の影響」がどのようなものなのかを解明することを目指した。

第 2 章では記述研究の「方法論」の中にある母方言話者の定義について先行研究で言及されていることを整理した。そして「方言話者」の定義の曖昧性や問題点を挙げ、本論文が目指す方向性を示した。続いて方言話者の定義について「育った地域（生育地）の影響説」と「親の方言（母方言）の影響説」を比較した。日本語のみならず英語圏においても親の出身地の違いによる方言習得の研究は行われてきた。しかし、どの研究も「親の影響」は周縁的に扱われ、むしろ「どのように方言を習得するのか」という「習得の過程」に焦点が当てられてきた。さらに方言習得の調査では「語彙的」要素の習得が中心であり、英語であれば単語の発音と母音の習得、日本語であれば語彙アクセントの習得であった。その「語彙的」な要素の習得とともに重要な「規則的」な要素の習得は少なく、筆者が調べた限りでは「規則的」な要素（音韻規則）の習得の研究は Payne (1976) のみであった。また先行研究の方言習得の調査対象者は言語形成期にある子供が中心で、言語形成期を終えた話者が最終的にどのような方言を習得しているのかについてはあまり調べられてこなかった。

本論文では「同じ方言地域に育っているのであれば、親の出身地に関わらず習得した方言に違いは観察されないはずである」という帰無仮説（ゼロ仮説）を立て、もしそこに「違い」が観察されれば「親の出身地の母方言の影響がある」といえるであろうと考えた。そこで本研究では調査対象者を両親の出身地によって 4 つのグループに分け、このグループ間に方言習得の違いあるかどうかを調べることにした。

第 3 章、第 4 章では「親の出身地の違いによって 4 グループに分けた話者が、どのような方言習得をし、またどのように異なるのか」という問題を設定し近畿方言および鹿児島方言でアクセント調査を行った。本研究が先行研究と異なる点は「語彙的」要素の習得を「語彙アクセント」の習得と「規則的」な要素の習得を当該方言の「音韻規則」、つまり「複合語のアクセント規則&複合法則の習得」の二つに分けて調査・分析を行っている点である。前者は一つ一つの語彙に備わったアクセントであり、各方言によって語彙アクセントは異なる。規則性がなく語彙ごとに異なるアクセントを習得することは効率が悪く、非常に負担の大きいものであることは容易に想像ができよう。本研究では親の出身地によって話者の「語彙アクセント」と「音韻規則」の習得に違いがあるのか、また「語彙アクセント」と「音韻規則」の習得ではどちらが難しいのかということを明らかにすることを研究課題とした。調査方言は近畿方言と鹿児島方言の 2 つの方言で、両方言とも「音韻規則」を持つ方言である。この 2 地点での調査結果を比較して「親の出身地の方言（母方言）」と「方言習得」に関して何らか

の共通性を見出すことを目的とした。

その結果、近畿方言と鹿児島方言で一貫して観察された傾向がある。それは「両親の出身地が当該方言地域以外の出身（グループ 4）」の場合、「語彙アクセント」も「音韻規則」も「両親ともに当該方言地域出身（グループ 1）」の話者とは統計的に異なることである。これは先に示した前提「同じ方言地域に育っているのであれば、習得した方言に違いは観察されないはずである」という帰無仮説に反する結果である。この結果に基づき「方言習得には親の出身地の母方言の影響がある」ということを間接的に示した。

また親の出身地の条件によって習得した方言にどのような違いあるのかということ調べるため「音韻規則」が達成できなかったものについて誤答分析を行った。この当該方言の「音韻規則」に則っていない「誤答」の中には東京方言と同じものから、当該方言のように聞こえるものもあったが全てが同じ割合で出現するわけではない。誤答分析で明らかになったのは「当該方言らしく聞こえるけれども、本当の伝統的な当該方言ではない」という間違いが多いということであった。これは「音韻規則」は違反しても、その方言を特徴づける韻律的特徴（核・式）は保持しているということであった。またこのような誤答は親の出身地が他の方言地域であればあるほど増加するという傾向が明らかとなった。つまり、この方言調査に参加した多くの話者は当該方言の韻律的特徴を保持しているので当該方言らしく聞こえるのだが、「音韻規則」というより抽象度の高いものの習得では違いがあることが明らかとなった。

このような調査結果および誤答分析を受けて、第 5 章では論文が考える方言話者の定義を提示した。先行研究の Chambers and Heisler (1999) は「はえぬき度」(RI 値)を導入して当該地域の方言の様子を提示しているのだが、この RI 値では多様な要因が多いためにバラつきが生じる問題、およびその土地固有の方言の変化を捉えることが難しい点を指摘した。さらに方言話者の条件として挙げられる「三世代その土地に居住している話者」の妥当性を検証するため、国立国語研究所(1965)の『共通語化の過程：北海道における親子三代のことば』のデータを再分析した。この再分析から明らかになったのは第 1 世代と第 3 世代のアクセントの一致率よりも隣接する 2 世代間（第 1 世代と第 2 世代、あるいは第 2 世代と第 3 世代）のアクセントの一致率の方が高いということであった。方言アクセントの伝承という観点からみると、この 2 世代間での関係が強いことを示唆しており親子 2 世代のみで方言話者を決めることが可能であると考えた。

では親子 2 世代の間で、親の出身地がどういう場合にその子供の当該方言の習得が異なるのだろうか。この点について本研究が行った近畿方言と鹿児島方言の調査結果を比較して異同を確認した。同じ土地に育っていれば確かにその土地の方言「らしく」聞こえる方言を習得しているかもしれない。しかしながら、それは表面的な部分でありその実態は大きく異なることを本論文では明らかにした。この結果を踏まえて、方言調査における方言のバラつきを抑えるための一つの手段として「親の出身地」の統制をとることを提案した。本論文が考える「方言話者」の条件は調査に協力する話者の「両親 / 母親の出身地が当該方言地域」であり、「母親が当該方言地域の出身でない場合は注意してとりかかるべき」であろう。つまり調査協力者の「両親がともに当該方言地域以外の出身」の場合はたとえ生まれてからその土地に育っていたとしても、当該方言を代表する「方言話者」とは呼べないということである。この親子 2 世代間の出身地を把握することで、大都市における方言調査においても汎用性が高く、さらにこの条件に該当する話者も見つけやすいという調査者にとって有利な方言話者の条件を設けるに至った。

6.2 展望と今後の課題

この論文の出発点は方言研究における「方言話者」の定義の問題であった。先行研究では周縁的に扱われてきた「親の出身地の方言」の問題であるが、本研究が行った近畿地方と鹿児島県の2地点で調査結果から親の出身地の方言が方言習得に影響があることを明らかにした。ではこの研究結果に基づく展望と課題は何であろうか。ここでは本論文で明らかになった点に基づく展望と今後の課題について述べる。

まず本論文で明らかになった「親の出身地の方言」の影響があるという結果は、調査者にとって「方言話者の選択にはより慎重になるべきである」と警笛を鳴らしているといえよう。それと同時に音声・音韻以外の領域への広がりをもたせようとしているものと考えている。本研究ではアクセント調査を行ったが、同じ方言地域で育っていたとしても親の出身地によって習得された方言アクセントが異なることが明らかとなった。特に「音韻規則」の習得に限って話をすると、調査者（筆者）と「両親が当該方言地域以外の出身」の被調査者との会話から「音韻規則」に則った発音であろうとなかろうと、当該方言の韻律的特徴さえ守って発音していればよいという傾向が近畿方言でも鹿児島方言でも観察された。一方、「両親が当該方言地域出身」の被調査者に「音韻規則」に則っていない発音をして「この言い方は許容できますか」と尋ねると、ほとんどの被調査者は即座に「その言い方はおかしい」という反応を示した。これらの回答からも分かるように、親の出身地による違いで「音韻規則」の習得が確実になされておらず、どこまで当該方言として許容するのかという許容範囲が異なることが明らかとなった。この音韻規則の習得を確かめるということは話者が持っている音韻に関する当該方言の文法が習得されているかどうか確かめていると言えよう。このように考えると、音韻に関する文法だけでなく、統語的あるいは形態的側面の文法も話者によって異なる可能性がでてくる。つまり、この本研究の調査結果および結論はアクセント調査での方言話者の選択だけでなく、方言の文法性の判断をするような調査やテストにおける方言話者の選択においても「親の出身地に留意しなければならない」と警笛を鳴らしていると言えるであろう。

では本研究に基づく今後の課題は何であろうか。本研究が扱った問題は「方言習得」であるが、その背後にあるのは「方言/言語習得」の問題と「方言/言語接触」の問題であろう。まず「方言/言語習得」の問題は両者が同じ「習得」を扱いながら、「習得」に関して何が同じで何が異なるのかという両者の共通点および相違点は不明のままである。本研究が行った「親の母方言の影響」をそのまま「親の母語の影響」に変えて行った研究と何が同じで何が異なるのだろうか。言語と方言の区別が曖昧であるため、何を方言習得/言語習得とするのかという問題にぶつかるかもしれない。だが習得し易いものと習得しにくいものがあるとすれば、言語/方言の体系の親近性が関わってくるのではないだろうか。このような「体系が異なる言語の習得」と「体系が異なる方言の習得」との共通点および相違点を探ることにより、人間が言語を習得する上で重要な部分とそうでない部分の解明に繋がるのではないだろうか。

また「親の母方言の影響」の問題を大きな視点から見ると家庭内における「方言接触」と捉えることができよう。出身地が異なる者同士が「家庭/家族」という小さな社会を形成し、その社会の中で育つ子供達がどのような方言を習得していくのか。さらにその子供が学齢期に入ると家庭という小さな社会を出て、地域の人々が暮らす実社会に入る。そのとき、その子供がどのような方言を選択し習得していくのか。方言習得の背景には様々な要因が関わると思われるが、本研究が扱った「親の出身地の方言」という要因はその一部に過ぎない。今後、方言習得の調査・研究を行う場合には他の要因も

考慮し、さらにアクセントだけではなく統語論や形態論からのアプローチも必要であろう。また「方言接触」の研究では地域方言が標準語に取って代わるという「標準語志向」の視点が多いが、体系を異にする方言同士（例えばトーン方言とモーラ方言の接触）が様々なレベルで接触する場合（例えば個人、社会、地理的条件など）、どちらの方言体系にどのような影響が現われるのかという視点も今後は必要になるであろう。日本には数多くの方言がある。今日のように人と人、モノとモノの流動性により方言と方言の接触の形も多種多様であろう。今後はこのような方言接触を多角的に捉えて分析することにより、方言/言語変化のメカニズムを解明に繋がるものであると考えている。

参考文献

- 秋永一枝(1958)「アクセントの推移の要因について」『国語学』第31号
- 上野善道(1997)「複合名詞から見た日本語諸方言のアクセント」杉藤美代子監修『アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』(日本語音声[2])。三省堂。
- (1984)「アクセント研究法」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学 2—方言研究法』。pp. 229-273。国書刊行会。
- NHK放送文化研究所(1998)『日本語発音アクセント辞典』。NHK出版。
- 奥村三雄(1962)「近畿方言総説」楳垣実編『近畿方言の総合的研究』三省堂 pp.1-59。
- 香月真由美(2008)「国会会議録における気づかない方言—「あっている」についての一考察—」松田謙次郎(編)。『国会会議録を使った日本語研究』。pp.207-233。ひつじ書房。
- 木部暢子(1997)『鹿児島県のことば』。明治書院。
- (2008)「内的変化による方言の誕生」小林隆・木部暢子・高橋顕志・安部清哉・熊谷康雄 著『方言の形成』。岩波書店。
- 金田一春彦(1967)『日本語音韻の研究』。東京堂出版。
- 窪菌晴夫(2006)『アクセントの法則』。岩波書店。
- (2007)「鹿児島方言のアクセント変化—複合法則の崩壊—」神戸言語学論叢 第5号 西光義弘教授還暦記念号。神戸大学文学部 言語学研究室。
- 国立国語研究所 (1951)『言語生活の実態—白河市および附近の農村における—』。国立国語研究所報告 2。秀英出版。
- (1965)『共通語化の過程：北海道における親子三代のことば』。国立国語研究所報告 27。国立国語研究所。
- (1981)「大阪のアクセント」『大都市の言語生活分析篇—アクセントの実態、国立国語研究所報告 70-1』。三省堂。
- 小林隆・篠崎晃一(2007)『ガイドブック方言調査』。ひつじ書房。
- 真田信治(1986)「ことばの変化のダイナミズム」『言語生活』429号。321-327
- 杉戸清樹(1983)「新ことば学入門 1・社会言語学」『言語生活』。376。
- 柴田武(1958)『日本の方言』。岩波書店
- (1984)「方言地理学」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学 2—方言研究法』。pp. 61-90。国書刊行会。
- (1988)『方言論』。平凡社。
- 陣内正敬(1997)「I 総論」平山輝男(編)『福岡県のことば』。pp.1-39。明治書院。
- 杉藤美代子(1984)「親の方言アクセントが子供のアクセント型の発話に与える影響」『柴田さんと今田さん』。和泉書店。
- 高木千恵(2006)「関西若年層の話しことばにみる言語変化の諸相」阪大日本語研究 別冊 2。大阪大学大学院文学研究科。日本語学講座。
- 武田佳子(2001)『大阪方言話者における句の音調の認識』。大阪大学大学院文学研究科修士論文(未公

- 刊).
- 竹村亜紀子(2008) 日本語における外来語アクセントとその変化. 海港都市研究 3. pp.143-154. 神戸大学大学院人文学研究科海港都市研究センター.
- (2009) 子供のアクセント獲得における親の母方言の影響—近畿方言における式保存の法則に注目して—. KLS29. pp.281-290. 関西言語学会.
- 田原広史・村中淑子(2000) 大阪アクセントにおける二拍名詞 IV 類・V 類の統合について—20 代から 60 代までの実態—. 『徳川宗賢先生追悼論文集 20 世紀フィールド言語学の軌跡』. 変異理論研究会編. 摂河泉文庫.
- 中井幸比古(1996) 京都アクセントにおける式保存について. 平山輝男博士米寿記念会(編)『日本語研究諸領域の視点(下)』. pp. 1051-1035. 明治書院.
- 中村千紘(2007) 「アクセント習得に対する親の方言アクセントの影響について」. 神戸大学卒業論文.
- 那須昭夫(2004) 『若年層京阪式アクセントにおける式保存の動態 —若年層京都方言話者の複合語音調形成に関する調査資料—』. 平成 15 年度大阪外国語大学特定運営経費(B).
- (2007) 「近畿方言における音調変異をめぐって 自律分節理論 vs. 最適性理論」. 西原哲雄他(編)『現代音韻論の論点』. pp.39-58. 晃光出版.
- 野元菊雄(1984)「方言研究の原理」. 飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学 2—方言研究法』. pp. 3- 21. 国書刊行会.
- 橋本行洋(2005)「「気づかない～」という術語について—新語研究の立場から」. 『日本語の研究』1 (4): pp.105-108. 武蔵野書院.
- 早田輝洋(1999)『音調のタイポロジー』大修館書店.
- 平山輝男(1951)『九州方言音調の研究』. 学界の指針社.
- (1960)『全国アクセント辞典』. 東京
- 宮治弘明(1995)「大阪市の若年層における方言の動態」. 『梅花女子大学文学部紀要 国語・国文学』. 29: pp.51-66 梅花女子大学文学部.
- (1997)「都市方言研究への一提言」. 『梅花女子大学文学部紀要 日本語・日本文学編』. 31: pp.1-12. 梅花女子大学文学部.
- 吉田則夫(1984)「方言調査法」. 飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学 2—方言研究法』. pp. 275- 299. 国書刊行会.
- 米田正人(1992)「大都市の言語生活」. 『日本語学』. pp.11-4. 明治書院
- 和田實(1943)「複合語アクセントの後部成素として見た二音節名詞」. 『方言研究』. 7: 1-26.
- Chambers, J. K. and Heisler, Troy (1990) Dialect Topography of Québec City English. *Canadian Journal of Linguistics* 44 (1). 23-48.
- Chambers, J. K. (1992) Dialect acquisition. *Language* 68: 673-705.
- (2000) Region and Language Variation. *English World-Wide* 21:2. p.169-199.
- Chambers, J. K. and Trudgill, Peter (1980) *Dialectology*. Cambridge University Press.
- Eckert, Penelope (1998) Age as a Sociolinguistic Variable. Florian Coulmas (Ed.) *The Handbook of Sociolinguistics*. 151-167. Blackwell.
- Kerswill, Paul and Williams, Ann (2000) Creating a New Town koine: Children and language change in Milton Keynes. *Language in Society* 29. 65-115.

- Kubozono, Haruo (2004) Tone and Syllable in Kagoshima Japanese. *Kobe Papers in Linguistics* 4, 69-84.
- Labov, William. (1991). *Sociolinguistic Patterns*. Philadelphia, Pennsylvania: University of Pennsylvania Press.
- (2010) What is to be learned? A keynote lecture given at 34th LAUD symposium on Cognitive Sociolinguistics.
- McCawley, J. D. (1978) What is a tone language? In: Fromkin, Victoria (ed.), *Tone: a linguistic survey*, 113-131. New York: Academic Press
- Payne, Arvilla (1976) *The acquisition of the phonological system of a second dialect*. Ph.D dissertation. University of Pennsylvania.
- Smith, Jannifer, Durham, Mercedes, & Fortune, Liane (2009) Universal and dialect-specific pathways of acquisition: Caregivers, children, and t/d deletion. *Language Variation and Change* 21: 69-95.
- Stanford, James. N. (2008) Child dialect acquisition: New perspectives on parent/ peer influence. *Journal of Sociolinguistics* 12. 567-506.
- Tagliamonte, Sali (2007) How'd you get that accent?: Acquiring a second dialect of the same language. *Language in Society* 36. 649-675.
- Takemura, Akiko (2008) Accentual difference caused by parental accentual influence in a Japanese dialect. The Thirteenth International Conference on Methods in Dialectology. p.64. University of Leeds, England, UK.
- (2009) Parents *Do* matter in dialect acquisition: Evidence from the Kansai dialect of Japanese. *New Ways of Analyzing Variation* 38. p.165.
- (2010) Dialect Acquisition in the View of Parental Origins: The Case of Kansai Dialect of Japanese. *Kobe Papers in Linguistics* 7, 78-90.
- Trudgill, Peter (1986) *Dialect in contact*. Basil Blackwell.

表 1 先行研究のまとめ 1

	Payne (1976/ 80)	Trudgill (1986)	Trudgill (1986)	Chambers (1992)	Roberts (1997)	Kerswill & Williams (2000)	Tagliamonte & Molfenter (2007)	Stanford (2008)	Smith et al. (2009)
目的	新しい土地に移ってくる年齢による習得の違いをみる	親の出身地によって当該方言の発音を習得しているかどうか	イギリス英語 (BrE) から オーストラリア英語 (AuE) への変化	子供の方言習得のメカニズムの解明	子供(3-4 歳児)による新しい音の変化の習得	新興住宅地における Koineization ¹ を調べる	3 人の子供たちの第 2 方言習得の仕方を調べる	子供たちの方言習得をするのか	t/d 削除の習得の様子を親子ペアでみる
調査場所	フィラデルフィア郊外、King Prussia (アメリカ)	ノリッジ (イギリス)	オーストラリア	カナダからイギリスに移住	フィラデルフィア (アメリカ)	Milton Keynes (新興住宅地) (イギリス)	カナダからヨーク(イギリス)へ移住	Sui 族, 中国南西部	スコットランド北東部、Buckie
子供の出身地／子供達の移住年齢	34 人の子供(27 人は州外、7 人は Penn.州生まれ)	年齢: 30-40 歳 20 人(その土地で生まれ育った人)	7 歳の双子	○	6 人の子供 (3-4 歳.) フィラデルフィアに生まれ.	48 人の Milton Keynes で生まれ育った子供(4,8,12 歳)	○	北部に生まれ育った子供達、	×
親の出身地を尋ねているか?	○	10 人: 両親ともその土地 10 人: 両親とも他の土地	○	×	○	○	○	○	親はみな Buckie 出身
当該方言の segment 単位の発音を調べているのか?	母音	下線部の発音がきちんとノリッジの発音でできるかどうか <i>Norwich City scored an <u>own goal</u>.</i>	○	○(具体的にどんな発音をみたのかを書き加えること)	Three vowels, which are the ongoing changes in Philadelphia dialect.	10 phonological variables: Consonants (th) (dh) (h) (t), Vowels (ɔ:) (u) (u:) (au) (ou) (ai)	○(T-voicing)	Yes (lexical items and tone)	Yes (/t/ deletion)
当該方言の phonological rule を調べているか?	Short-a	×	×	×	Short-a	Short-a のような音韻規則はない	×	×	×
結論	○ Yes, it exists.	○ Yes, it exists.	N/A	N/A	子供達は新しい音変化を習得した。	Koineization を引き起こす要因は個々人の人口統計学的、社会的ネットワークによる	Partially yes	Cultural aspect (not parents/peers),	t/d 削除のプロセスは親(母親)と同じ

¹ (development of a new, mixed variety following dialect acquisition)

表 2 先行研究のまとめ 2

	金田一 (1941)	杉藤 (1984)	田原・村中 (2000)	那須 (2004)	中村 (2007)
目的	ガ行鼻濁音の有無	方言アクセントに親の出身地の影響があるかどうかをみる	2 音節名詞、第 4, 5 類の変化がどのようにして起こったかを調べる	単語単独形式とともに式保存の法則が守られているかどうかをみる	親の出身地の違いによって、近畿方言の習得率はどうなっているのか
調査場所	東京	大阪府	大阪府	京都府	近畿圏内
子供達(対象者)の出身地 ／子供達の移住年齢	13-14 歳の男子 70 名	女子大学生	N/A	18 人 (15 歳から 20 歳)	大学生
親の出身地を尋ねているか?	Yes	Yes	Not mentioned	No	○
当該方言の segment 単位の発音を 調べているのか?	ガ行部濁音の有無	2 音節名詞と その助詞付きの形	2 音節名詞	3,4 音節名詞	2 音節名詞
当該方言の phonological rule を調 べているか?	N/A	N/A	N/A	3, 4 音節名詞をもとにして作った 新造複合語	新造複合語
結論	No, it does not exist.	Yes, it exists.	N/A	N/A	Yes

付録

表 3 近畿方言調査 調査語彙 2 音節名詞第 1 類、第 2 類、第 3 類

第1類						第2類						第3類					
#	語彙	単語(●●)	助詞付き(●●▲)	複合語		#	語彙	単語(●○)	助詞付き(●○△)	複合語		#	語彙	単語(●○)	助詞付き(●○△)	複合語	
1	柿	かき	かきが	柿ごはん	かきごはん	1	北	きた	きたが	北開き	きたびらき	1	腕	うで	うでが	腕袋	うでぶくろ
2	腰	こし	こしが	腰袋	こしぶくろ	2	牙	きば	きばが	牙袋	きばぶくろ	2	波	なみ	なみが	波飾り	なみかざり
3	笹	ささ	ささが	笹ごはん	ささごはん	3	旅	たび	たびが	旅係	たびがかり	3	岸	きし	きしが	岸問題	きしもんだい
4	壁	かべ	かべが	壁問題	かべもんだい	4	紙	かみ	かみが	紙がかり	かみがかり	4	泡	あわ	あわが	泡削り	あわけずり
5	牛	うし	うしが	牛まつり	うしまつり	5	夏	なつ	なつが	夏開き	なつびらき	5	裏	うら	うらが	裏問題	うらもんだい
6	枝	えだ	えだが	枝もどき	えだもどき	6	肘	ひじ	ひじが	肘思い	ひじおmoi	6	蚤	のみ	のみが	蚤まつり	のみまつり
7	霧	きり	きりが	霧思い	きりおmoi	7	歌	うた	うたが	歌袋	うたぶくろ	7	山	やま	やまが	山がかり	やまがかり
8	口	くち	くちが	口問題	くちもんだい	8	村	むら	むらが	村ごはん	むらごはん	8	塩	しお	しおが	塩ごはん	しおごはん
9	風	かぜ	かぜが	風思い	かぜおmoi	9	胸	むね	むねが	胸おとし	むねおとし	9	月	つき	つきが	月まつり	つきまつり
10	水	みず	みずが	水まつり	みずまつり	10	冬	ふゆ	ふゆが	冬がかり	ふゆがかり	10	鍵	かぎ	かぎが	鍵もどき	かぎもどき
11	梅	うめ	うめが	梅まつり	うめまつり	11	石	いし	いしが	石まつり	いしまつり	11	栗	くり	くりが	栗問題	くりもんだい
12	虎	とら	とらが	虎問題	とらもんだい	12	旗	はた	はたが	旗もどき	はたもどき	12	雲	くも	くもが	雲おとし	くもおとし
13	酒	さけ	さけが	酒もどき	さけもどき	13	橋	はし	はしが	橋削り	はしけずり	13	坂	さか	さかが	坂飾り	さかかざり
14	竹	たけ	たけが	竹ごはん	たけごはん	14	寺	てら	てらが	寺喧嘩	てらげんか	14	花	はな	はなが	花ごはん	はなごはん
15	皿	さら	さらが	皿おとし	さらおとし	15	岩	いわ	いわが	岩飾り	いわかざり	15	靴	くつ	くつが	靴もどき	くつもどき
16	飴	あめ	あめが	飴削り	あめけずり	16	梨	なし	なしが	梨ごはん	なしごはん	16	髪	かみ	かみが	髪まつり	かみまつり
17	箱	はこ	はこが	箱開き	はこびらき	17	川	かわ	かわが	川思い	かわおmoi	17	櫛	くし	くしが	櫛問題	くしもんだい
18	海老	えび	えびが	海老飾り	えびかざり	18	雪	ゆき	ゆきが	雪問題	ゆきもんだい	18	犬	いぬ	いぬが	犬まつり	いぬまつり
19	鳥	とり	とりが	鳥もどき	とりもどき	19	町	まち	まちが	町問題	まちもんだい	19	池	いけ	いけが	池おとし	いけおとし
20	庭	にわ	にわが	庭問題	にわもんだい	20	音	おと	おとが	音まつり	おとまつり	20	馬	うま	うまが	馬まつり	うままつり

付録

表 4 近畿方言調査 調査語彙 2 音節名詞第 4 類、第 5 類

第4類								第5類							
	調査語彙	#	単語(○●)	伝統的な助詞付き(○○▲)	新しい助詞付き(○○▲)	複合語		#	調査語彙		単語(○◎)	伝統的な助詞付き(○●△)	新しい助詞付き(○●△)	複合語	
1	船	21	ふね	ふねが	ふねが	船まつり	ふねまつり	1	鍋	17	なべ	なべが	なべが	鍋ごはん	なべごはん
2	板	68	いた	いたが	いたが	板まつり	いたまつり	2	鮎	246	あゆ	あゆが	あゆが	鮎まつり	あゆまつり
3	肩	24	かた	かたが	かたが	肩おとし	かたおとし	3	声	157	こえ	こえが	こえが	声袋	こえぶくろ
4	息	7	いき	いきが	いきが	息げんか	いきげんか	4	窓	87	まど	まどが	まどが	窓開き	まどびらき
5	数	243	かず	かずが	かずが	数けずり	かずけずり	5	猿	176	さる	さるが	さるが	猿飾り	さるかざり
6	帯	30	おび	おびが	おびが	帯がかり	おびがかり	6	鮎(ふな)	221	ふな	ふなが	ふなが	鮎まつり	ふなまつり
7	海	40	うみ	うみが	うみが	海日和	うみびより	7	前	11	まえ	まえが	まえが	前まつり	まえまつり
8	瓜	46	うり	うりが	うりが	うりごはん	うりごはん	8	雨	240	あめ	あめが	あめが	雨まつり	あめまつり
9	絹	225	きぬ	きぬが	きぬが	絹もどき	きぬもどき	9	蜘蛛	253	くも	くもが	くもが	蜘蛛問題	くももんだい
10	糸	154	いと	いとが	いとが	糸開き	いとびらき	10	午後	132	ごご	ごごが	ごごが	午後問題	ごごもんだい
11	空	131	そら	そらが	そらが	空思い	そらおもい	11	青	260	あお	あおが	あおが	青飾り	あおかざり
12	肌	204	はだ	はだが	はだが	肌もどき	はだもどき	12	秋	32	あき	あきが	あきが	秋ごはん	あきごはん
13	位置	195	いち	いちが	いちが	位置問題	いちもんだい	13	白	50	しろ	しろが	しろが	白思い	しろおもい
14	中	57	なか	なかが	なかが	中まつり	なかまつり	14	赤	69	あか	あかが	あかが	赤袋	あかぶくろ
15	針	144	はり	はりが	はりが	針問題	はりもんだい	15	影	44	かげ	かげが	かげが	影問題	かげもんだい
16	箸	81	はし	はしが	はしが	箸係	はしがかり	16	夜	60	よる	よるが	よるが	夜がかり	よるがかり
17	稲	215	いね	いねが	いねが	稲まつり	いねまつり	17	地下	205	ちか	ちかが	ちかが	地下開き	ちかびらき
18	傘	185	かさ	かさが	かさが	傘もどき	かさもどき	18	鶴	199	つる	つるが	つるが	鶴もどき	つるもどき
19	(粉)	107	こな	こなが	こなが	粉削り	こなけずり	19	汗	115	あせ	あせが	あせが	汗おとし	あせおとし
20	種	251	たね	たねが	たねが	種ごはん	たねごはん	20	朝	100	あさ	あさが	あさが	朝開き	あさびらき

表 5 近畿方言の話者情報 (グループ 1)

A(父:近畿 母:近畿)									
	番号	性別	生年	本人	父	母	単語(80 語)	助詞(80 語)	新造複合語(100 語)
1	1	女性	1987	奈良市	奈良市	奈良県旧加茂町	76	78	97
2	3	女性	1985	大阪市平野区	大阪市	奈良市	78	78	98
3	11	女性	1982	京都府京都市	滋賀県栗東市	京都市	78	77	86
4	12	女性	1969	大阪府大阪市	奈良県五條市	大阪市	79	79	100
5	16	女性	1988	奈良県宇陀市	奈良県宇陀市	奈良県宇陀市	79	79	100
6	19	女性	1976	大阪府堺市	堺市	堺市	78	78	99
7	20	女性	1968	大阪府八尾市	奈良	奈良	78	78	98
8	21	女性	1985	大阪府和泉市	和歌山県和歌山市	大阪府岸和田市	79	78	100
9	24	女性	1969	奈良県奈良市	奈良県奈良市	奈良県奈良市	80	80	100
10	25	女性	1970	奈良県奈良市	奈良県奈良市	奈良県天理市	79	79	98
11	27	女性	1968	奈良県奈良市	奈良県奈良市	奈良県奈良市	79	79	100
12	31	女性	1968	奈良県奈良市	奈良県奈良市	奈良県奈良市	79	79	99
13	40	女性	1982	大阪市枚方市一高槻市	大阪府住之江⇒堺市	大阪府交野(かたの)市	77	76	81
14	41	女性	1987	大阪府摂津市	広島(生)⇒大阪市内(育) 祖父母:韓国	大阪府大阪市(祖父母:韓国)	76	69	87
15	44	女性	1987	奈良県宇陀市	奈良県宇陀市	三重県	80	80	100
16	45	女性	1987	和歌山県和歌山市	和歌山県和歌山市	和歌山県和歌山市	79	79	100
17	46	女性	1978	奈良県大和郡山市	奈良県大和郡山市	奈良県大和郡山市	76	79	95
18	50	女性	1986	大阪府豊中市	京都市内	大阪市内	72	70	62
19	53	女性	1985	大阪府大阪市	大阪府八尾市	大阪市天王寺区	77	77	93
20	54	女性	1988	奈良県御所市	大阪市内	奈良県御所市	79	78	99
21	56	女性	1978	東大阪市	東大阪市	東大阪市	79	77	98

表 6 近畿方言の話者情報 (グループ 2)

B(父:近畿外 母:近畿)									
	番号	性別	生年	本人	父	母	単語(80 語)	助詞(80 語)	新造複合語(100 語)
1	2	女性	1987	大阪市生野区	広島市	大阪府岸和田市	77	78	97
2	4	女性	1987	奈良市	鹿児島市	奈良市	76	71	85
3	23	女性	1976	大阪府高槻市	福岡、東京(20 歳～大阪)	大阪市内と奈良	75	72	82
4	33	女性	1971	大阪府堺市	鳥取県鳥取市	大阪府堺市	77	77	99
5	34	女性	1984	大阪府阪南市	名古屋市	大阪府泉佐野市	79	80	99
6	35	女性	1987	奈良県生駒市	佐賀県	京都市内	75	74	99
7	36	女性	1972	大阪府高槻市	鹿児島県日置市	大阪市内	47	23	22
8	42	女性	1988	大阪府大東市	北海道枝幸(えさし) 郡	大阪府大東市	79	79	87
9	37	女性	1971	大阪一京都(今)	岡山県岡山市	鳥取県境港市	79	79	96
10	47	女性	1987	大阪府茨木市	石川県	大阪府森口市	73	71	81
11	59	男性	1988	大阪府大阪市	秋田県大館市	大阪府池田市	74	77	86
12	69	女性	1973	大阪府堺市	北海道小樽市	大阪府泉佐野市	73	73	72
13	82	女性	1988	兵庫県神戸市	石川県珠洲市	滋賀県大津市	70	74	31
14	84	女性	1967	大阪府吹田市	島根県安来市	大阪府豊中市	79	79	80
15	85	女性	1985	神戸市灘区	石川県七尾市	兵庫県神戸市	75	77	91
16	90	女性	1986	滋賀県東近江市	新潟県長岡市	大阪府大東市	75	75	95
17	98	女性	1990	大阪府泉南市	高知県四万十市	大阪府大阪市	75	76	97
18	100	女性	1990	大阪府泉佐野市	広島県広島市	和歌山県和歌山市	65	67	60

表 7 近畿方言の話者情報 (グループ 3)

C(父:近畿 母:近畿外)									
	番号	性別	生年	本人	父	母	単語(80 語)	助詞(80 語)	新造複合語(100 語)
1	10	女性	1970	奈良県五條市	奈良県五條市	熊本県	78	78	99
2	13	女性	1970	兵庫県尼崎市	神戸市	高知県土佐市	79	79	97
3	15	女性	1983	大阪府大阪市	大阪市	高知県土佐市	79	79	100
4	17	男性	1972	京都府長岡京市	京都府中京区	新潟県三条市	73	72	73
5	22	女性	1986	大阪府大阪市	小 2～大阪(高知)	島根県江津市	75	76	92
6	29	女性	1974	奈良県奈良市	大阪市内	0-10 歳:北海道→11-23 歳:大阪→24-現在:奈良市	73	72	62
7	30	女性	1985	大阪府守口市	大阪府岸和田市	大分県摂津市	76	76	72
8	39	女性	1981	大阪市西区	大阪市西区	鹿児島県徳之島	78	78	99
9	43	女性	1988	奈良県奈良市	奈良市	高知(生)⇒徳島	75	54	83
10	51	女性	1987	京都市	京都市	東京都杉並区	77	78	97
11	52	女性	1981	大阪市阪南市	大阪市内	佐賀県日達原	77	77	95
12	55	女性	1985	京都市伏見区	京都市伏見区	福岡県北九州市	71	70	48
13	62	女性	1986	大阪府和泉市	兵庫県西宮市	高知県土佐市	39	36	32
14	68	女性	1971	奈良県大和郡山市	神戸市	埼玉県大宮市	77	77	99
15	83	女性	1986	京都府綴喜郡	京都府綴喜郡	香川県仲多度郡多度津町	76	73	61
16	96	女性	1989	大阪府大阪市	大阪府大阪市西成区	岡山県倉敷市	13	13	0
17	97	女性	1988	大阪府吹田市	大阪府	鹿児島県奄美大島	74	76	92
18	99	女性	1989	大阪府枚方市	京都府宇治市	千葉県	40	33	30
19	101	女性	1990	大阪府豊中市	大阪府	熊本県	37	15	64
20	102	女性	1990	大阪府和泉市	大阪府	鹿児島県	74	74	95
21	103	女性	1988	大阪府大阪市	大阪府	広島県	22	27	64

表 8 近畿方言の話者情報 (グループ 4)

D(父:近畿外 母:近畿外)									
	番号	性別	生年	本人	父	母	単語(80 語)	助詞(80 語)	新造複合語(100 語)
1	7	女性	1987	奈良市	北九州市	島根県旧大原郡木次町	69	71	77
2	8	男性	1982	京都府精華町	東京都杉並区	富山市	64	71	53
3	58	女性	1988	大阪府貝塚市	福岡県津古	福岡県福岡市	73	73	60
4	65	女性	1987	大阪府豊中市	岡山県津山市	岡山県津山市	3	2	0
5	70	男性	1988	京都府伏見区	山口県阿武郡	福岡県久留米市	23	20	26
6	71	男性	1981	大阪府東大阪市	広島県三原市	岡山県井原市	71	77	86
7	72	女性	1977	大阪府堺市	愛媛県	高知県土佐市	8	6	0
8	73	男性	1974	兵庫県三木市	愛知県豊田氏	高知県高岡郡	49	59	5
9	74	女性	1980	神戸市西区	広島県呉市	広島県呉市	46	63	35
10	75	女性	1978	神戸市西区	鳥取県八頭郡	鳥取県八頭郡	52	61	38
11	76	女性	1984	奈良県生駒市	山口県熊毛郡	香川県高松市	71	75	86
12	77	男性	1987	兵庫県西宮市	福岡県宗像郡	埼玉県浦和市	3	4	17
13	78	男性	1969	兵庫県神戸市	宮城県登米市	岡山県美作市	71	60	60
14	79	女性	1987	京都府向日市	東京都	高知県(高知市)	75	73	68
15	80	女性	1990	京都府向日市	東京都	高知県(高知市)	40	36	51
16	88	女性	1988	滋賀県湖南氏	山口県阿武郡	福岡県	40	34	45
17	89	男性	1989	大阪府守口市	熊本県阿蘇郡	大分県竹田市	75	74	62
18	91	女性	1982	大阪府大阪市	山口県宇部市	福島県須賀川氏	69	68	48
19	92	女性	1970	大阪府寝屋川市	台湾(1-15 歳)、大阪布施 (16 歳～)	高知県	79	77	87
20	93	女性	1988	大阪府枚方市	長崎県壱岐市	長崎県壱岐市	57	40	57
21	94	男性	1976	大阪府大阪市	広島県呉市(幼い頃に広島←→大阪)	広島県呉市	76	57	8

表 9 鹿児島方言の話者情報 (グループ 1)

A(父:鹿児島 母:鹿児島)									
	番号	性別	生年	本人	父	母	単語(48 語)	助詞(48 語)	新造複合語(96 語)
1	2	女性	1984	日置市(旧伊集院町)	鹿児島県伊集院町	東市来町、鹿児島市、始良町、福山町	40/48	48/48	94/96
2	6	女性	1988	鹿児島市	始良郡蒲生町	鹿児島市	38/48	43/48	61/96
3	8	女性	1988	鹿児島市	鹿児島県川辺町	鹿児島市田上町	30/48	30/48	45/96
4	9	男性	1989	南九州市(旧知覧町)	南九州市(旧知覧町)	南九州市(旧知覧町)	36/48	45/48	59/96
5	15	女性	1988	鹿児島県薩摩郡さつま町(旧鶴田町)	鹿児島県伊集院町	鹿児島県薩摩郡さつま町	38/48	42/48	51/96
6	16	女性	1988	鹿児島県始良郡始良町	鹿児島県	埼玉県(5 歳まで)、鹿児島	34/38	45/48	54/96
7	19	女性	1989	鹿児島市(屋久島、東京(4-5 歳))	鹿児島市	鹿児島市城山	30/48	33/48	53/96
8	23	女性	1990	川内市、鹿児島市、旧肝属郡高山町下位、鹿児島市	鹿児島県出水市	鹿児島県旧肝属郡高山町下位	36/48	41/48	60/96
9	24	女性	1989	種子島	種子島西之表市	根占町	23/48	31/48	36/96
10	74	女性	1984	鹿児島市	鹿児島市甲突町	南九州市川辺町(18 歳まで)→鹿児島市	36/48	45/48	46/96
11	77	女性	1985	鹿児島市	大口市	鹿児島市	46/48	48/48	71/96
12	47	女性	1990	鹿児島市 (甕島、鹿屋市に住んでいたこと有)	鹿児島県日吉	鹿児島県加世多	35/48	40/48	65/96
13	54	女性	1990	鹿児島県伊佐市	鹿児島県知覧町	鹿児島県指宿市	34/48	48/48	70/96
14	65	女性	1983	鹿児島県指宿市	鹿児島県指宿市	鹿児島県指宿市	41/48	47/48	87/96
15	68	男性	1992	鹿児島県鹿児島市	鹿児島県鹿児島市	鹿児島県鹿児島市	31/48	29/48	46/96
16	69	男性	1992	鹿児島県鹿児島市	鹿児島県鹿児島市	鹿児島県鹿児島市	35/48	41/48	58/96
17	76	女性	1981	鹿児島市	屋久島(熊毛郡上屋久町宮ノ浦)	揖宿郡穎娃町	29/48	17/48	40/96
18	75	女性	1985	鹿児島市	屋久島(熊毛郡上屋久町宮ノ浦)	揖宿郡穎娃町	24/48	26/48	48/96

表 10 鹿児島方言の話者情報 (グループ 2)

グループ 2 (父:他 母:鹿児島)									
	番号	性別	生年	本人	父	母	単語(48 語)	助詞(48 語)	新造複合語(96 語)
1	1	女性	1988	鹿児島市、奄美大島、枕崎、粟野、串木野、鹿児島市	香川県(0-7 歳)、福岡県若松区(7~18 歳)	金峰町(南さつま市を転々としていた)	34/48	27/48	47/96
2	18	女性	1990	鹿児島市(川内市 2-5 歳)	鹿児島(幼稚園)、東京(小学校-専門学校)	鹿児島市	25/48	22/48	41/96
3	30	女性	1990	鹿児島市	福岡県北九州市	鹿児島県甑島下甑	24/48	13/48	46/96
4	31	女性	1988	鹿児島市西陵	京都府京都市	鹿児島市	32/48	34/48	56/96
5	32	女性	1990	桜島、川内、鹿児島市、鹿屋市、屋久島、鹿児島市	兵庫県明石市	鹿児島県日置市吹上町	33/48	42/48	48/48
6	70	男性	1992	鹿児島市	福岡県久留米市	鹿児島市	34/48	31/48	56/96
7	71	男性	1992	鹿児島市	宮崎県都城市	鹿児島県肝属郡(現)肝属町	32/48	21/48	49/96
8	82	女性	1987	鹿児島市内、加治木町、始良町	鹿児島県(種子島)西之表市	鹿児島市	27/48	6/48	49/96
9	87	女性	1985	鹿児島市	青森県北津軽郡	鹿児島市	27/48	11/48	59/96
10	89	女性	1989	鹿児島市	名古屋市⇒大学は東京⇒20 代後半から鹿児島	鹿児島市内	27/48	30/48	54/96
11	90	女性	1990	旧指宿郡喜入町(現鹿児島市喜入町)	種子島	指宿市	37/48	19/48	41/96
12	95	女性	1989	旧川内市(現薩摩川内市)	兵庫県尼崎市(35 歳くらいから鹿児島)	旧川内市	32/48	41/48	47/96
13	101	女性	1988	鹿児島市	東京都品川	鹿児島市	26/48	32/48	43/96

表 11 鹿児島方言の話者情報 (グループ 3)

グループ 3 (父:鹿児島 母:他)									
	番号	性別	生年	本人	父	母	単語(48 語)	助詞(48 語)	新造複合語(96 語)
1	17	女性	1990	指宿市(7 歳まで加世田市(現・南さつま市))	指宿市	末広町(現・曾於市(そおし))(一型)	25/48	17/48	48/96
2	14	女性	1989	鹿児島市内、加治木町、始良町	鹿児島市	喜界島	19/48	0/48	38/96
3	77	男性	1992	鹿児島県鹿児島市	鹿児島市 18-22 大学(山口) 22 以降鹿児島市	北九州市 18-22 大学(山口) 鹿児島市	23/48	35/48	48/96
4	78	女性	1992	鹿児島県鹿児島市	鹿児島市 18-22 大学(福岡市) 22 以降鹿児島市	福岡県大牟田市 18-22 大学(福岡市) 鹿児島市	20/48	13/48	37/96
5	79	男性	1994	鹿児島県鹿児島市	鹿児島市 18-22 大学(福岡市) 22 以降鹿児島市	福岡県大牟田市 18-22 大学(福岡市) 鹿児島市	5/48	0/48	0/96
6	81	女性	1988	鹿児島市内、加治木町、始良町	鹿児島市(草牟田)	沖縄県那覇市	26/48	20/48	60/96
7	83	女性	1985	鹿児島市内、加治木町、始良町	鹿屋市	(奄美大島)大島郡大和村	26/48	17/48	37/96
8	84	男性	1984	薩摩川内市	いちき串木野市→埼玉県川口市→薩摩川内	岩手県大船市→川口市→薩摩川内	38/48	48/48	90/96
9	85	女性	1984	指宿市	指宿市山川	福岡県直方市感田	36/48	46/48	49/96
10	86	男性	1992	鹿児島市内	志布志→鹿児島→東京→鹿児島市	埼玉	29/48	33/48	50/96
11	88	女性	1988	始良町	鹿児島県始良町	東京都	16/48	9/48	16/96
12	92	女性	1990	鹿児島市	旧鹿児島市	枕崎市若葉町(枕崎駅近く=海側)	31/48	26/48	25/96
13	93	女性	1989	鹿児島市	旧鹿児島市	宮崎県つの市	25/48	25/48	61/96
14	94	女性	1990	旧国分市(現霧島市)	旧国分市(現霧島市)	茨城県牛久	28/48	13/48	46/96
15	97	女性	1989	現霧島市	鹿児島県隼人町	広島市南区	14/48	0/48	2/96
16	98	女性	1989	薩摩郡薩摩町(現薩摩川内市)	薩摩郡祁答院(けどういん)町=現薩摩川内市	宮崎県児湯(こゆ)郡 川南(かわみなみ)町	30/48	40/48	82/96

表 12 鹿児島方言の話者情報 (グループ 4)

グループ 4 (父:他 母:他)									
	番号	性別	生年	本人	父	母	単語(48 語)	助詞(48 語)	新造複合語(96 語)
1	34	女性	1990	鹿児島、宮崎、鹿児島	大分県中津	大分県(佐野)	29/48	23/48	41/96
2	35	女性	1989	鹿児島市	鹿児島県志布志市有明町 (一型アクセント)	鹿児島県志布志市志布志 (一型アクセント)	26/48	27/48	60/96
3	37	女性	1990	鹿児島市	福岡県、愛知(名古屋に高校から)	福岡、東京(小学校)、 山口(小学校～)	21/48	8/48	53/96
4	72	男性	1992	鹿児島県鹿児島市	福岡県大牟田市	兵庫県神戸市、福岡市(中学/高校)	22/48	2/48	45/96
5	73	男性	1992	鹿児島県鹿児島市	千葉県船橋市	鹿児島県奄美渡島	36/48	19/48	43/96
6	80	男性	1986	鹿児島市	枕崎市宮前町	千葉県習志野市	13/48	3/48	5/96
7	91	女性	1989	鹿児島市	沖縄県、関東、鹿児島市、鹿屋市	種子島、鹿児島市(小 6～)、 鹿屋市(30 歳～)	14/48	8/48	20/96
8	99	女性	1990	鹿児島市	宮崎県都城市	宮崎県延岡市	6/48	4/48	6/96

表 13 鹿児島方言調査の調査語彙 A (+) と A (-)

(色が付いた部分は誤答が多いと予測される部分を示す)

	東京方言: 起伏式(+)アクセント		新造複合語: 後部要素が付き たとき	東京方言: 平板式(-)アクセント		新造複合語: 後部要素が付き いたとき
鹿児島方言: A 型アクセント	食べ物	食べ物が	食べ物コーナー (A+)	鎧(よろい)	鎧(よろい)が	鎧(よろい)兜 (A+)
			食べ物党(A-)			鎧(よろい)党 (A-)
	赤貝	赤貝が	赤貝問題(A+)	友達	友達が	友達関係(A+)
			赤貝節(A-)			友達節(A-)
	玄関	玄関が	玄関問題(A+)	問題	問題が	問題意識(A+)
			玄関先(A-)			問題病(A-)
	飛行機	飛行機が	飛行機事故(A+)	遠足	遠足が	遠足日和(A+)
			飛行機節(A-)			遠足節(A-)
	ガンジス	ガンジスが	ガンジス川(A+)	オルガン	オルガンが	オルガン教室 (A+)
			カンジス病(A-)			オルガン病(A-)
	ロンドン	ロンドンが	ロンドン旅行(A+)	ブラジル	ブラジルが	ブラジル旅行 (A+)
			ロンドン病(A-)			ブラジル病(A-)
	岡山	岡山が	岡山問題(A+)	鹿児島	鹿児島が	鹿児島問題 (A+)
			岡山産(A-)			鹿児島産(A-)
	赤	赤が	赤信号(A+)	危険	危険が	危険信号(A+)
			赤色(A-)			危険色(A-)
	社会	社会が	社会問題(A+)	共産	共産が	共産問題(A+)
			社会党(A-)			共産党(A-)
	定期	定期が	定期券(A+)	乗車	乗車が	乗車券(A+)
			定期病(A-)			乗車病(A-)
	コーラ	コーラが	コーラ事件(A+)	汚職	汚職が	汚職事件(A+)
			コーラ党(A-)			汚職党(A-)
	オレンジ	オレンジが	オレンジ問題 (A+)	ラクダ	ラクダが	ラクダ問題(A+)
			オレンジ色(A-)			ラクダ色(A-)

表 14 鹿児島方言調査の調査語彙 B(+) と B(-)
(色が付いた部分は誤答が多いと予測される部分を示す)

	東京方言: 起伏式(+)アクセント		新造複合語: 後部要素が付き たとき	東京方言: 平板式(-)アクセント		新造複合語: 後部要素が付き たとき
鹿児島方言: B 型アクセント	飲み物 (B+)	飲み物が (B+)	飲み物コーナー (B+)	蒸しパン (B-)	蒸しパンが (B-)	蒸しパンコーナー (B+)
			飲み物党(B-)			蒸しパン党(B-)
	貝 (B+)	貝が (B+)	貝柱(B+)	広島 (B-)	広島が (B-)	広島旅行(B+)
			貝節(B-)			広島節(B-)
	火事 (B+)	火事が (B+)	火事場泥棒(B+)	牛肉 (B-)	牛肉が (B-)	牛肉問題(B+)
			火事病(B-)			牛肉病(B-)
	先生 (B+)	先生が (B+)	先生気取り(B+)	学校 (B-)	学校が (B-)	学校制度(B+)
			先生節(B+)			学校節(B-)
	ドーナツ (B+)	ドーナツが (B+)	ドーナツパン(B+)	真鯉 (B-)	真鯉が (B-)	真鯉料理(B+)
			ドーナツ病(B-)			真鯉病(B-)
	コーヒー (B+)	コーヒーが (B+)	コーヒーゼリー (B+)	アメリカ (B-)	アメリカが (B-)	アメリカ旅行(B+)
			コーヒー病(B-)			アメリカ病(B-)
	長崎 (B+)	長崎が (B+)	長崎問題(B+)	沖縄 (B-)	沖縄が (B-)	沖縄問題(B+)
			長崎産(B-)			沖縄産(B-)
	青 (B+)	青が (B+)	青信号(B+)	手旗 (B-)	手旗が (B-)	手旗信号(B+)
			青色(B-)			手旗色(B-)
	自由 (B+)	自由が (B+)	自由問題(B+)	公明 (B-)	公明が (B-)	公明問題(B+)
			自由党(B-)			公明党(B-)
	招待 (B+)	招待が (B+)	招待券(B+)	お食事 (B-)	お食事が (B-)	お食事券(B+)
			招待病(B-)			お食事病(B-)
	生麦 (B+)	生麦が (B+)	生麦事件(B+)	誘拐 (B-)	誘拐が (B-)	誘拐事件(B+)
			生麦党(B-)			誘拐党(B-)
	空 (B+)	空が (B+)	空問題(B+)	ねずみ (B-)	ねずみが (B-)	ねずみ問題(B+)
			空色(B-)			ねずみ色(B-)

付録

近畿方言調査 調査用紙 1

1	鍋	鍋ごはん	21	旗 ^{ハタ}	旗 ^{ハタ} もどき	41	馬	馬まつり
2	裏	裏問題	22	口	口問題	42	息	息げんか
3	中	中まつり	23	糸	糸開き	43	鳥	鳥もどき
4	冬	冬がかり	24	旅	旅係	44	猿	猿飾り
5	腕	腕 ^{ウデ} 袋 ^{ブクロ}	25	白	白 ^{シロカザリ} 飾り	45	雪	雪問題
6	海	海 ^{ウミビヨリ} 日和	26	腰	腰 ^{コシブクロ} 袋	46	傘	傘もどき
7	夏	夏開き	27	数	数けずり	47	池	池おとし
8	鮒	鮒まつり	28	髪	髪まつり	48	壁	壁問題
9	櫛	櫛 ^{クシモンダイ} 問題	29	秋	秋ごはん	49	雨	雨まつり
10	牛	牛まつり	30	川	川 ^{カワヤスミ} 休み	50	北	北 ^{キタヒラキ} 開き
11	鶴	鶴もどき	31	酒	酒もどき	51	塩	塩ごはん
12	町	町問題	32	帯	帯がかり	52	空	空 ^{ソラ} まつり
13	皿	皿おとし	33	水	水まつり	53	竹	竹ごはん
14	月	月まつり	34	岩	岩飾り	54	地下	地下開き
15	種	種ごはん	35	汗	汗おとし	55	肘 ^{ヒジ}	肘 ^{ヒジ} 思い
16	青	青飾り	36	岸	岸問題	56	稲	稲 ^{イネ} まつり
17	庭	庭問題	37	箱	箱 ^{ハコ} 開き	57	靴	靴もどき
18	雲	雲おとし	38	板	板まつり	58	胸	胸 ^{ムネヤスミ} 休み
19	朝	朝開き	39	橋	橋削り	59	霧	霧 ^{キリモンダイ} 問題
20	粉	粉 ^{コナ} 削り	40	蜘蛛 ^{クモ}	蜘蛛 ^{クモ} 問題 ^{モンダイ}	60	犬	犬まつり

付録

近畿方言調査 調査用紙 1

61	紙	カミガカリ 紙係	81	梅	梅まつり
62	箸	箸係	82	針	針問題
63	虎	虎問題	83	窓	窓開き
64	波	波飾り	84	音	音まつり
65	午後	午後問題	85	栗	栗問題
66	牙	キバブクロ 牙袋	86	うり	うりごはん
67	笹	笹ごはん	87	前	前まつり
68	花	花ごはん	88	枝	枝もどき
69	鮎	鮎まつり	89	アカ 赤	アカブクロ 赤袋
70	歌	ウタブクロ 歌袋	90	梨	梨ごはん
71	泡	泡削り	91	位置	位置問題
72	肌	肌もどき	92	山	山がかり
73	風	カゼモンダイ 風問題	93	絹	絹もどき
74	柿	柿ごはん	94	村	村ごはん
75	坂	坂飾り	95	カギ 鍵	カギ 鍵もどき
76	声	声袋	96	影	影問題
77	石	石まつり	97	エビ 海老	エビカザ 海老飾り
78	肩	肩おとし	98	船	船まつり
79	ハ 蚤	ハ 蚤まつり	99	アメ 飴	アメケズリ 飴削り
80	テラ 寺	テラゲンカ 寺喧嘩	100	夜	ヨルガカリ 夜係

付録

近畿方言調査 調査用紙 2

1. 北 北が
2. 数、増えてるわ
3. 塩 塩が
4. 白が見えへん？
5. 虎 虎が
6. 船が嫌いやねん
7. 息 息が
8. 夜、来るで
9. 箸が折れてんで
10. 水 水が
11. 前 前が
12. 午後が眠たいねん
13. 村 村が
14. 空、きれいやなあ
15. 白、嫌いやねん
16. 坂 坂が
17. 鍋 鍋が
18. 瓜が熟れてるで
19. 声、入ってんで
20. 梨 梨が
21. 船 船が
22. 髪 髪が
23. 粉がこぼれるわ
24. 肩 肩が
25. 鮒(ふな)が見えへん？
26. 枝 枝が
27. 猿、怖いねん
28. 雲 雲が
29. 息が長いなあ
30. 帯 帯が
31. 種、多すぎやで
32. 秋 秋が
33. 朝が眠たいねん
34. 風 風が
35. 旗 旗が
36. 鮎が好きやねん
37. 肩、痛い
38. 泡 泡が
39. 中、見えるで

40. 海 海が
41. 箱 箱が
42. 蜘蛛、大きなって
43. 板が反ってるわ
44. 影 影が
45. 夏 夏が
46. 瓜 瓜が
47. 秋、静かやなあ
48. 月 月が
49. 絹が嫌いやねん
50. 白 白が
51. 庭 庭が
52. 地下が怖いねん
53. 粉、吹いてんで
54. 栗 栗が
55. 朝、眠たいねん
56. 地下は入らんといて
57. 中 中が
58. 海老 海老が
59. 針が長すぎんねん
60. 夜 夜が
61. 鮎が入ってへんで
62. 石 石が
63. (昨日仕入れた)糸、切らして
もうた
64. 飴 飴が
65. 稲、折れてんで
66. 蜜 蜜が
67. 位置がずれてるわ
68. 板 板が
69. 赤 赤が
70. 鍋は食べへん？
71. 船、出てるわ
72. 午後は来るで
73. 箸、大きいねん
74. 花 花が
75. 鶴、飛んでんで
76. 瓜が欲しいんやけど
77. 海、きれいやなあ

78. 酒 酒が
79. 帯が隠れてるわ
80. 鍋、嫌いやねん
81. 箸 箸が
82. 空が見えるわ
83. 前が怖いねん
84. 絹、入ってんで
85. 川 川が
86. 数が増えてるわ
87. 窓 窓が
88. 赤、嫌いやねん
89. 肘 肘が
90. 帯、長すぎひん？
91. 猿が怖いねん
92. 粉が吹いてんで
93. 前、見えへん？
94. 朝、起きられへん
95. 靴 靴が
96. 空がきれいやなあ
97. 鍋、食べへん？
98. 赤が好きやねん
99. 肌、きれいやなあ
100. 朝 朝が
101. 板が欲しいわ
102. 青が入るようにしてや
103. 蜘蛛、隠れてんで
104. 鳥 鳥が
105. 傘が長いなあ
106. 肩、凝ったわ
107. 粉 粉が
108. 赤が入るようにしてや
109. 位置、ずれてるわ
110. 海、見えるわ
111. 夜は来るで
112. 橋 橋が
113. 船、嫌いやねん
114. 地下、怖いねん
115. 汗 汗が
116. 声が入ってんで

- | | | |
|-------------------|--------------------|-----------------------|
| 117. 影、見えへん？ | 156. 夜、怖いねん | 195. 位置 位置が |
| 118. 櫛 櫛が | 157. 声 声が | 196. 帯、隠れてるわ |
| 119. 雨が降ってるやん | 158. 汗が出えへん | 197. 鮎、入ってんで |
| 120. 稲、大きくなったなあ | 159. 箸、折れてんで | 198. 町 町が |
| 121. 汗、出えへん | 160. 鮎(ふな)が大きくなってん | 199. 鶴 鶴が |
| 122. 帯が長すぎひん？ | 161. 息、長いなあ | 200. 犬 犬が |
| 123. 赤、入るようにしてや | 162. 猿、見えへん | 201. 蜘蛛が隠れてんで |
| 124. 種が多すぎやで | 163. 鍋が嫌いやねん | 202. 汗、乾かへん |
| 125. 竹 竹が | 164. 糸、入ってへんで | 203. 霧 霧が |
| 126. 雪 雪が | 165. 稲が大きくなったなあ | 204. 肌 肌が |
| 127. 窓がきれいになってるやん | 166. 鍵 鍵が | 205. 地下 地下が |
| 128. ふな、見えへん？ | 167. 口 口が | 206. 数、多いなあ |
| 129. 針が落ちてんで | 168. 雨、多いねん | 207. 夜が怖いねん |
| 130. 青が嫌いやねん | 169. 船が出てるわ | 208. 寺 寺が |
| 131. 空 空が | 170. 声、きれいやねえ | 209. 肩が痛い |
| 132. 午後 午後が | 171. 種が入ってへんで | 210. 鶴、見えへん？ |
| 133. 影、消えてんで | 172. 歌 歌が | 211. (昨日仕入れた)糸が切れてもうた |
| 134. 空、見えるわ | 173. 笹 笹が | 212. 腕 腕が |
| 135. 窓、きれいにしたん？ | 174. 蜘蛛が大きくなってん | 213. 秋、長いよなあ |
| 136. 壁 壁が | 175. 針、長すぎんねん | 214. 影が消えてんで |
| 137. 牙 牙が | 176. 猿 猿が | 215. 稲 稲が |
| 138. 鮎、好きやねん | 177. 青、入らんようにしてや | 216. 牛 牛が |
| 139. 粉、こぼれるわ | 178. 窓が見えへん | 217. 傘、折れてんで |
| 140. 秋は静かやなあ | 179. 絹、嫌いやねん | 218. 鶴が見えへん |
| 141. 中、きれいやで | 180. 鶴が飛んでんで | 219. 午後、来るで |
| 142. 雨、降ってるやん | 181. 池 池が | 220. 肌、見えるわ |
| 143. 位置が嫌いやねん | 182. 肌がきれいやなあ | 221. 鮎(ふな) 鮎が |
| 144. 針 針が | 183. 板、反ってる | 222. 猿が見えへん |
| 145. 青、嫌いやねん | 184. 稲が折れてんで | 223. 海がきれいやなあ |
| 146. 種、入ってへんで | 185. 傘 傘が | 224. 紙 紙が |
| 147. 波 波が | 186. 息が入らへん | 225. 絹 絹が |
| 148. 岩 岩が | 187. 箸が大きいねん | 226. 前が見えへん？ |
| 149. 汗が乾かへん | 188. 梅 梅が | 227. 瓜、欲しいんやけど |
| 150. 瓜、熟れてるで | 189. 朝が起きられへん | 228. 馬 馬が |
| 151. 傘が折れてんで | 190. 冬 冬が | 229. 秋は長いよなあ |
| 152. 地下、入らんといて | 191. 前、怖いねん | 230. 皿 皿が |
| 153. 板、欲しいわ | 192. 海が見えるわ | 231. 肩が凝ったわ |
| 154. 糸 糸が | 193. 影が見えへん | 232. 白、見えへん？ |
| 155. 絹が入ってんで | 194. 白が嫌いやねん | |

- 233. 傘、長いなあ
- 234. 胸 胸が^い
- 235. ^{ひな}鮎、大きなってん
- 236. 糸が入ってへんで
- 237. 雨が多いねん
- 238. 中がきれいやで
- 239. 午後、眠たいねん
- 240. 雨 雨が^い
- 241. 中が見えるで
- 242. 裏 裏が^い
- 243. 数 数が^い
- 244. 柿 柿が^い
- 245. 音 音が^い
- 246. 鮎 鮎が^い
- 247. 数が多いなあ
- 248. 岸 岸が^い
- 249. 針、落ちてんで
- 250. 声がきれいやねえ
- 251. 種 種が^い
- 252. 旅 旅が^い
- 253. 蜘蛛 蜘蛛が^い
- 254. 息、入らへん
- 255. 肌が見えるわ
- 256. 窓、見えへん
- 257. 腰 腰が^い
- 258. 位置、嫌いやねん
- 259. 山 山が^い
- 260. 青 青が^い

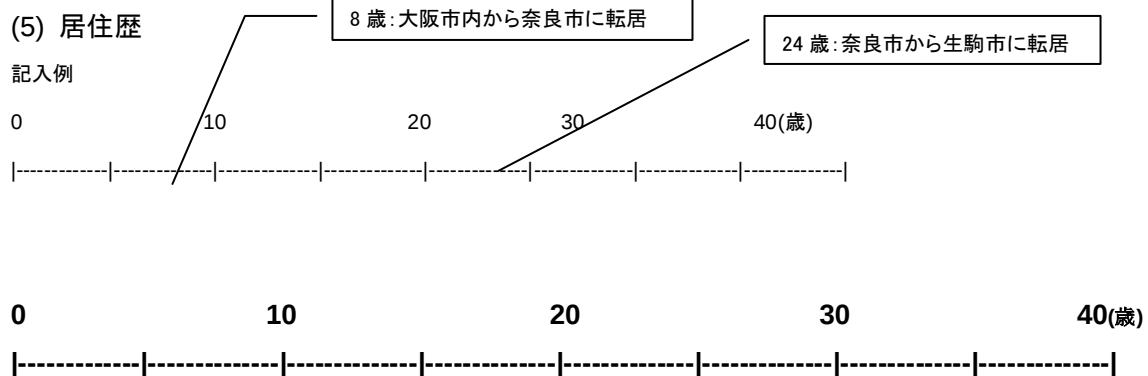
フェイスシート

(1) 今日の日付: _____ 年 _____ 月 _____ 日

(2) お名前: _____

(3) お生まれになった年: 西暦 _____ 年

(4) 出身地 _____ 都道 _____ 府県 _____ 群市 _____ 町村 _____



(6) 両親の出身地

父親: _____

もしお父様が近畿地方出身でない場合、何歳から近畿地方に移ってきましたか? _____ 歳

母親: _____

もしお母様が近畿地方出身でない場合、何歳から近畿地方に移ってきましたか? _____ 歳

(7) 普段(友達や家族と話すとき)自分が話していることばはなに弁(方言)ですか?

_____ 弁(方言)

ご協力ありがとうございました。

付録

次の単語を普段の言葉 (鹿児島弁) で1回ずつ読んでください。

Group 1

1	食べ物が	たべものが	
	食べ物	たべもの	
	食べ物コーナー	たべものコーナー	
	食べ物党	たべものとう	(民主党)
	食べ物党が	たべものとうが	

2	ブラジルが	ブラジルが	
	ブラジル	ブラジル	
	ブラジル旅行	ブラジルりょこう	
	ブラジル病	ブラジルびょう	
	ブラジル病が	ブラジルびょうが	

3	火事が	かじが	
	火事	かじ	
	火事場泥棒	かじばどろぼう	
	火事病	かじびょう	(心臓病)
	火事病が	かじびょうが	

4	学校が	がっこうが	
	学校	がっこう	
	学校制度	がっこうせいど	
	学校節	がっこうぶし	(ソーラン節)
	学校節が	がっこうぶしが	

5	ロンドンが	ロンドンが	
	ロンドン	ロンドン	
	ロンドン旅行	ロンドンりょこう	
	ロンドン病	ロンドンびょう	
	ロンドン病が	ロンドンびょうが	

6	鎧が	よろいが	
	鎧	よろい	
	鎧兜	よろいかぶと	
	鎧党	よろいとう	
	鎧党が	よろいとうが	

付録

7

先生が
先生
先生気取り
先生節
先生節が

せんせいが
せんせい
せんせいきどり
せんせいぶし
せんせいぶしが (ソーラン節)

8

蒸しパンが
蒸しパン
蒸しパンコーナー
蒸しパン党
蒸しパン党が

むしパンが
むしパン
むしパンコーナー
むしパンとう
むしパンとうが

9

赤貝が
赤貝
赤貝問題
赤貝節
赤貝節が

あかがいが
あかがい
あかがいもんだい
あかがいぶし
あかがいぶしが

10

コーヒーが
コーヒー
コーヒーゼリー
コーヒー病
コーヒー病が

コーヒーが
コーヒー
コーヒーゼリー
コーヒーびょう
コーヒーびょうが

11

真鯉が
真鯉
真鯉料理
真鯉病
真鯉病が

まごいが
まごい
まごいりょうり
まごいびょう
まごいびょうが

12

玄関が
玄関
玄関先
玄関問題
玄関問題が

げんかんが
げんかん
げんかんさき
げんかんもんだい
げんかんもんだいが

付録

13

オルガンが
オルガン
オルガン教室
オルガン病
オルガン病が

オルガンが
オルガン
オルガンきょうしつ
オルガンびょう
オルガンびょうが

14

貝が
貝
貝柱
貝節
貝節が

かいが
かい
かいばしら
かいぶし
かいぶしが

15

アメリカが
アメリカ
アメリカ旅行
アメリカ病
アメリカ病が

アメリカが
アメリカ
アメリカりょこう
アメリカびょう
アメリカびょうが

16

友達が
友達
友達関係
友達節
友達節が

ともだちが
ともだち
ともだちかんけい
ともだちぶし
ともだちぶしが

17

広島が
広島
広島旅行
広島節
広島節が

ひろしまが
ひろしま
ひろしまりょこう
ひろしまふし
ひろしまぶしが

18

ガンジスが
ガンジス
ガンジス川
ガンジス病
ガンジス病が

ガンジスが
ガンジス
ガンジスがわ
ガンジスびょう
ガンジスびょうが

付録

19

飲み物が
飲み物
飲み物コーナー
飲み物党
飲み物党が

のみものが
のみもの
のみものコーナー
のみものとう
のみものとうが

20

牛肉が
牛肉
牛肉問題
牛肉病
牛肉病が

ぎゅうにくが
ぎゅうにく
ぎゅうにくもんだい
ぎゅうにくびょう
ぎゅうにくびょうが

21

ドーナツが
ドーナツ
ドーナツパン
ドーナツ病
ドーナツ病が

ドーナツが
ドーナツ
ドーナツパン
ドーナツびょう
ドーナツびょうが

22

飛行機が
飛行機
飛行機事故
飛行機節
飛行機節が

ひこうきが
ひこうき
ひこうきじこ
ひこうきぶし
ひこうきぶしが

23

遠足が
遠足
遠足日和
遠足節
遠足節が

えんそくが
えんそく
えんそくびより
えんそくぶし
えんそくぶしが

24

問題が
問題
問題意識
問題病
問題病が

もんだいが
もんだい
もんだいいしき
もんだいびょう
もんだいびょうが

付録

Group 2

1

定期が
定期
定期券
定期病
定期病が

ていきが
ていき
ていきけん
ていきびょう
ていきびょうが

2

沖縄が
沖縄
沖縄産
沖縄問題
沖縄問題が

おきなわが
おきなわ
おきなわさん
おきなわもんだい
おきなわもんだいが

3

ねずみが
ねずみ
ねずみ色
ねずみ問題
ねずみ問題が

ねずみが
ねずみ
ねずみいろ
ねずみもんだい
ねずみもんだいが

4

コーラが
コーラ
コーラ事件
コーラ党
コーラ党が

コーラが
コーラ
コーラじけん
コーラとう
コーラとうが

5

共産が
共産
共産党
共産問題
共産問題が

きょうさんが
きょうさん
きょうさんとう
きょうさんもんだい
きょうさんもんだいが

6

危険が
危険
危険信号
危険色
危険色が

きけんが
きけん
きけんしんごう
きけんいろ
きけんいろが

付録

7	岡山が 岡山 岡山産 岡山問題 岡山問題が	おかやまが おかやま おかやまさん おかやまもんだい おかやまもんだいが
8	オレンジが オレンジ オレンジ色 オレンジ問題 オレンジ問題が	オレンジが オレンジ オレンジいろ オレンジもんだい オレンジもんだいが
9	招待が 招待 招待券 招待病 招待病が	しょうたいが しょうたい しょうたいけん しょうたいびょう しょうたいびょうが
10	汚職が 汚職 汚職事件 汚職党 汚職党が	おしょくが おしょく おしょくじけん おしょくとう おしょくとうが
11	長崎が 長崎 長崎産 長崎問題 長崎問題が	ながさきが ながさき ながさきさん ながさきもんだい ながさきもんだいが
12	手旗が 手旗 手旗信号 手旗色 手旗色が	てばたが てばた てばたしんごう てばたいろ てばたいろが

付録

13

社会が	しゃかいが
社会	しゃかい
社会党	しゃかいとう
社会問題	しゃかいもんだい
社会問題が	しゃかいもんだいが

14

乗車が	じょうしゃが
乗車	じょうしゃ
乗車券	じょうしゃけん
乗車病	じょうしゃびょう
乗車病が	じょうしゃびょうが

15

生麦が	なまむぎが
生麦	なまむぎ
生麦事件	なまむぎじけん
生麦党	なまむぎとう
生麦党が	なまむぎとうが

16

ラクダが	ラクダが
ラクダ	ラクダ
ラクダ色	ラクダいろ
ラクダ問題	ラクダもんだい
ラクダ問題が	ラクダもんだいが

17

誘拐が	ゆうかいが
誘拐	ゆうかい
誘拐事件	ゆうかいじけん
誘拐党	ゆうかいとう
誘拐党が	ゆうかいとうが

18

自由が	じゆうが
自由	じゆう
自由党	じゆうとう
自由問題	じゆうもんだい
自由問題が	じゆうもんだいが

付録

19

赤が
赤
赤信号
赤色
赤色が

あかが
あか
あかしんごう
あかいろ
あかいろが

20

空が
空
空色
空問題
空問題が

そらが
そら
そらいろ
そらもんだい
そらもんだいが

21

公明が
公明
公明党
公明問題
公明問題が

こうめいが
こうめい
こうめいとう
こうめいもんだい
こうめいもんだいが

22

鹿児島が
鹿児島
鹿児島産
鹿児島問題
鹿児島問題が

かごしまが
かごしま
かごしまさん
かごしまもんだい
かごしまもんだいが

23

お食事が
お食事
お食事券
お食事病
お食事病が

おしょくじが
おしょくじ
おしょくじけん
おしょくじびょう
おしょくじびょうが

24

青が
青
青信号
青色
青色が

あおが
あお
あおしんごう
あおいろ
あおいろが

フェイスシート：差し支えない範囲でお答えいただければ幸いです。

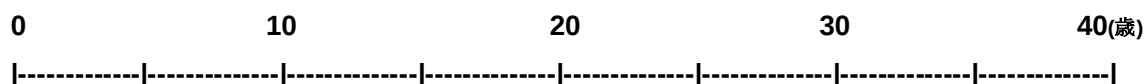
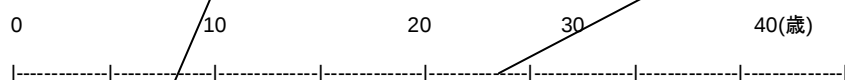
(1) お名前： _____

(2) お生まれになった年：西暦 _____ 年

(3) 出身地 _____ 都道 _____ 群市 _____
 _____ 府県 _____ 町村 _____

(4) 居住歴

記入例



(5) ご両親の出身地

父親： _____ (転居歴/町名までお願いします)

- ・ お父様が今お住まいの地域と育ってきた地域が異なる場合、
 何歳のときに現在の場所に移ってこられましたか？ _____ 歳
- ・ お父様が普段話す言葉とあなたご自身が普段話す言葉は違うと感じますか？ はい / いいえ

母親： _____ (転居歴/町名までお願いします)

- ・ お母様が今お住まいの地域と育ってきた地域が異なる場合、
 何歳のときに現在の場所に移ってこられましたか？ _____ 歳
- ・ お母様が普段話す言葉とあなたご自身が普段話す言葉は違うと感じますか？ はい / いいえ

(6) おじい様／おばあ様と一緒に住まいの経験はありますか？ はい / いいえ
 (あるいは現在、一緒に住まいですか?)

(7) 普段(友達や家族と話するとき)自分が話していることばはなに弁(方言)ですか？

_____ 弁(方言)

ご協力ありがとうございました。

竹村亜紀子(神戸大学大学院人文学研究科 言語学)